

杵築城下町遺跡 2

—都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2008

杵築城下町遺跡 2

—都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター



町屋敷絵図 (文化12年)



上：守江湾からみた杵築市街地 下：谷町及び周辺



伊賀系陶器花入 (2/3)

序 文

本書は、県教育委員会が別府土木事務所の依頼を受けて実施した、都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う杵築城下町遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する杵築市谷町地区は、八坂川左岸の河口に近い丘陵谷部に位置しており、周辺の豊かな自然と歴史に恵まれています。

今回調査した杵築城下町は、南北の台地上に展開する武家屋敷に挟まれた町屋の中心部にあたります。

発掘調査の結果、江戸時代初頭頃から現在に至る町の変遷をみることができました。特に、江戸時代を通じて多く発生した火災、その後の造成過程や出土した陶磁器類から当時営まれた町人の生活を窺うことができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助となれば幸いです。

終わりに、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成20年2月15日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 福田 快次

例 言

- 1 本書は大分県教育委員会が実施した、都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う平成15年度から平成18年度の4カ年に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は大分県土木建築部の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
- 3 出土遺物の整理作業は大分県教育庁埋蔵文化財センター（以下、センターという。）で行った。
- 4 出土遺物、図面、写真等はセンターで保管している。
- 5 本書の作成にあたり、出土遺物については佐賀県立九州陶磁文化館館長の大橋康二氏、センター副主幹の吉田寛氏の教示を得た。また、東京都中央区教育委員会の仲光克顕氏に多くの協力を得た。
- 6 杵築城下町遺跡の文献資料の検討に関しては大分県立歴史博物館主任学芸員の平川毅氏に依頼した。
- 7 本書の執筆は調査を担当した栗田勝弘、小林昭彦が担当した。執筆分担は次のとおりである。

栗田勝弘（第1章、第2章、第3章第1節～第10節、第5章）

小林昭彦（第3章第11節～第13節）

平川 毅（第4章）
- 8 発掘調査にあたり杵築市教育委員会、県土木建築部別府土木事務所、地元関係者の協力を得た。特に、きつき城下町資料館には発掘調査及び「町屋敷絵図」の撮影・掲載許可など過分の配慮をいただいた。
- 9 本書の編集は栗田勝弘、小林昭彦が担当した。

目次

序文

例言

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯と調査方法…………… 1

第2節 調査団の構成…………… 1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・歴史的環境…………… 3

第3章 調査の成果

第1節 17調査区…………… 6

第2節 18調査区…………… 14

第3節 19調査区…………… 19

第4節 20調査区…………… 34

第5節 21調査区…………… 47

第6節 22調査区…………… 58

第7節 23調査区…………… 66

第8節 24調査区…………… 77

第9節 25調査区…………… 87

第10節 26調査区…………… 89

第11節 27調査区…………… 101

第12節 28調査区…………… 125

第13節 29調査区…………… 145

第4章 文献資料調査…………… 165

第5章 総括…………… 170

報告書抄録

図 版 目 次

<p>第1図 調査遺跡及び周辺遺跡分布図 (1/25,000)……………4</p> <p>第3図 町屋敷絵図(文化12年)一中町・谷町一 ……………付図</p> <p>第5図 17調査区側溝と石列実測図(1/60)……………7</p> <p>第7図 17調査区石組遺構実測図(1/20)……………7</p> <p>第9図 17調査区出土遺物(1/3)※15は1/4……………9</p> <p>第11図 17調査区出土遺物(1/3)……………11</p> <p>第13図 18調査区遺構配置図(1/120)……………14</p> <p>第15図 18調査区出土遺物(1/3)……………16</p> <p>第17図 18調査区出土遺物(1/3、2/3)……………17</p> <p>第19図 19調査区1号石列実測図(1/60)……………20</p> <p>第21図 19調査区4号石列遺構実測図(1/60)……………21</p> <p>第23図 19調査区2号土坑遺構実測図(1/60)……………21</p> <p>第25図 19調査区出土遺物(1/3)……………23</p> <p>第27図 19調査区出土遺物(1/3)※17は1/4……………25</p> <p>第29図 19調査区出土遺物(1/3)……………27</p> <p>第31図 19調査区出土遺物(1/3)※58は1/4……………29</p> <p>第33図 19調査区出土遺物(1/3) ※71~73、76、77は1/4……………31</p> <p>第35図 19調査区出土遺物(2/3)……………32</p> <p>第37図 20調査区2号側溝実測図(1/60)……………35</p> <p>第39図 20調査区1号土坑実測図(1/60)……………35</p> <p>第41図 20調査区3号土坑実測図(1/60)……………35</p> <p>第43図 20調査区3号溝実測図(1/60)……………35</p> <p>第45図 20調査区出土遺物(1/3)……………38</p> <p>第47図 20調査区出土遺物(1/3)※32は1/4……………40</p> <p>第49図 20調査区出土遺物(1/3) ※49は1/4、54は1/6……………42</p> <p>第51図 20調査区出土遺物(1/3、2/3)……………44</p> <p>第53図 21調査区1号側溝実測図(1/60)……………49</p> <p>第55図 21調査区2号土坑実測図(1/60)……………49</p> <p>第57図 21調査区6号土坑実測図(1/60)……………49</p> <p>第59図 21調査区出土遺物(1/3)……………52</p> <p>第61図 21調査区出土遺物(1/3)……………54</p> <p>第63図 21調査区出土遺物(1/3)……………56</p> <p>第65図 22調査区遺物配置図(1/120)……………58</p> <p>第67図 22調査区1号土坑実測図(1/60)……………59</p> <p>第69図 22調査区1号集石実測図(1/60)……………59</p>	<p>第2図 杵築城下町遺跡(中町・谷町地区)の調査区 ……………付図</p> <p>第4図 17調査区遺構配置図(1/120)……………6</p> <p>第6図 17調査区1号土坑実測図(1/60)……………7</p> <p>第8図 17調査区出土遺物(1/3)……………8</p> <p>第10図 17調査区出土遺物(1/3)……………10</p> <p>第12図 17調査区出土遺物(1/3、2/3)……………12</p> <p>第14図 18調査区側溝実測図(1/60)……………15</p> <p>第16図 18調査区出土遺物(1/3)……………17</p> <p>第18図 19調査区遺構配置図(1/120)……………20</p> <p>第20図 19調査区3号石列遺構実測図(1/60)……………20</p> <p>第22図 19調査区1号土坑遺構実測図(1/60)……………21</p> <p>第24図 19調査区3号土坑遺構実測図(1/60)……………21</p> <p>第26図 19調査区出土遺物(1/3)……………24</p> <p>第28図 19調査区出土遺物(1/3)……………26</p> <p>第30図 19調査区出土遺物(1/3)……………28</p> <p>第32図 19調査区出土遺物(1/3)……………30</p> <p>第34図 19調査区出土遺物(1/3)……………32</p> <p>第36図 20調査区遺構配置図(1/120)……………34</p> <p>第38図 20調査区5号側溝実測図(1/60)……………35</p> <p>第40図 20調査区2号土坑実測図(1/60)……………35</p> <p>第42図 20調査区4号、6号土坑実測図(1/60)……………35</p> <p>第44図 20調査区出土遺物(1/3)……………37</p> <p>第46図 20調査区出土遺物(1/3)※19は1/4……………39</p> <p>第48図 20調査区出土遺物(1/3)※46、48は1/4……………41</p> <p>第50図 20調査区出土遺物(1/3)……………43</p> <p>第52図 21調査区遺構配置図(1/120)……………48</p> <p>第54図 21調査区1号集石実測図(1/60)……………49</p> <p>第56図 21調査区4号土坑実測図(1/60)……………49</p> <p>第58図 21調査区最下層面杭列実測図(1/30)……………50</p> <p>第60図 21調査区出土遺物(1/3)……………53</p> <p>第62図 21調査区出土遺物(1/3) ※39、40、45は1/6……………55</p> <p>第64図 21調査区出土遺物(2/3)……………56</p> <p>第66図 22調査区1号側溝実測図(1/60)……………59</p> <p>第68図 22調査区5号土坑実測図(1/60)……………59</p> <p>第70図 22調査区2号集石実測図(1/60)……………59</p>
--	--

第71図	22調査区出土遺物 (1/3)……………61	第72図	22調査区出土遺物 (1/3) ※17は1/8……………62
第73図	22調査区出土遺物 (1/3) ※16は1/8、18は1/4……………63	第74図	22調査区出土遺物 (1/3) ※28、29は2/3…64
第75図	23調査区遺構配置図 (1/120)……………66	第76図	23調査区出土遺物 (1/3)……………67
第77図	23調査区出土遺物 (1/3)……………68	第78図	23調査区出土遺物 (1/3)……………69
第79図	23調査区出土遺物 (1/3)……………70	第80図	23調査区出土遺物 (1/3) ※40は1/4……………71
第81図	23調査区出土遺物 (1/3) ※43、45、46は1/6……………72	第82図	23調査区出土遺物 (1/3)……………73
第83図	23調査区出土遺物 (1/3、2/3) ……74	第84図	24調査区遺構配置図 (1/120)……………77
第85図	24調査区1号側溝実測図 (上部遺構) (1/60)……………78	第86図	24調査区柵状側溝実測図 (下部遺構) (1/60)……………78
第87図	24調査区出土遺物 (1/3)……………79	第88図	24調査区出土遺物 (1/3)……………80
第89図	24調査区出土遺物 (1/3)……………81	第90図	24調査区出土遺物 (1/3)……………82
第91図	24調査区出土遺物 (1/3)……………83	第92図	24調査区出土遺物実測図 (2/3、1/3) ……83
第93図	24調査区出土遺物 (2/3)……………84	第94図	25調査区遺構配置図 (1/120)……………87
第95図	25調査区遺構配置図 (1/60) ……88	第96図	25調査区出土遺構実測図 (1/3、2/3) ……88
第97図	26調査区遺構配置図 (1/120)……………89	第98図	26調査区1号側溝実測図 (1/60) ……90
第99図	26調査区3号集石実測図 (1/60) ……90	第100図	26調査区1号土坑実測図 (1/60)……………90
第101図	26調査区2号土坑実測図 (1/60)……………90	第102図	26調査区3号土坑実測図 (1/60)……………90
第103図	26調査区4号土坑実測図 (1/60)……………90	第104図	26調査区5号、6号土坑実測図 (1/60)…90
第105図	26調査区出土遺物 (1/3) ※4は1/5……………92	第106図	26調査区出土遺物 (1/3) ※14は1/5……………93
第107図	26調査区出土遺物 (1/3) ……94	第108図	26調査区出土遺物 (1/3) ……95
第109図	26調査区出土遺物 (1/3) ……96	第110図	26調査区出土遺物 (1/3、2/3)……………97
第111図	27調査区遺構配置図 (1/120)……………101	第112図	27調査区北辺A-A' 土層断面図 (1/60)……………102
第113図	27調査区西辺B-B'、南辺D-D' 土層断面図 (1/40) ……103	第114図	27調査区溝1・3、落込み2・3実測図 (1/60)……………104
第115図	27調査区溝2 (I・II) 実測図 (1/60)…105	第116図	27調査区出土遺物 (1/3)……………106
第117図	27調査区出土遺物 (1/3)……………107	第118図	27調査区出土遺物 (1/3) ※38は1/4……………108
第119図	27調査区出土遺物 (1/3)……………109	第120図	27調査区出土遺物 (1/3) ※56は1/4……………110
第121図	27調査区出土遺物 (1/3) ※67・77は1/4……………111	第122図	27調査区出土遺物 (1/3)……………112
第123図	27調査区出土遺物 (1/3)……………113	第124図	27調査区出土遺物 (1/4)……………114
第125図	27調査区出土遺物 (1/3)……………115	第126図	27調査区出土遺物 (1/3)……………116
第127図	27調査区出土銭貨 (原寸) ……117	第128図	27調査区出土銭貨 (原寸) ……118
第129図	28調査区遺構配置図 (1/120)……………125	第130図	28調査区北壁 (東西方向) 土層断面図…126
第131図	28調査区北壁 (東半部) 土層断面図 (1/40)……………126	第132図	28調査区南壁 (東西方向) 土層断面図…126
第133図	28調査区西壁 (南北方向) 土層断面図 (1/40)……………126	第134図	28調査区溝2・3・4、石組1実測図 (1/60)……………127
第135図	28調査区各層の遺構 (1/200)……………128	第136図	28調査区遺構 (石組2～8、配石) 実測図 (1/60) ……129

第137図	28調査区出土遺物 (1/3)……………130	第138図	28調査区出土遺物 (1/3)……………131
第139図	28調査区出土遺物 (1/3) ※27・28は1/4……………132	第140図	28調査区出土遺物 (1/3) ※42・43は1/4……………133
第141図	28調査区出土遺物 (1/3) ※44は1/4、51は1/6……………134	第142図	28調査区出土遺物 (1/3) ※56は1/2、55は1/6……………135
第143図	28調査区出土遺物 (1/3)……………136	第144図	28調査区出土遺物 (1/3)……………137
第145図	28調査区出土遺物 (1/3)……………138	第146図	28調査区出土遺物 (1/3)……………139
第147図	28調査区出土銭貨 (原寸) ……………140	第148図	29調査区遺構配置図 (1/120)……………145
第149図	29調査区西辺A-A' 土層断面図 (1/40)……………146	第150図	29調査区北辺西半部土層断面図 (1/40)……………147
第151図	29調査区北辺東半部C-C' 土層断面図 (1/40)……………147	第152図	29調査区北辺西半部B-B' 土層断面図 (1/80)……………148
第153図	29調査区南辺D-D' 土層断面図 (1/80)……………148	第154図	29調査区溝1、土坑1・2・3・5・9・10、 ピット1～6実測図 (1/60) ……………149
第155図	29調査区溝2実測図 (1/30) ……………150	第156図	29調査区溝3実測図 (1/80) ……………150
第157図	29調査区溝4実測図 (1/60) ……………151	第158図	29調査区埋甕実測図 (1/20) ……………151
第159図	29調査区建物1・2実測図 (1/60) ……152	第160図	29調査区出土遺物 (1/3) ※4・17は1/4……………153
第161図	29調査区出土遺物 (1/3) ※18は1/4…………154	第162図	29調査区出土遺物 (1/3)……………155
第163図	29調査区出土遺物 (1/3)……………156	第164図	29調査区出土遺物 (1/8)……………157
第165図	29調査区出土遺物 (1/3)……………158	第166図	29調査区出土銭貨 (原寸) ……………159
第167図	29調査区出土銭貨 (原寸) ……………160		

写真図版目次

巻頭図版	町屋敷絵図 (文化12年) 守江湾からみた杵築市街地 谷町及び周辺 伊賀系陶器花入 (2/3) 杵築城下町遺跡の形成過程 —杵築城下町の土層 (22区)—……………5		
写真1	17調査区南壁土層 (北方向から) ……………13 調査区全景 (東方向から) ……………13 石列、側溝検出状態 (南方向から) ……………13 石列1、側溝1検出 (南方向から) ……………13 遺構検出状況 (東方向から) ……………13 石組遺構掘形完掘状態 (北方向から) ……………13 焼土5面遺物出土状態……………13	写真2	18調査区側溝検出状態 (北方向から) ……18 南壁土層 (北方向から) ……………18 石列検出状態 (北方向から) ……………18 SX1検出状態 (北方向から)……………18 調査区検出状態 (東方向から) ……………18

写真3	19調査区遺構検出状態（西方向から）……33	写真4	20調査区作業風景（東方向から）……46
	1号石列検出状態（北方向から）……33		20調査区全景（東方向から）……46
	南壁土層断面……33		南側壁面（北方向から）……46
	焼土5面陶磁器出土状態（西方向から）…33		北側壁面（南東方向から）……46
	1号土坑完掘状態（北方向から）……33		2号側溝（北方向から）……46
	2号土坑検出状態（西方向から）……33		5号側溝（西方向から）……46
	3号土坑検出状態（西方向から）……33		焼土3面1号土坑……46
	3号石列検出状態（北方向から）……33		焼土4面遺物出土状態……46
写真5	21調査区作業風景（北東方向から）……57	写真6	22調査区全景（東方向から）……65
	調査区全景（西方向から）……57		南壁土層（北方向から）……65
	1号側溝（北方向から）……57		1号溝（北方向から）……65
	南壁土層（北方向から）……57		1号集石（北方向から）……65
	1号側溝断面（北方向から）……57		2号集石（南方向から）……65
	集石遺構……57		1号土坑（北方向から）……65
	最下層遺構……57		遺物出土状態……65
	最下層出土の掘立柱痕跡……57	写真8	24調査区全景（西方向から）……86
写真7	23調査区全景（西方向から）……76		1号側溝（北方向から）……86
	南壁面（北方向から）……76		北壁面（南方向から）……86
	東壁面（西方向から）……76		配石（南方向から）……86
	焼土3面甕出土状態……76		柵状側溝（南方向から）……86
	焼土3・4面整地層 遺物出土状態		柵状側溝（北方向から）……86
	（東方向から）……76		柵状側溝（西方向から）……86
	遺物出土状態……76	写真10	26調査区全景（西方向から）……100
	焼土4面 遺物出土状態……76		調査区全景（東方向から）……100
	焼土5面 遺物出土状態……76		1号側溝（北方向から）……100
写真9	1号溝出土状態（南方向から）……88		1号集石（下）、2号集石（上）（南方向から）
			……100
			池状遺構・南壁土層面（北方向から）……100
			池状遺構・北壁土層面（南方向から）……100
			4号土坑（南方向から）……100
			6号土坑（南方向から）……100
写真11	27調査区遠景（南方向から）……124	写真12	28調査区遠景（東上方向から）……144
	全景（西方向から）……124		溝1全景（北方向から）……144
	溝1（南方向から）……124		溝2全景（南方向から）……144
	溝2-II（南方向から）……124		溝3全景（南方向から）……144
	溝4（南方向から）……124		溝4全景（南方向から）……144
	調査西壁土層状態（東方向から）……124		溝3遺物出土状態（南方向から）……144

写真13	29調査区完掘時全景（東方向から）……………	164
	建物2全景（南方向から）……………	164
	埋甕出土状態（南方向から）……………	164
	溝2全景（南方向から）……………	164
	溝3全景（南方向から）……………	164
	土坑1～5全景（南方向から）……………	164

表 目 次

表1	17調査区出土遺物観察表……………	12	表2	18調査区出土遺物観察表……………	15
表3	19調査区出土遺物観察表……………	21	表4	20調査区出土遺物観察表……………	44
表5	21調査区出土遺物観察表……………	50	表6	22調査区出土遺物観察表……………	60
表7	23調査区出土遺物観察表……………	74	表8	24調査区出土遺物観察表……………	84
表9	25調査区出土遺物観察表……………	87	表10	26調査区出土遺物観察表……………	98
表11	27調査区出土遺物観察表……………	119	表12	27調査区出土銭貨観察表……………	122
表13	28調査区出土遺物観察表……………	141	表14	28調査区出土銭貨観察表……………	143
表15	29調査区出土遺物観察表……………	161	表16	29調査区出土銭貨観察表……………	163
表17	18世紀前半における杵築藩城下町の火災発生状況……………	169			

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経過と調査方法

今回調査した杵築城下町遺跡は都市計画道路宗近魚町線の拡幅工事に伴うものである。調査対象地は杵築市大字杵築字谷町及び中町に位置している。武家屋敷が建ち並ぶ北台と南台に挟まれた谷状部に相当しており、当時の一般民衆が住む町屋に当たる位置を占めている。文化12年頃という城下町絵図によると、宗近魚町線は当時の幹線道路をそのまま踏襲したものであり、道路の両側には間口の狭い短冊形の商家が軒を連ねていた町屋であることは判っていた。宗近魚町線の拡幅工事は道路の両側を相互に削って道を拡幅するものであり、当時の家屋の道に面した表部分、つまり入り口部分を4～5m程度だけ調査対象とするものであった。従って、遺構の全体像を把握するには至らなかったというのが現実である。しかし、谷町地区の調査では5～7回の火災遺構が検出されており、その都度、山の土や土砂を持って来ては地表面を高く盛って敷地を嵩上げ構築した痕跡を確認できた。この人為的な盛り土は約2mにも達しており、一回の火災で30～40cmの嵩上げが行われたことが確認できた。水の出る標高の低い谷町にとっては必要不可欠な行為であったのであろう。

都市計画道路宗近魚町線の拡幅工事は平成13年度に土木建築部企画検査室（現建設政策課）より提示され、平成14年度～平成18年度の5年間に渡って調査条件の整った地点から発掘調査に取り掛かった。用地買収により撤去した商家はそれぞれ背後に移動して商売を再開しており、日常生活や営業活動の邪魔にならない様に通入口部は調査を保留するか、条件が整えば前を半分ずつ調査するという方法がとられた。従って、調査区は1～29調査区と細切れに設定することになった。また、表土や発掘で出る排土はトラックで一旦搬出し、調査終了後に埋め戻すというものであった。

平成14年度は中町を主体として一部谷町を含む西方の高い位置を対象としており、発掘調査区は1調査区～16調査区を設定した。この調査報告書は既に平成16年度に刊行済みである。

今回の発掘調査報告書は平成15年度、平成16年度、平成17年度、平成18年度の調査成果を纏めて報告するもので、調査区は当初の呼称方法を踏襲した。つまり、平成15年度は谷町の東端部にあたる17調査区～19調査区。平成16年度は谷町から中町の20調査区～26調査区。平成17年度は谷町の27調査区、28調査区。平成18年度は29調査区である。これによって、車道拡幅部分や深く掘削が計画された歩道部分に関しての調査を完了した。なお、埋蔵文化財に影響を与えない歩道部分に関しては現状のまま永久保存するという方法で対処した。

第2節 調査団の構成

杵築城下町遺跡の調査組織は以下のとおりである。

平成15年度

調査主体 大分県教育委員会
 調査組織 今永一成 大分県教育庁文化課長
 麻生祐治 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐
 清水宗昭 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐
 栗田勝弘 大分県教育庁文化課発掘調査一般事業担当主幹（調査担当）
 山本哲也 大分県教育庁文化課発掘調査一般事業担当嘱託（調査担当）

平成16年度

調査主体 大分県教育委員会
 調査組織 伊藤正行 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
 益永孝則 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼総務課長

第2節 調査団の構成

高橋 徹 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課長
栗田勝弘 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課一般事業担当主幹（調査担当）
戸田英佑 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課嘱託（調査担当）

平成17年度

調査主体 大分県教育委員会
調査組織 渋谷忠章 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
益永孝則 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼総務課長
栗田勝弘 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課長
小林昭彦 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課一般事業担当主幹（調査担当）
大野瑞恵 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課嘱託（調査担当）

平成18年度

調査主体 大分県教育委員会
調査組織 小玉学司 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
岡本義博 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長兼総務課長
栗田勝弘 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課長
小林昭彦 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課一般事業担当主幹（調査担当）

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的・歴史的環境

杵築城下町遺跡（1）の所在する杵築市は国東半島東南部の半島付け根部に位置している。遺跡は広大な干潟を有する守江湾の最奥部、北の高山川と南の八坂川とに挟まれた丘陵上に展開している。海に面する丘陵先端部の高台の杵築城本丸跡（3）には、昭和45年に鉄筋コンクリートの天守閣が復元されている。天守閣から眺望できる沖積平野や浅海性の海岸は両河川の長い年月によって形成された「たまもの」ともいえよう。

守江湾の北部の海辺の山地には縄文早期の標式遺跡となる稲荷山遺跡が位置している。原体条痕文を持たない繊細な押型文土器と無文厚手土器の共伴する古式なタイプの早期土器である。

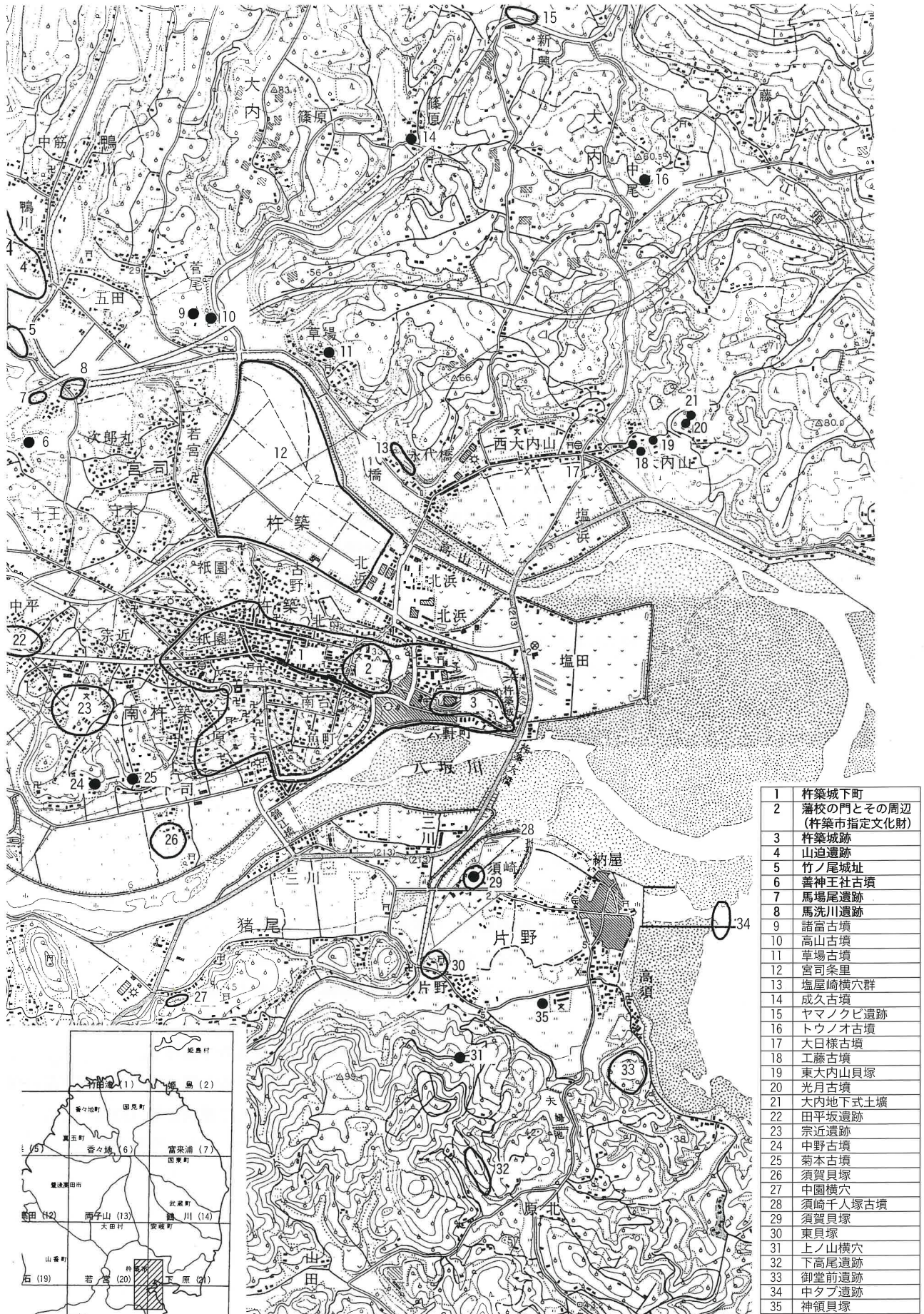
縄文後期には当時の海岸線に沿って貝塚が形成される傾向が認識できるが、守江湾周辺部にも6箇所に貝塚が点在しており、旧森湾を控えた宇佐地域に匹敵する県内有数な貝塚集中分布域といえる。高山川の河口付近に位置する東大内山貝塚（19）をはじめ、河口より約2.5kmも遡った地点では後期初頭の山迫貝塚（4）が圃場整備に伴って発見されている。充填縄文の中津式土器や福田kⅡ式土器が石斧、石錘と伴って出土しており、当時の海岸線が内陸部まで浸入していたことが推量できる。一方、八坂川の河口付近の左岸には須賀貝塚（26）、右岸には須崎貝塚（29）、東貝塚（30）、神領貝塚（35）が発見されている。神領貝塚は平成5年の圃場整備事業に伴って発見され、後期初頭の凹線文土器や中津式土器が出土している。また、東貝塚は後期後葉の三万田式土器が主体であり、文様の希薄な精製された浅鉢形や深鉢形の土器がセットで出土している。

弥生時代の遺跡は希薄であるが、弥生中期のJR杵築駅東遺跡がある。壺や甕や鉢や脚付土器等に伴って磨製石剣、磨製石鏃が出土しており中期中葉の須玖式土器が主体となる集落遺跡と推察されている。その他には、杵築市野田区新宮出土の細形銅剣は祭祀に伴う遺物としても留意されるものである。

古墳時代になると杵築市域は県下有数の古墳密集地と化している。近年九州最大級の小熊山古墳や御塔山古墳が別府湾周辺の遠望のよい高台に発見された。狩宿地区の小熊山古墳は全長120mに及ぶ前期の前方後円墳で県下最大級である。墳丘上の埴輪は巴型透かしや鱗付きの円筒埴輪と底部穿孔の壺形埴輪の組み合わせであり、墳丘形態や埴輪群の特徴から畿内色の強いものであった。また、御塔山古墳は小さな造り出しを持つ径約80mの四段築成の円墳で外堤を持つ。墳丘上から円筒埴輪や盾形埴輪等が出土し4世紀末～5世紀初頭のもものと推察されている。古墳時代後期には横穴式石室を持つ七双子古墳群や的場古墳群等の群集墳が急増する。

古代、中世の遺跡としては宇佐・国東に展開する六郷山寺院の中山本寺である横城山東光寺が注目される。寺院の奥ノ院とその周辺部に当たる丘陵尾根の鞍部から裏山埋納を象徴する12世紀前半の経塚遺構群が発見されている。経筒には銅製と陶製があり、14口が検出されている。陶製経筒には和鏡や湖州鏡を蓋としたものが多い。一方、八坂川の河川改修工事に伴って八坂久保田遺跡、八坂本庄遺跡、八坂中遺跡が発掘調査され、条里地域の水田開発の様相や溝を廻らせた多数の居館跡が検出され注目されている。大規模な水害が頻繁におこる環境での集落形成である。発掘調査報告書では、畿内系瓦器碗、吉備系土師器碗、京都系土師器等が出土していることから、水上交通にかかわる物資の集積センター的役割に関連する集落遺跡という見解である。10世紀の『和名抄』には速見郡の5つの郷が掲載されているが、八坂郷はこのような遺跡を包括するものであろう。

さて、大友木付氏系図によれば、木付氏は大友家の二代親秀の六男親重を祖とする一族であり、八坂下荘の高山川の下流部の木付という地名を名字としている。初代六郎親重は速見武者所として建長2年（1250）に竹ノ尾城（5）を築城した。竹ノ尾城は木付氏4代145年間の居城で八坂郷の中心であった。現在の杵築市街地が中心部となるのは、応永元年（1394）に木付氏4代の頼直が築城した台山城に移った後のことである。厳密に言えば、明德4年（1393）に台山城は北台に築城され、その後、城山に築城されたという青山賢信氏の注目される説もあるが考古学的には検証されていない。台山城は木付氏14代200年間、杉原、細川、小笠原時代の50年間の250年間の居城である。台山城はその地形から臥牛城とも呼ばれ、天正15年（1587）に島津軍を撃破して勝山城とも賞賛された。慶長5年（1600）には大友軍にも耐えた難攻不落の城であった。

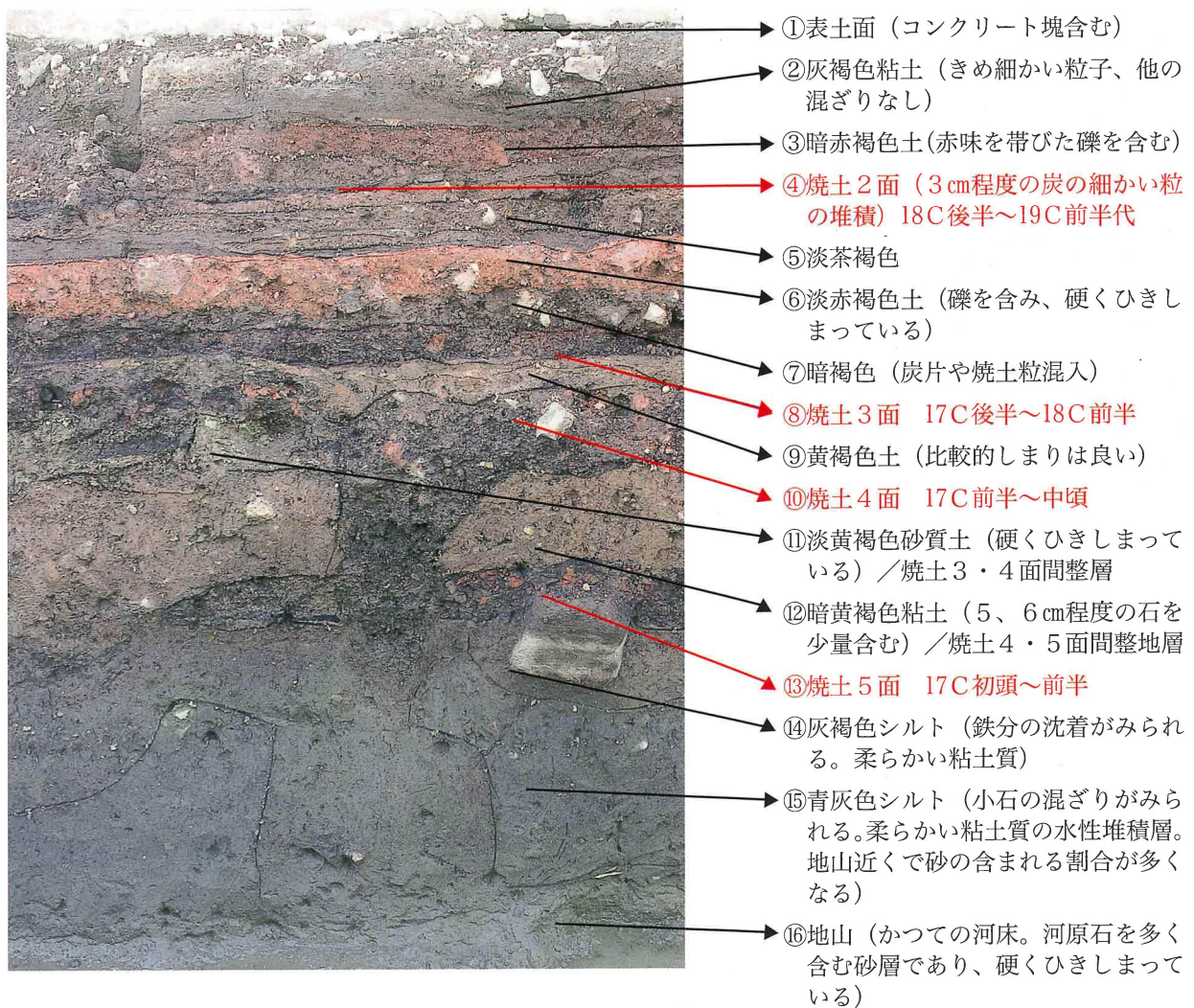


第1図 調査遺跡及び周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)

木付氏は文禄2年(1593)に大友氏と運命を共にし、木付17代統直で滅亡する。以後、杵築城主は目まぐるしく交代している。文禄4年(1595)に前田玄以、慶長元年(1596)に杉原長房、慶長5年(1600)に細川忠興、慶長6年(1601)に松井康之、寛永10年(1633)小笠原忠知、正保2年(1645)には初代藩主松平英親の3万7千石である。松平英親は城山の北端の低地の城館に入城しており、これが近世の杵築城として明治4年の廃藩置県まで能見松平氏10代227年間余り領内政治の中枢部として機能している。現在、城内と呼ばれる一帯は本丸と西丸があり、本丸には政所が置かれていた。城外には広小路があり、役所や倉庫、武器庫などが建ち並んでいた。城山から杵築城郭に伴う城下町の構造は、幾つかの城下町絵図によって武家屋敷や町屋の様相を伺うことが出来る。

杵築城下町は北台、南台という高台の平坦地には石垣や土塀を築く武家屋敷が並び、その間に挟まれた低い谷部には文字通り谷川が流れ、短冊形の間口の狭い町屋が谷町、中町、新町として展開していた。この様な高台と谷と坂からなる城下町には勘定場の坂、酢屋の坂、塩屋の坂、鉛屋の坂、天神の坂などの坂道や石段道が有機的に結ばれており杵築城下町の歴史的景観を今なお留めている。

参考文献『杵築市誌本編』(平成17年)



杵築城下町遺跡の形成過程 — 杵築城下町の土層 (22区) —

第3章 調査の成果

第1節 17調査区

17調査区は長さ約9.2m、幅約4.5mの長方形を呈する。地表面の標高は海拔約3.8mである。土層は地表面から約1.7m～1.9m程度掘ると青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山と変化している。

層序は比較的に整然と堆積しているが、約1.7mの堆積土内に焼土2面～焼土6面までの5回の焼土・炭化物層がパックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。5回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.2～0.3mから約0.2mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1～0.3mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山土と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。

1 検出遺構 (第4図、5～7図、写真1)

側溝と石列 (第5図)

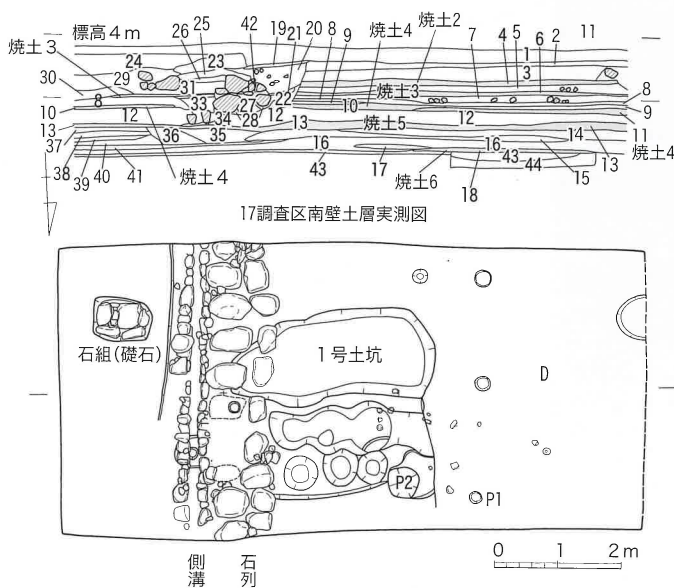
調査区の東側で側溝と石列が検出された。側溝は、現県道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝は二段掘りの様相を呈し、溝幅約0.15mで、深さ約0.2～0.25mである。底部を除く側片には掌大～人頭大の川原礫を1～2段に並べていた。一方、側溝の西側には、巨大な楕円礫とこれより一回り小振りな礫をセットにして二列に並べており、側溝上面より約0.5m程度高くしている。上面で約2.9～3m、下面で2.6mである。側溝は焼土5面よりは新しく、焼土3面よりは古くなる様相を呈する。

土坑 (第6図)

調査区の中央部、海拔2.9mの地点で幾つかの不定形な土坑が検出されている。1号土坑は長軸約3.3m、短軸約1.4mであり、深さは約0.75mである。床面は略平坦面を呈する。用途不明であるが、土坑が埋まった後に石列が組まれており、石列より古いものである。

【17調査区南壁土層説明】

- | | |
|----------------------------|---|
| 1 コンクリート地表面 | 9 灰白色砂質土 (砂礫を含む。焼土3～4面間③) |
| 2 暗黄褐色土 | 10 暗茶褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土4面) |
| 3 暗茶灰黄褐色土 | 11 暗黒褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土4面) |
| 4 暗茶褐色粘質土 (炭化物を多く含む。焼土2面) | 12 暗黄褐色粘質土 (焼土4～5面間①) |
| 5 灰白色砂質土 (砂礫を含む) | 13 暗黒褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土5面) |
| 6 暗黒褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土3面) | 14 暗灰黄褐色粘質土 (炭化物、黄色ブロックを含む。焼土5～6面間①) |
| 7 暗灰白色砂質土 (砂礫を含む。焼土3～4面間①) | 15 灰白色砂質土 (細砂を含む。焼土5～6面間②) |
| 8 暗黄褐色砂質土 (焼土3～4面間②) | 16 灰褐色シルト質土 (細砂、炭化物、鉄分を含む。焼土5～6面間③) |
| | 17 暗黄褐色粘質土 |
| | 18 暗黒褐色土 (焼土若干、炭化物を含む。焼土6面) |
| | 19 黄褐色土 (径2～3cmの小石が混じる) |
| | 20 暗茶褐色土 (径2～5cmの小石が多く混じる) |
| | 21 淡茶褐色土 (焼土粒が少量混入) |
| | 22 暗灰褐色土 (バサバサし径2～3cmの小石が混じる) |
| | 23 暗褐色土 (硬い山土、近現代の攪乱層) |
| | 24 灰褐色土 (近現代の攪乱層) |
| | 25 暗灰褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土1面) |
| | 26 暗黄褐色土 (やや粘性、径5mm程度の小石を含む) |
| | 27 暗黄褐色粘質土 |
| | 28 暗灰褐色土 (焼土粒、炭化物が若干混入。石列1の充填土) |
| | 29 淡茶褐色土 (径5cm程度の石が多く混じる) |
| | 30 暗灰褐色土 (径2～3cmの小石を多く含む) |
| | 31 灰白色砂質土 (径1cm程度の小石を多く含む) |
| | 32 暗黄褐色粘質土 (粘性有り、炭化物を若干含む) |
| | 33 灰褐色粘質土 (粘性強く、径1cm程度の小石、炭化物、焼土粒を少量含む) |
| | 34 暗黄褐色粘質土 (粘性強い、石列2の充填土) |
| | 35 淡灰褐色粘質土 |
| | 36 灰褐色粘質土 (砂、小石を含まない) |
| | 37 (14に対応) |
| | 38 (15に対応) |
| | 39 灰白色砂質土 (砂、小石を含まない) |
| | 40 暗灰白色砂質土 (細砂、径1～2cmの小石を少量含む) |
| | 41 暗黄褐色粘質土 (粘性有り、黄褐色ブロックが多く混じる) |
| | 42 人頭大の礫多い |
| | 43 黄褐色砂質土 (流れ込み遺物を包含) |
| | 44 青灰色シルト質土 (粘りがあり、細砂、鉄分が斑に入る) |



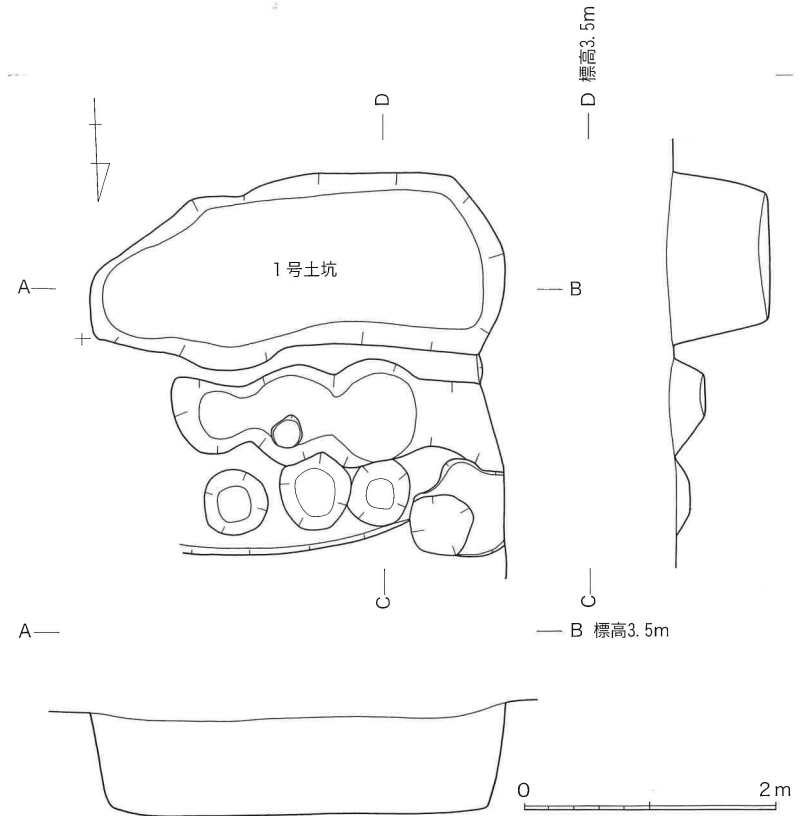
第4図 17調査区遺構配置図 (1/120)

石組遺構 (第7図)

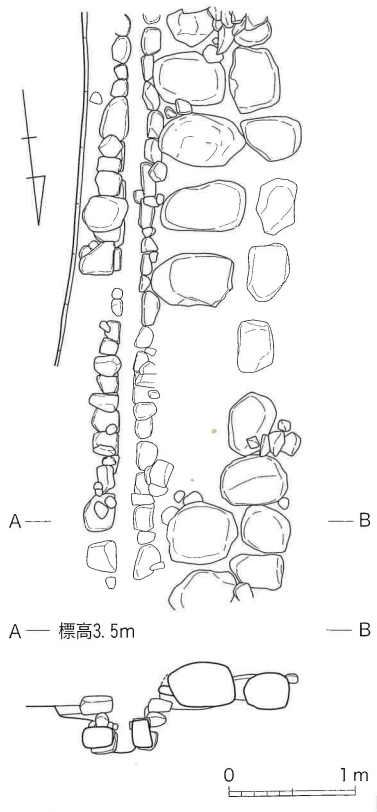
調査区の東端で検出された遺構である。土坑は長軸約2m、短軸約1.5mの隅丸長方形であり、深さは約0.75mである。床面は略平坦面を呈する。中には巨大な礫が組まれた状態であった。礎石の可能性も高い。

2 出土遺物 (第8図～第12図)

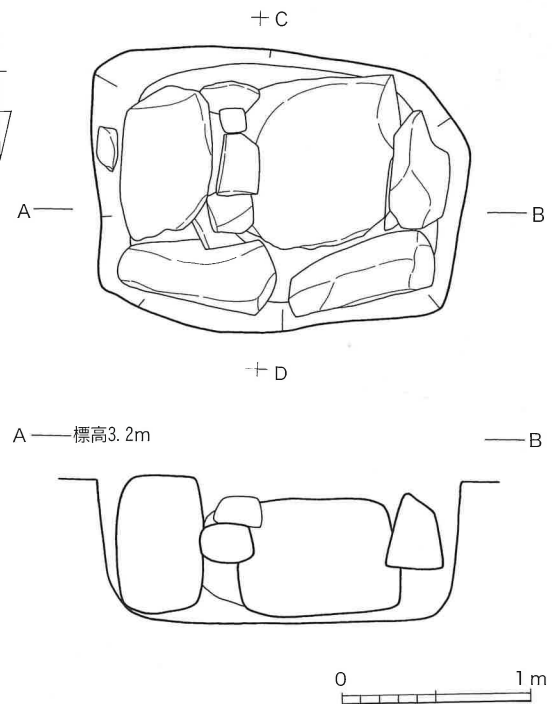
本調査区の出土遺物の詳細は表1に記述している。



第6図 17調査区1号土坑実測図 (1/60)



第5図 17調査区側溝と石列実測図 (1/60)

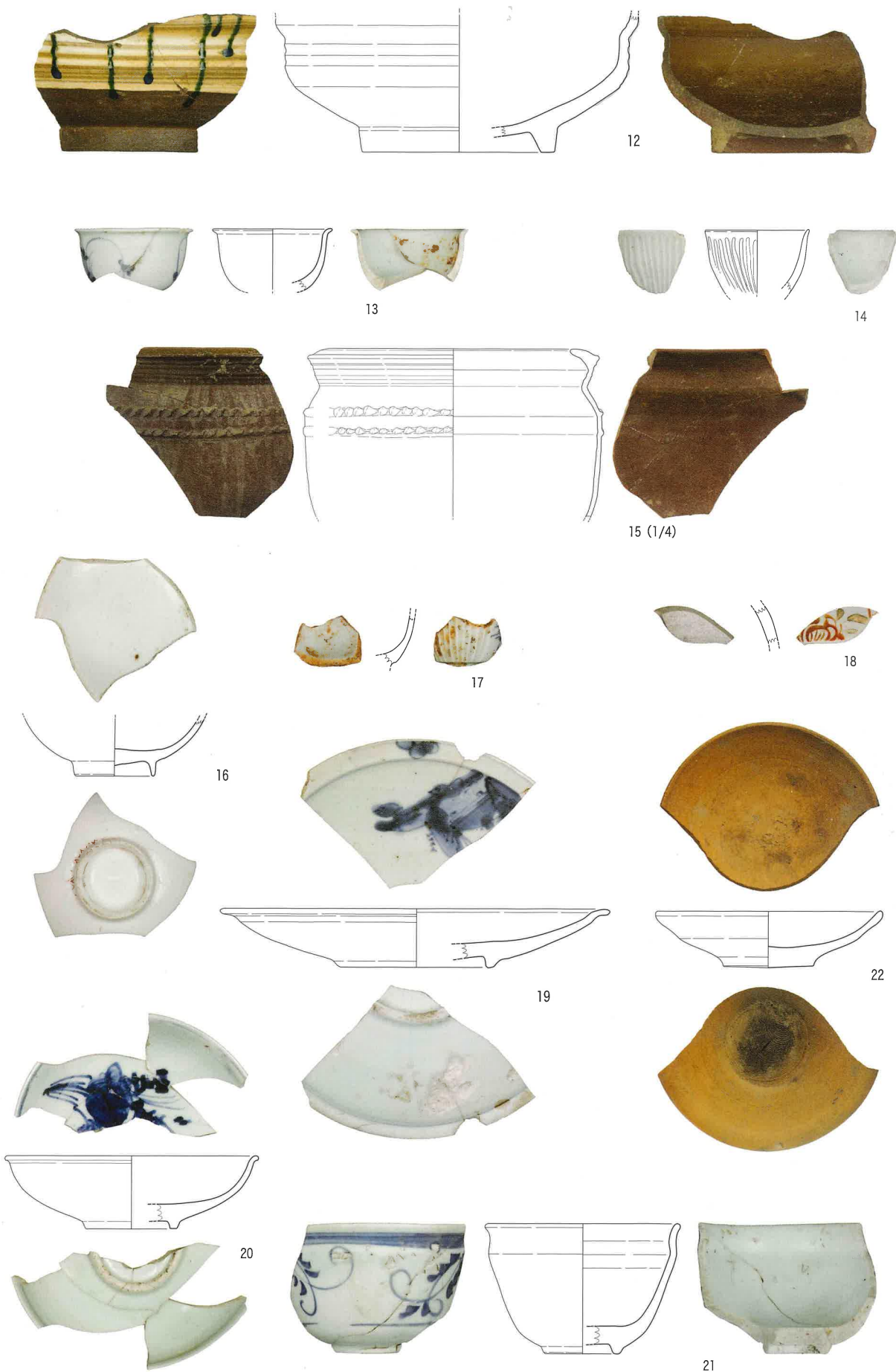


第7図 17調査区石組遺構実測図 (1/20)

第1節 17調査区



第8図 17調査区出土遺物 (1/3)

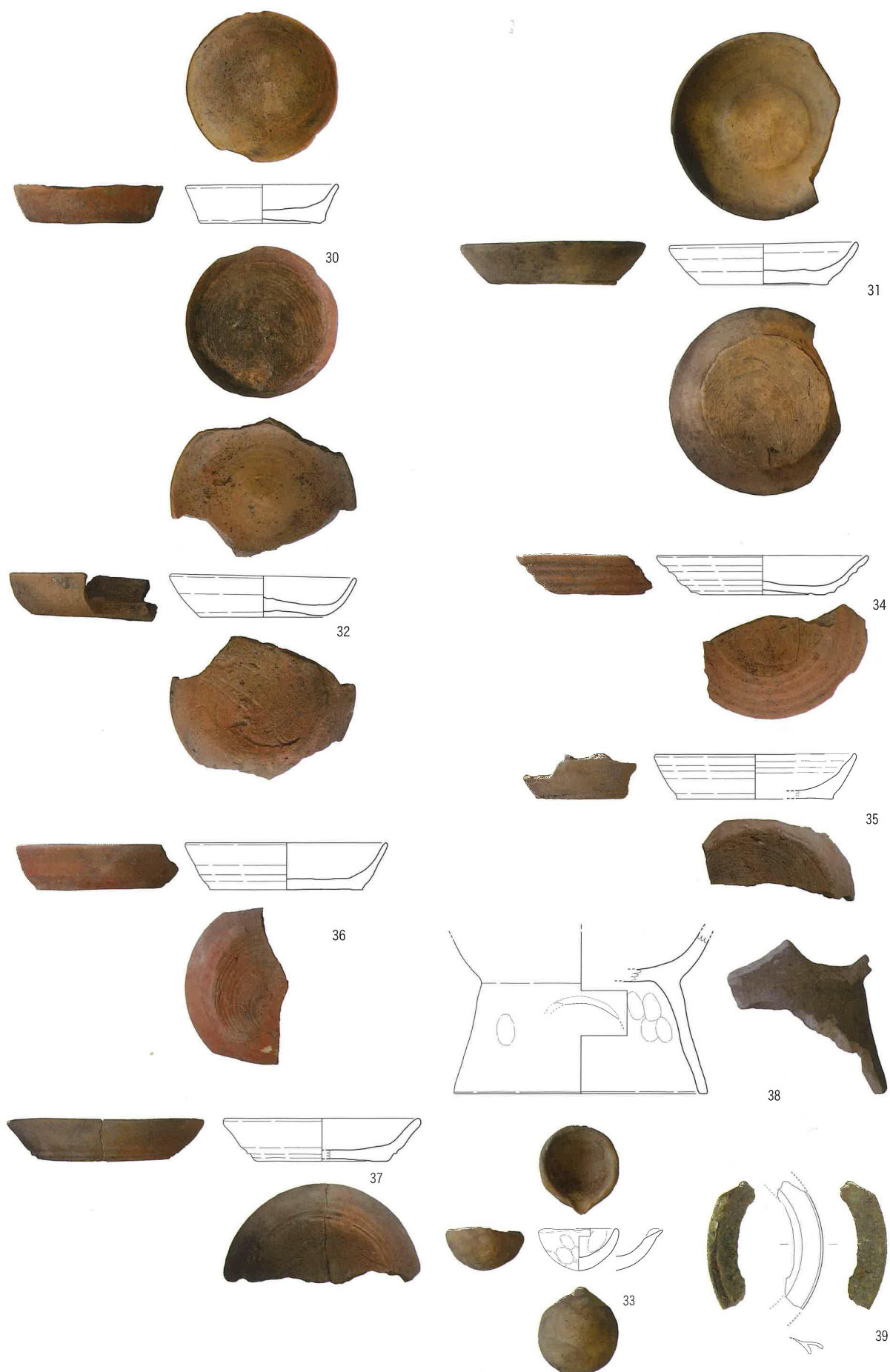


第9図 17調査区出土遺物 (1/3) ※15は1/4

第1節 17調査区

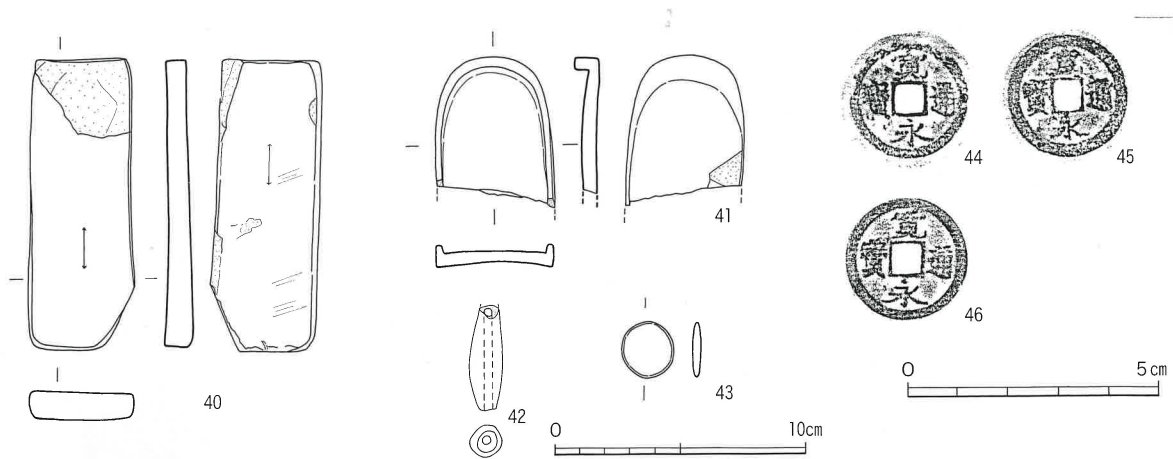


第10図 17調査区出土遺物 (1/3)



第11図 17調査区出土遺物 (1/3)

第1節 17調査区



第12図 17調査区出土遺物 (1/3、2/3)

表1 17調査区出土遺物観察表

番号	遺構	出土土層	器種		大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
					口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
1	SX01		磁器	瓶				3.4	1/3 個体	肥前		?
2	SX01		磁器	水滴				5.5	1/6 個体	肥前有田	武者人形色絵	18世紀前半頃、
3	SX01		陶器	鉢	37.3				1/10 個体	肥前		17世紀後半～18世紀前半
4	石列1		磁器	青花皿					1/10 個体	中国		16世紀末～17世紀前半
5	石列1下面		磁器	小杯	5.6	4.5	2.7		1/2 個体	肥前	鎬(しのぎ)文	1630～1650年
6	石列1下面		陶器	碗			4.8		底部完形	肥前	透明釉	17世紀～18世紀前半
7	P2		青磁	碗	10.8	7	5.1		1/2 個体	肥前	高台内砂付着	1630～1650年?
8		表土層	磁器	染付皿	13.2	3.3	8.5		1/3 個体	肥前	型紙刷り、印判染付	明治10年以降
9		焼土3面	陶器	碗			4.2		底部完形	肥前	透明釉	17世紀～18世紀前半
10		焼土3面	陶器	甕	11.5	6.9	5.2		底部～胴部	肥前	銅緑釉	17世紀第2～3四半期
11		焼土3面	陶器	甕	17.6				口縁の一部	肥前		?
12		焼土3面	陶器	鉢			10		底部～胴部1/3	肥前		17世紀後半～18世紀前半
13		焼土3～4面間	磁器	小杯	6.3				1/3 個体	肥前	蓮華文	1630～1650年
14		焼土3～4面間	磁器	小杯	5.6				1/5 個体	肥前	鎬(しのぎ)文	1630～1650年
15		焼土4面	陶器	甕	25				口縁の1/10	肥前		?
16		焼土4面	磁器	碗			4.1		底部完形	肥前	色絵	17世紀後半
17		焼土4面	磁器	小杯					胴部細片	肥前	鎬(しのぎ)文、寿字文	1630～1650年
18		焼土4面	磁器	瓶					胴部細片	肥前	色絵	?
19		焼土4面	磁器	染付皿	20.2	3.1	8.1		1/4 個体	肥前	山水文	1630～1650年
20		焼土5面	磁器	染付皿	13.6	3.8	4.9		1/3 個体	肥前		1630～1650年、1610～1630?
21		焼土5面	磁器	染付碗	10.2	6.8	4		口縁の1/5	肥前	天目型、19調査区焼土5面②の接合	17世紀前半、1610～1630
22		焼土5面下層	陶器	皿	11.8	2.9	4.8		2/3 個体	肥前		?
23		焼土5面下層	陶器	碗			3.9		底部完形	肥前	内外面灰釉	1590～1610
24		焼土5面下層	陶器	鉢	13.2	5	5.6		略完形	肥前	八角	1590～1610
25		焼土5面下層	陶器	皿	12.1	3.6	4.7		完形	肥前	胎土目	1590～1610
26		焼土5～6面間	陶器	皿	11.2	3.7	4.3		底部の1/2	肥前		1590～1610
27		焼土3～4面間	陶器	甕		16		26	底部の1/10	肥前		
28		焼土5面下層	土師質土器	杯	10.7	2～2.5	7.5		完形		回転系切り、ロクロ調整、歪みが大きい	
29		焼土5面下層	土師質土器	杯	11.2	1.8	7.6		口縁の1/5		回転系切り、ロクロ調整	
30		焼土5面下層	土師質土器	杯	8.2	2～2.1	6.7		完形		回転系切り、ロクロ調整	
31		焼土5面下層	土師質土器	杯	10.1	2.1～2.3	6.9		略完形		回転系切り、ロクロ調整、歪みが大きい	
32		焼土5面下層	土師質土器	杯	10	2.1～2.3	6.8		略1/2		回転系切り、ロクロ調整、ヘラ記号	
33		焼土5面下層	土師質土器	とりべ	4.3	2.2			完形			
34		焼土5面下層	土師質土器	杯	11.3	2.1	6.7		略1/3		回転系切り、ロクロ調整、外表面に段段の起伏	
35		焼土5面下層	土師質土器	杯	10.8	2.4	8.4		略1/5		回転系切り、ロクロ調整	
36		焼土5面下層	土師質土器	杯	10.9	8.1	2.5		略1/3		回転系切り、ロクロ調整	
37		焼土5面下層	土師質土器	杯	10.6	2.3	7.2		略1/2		回転系切り、ロクロ調整	
38		焼土5面下層	瓦器				13.6		底部の1/5			
39	SX01		銅製品			幅1.5		重さ19.1g	破片			
40		焼土5面下層	砥石		長さ11.4	幅4.2	厚さ1	重さ86g	略完形		緑泥片岩	
41		焼土4・5面層	碗			幅4.6	厚さ0.6	重さ30.3g	略1/3		輝緑凝灰岩	
42		焼土5面下層	土錘		長さ4.1	幅1.2		重さ6.4g	略完形			
43	SX01		基石			幅2～2.1		重さ2.5g	略完形			
44	SX01		銭貨	寛永通寶		径2.4		重さ2.7g	完形		「ス」の古寛永	
45		焼土3～4面間	銭貨	寛永通寶		径2.4		重さ3.1g	完形		「ス」の古寛永	
46		焼土4面	銭貨	寛永通寶		径2.4		重さ2.9g	完形		「ス」の古寛永	



17調査区南壁土層（北方向から）



調査区全景（東方向から）



石列、側溝検出状態（南方向から）



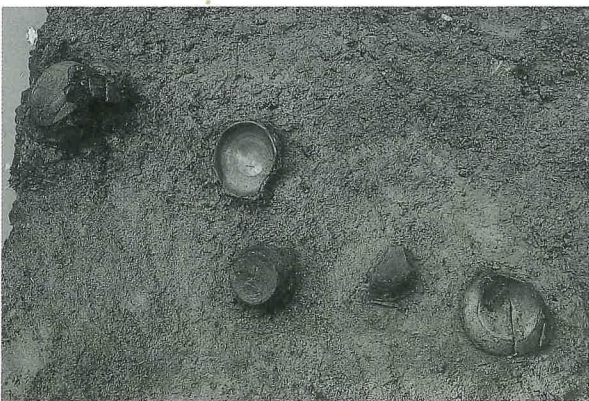
石列1、側溝1検出（南方向から）



遺構検出状況（東方向から）



石組遺構掘形完掘状態（北方向から）



焼土5面遺物出土状態



焼土5面遺物出土状態

第2節 18調査区

18調査区は長さ約13.5m、幅約4mの長方形を呈する。地表面の標高は海拔約3.9~4mである。発掘調査は、地表面から約1.6m~2.1m程度掘ったが、約1.6mで青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山と変化している。

層序は比較的整然と堆積しているが、約1.6mの堆積土内に焼土3面~焼土5面までの3回の焼土・炭化物層がパックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。3回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.02~0.03mから約0.2mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1~0.3mの黄褐色土層は礫を含み、人為的に持ち込まれた整地層であった。この搬入土は山土と想定され、人為的な遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。

1 検出遺構 (第13、14図、写真2)

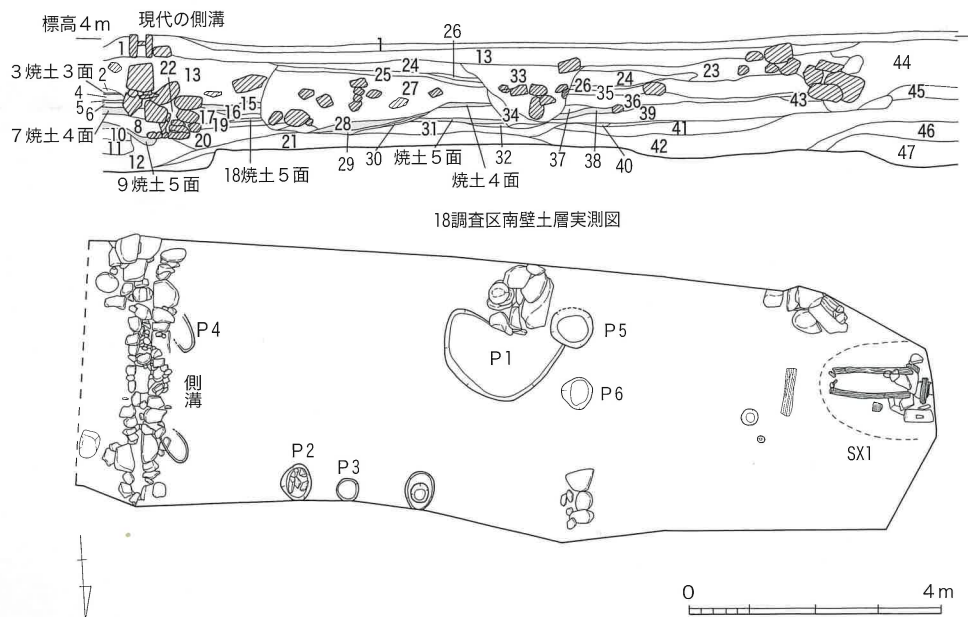
側溝 (第14図)

調査区の東端で側溝が検出された。側溝は、現県道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝は、溝幅約0.15~0.18mで、深さ約0.15~0.3mである。底部を除く側片には掌大~人頭大の川原礫を1~3段に並べていた。なお、この側溝から西に約6mと10.5mの位置には、人頭大の川原礫が調査区南壁沿いに纏まった痕跡があり、側溝の残影とも推測できる。一方、この側溝の直上やや東寄りには、現代の側溝が機能しており、側溝の位置が踏襲されてきたことが推察できる。

側溝は焼土5面よりは新しく、焼土3面よりは古くなる様相を呈する。

2 出土遺物 (第15図~第17図)

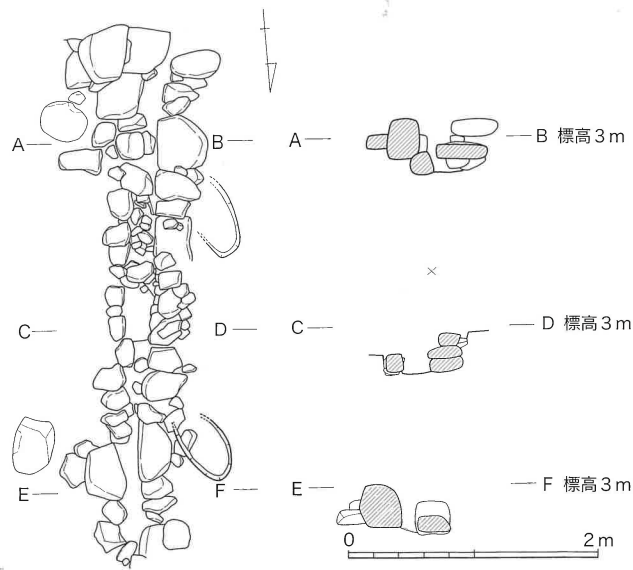
本調査区の出土遺物の詳細は表2に記述している。



第13図 18調査区遺構配置図 (1/120)

【18調査区南壁土層説明】

- | | | | | | |
|----|------------------------------------|----|------------------------------|----|------------------------------------|
| 1 | コンクリート地表面 | 47 | 暗赤褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土4面) | 65 | 暗灰褐色土 (焼土粒、小石、人頭大の礫を多く含む) |
| 5 | 灰白色砂質土 (砂礫を含む) | 48 | 暗黄褐色粘質土 (径1cm程度の小石を多く含む) | 66 | 暗黒褐色土 |
| 6 | 暗黒褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土3面) | 49 | 暗灰褐色土 | 67 | 赤褐色砂礫層 |
| 7 | 暗灰白色砂質土 (砂礫を含む。焼土3~4面間①) | 50 | 暗黒褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土5面) | 68 | 灰褐色土 (小石を多く含む) |
| 8 | 暗黄褐色砂質土 (焼土3~4面間②) | 51 | 灰粘質土 (径1cm程度の小石が混じる) | 69 | 暗黄褐色粘質土 |
| 9 | 灰白色砂質土 (砂礫を含む。焼土3~4面間③) | 52 | 灰褐色粘質土 (黄色ブロックを含む) | 70 | 暗黒褐色土 (炭化物層。焼土5面) |
| 11 | 暗黒褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土4面) | 53 | 暗褐色砂質土 (側溝2の埋土。拳大の礫、炭化物少量含む) | 71 | 暗黄褐色粘質土 (粘性強く、1cm程度の小石が入る) |
| 12 | 暗黄褐色粘質土 (焼土4~5面間①) | 54 | 暗灰褐色粘質土 | 72 | 淡灰褐色粘質土 |
| 13 | 暗黒褐色土 (焼土、炭化物を含む。焼土5面) | 55 | 暗黒褐色土 (径5cm程度の石を含む) | 73 | 暗茶褐色粘質土 (粘性強く、2cm程度の小石が入る) |
| 14 | 暗灰黄褐色粘質土 (炭化物、黄色ブロックを含む。焼土5面①) | 56 | 暗褐色土 (径2cm程度の小石を含む) | 74 | 暗灰褐色粘質土 (粘性強く、5cm程度の小石、鉄分が斑に入る) |
| 16 | 灰褐色シルト質土 (細砂、炭化物、鉄分を含む。焼土5面間③) | 57 | 暗茶褐色土 (炭化物を多く含む) | 75 | 暗黒褐色土 |
| 44 | 青灰色シルト質土 (粘りがあり、細砂、鉄分が斑に入る。焼土5面間⑤) | 58 | 灰白色土 (小石を含まない) | 76 | 暗茶褐色土 (小石を含む) |
| 45 | 暗茶褐色土 | 59 | 灰白色砂礫土 (径5~10cmの小石を多く含む) | 77 | 淡茶褐色土 |
| 46 | 淡灰褐色土 (径2cm程度の小石を多く含む) | 60 | 黒褐色土 (炭化物層。焼土5面) | 78 | 暗褐色砂礫層 (1cm程度の小石が斑に入る) |
| | | 61 | 赤褐色土 (焼土層。焼土5面) | 79 | 青灰色シルト質土 (粘りがあり、細砂、鉄分が斑に入る。44層に対応) |
| | | 62 | 暗褐色土 (径2mm程度の細石が少量混じる) | | |
| | | 63 | 暗灰褐色粘質土 (粘性弱く、鉄分が斑に入る) | | |
| | | 64 | 灰褐色粘質土 (径2cm程度の小石を含む) | | |

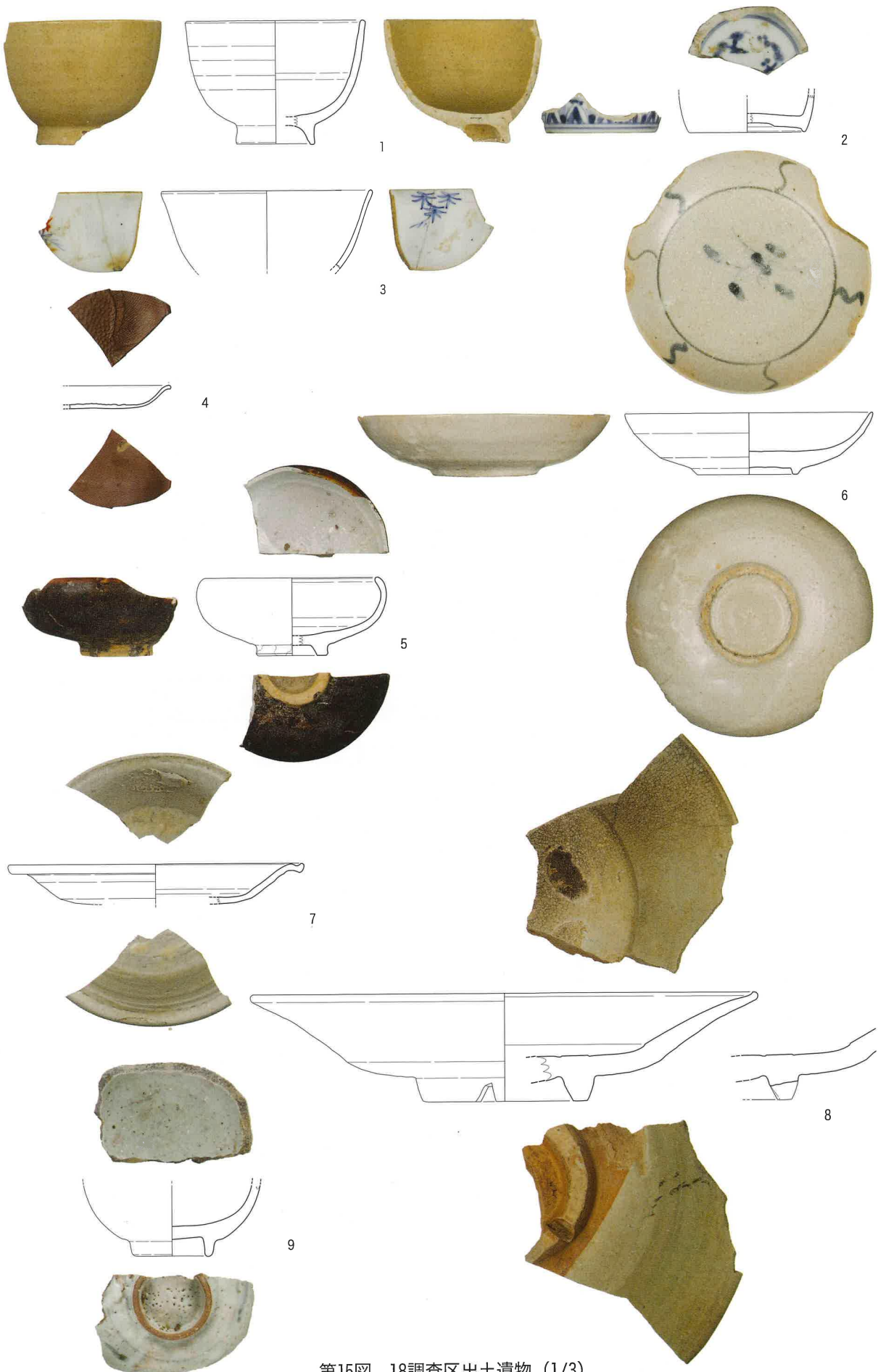


第14図 18調査区側溝実測図 (1/60)

表2 18調査区出土遺物観察表

番号	遺構	出土土層	器種		大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
					口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
1	一括		陶器	碗	9.6	6.6	4.2		1/5 個体	肥前	内外透明釉	17世紀後半～18世紀前半
2	一括		磁器	猪口			6.2		底部の1/2	肥前		18世紀後半
3	一括		磁器	碗	11.4				口縁の1/10	肥前	色絵、端反碗、焼き接ぎ有り	1810～1860年
4	一括		陶器	皿		1.2			底部の1/5	関西系	型打ち成形	19世紀
5	P4		磁器	鉢	9.4	4.2	3.8	10.4	1/3 個体	肥前	外鉄釉、内透明釉	1630～1650年
6	P5		磁器	染付皿	13.5	3.3	5.6		略完形	肥前		1630～1650年
7	側溝2下面		陶器	皿	16	2.2			口縁の1/5	肥前	溝縁皿	1600～1630年
8		焼土4面	陶器	鉢	26.8	5.9	8.8		1/5 個体	肥前	砂目、割り高台	1600～1630年
9		灰白色砂礫層	陶器	碗			4.3		底部の1/2	肥前	陶体染付	18世紀前半
10		焼土5面+灰白色砂礫層	磁器	染付碗	9.1				口縁の1/5	肥前		17世紀中頃～後半
11		焼土5面下層	磁器	染付皿		1.6			口縁の1/10	肥前		18世紀前半
12		焼土5面下層	陶器	壺	9.3				口縁の1/2	肥前上野	ワラ灰釉	17世紀前半
13		焼土5面下層	陶器	碗			4.7		底部の1/2	肥前		1590～1610年
14		焼土5面下層	陶器	鉢	31.2				口縁細片	肥前	灰釉	?
15	側溝2下面		鉄製品			幅3.2	厚さ0.7～1.7	重さ51.1g	破片		三叉の金突き	
16	一括		鉄製品					重さ38.5g	破片		小柄	
17	一括		木器		長さ17.6		厚さ1～1.2		破片		「コ」字の溝、竹釘痕	
18	一括		煙管	吸口	長さ7.4			重さ3.6g	破片			
19	一括		煙管	雁首	長さ9.2		火皿径1.5	重さ8.9g	破片			
20	一括		銅製品	水滴		高さ1.4	底径3.3	重さ13.2g	破片			
21	一括		銅製品			高さ1.4	底径4.8	重さ43.6g	破片			
22	一括		銅製品		長さ4.5	高さ3.2	厚さ1～1.2	重さ19.1g	略完形		不明	

第2節 18調査区



第15図 18調査区出土遺物 (1/3)



第16図 18調査区出土遺物 (1/3)

第17図 18調査区出土遺物 (1/3、2/3)

写真2



18調査区側溝検出状態（北方向から）



南壁土層（北方向から）



石列検出状態（北方向から）



SX1検出状態（北方向から）



調査区検出状態（東方向から）

第3節 19調査区

19調査区は長さ約11m、幅約5.4～7mの長方形を呈する。地表面の標高は海拔約3.8mである。土層は地表面から約1.8m程度掘ると青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山と変化している。発掘調査は部分的であるが2.5mの深さまで土層の確認をした。

層序は比較的整然と堆積しているが、約2.5mの堆積土内に焼土3面～焼土6面までの4回の焼土・炭化物層がパックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。4回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.02～0.03mから約0.2mの堆積があり、これらに挟まれた約0.3～0.6mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山土と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。

1 検出遺構 (第18図～第24図、写真3)

1号石列 (第19図)

調査区の中央部で長さ4.8mの石列が検出された。石列は、一抱えもある巨大な川原石を1～2段に並べて直線的に配置したもので、巨石と巨石の間に拳大や人頭大の石を置いたものである。現県道の宗近魚町線にはほぼ直角に配置されており、南方の谷川へと続く側溝の東片側のみが遺存したものと推量できる。石列中央部での標高は、検出面で約2.9～3m、下面で2.6mである。

2号石列 (第18図)

調査区の南壁近くに位置する石列である。大、小の礫が混在しており、石列が集石遺構かも判然としない。検出面の標高は約2.5m前後であり、4号石列の上面に位置している。

3号石列 (第20図)

調査区の中央部で長さ4.5mの石列が検出された。石列は、一抱えもある巨大な川原石と拳大や人頭大の石を集めて直線的に並べたものである。石列内の石の密度には濃淡がある。南壁近くで直角に曲がり、西向きに2m程延びる様相を呈する。石列中央部での標高は、検出面で約1.9m、下面で1.45mである。この石列の上面に2号土坑が位置している。

4号石列 (第21図)

調査区の中央部やや東側で長さ約6.9mの石列が検出された。石列は、川原石を1～2段に並べて直線的に配置したもので、巨石と巨石の間に拳大や人頭大の石を置いたものである。石列中央部での標高は、検出面で1.25m、下面で1.05mである。水が湧き出る状態である。この石列の上面に2号石列が位置している。

1号土坑 (第22図)

調査区の中央部西寄りで長形状の土坑が検出されている。土坑は長軸約3m+ α 、短軸約0.9m～1.4mであり、深さは約0.5mである。床面は略平坦面を呈する。用途不明である。土坑の標高は、検出面で2.95m、床面で2.25mである。この土坑は3号石列の上面に位置している。

2号土坑 (第23図)

調査区の中央部西寄りで形状の土坑が検出されている。土坑は長軸約1.4m、短軸約1.2mの隅丸方形であり、検出面からの深さは約0.05mである。床面は略平坦面を呈する。土坑の中央は円形に心持ち窪み、土坑内には縁に沿って掌大～人頭大の礫が並べて配置された状態であった。土坑の標高は、検出面で2.75～2.8m、床面で2.63mである。この土坑は3号石列の上面に位置している。

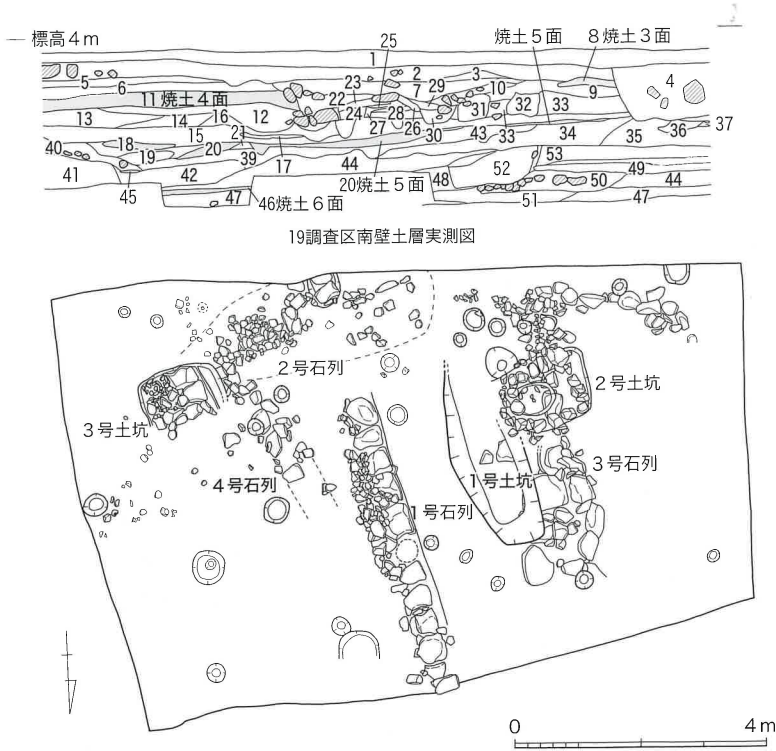
3号土坑 (第24図)

調査区の東端で検出された遺構である。土坑は北半分を欠損しており、現長軸で約1.35m、現短軸で約1mの隅丸方形であり、検出面からの深さは約0.25～0.3mである。床面は略平坦面を呈する。中には巨大な礫や拳大の礫が整然と組まれた状態で入っていた。土坑の標高は、検出面で2.45～2.5m、床面で2.2mである。この土坑は4号石列の上面に位置している。

2 出土遺物 (第25図～第35図)

本調査区の出土遺物の詳細は表3に記述している。

第3節 19調査区

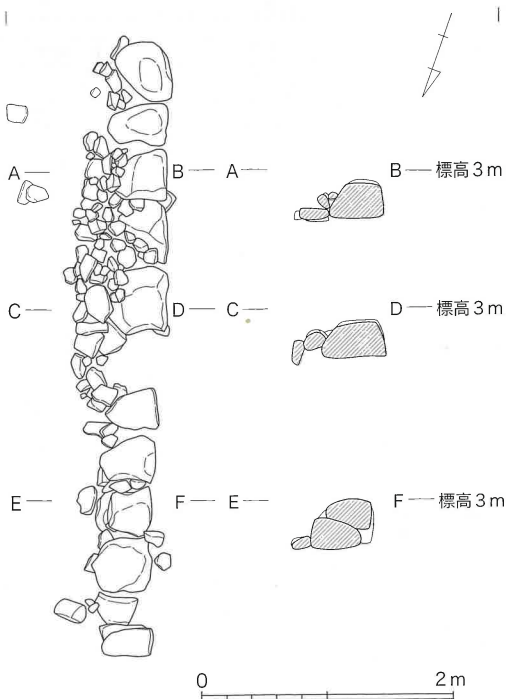


第18図 19調査区遺構配置図 (1/120)

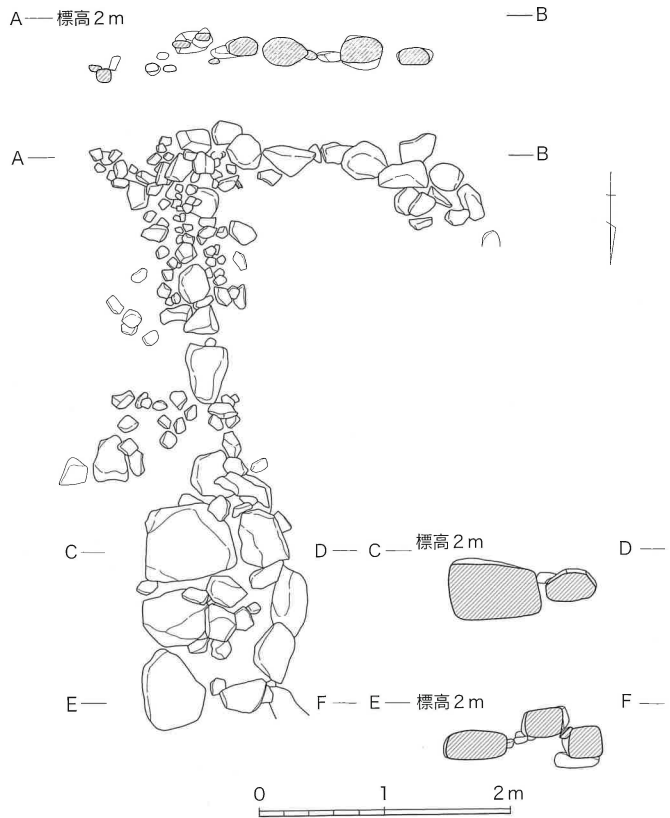
- 44 青灰色粘質土 (粘りが強い)
- 45 黒褐色土 (炭化物層)
- 46 灰褐色シルト質土 (炭化物層。焼土6面)
- 47 灰色砂礫層 (3cm前後の砂礫を多く含む。石列4はこの層中で検出)
- 48 淡灰褐色粘質土 (1mm程度の砂礫が混じる)
- 49 暗灰褐色粘質土 (炭化物が微量部分的に残る)
- 50 暗褐色粘質土 (石列3はこの層中で検出)
- 51 黄褐色砂質土
- 52 黄褐色粘質土
- 53 灰褐色粘質土 (鉄分が斑に入る)

【19調査区南壁土層説明】

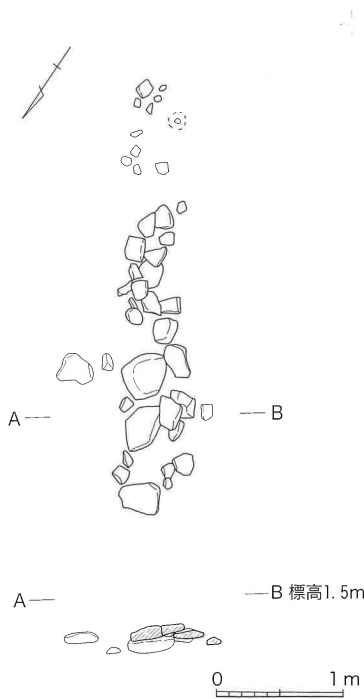
- 1 コンクリート地表面
- 2 淡茶褐色土 (焼土、炭化物、礫を多く含む)
- 3 赤褐色砂質土 (1cm程度の小石を多く含む)
- 4 暗茶褐色土 (攪乱層。焼土、炭化物、礫を多く含む)
- 5 暗褐色土 (焼土、炭化物少量含む)
- 6 淡茶褐色土 (軟土質。炭化物を含む)
- 7 淡茶褐色土 (径2mm程度の砂礫を含む。瓦片が多い。炭化物を少量含む)
- 8 暗赤褐色土 (焼土、炭化物を多く含む。焼土3面)
- 9 暗灰褐色土 (炭化物を少量含む。1mm程度の砂礫を含む)
- 10 暗灰褐色土 (炭化物を少量含む。1mm程度の砂礫、径10cmの礫が多い)
- 11 暗赤褐色土 (焼土、下部に炭化物を含む。焼土4面)
- 12 暗黄褐色粘質土 (焼土4～5面間①)
- 13 灰白色砂礫土 (鉄分が斑に入り、径2cm程度の小石を多く含む)
- 14 灰褐色砂質土 (鉄分が斑に入る細砂)
- 15 黄褐色粘質土 (径5cm程度の小石を多く含む)
- 16 灰褐色粘質土 (柔らかな土質、砂粒を含まない。鉄分が斑に入る)
- 17 灰褐色粘質土 (径2cm程度の小石を含む)
- 18 淡灰褐色土 (炭化物、焼土粒を少量含む。焼土5面)
- 19 灰褐色粘質土 (径5cm程度の小石を含む)
- 20 暗黒褐色土 (炭化物を多く含む。焼土は少ない。焼土5面)
- 21 灰褐色粘質土 (鉄分が斑に入る)
- 22 暗茶褐色土 (1mm程度の砂が少量混じり、灰色ブロックが斑に入る)
- 23 暗灰褐色土 (下部に焼土粒が集積。焼土4面)
- 24 淡灰褐色砂質土
- 25 淡黄褐色砂質土
- 26 暗灰褐色土 (炭化物を少量含む)
- 27 暗灰色土
- 28 灰褐色粘質土 (炭化物、焼土粒を多く含むピット埋土)
- 29 淡灰褐色土 (黄色ブロック、径1cm程度の小石を多く含む)
- 30 暗灰褐色粘質土 (粘りは弱く、炭化物を少量混じる)
- 31 暗灰褐色粘質土 (炭化物、焼土粒を少量含むピット埋土)
- 32 暗茶褐色土 (炭化物、焼土粒を少量含むピット埋土)
- 33 灰褐色砂礫層 (径2cm程度の小石を含む)
- 34 淡灰褐色粘質土 (黄色ブロックを多く含む)
- 35 暗黄褐色粘質土 (径2cm程度の小石を多く含む)
- 36 暗黒褐色土 (炭化物多いピット埋土)
- 37 茶褐色粘質土
- 38 暗褐色土 (石列3の埋土)
- 39 暗黄褐色粘質土 (鉄分が斑に入り、小石を多く含む)
- 40 灰色粘質土 (拳大の石を含む)
- 41 灰黄褐色砂質土 (鉄分が斑に入る)
- 42 灰褐色砂質土 (中位に炭化物の集積)
- 43 淡黄褐色粘質土 (径2cm程度の小石を含む)



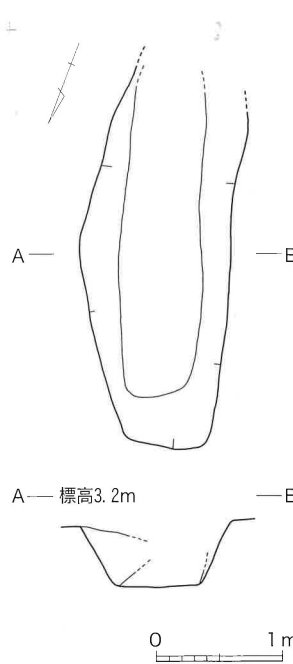
第19図 19調査区1号石列実測図 (1/60)



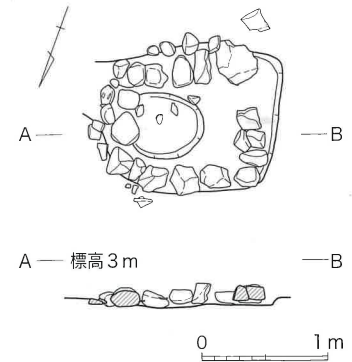
第20図 19調査区3号石列遺構実測図 (1/60)



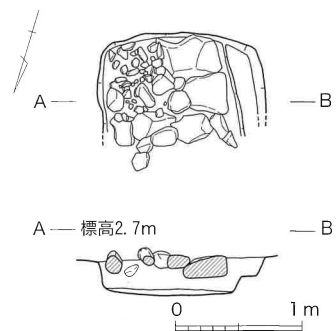
第21図 19調査区
4号石列遺構実測図 (1/60)



第22図 19調査区
1号土坑遺構実測図 (1/60)



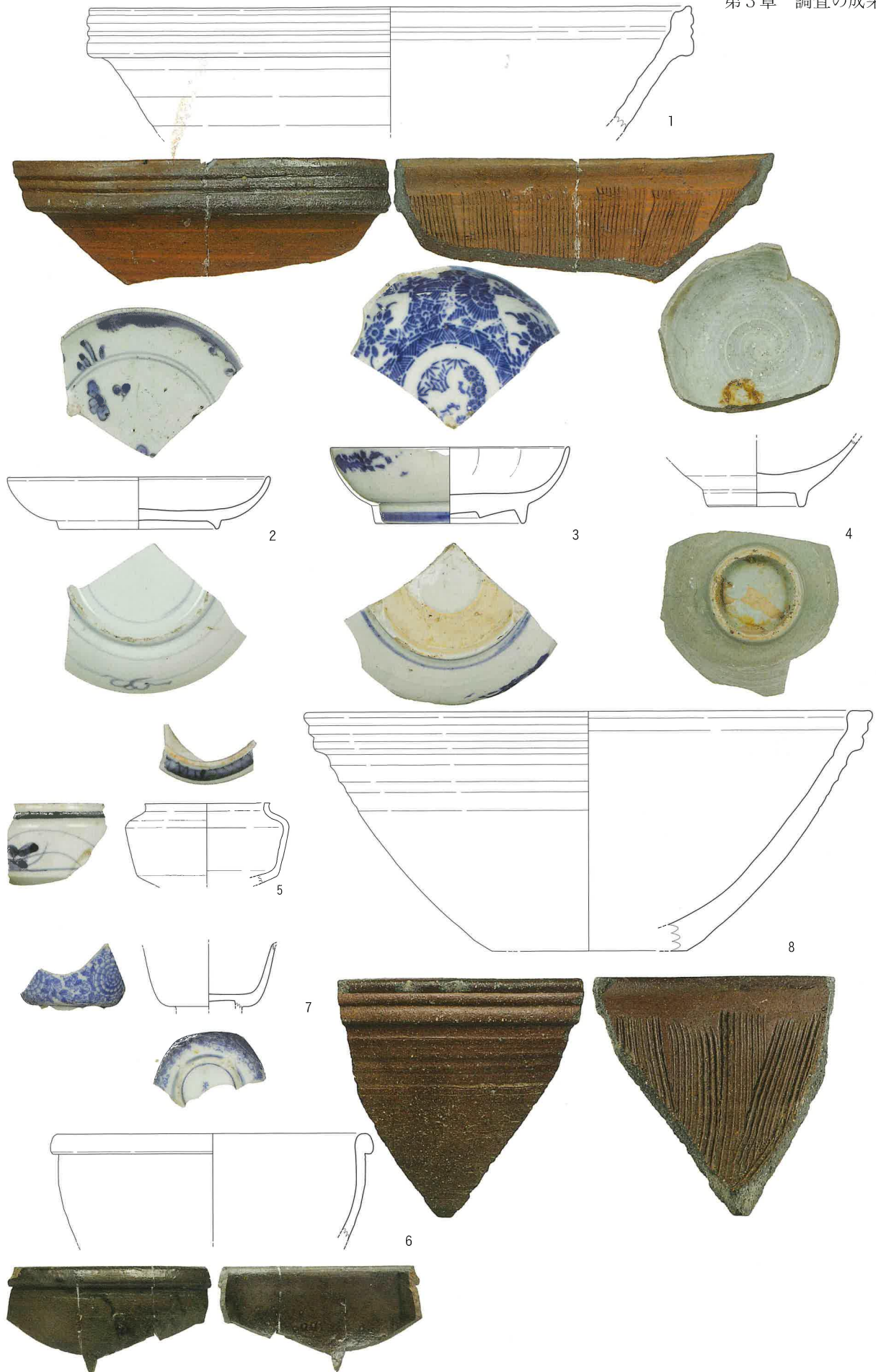
第23図 19調査区
2号土坑遺構実測図 (1/60)



第24図 19調査区
3号土坑遺構実測図 (1/60)

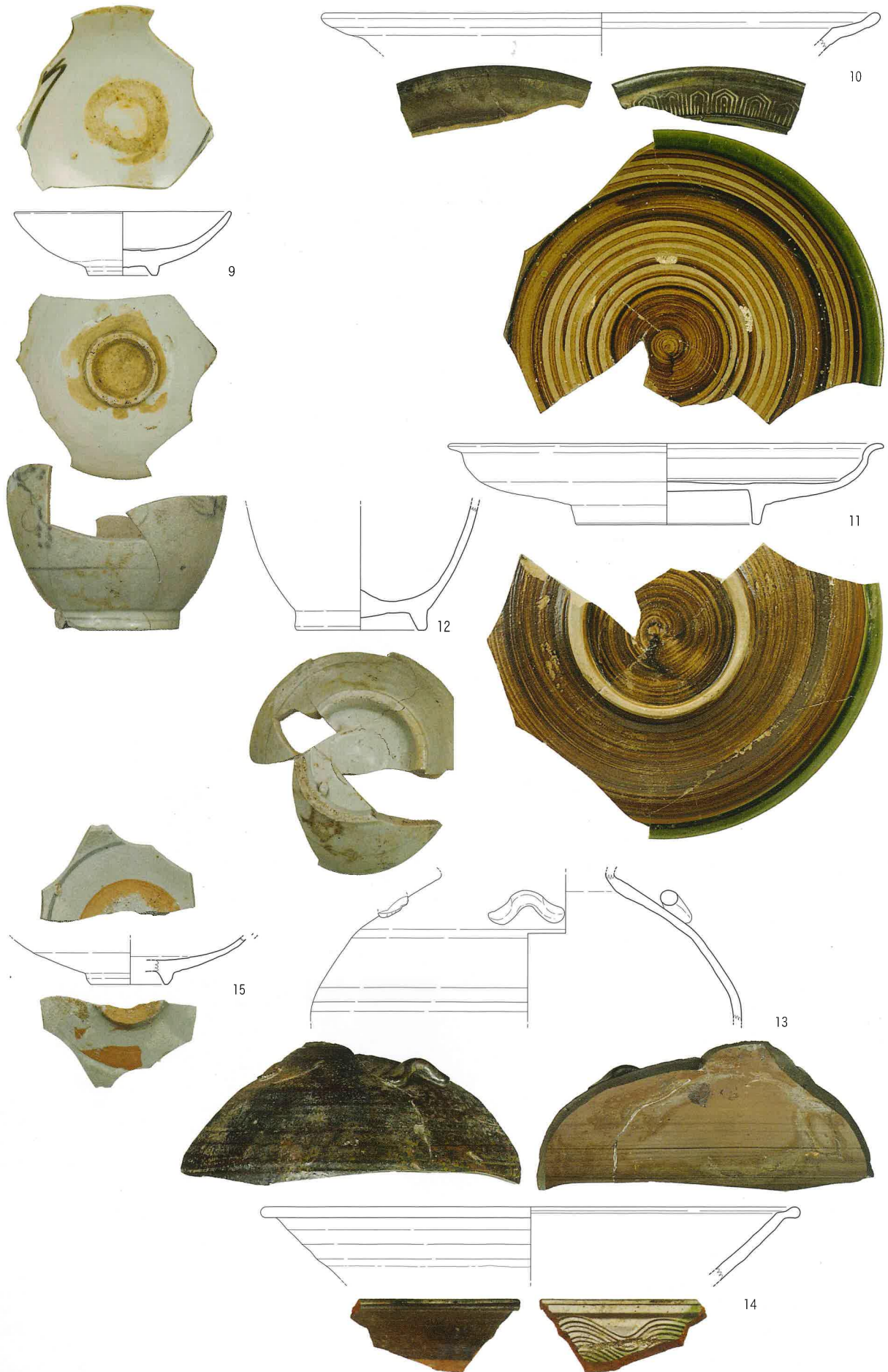
表3 19調査区出土遺物観察表

番号	遺構	出土層	器種		大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
					口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
1	一括		陶器	搦鉢	31.8				口縁の1/5	堺		?
2	一括		磁器	染付皿	14.3	2.8	8.8		1/4 個体	肥前		17世紀後半?
3	一括		磁器	染付皿	13	4.1	8		1/4 個体	肥前	型紙刷り	明治10年代
4	一括		陶器か磁器	碗			5.3		底部完形	肥前	刷毛目、朝鮮の高麗茶碗を真似た物	1630~1650年
5	一括		磁器	染付壺	6.8			9	口縁の1/5	肥前・有田	蓋付小壺、	17世紀後半
6	一括		陶器	鉢	16.8				口縁の1/5	肥前		?
7	一括		磁器	小杯			3.6		底部の1/2	瀬戸美濃		大正後半~昭和
8	一括		陶器	搦鉢	30.3	13.1	10.2		口縁の1/5	?		?
9	一括		磁器	皿	11.6	3.4	3.8		1/2 個体	肥前		
10	一括		陶器	大皿	29.4				破片	肥前		
11	一括		陶器	皿	22.8	4.4	9.7		2/3 個体	肥前陶磁	緋襷軸手法、砂目、陶石粉を使用、鉄軸	1630~1640・1650年
12	1号土坑	(焼土3面からの掘り込み)	磁器	染付瓶			7		2/3 個体	肥前	ぶどう文、二次被熱	1650~1670年
13	1号土坑	(焼土3面からの掘り込み)	陶器	茶壺				23	胴部片	福岡・関西系	黄灰釉	17世紀
14	1号土坑	(焼土3面からの掘り込み)	陶器	鉢	28.2				口縁細片	肥前	刷毛目	17世紀後半~18世紀前半
15	1号土坑	(焼土3面からの掘り込み)	磁器	皿			4.2		底部の1/5	肥前	見込蛇目軸剥ぎ	18世紀後半
16	1号土坑	(焼土3面からの掘り込み)	陶器	瓶	5.1	23.9	11	14.4	略完形	肥前	ワラ灰釉、上半鉄釉、二次被熱	17世紀第2~3四半期
17	1号土坑	(焼土3面からの掘り込み)	陶器	搦鉢	29	13.1	12.9	30.5	略完形	備前		
18	1号土坑	(焼土3面からの掘り込み)	小杯	小杯	4.2	3.2	1.8		1/2 個体	肥前		
19	1号土坑+焼土4面接合		陶器	瓶	8	12.7	6.4	14.2	1/3 個体	肥前		
20	2号土坑		陶器	搦鉢	28.8	13.2	14.2	32.3	口縁の1/3	?		
21	石列3上面		磁器	染付皿	13.8	3.1	8.5		底部の1/5	肥前		17世紀後半?
22	側溝③周辺		磁器	染付皿	13.4	2.9	5.2		1/5 個体	肥前		?
23		焼土3面	陶器	鉢	26.2				口縁の1/5	肥前	刷毛目	17世紀後半~18世紀前半
24		焼土3面	陶器	瓶			5.2		底部の1/5	肥前		?
25		焼土3~4面間	磁器	再加工品	4.6	0.9	2.4		底部完形	中国	景德鎮、底部は再加工で円形に面取	
26		焼土3~4面間+焼土3面	陶器	鉢			8.8		底部の1/4	肥前		?
27		焼土3~4面間	陶器	鉢			11		底部の1/2	肥前	内面砂目	17世紀後半~18世紀前半
28		焼土3~4面間	陶器	水差底部			14.4		底部の1/2	熊本八代か	国産、茶関係	17世紀前半
29		焼土3~4面間	磁器	油壺				10	胴部細片	肥前・有田	基筒底	1650年後半~1670年
30		焼土3~4面間	白磁	白磁瓶			5.1		底部の1/2	肥前	白磁瓶	?
31		焼土4面	陶器	皿			4.5		底部完形	肥前	見込蛇目軸剥	?
32		焼土4面	陶器	碗			4.8		底部完形	肥前	内外透明釉	17世紀~18世紀前半
33		焼土4面	陶器	瓶			3.4		口縁縁き略完形	関西系	墨書有り	19世紀後半



第25図 19調査区出土遺物 (1/3)

第3節 19調査区



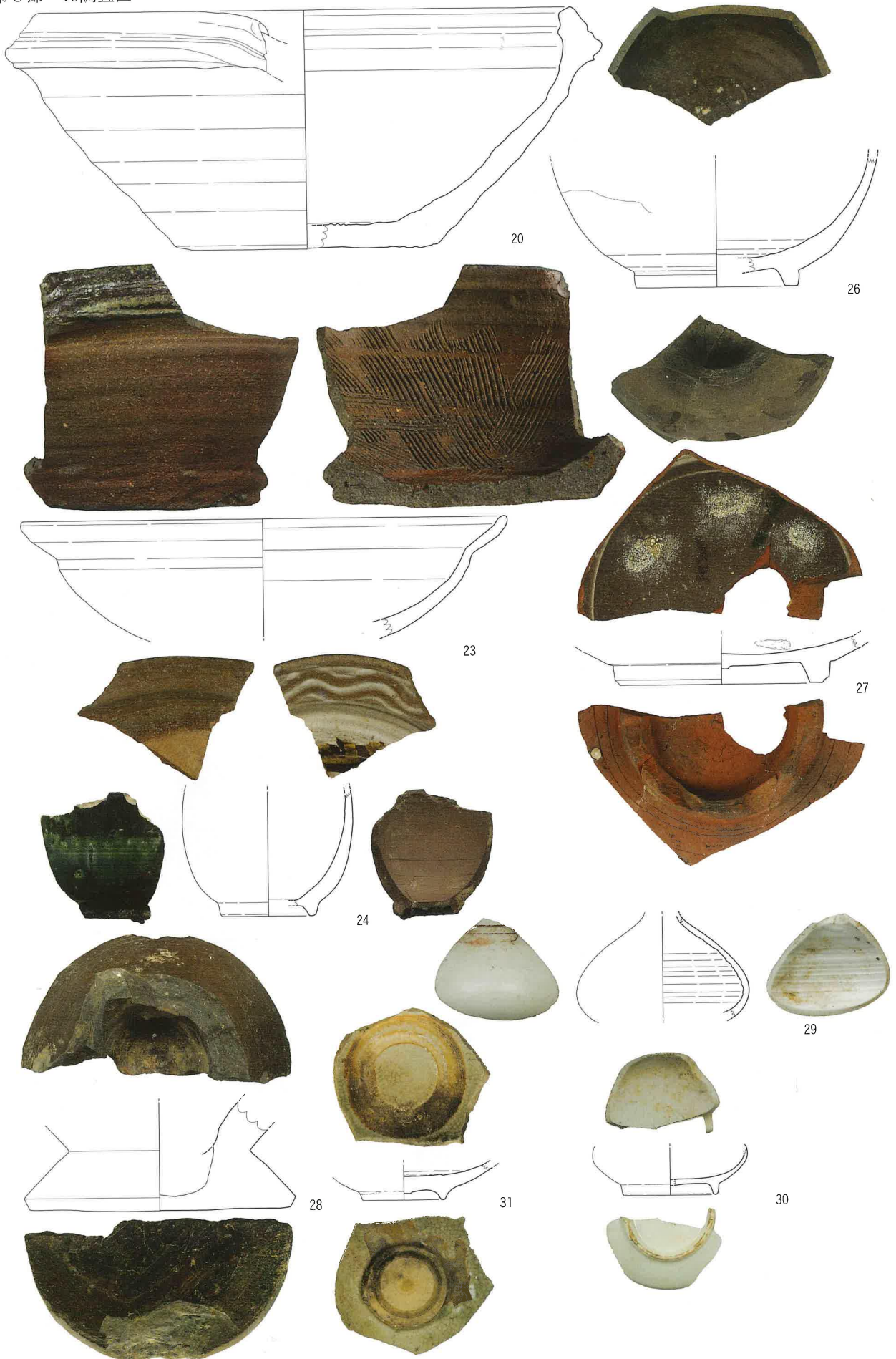
第26図 19調査区出土遺物 (1/3)



第27図 19調査区出土遺物 (1/3)

※17は1/4

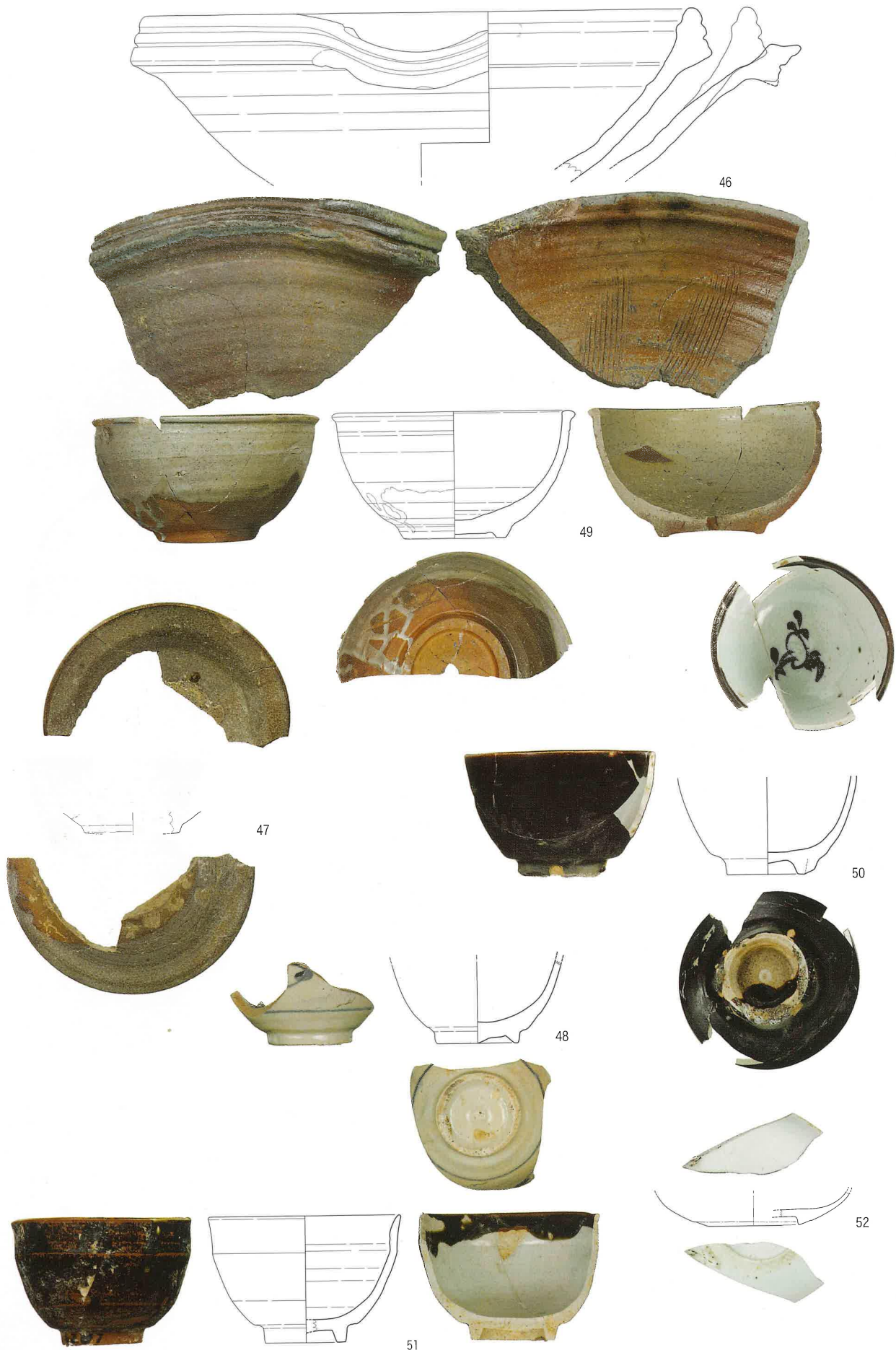
第3節 19調査区



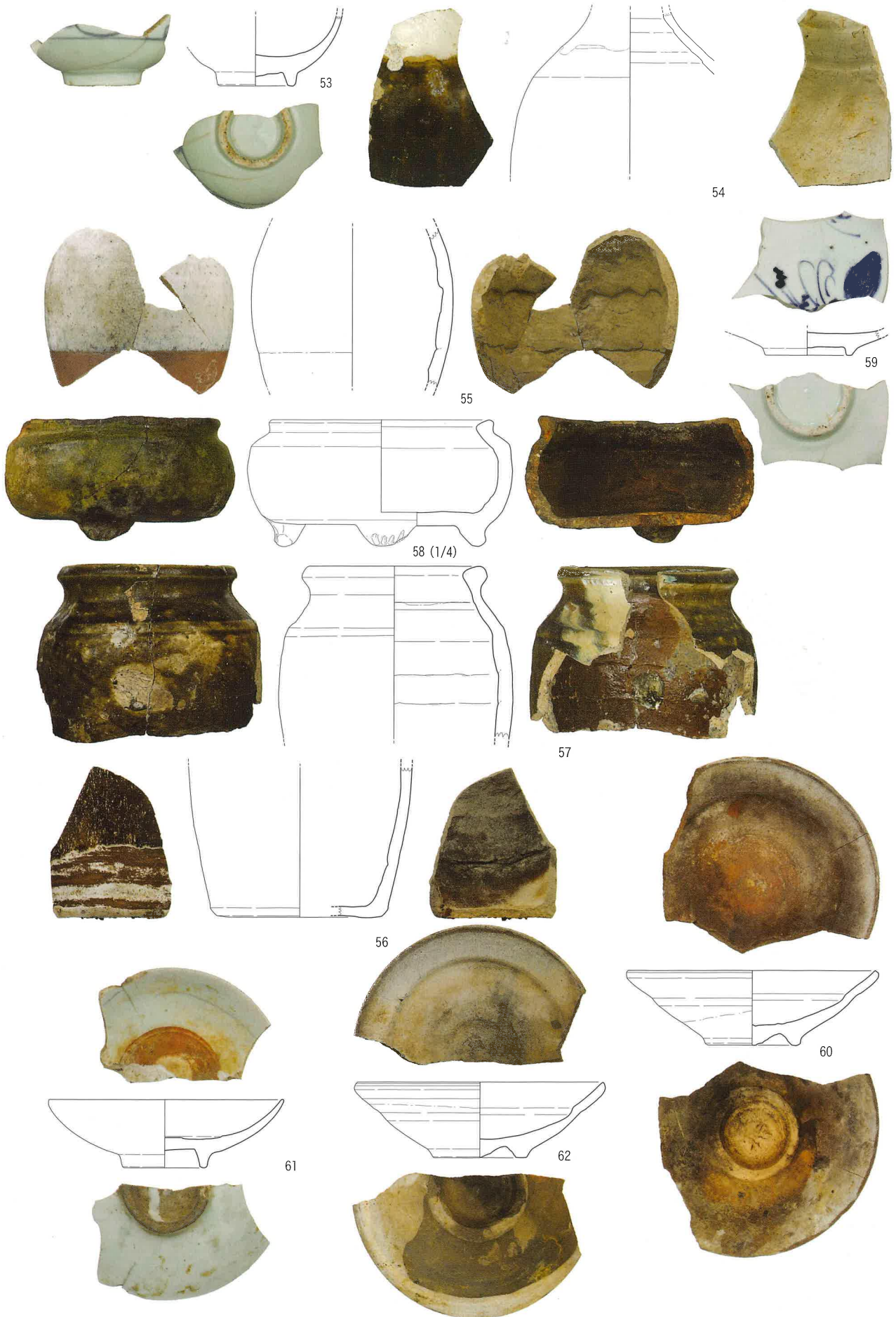
第28図 19調査区出土遺物 (1/3)



第29図 19調査区出土遺物 (1/3)



第30図 19調査区出土遺物 (1/3)



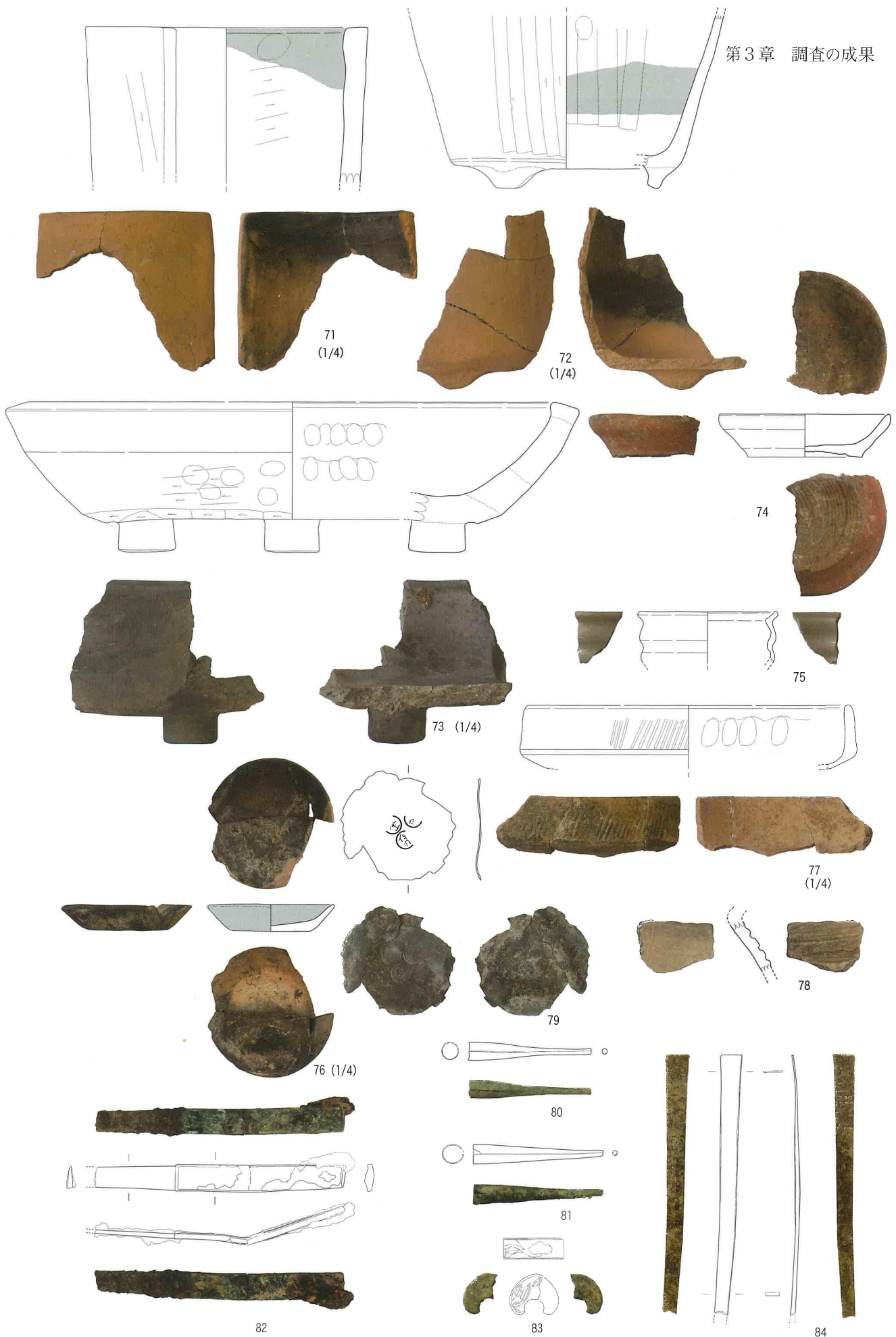
第31図 19調査区出土遺物 (1/3)

※58は1/4

第3節 19調査区

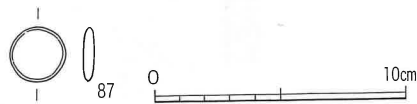
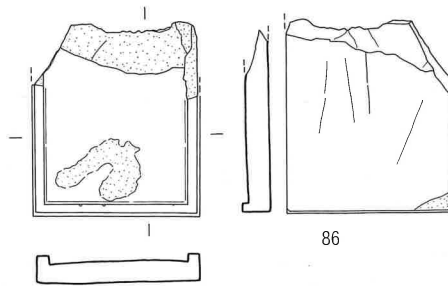
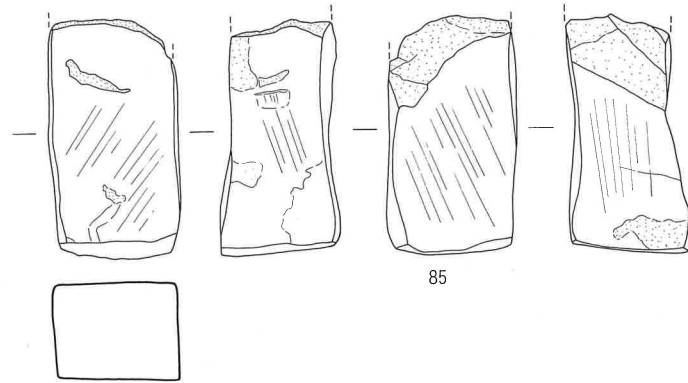


第32図 19調査区出土遺物 (1/3)

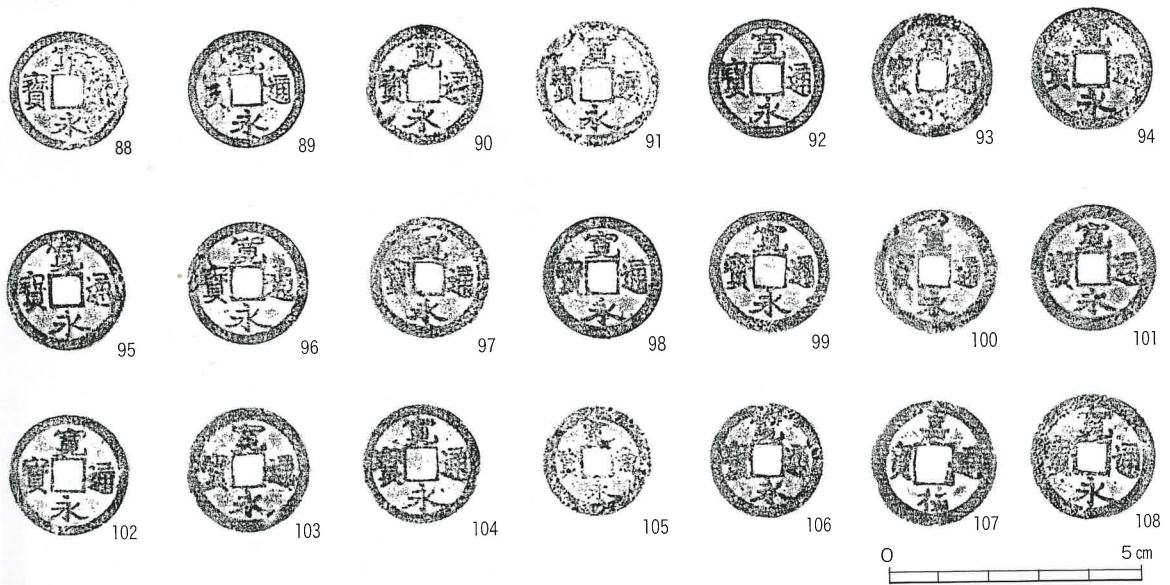


第33図 19調査区出土遺物 (1/3)

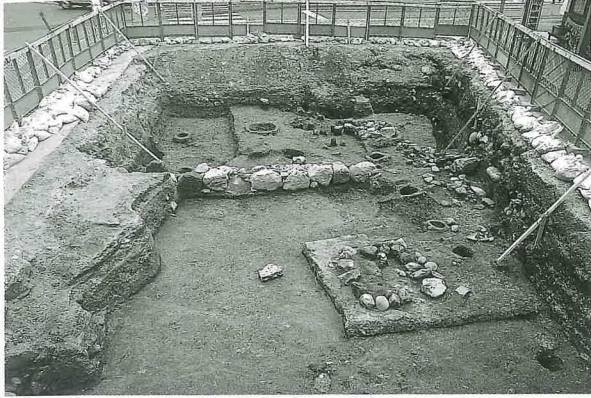
※71~73、76、77は1/4



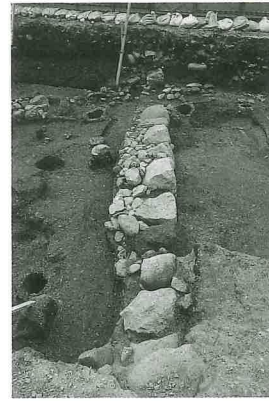
第34図 19調査区出土遺物 (1/3)



第35図 19調査区出土遺物 (2/3)



19調査区遺構検出状態（西方向から）



1号石列検出状態（北方向から）



南壁土層断面



焼土5面陶磁器出土状態（西方向から）



1号土坑完掘状態（北方向から）



2号土坑検出状態（西方向から）



3号土坑検出状態（西方向から）



3号石列検出状態（北方向から）

第4節 20調査区

20調査区は長さ約16m、幅約4mの長方形を呈する。地表面の標高は約4.1mである。調査区の出土遺構を俯瞰すると、調査区南壁断面には東隅から約3.5～4m置きに巨石が並んで遺存しており、側溝の痕跡と推察できる。

土層は地表面から約1.7m～1.9m程度掘ると青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山と変化している。層序は比較的に整然と堆積しているが、約1.8mの堆積土内に焼土1面～焼土6面までの6回の焼土・炭化物層がパックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。6回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.02～0.03mから約0.2mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1～0.7mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山土と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。

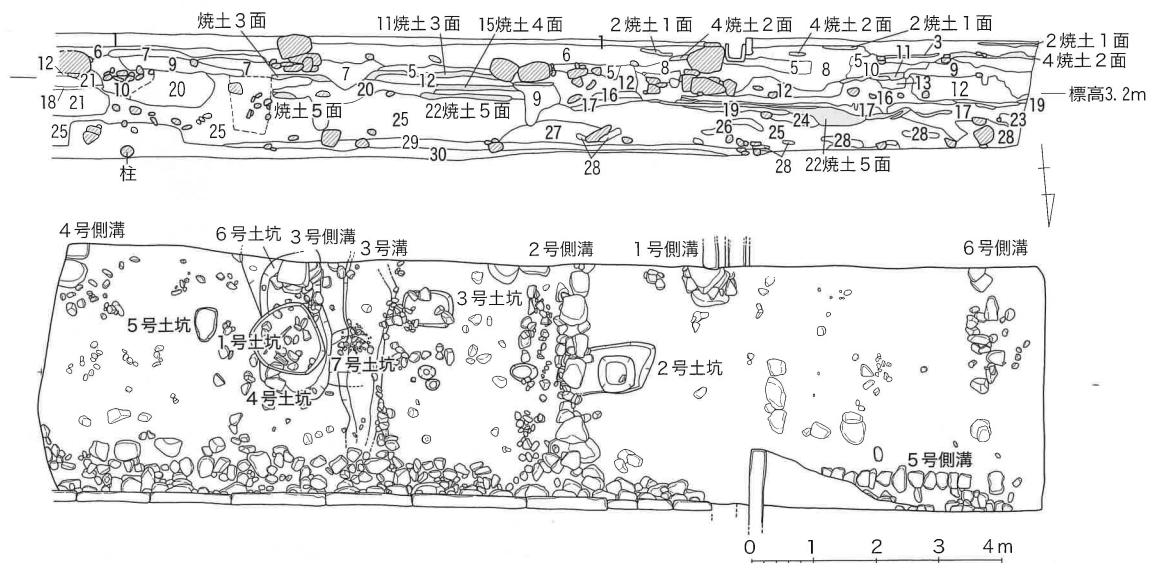
1 検出遺構 (第36～43図、写真4)

1号側溝 (第36図)

1号側溝は現在のコンクリート製の側溝の位置を踏襲しており、調査区南壁に巨石が組まれ遺存していた。これは、1号側溝の東片側の石垣の一部と推量できる。石の底面の標高は3.13、3.16、3.18mである。一方、1号側溝の西片側の石垣は調査区の中央部に3～4個並んでいる巨石と推察できる。石の底面の標高は3.11、3.15、3.17mである。焼土5面より上位に位置している。

2号側溝 (第37図)

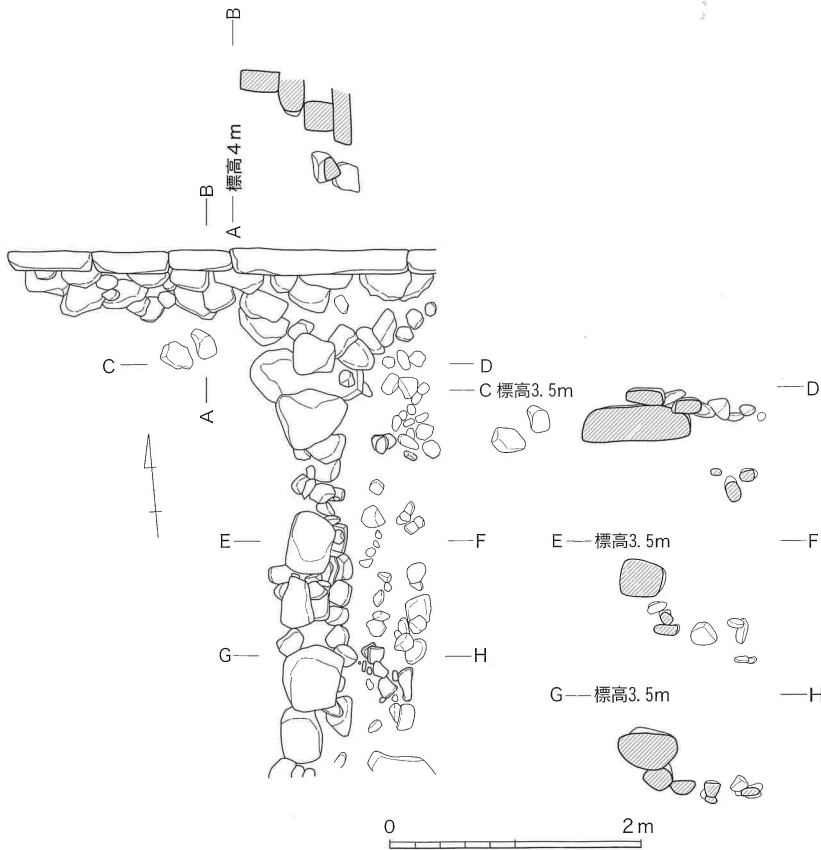
調査区の中央部に遺存する側溝である。側溝の西側には巨大な石と人頭大や拳大の石が2～3段に積まれているが、東側には人頭大や拳大の石が二列に並んでおり巨石は南壁を除いて確認できない。側溝は、現県道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝の溝幅は約0.3～0.45m程であるが



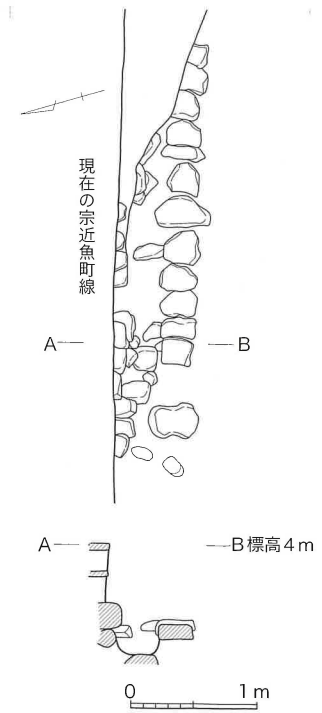
第36図 20調査区遺構配置図 (1/120)

【20調査区南壁土層説明】

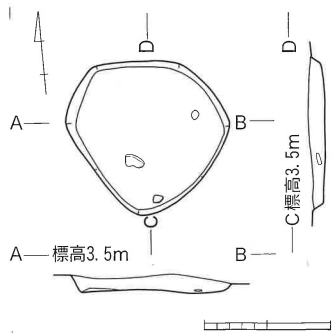
- | | |
|----------------------------|---------------------------------|
| 1 コンクリート地表面 | 16 灰褐色砂質土 (人頭大の礫を含む) |
| 2 赤茶褐色土 (炭化物を僅かに含む。焼土1面) | 17 灰褐色砂質土 (小石を含む) |
| 3 暗黄褐色土 | 18 灰褐色砂質土 |
| 4 焼土2面 (炭化物を多く含む) | 19 茶褐色粘質土 (径5cm程度の小石を含む) |
| 5 茶褐色砂質土 (小石、炭化物を少量含む) | 20 暗灰褐色粘質土 (焼土粒を含む) |
| 6 淡茶褐色土 (礫、焼土粒、炭化物を含む) | 21 灰白色粘質土 (僅かに砂粒を含む) |
| 7 淡黄褐色砂質土 (瓦片や礫を含む) | 22 焼土5面 (炭化物、焼土塊を多く含む) |
| 8 は5層と略同じ (瓦を多く含む) | 23 暗黒褐色土 (礫や僅かに炭化物を含む) |
| 9 暗褐色砂質土 (拳大の礫を多量に含む) | 24 灰黄褐色砂質土 (小粒の砂礫を含む) |
| 10 暗褐色土 (黄色の砂と小石を含む) | 25 暗黄褐色砂質土 (焼土、炭化物や小粒～人頭大の礫を含む) |
| 11 焼土3面 (焼土粒を僅かに含む、炭化物層) | 26 淡灰褐色土 (径1cm程度の小石を多く含む) |
| 12 暗黄褐色土 (径10cm程度の小石を多く含む) | 27 暗灰褐色砂質土 (鉄分の沈着あり) |
| 13 暗黄褐色土 (炭化物を少量含む) | 28 暗灰褐色土 (鉄分の沈着あり) |
| 14 暗黒褐色土 (暗黄褐色土が混入) | 29 灰褐色シルト (マンガンの沈着あり、最上面は焼土6面) |
| 15 焼土4面 (上に炭化物の層、下に厚い焼土層) | 30 青灰色シルト層 |



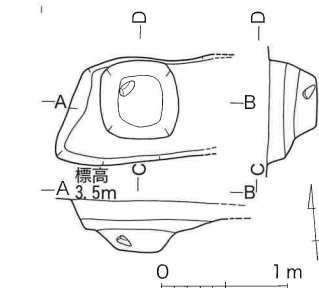
第37図 20調査区2号側溝実測図 (1/60)



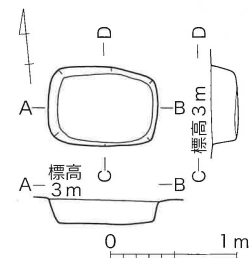
第38図 20調査区5号側溝実測図 (1/60)



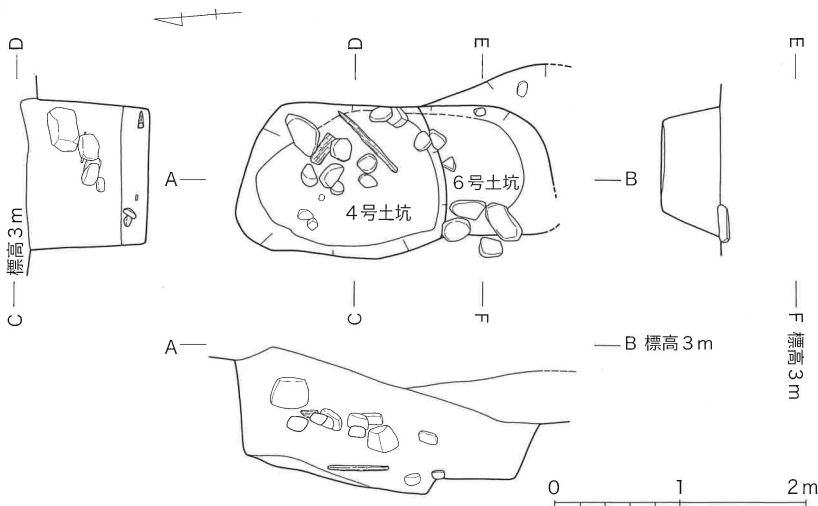
第39図 20調査区
1号土坑実測図 (1/60)



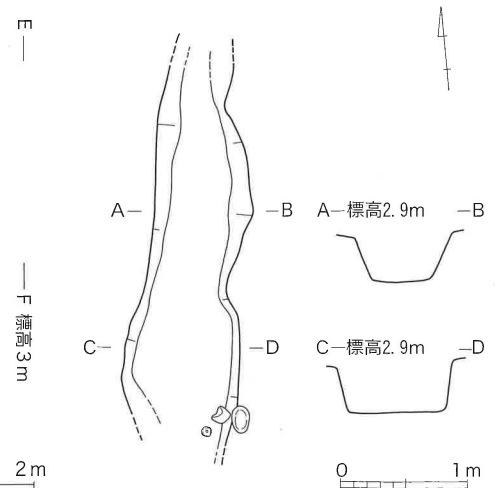
第40図 20調査区
2号土坑実測図 (1/60)



第41図 20調査区
3号土坑実測図 (1/60)



第42図 20調査区4号、6号土坑実測図 (1/60)



第43図 20調査区3号溝実測図 (1/60)

第4節 20調査区

拳大の礫が二列に配置されており、溝幅は定かではない。溝の深さは0.4～0.5m程度である。検出面の側溝上面は標高3.25～3.5mで、下面では2.55～2.65mである。

3号側溝・3号溝（第36、43図）

調査区の中央東寄り、3号溝の東片側の調査区南壁には巨石を組んだ痕跡があり、側溝の一部と推量された。しかし、3号溝との関係は明瞭ではない。

3号溝は調査区の中央東寄りに位置する溝である。溝は現県道の宗近魚町線に接して直角に配置されているが、平面は定型ではない。溝はいわゆる箱掘りであり、溝幅は約0.5～0.9mと一定ではないが、深さは約0.4m程度である。検出面の側溝上面は標高2.7～2.75mで、下面では2.4～2.45mである。

4号側溝（第36図）

調査区の東端の南壁に位置する巨石である。側溝の痕跡は明瞭ではないが、現在の側溝の位置から推量するとこの巨石の位置が側溝と想定できる。

5号側溝（第38図）

調査区の北西隅に位置する側溝である。側溝は現県道の標高約4mの宗近魚町線に接して並行に配置されており、調査区の北壁に沿って遺存している様相を呈する。昔の道路の側溝の一部と推察できる。側溝は3m程度が明瞭であり、南片側には一抱えもある大きな石と人頭大の石が整然と配置されているが、北片側には同じ様な石を二段に並べており、その上面がかつての道路と推察される。側溝の溝幅は約0.3m程であるが、現道路敷きからの深さは0.45m程度下位である。検出面の側溝上面は標高3.55mで、下面では3.15mである。

6号側溝・石列（第36図）

調査区の西端で石列が発見されている。拳大～人頭大の石礫を、他の側溝と同じように平行して並べたものである。礫の底面の標高は2.12、2.14、2.16、2.18m等と低く、水が湧き出る位置である。側溝か石列かの判断も定かではないが6号側溝としておく。

1号土坑（第39図）

調査区の中央部東寄りに位置する土坑である。平面形は不整円形で、長軸約1.25m、短軸約1.1mであり、確認面から床面までは僅か0.1～0.15m程度である。土坑は4、6、7号土坑の上に位置しており、確認面の標高は3.35m、床面は3.2mである。

2号土坑（第40図）

調査区の中央部、2号側溝の中央西側に接する土坑である。平面形は不整長方形で、長軸約1.2m+ α 、短軸約0.85mであり、確認面から床面までは僅か0.1～0.25m程度であるが、一部に一辺0.6mの隅丸方形で深さ0.4mを呈する部分がある。土坑確認面の標高は3.45m、床面は3mである。

3号土坑（第41図）

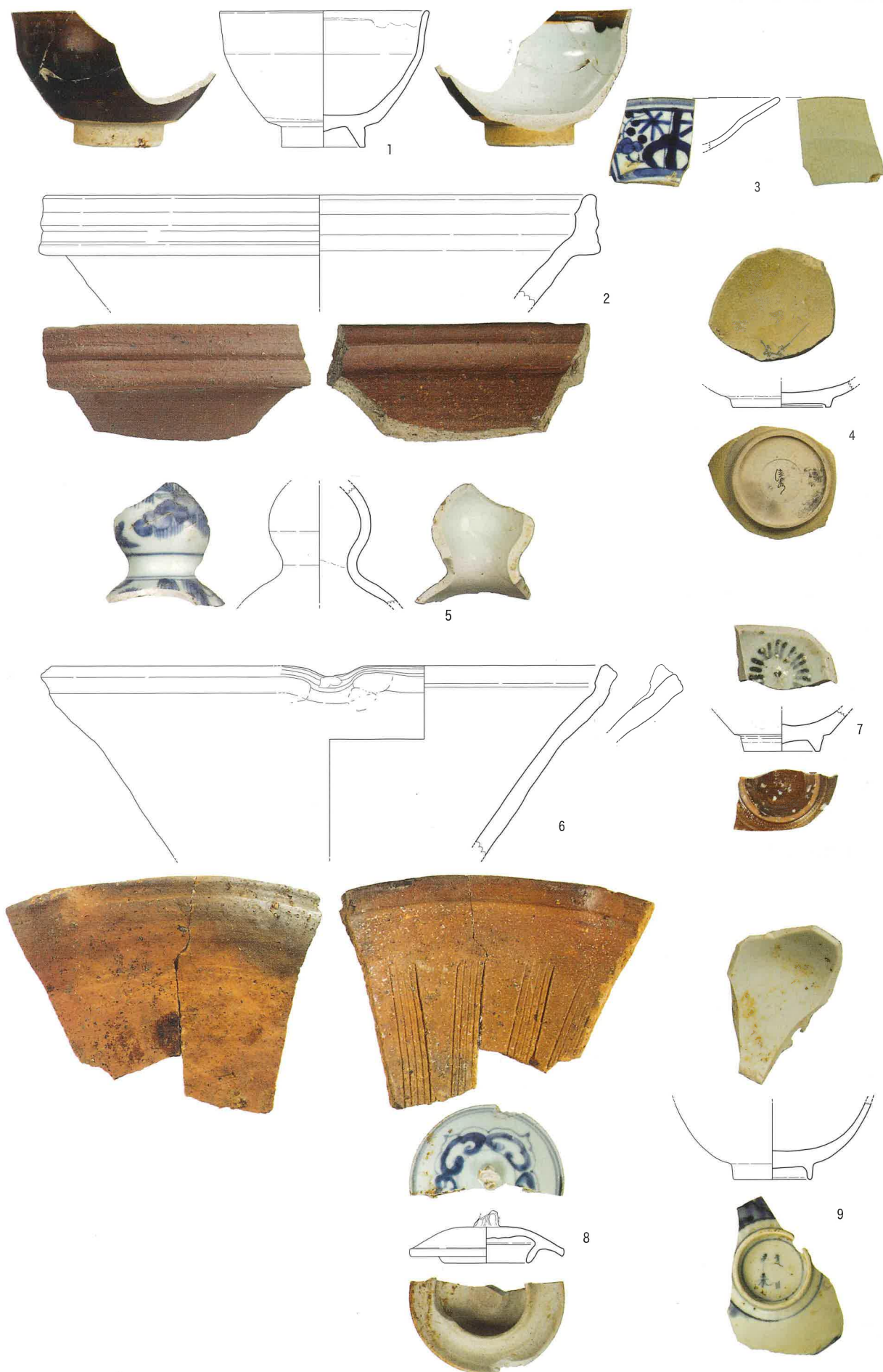
調査区の中央部やや東側に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸約0.87m、短軸約0.63mであり、確認面から床面までは僅か0.2m程度である。土坑確認面の標高は2.9m、床面は2.7mである。

4、6、7号土坑（第36、42図）

調査区の東寄りに位置する重複した土坑である。平面形は隅丸の不整形であり断面は箱掘りを呈する。4号土坑は長軸約1.68m、短軸約1.2mであり、確認面から床面までは0.75～0.95m程度である。土坑内には川原礫や木片が流れ込んでいた。水が湧く状態である。1号土坑の下に位置しており、4号土坑の確認面の標高は2.89m、床面1.83～2.15mである。

6号土坑は長軸約0.85m+ α 、短軸約1mであり、確認面から床面までは0.45m程度である。土坑の確認面の標高は2.39～2.66m、床面1.94mである。

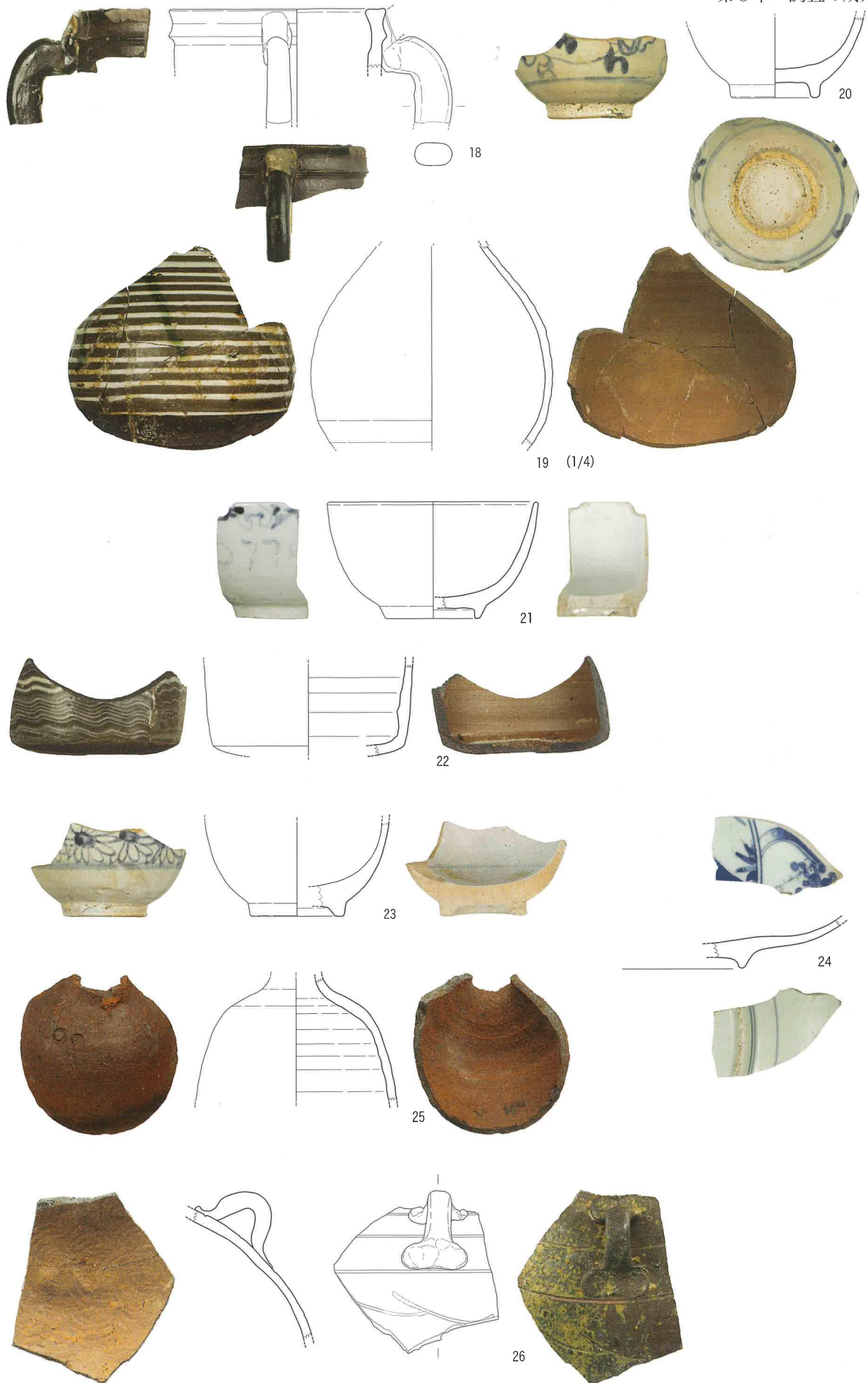
7号土坑は長軸約0.7m+ α 、短軸約1mであり、確認面から床面までは0.57m程度である。土坑の確認面の標高は2.84m、床面2.27mである。



第44図 20調査区出土遺物 (1/3)



第45図 20調査区出土遺物 (1/3)



第46図 20調査区出土遺物 (1/3)

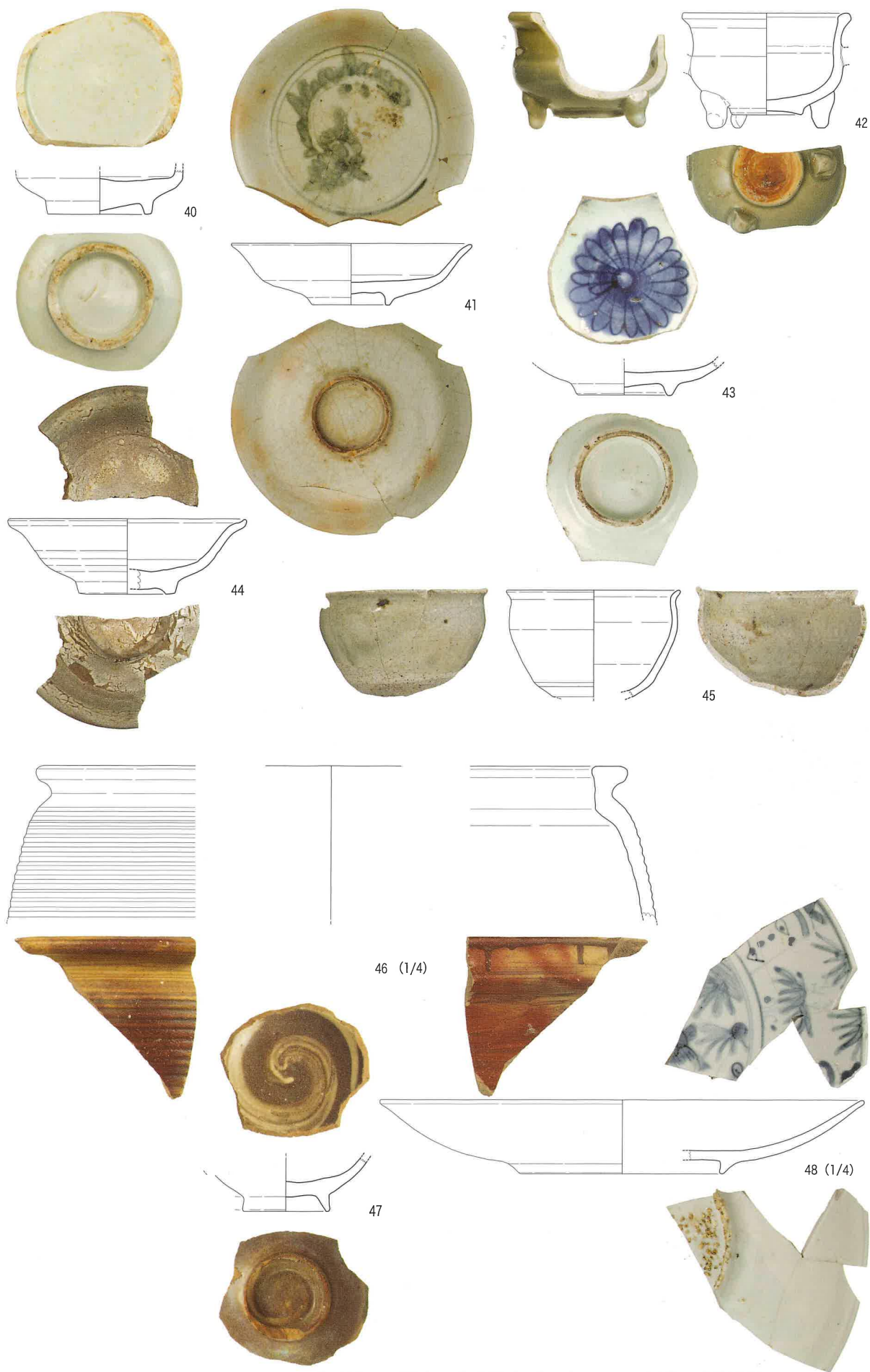
※19は1/4

第4節 20調査区



第47図 20調査区出土遺物 (1/3)

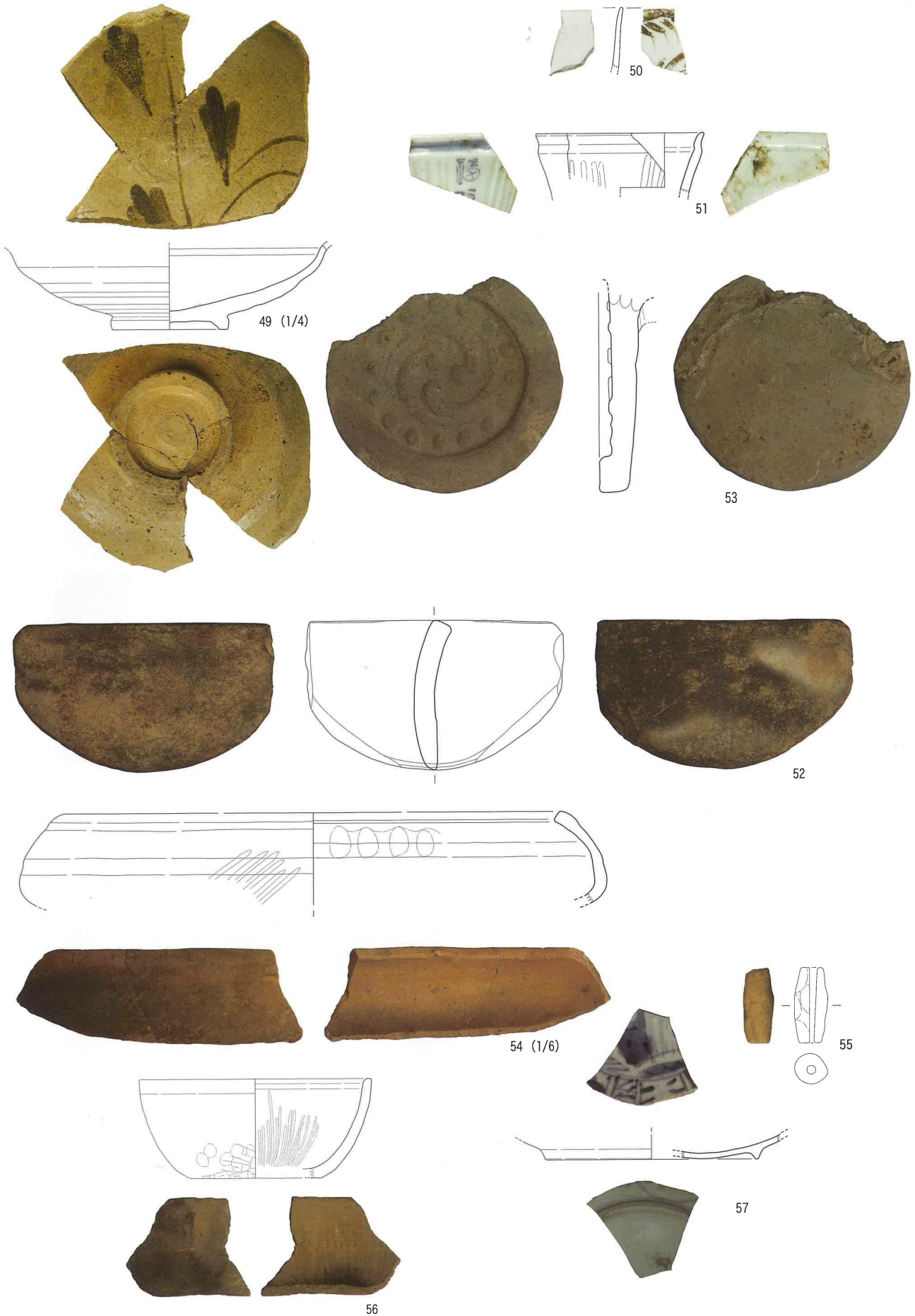
※32は1/4



第48図 20調査区出土遺物 (1/3)

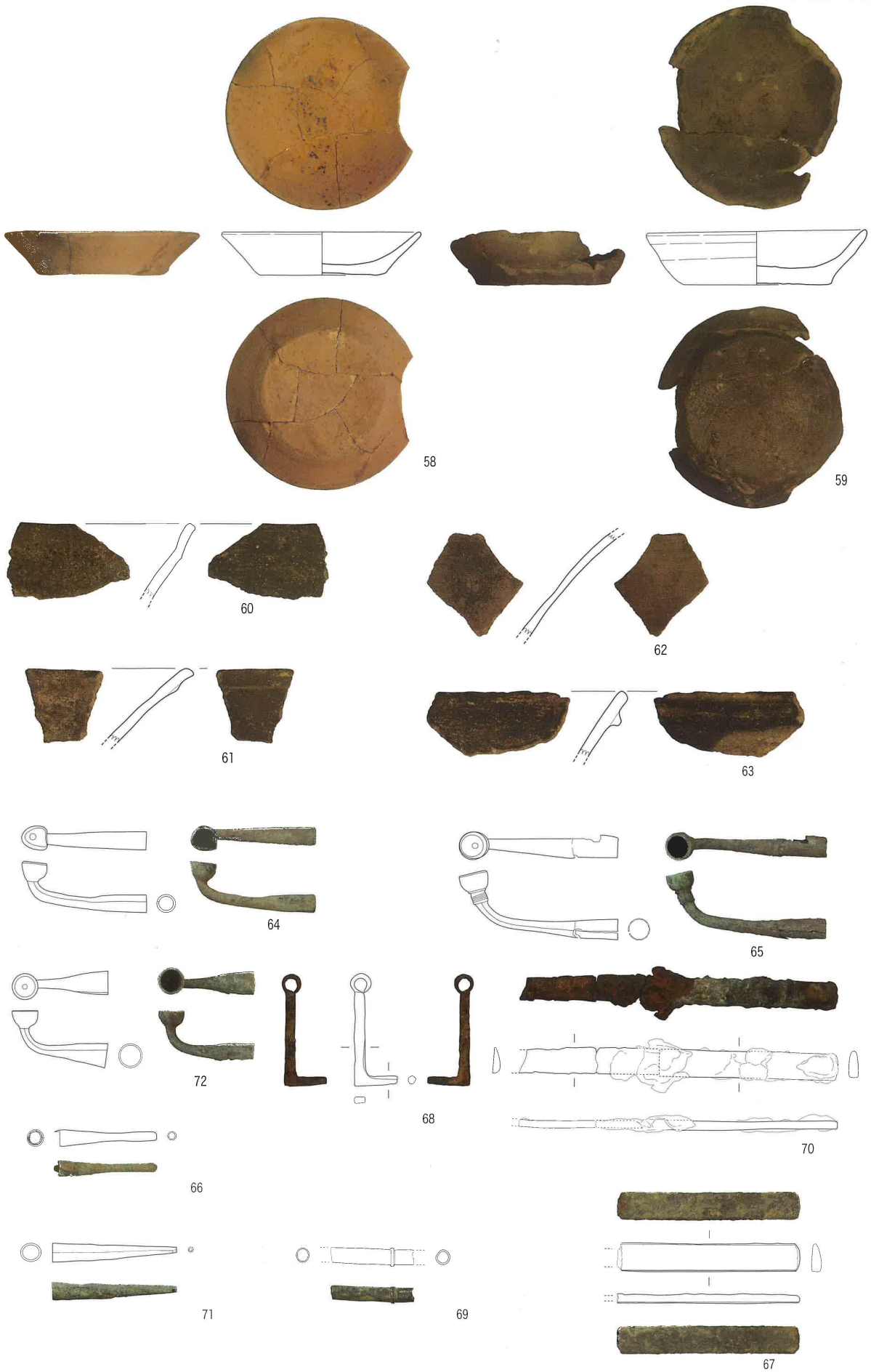
※46、48は1/4

第4節 20調査区



第49図 20調査区出土遺物 (1/3)

※49は1/4、54は1/6



第50図 20調査区出土遺物 (1/3)

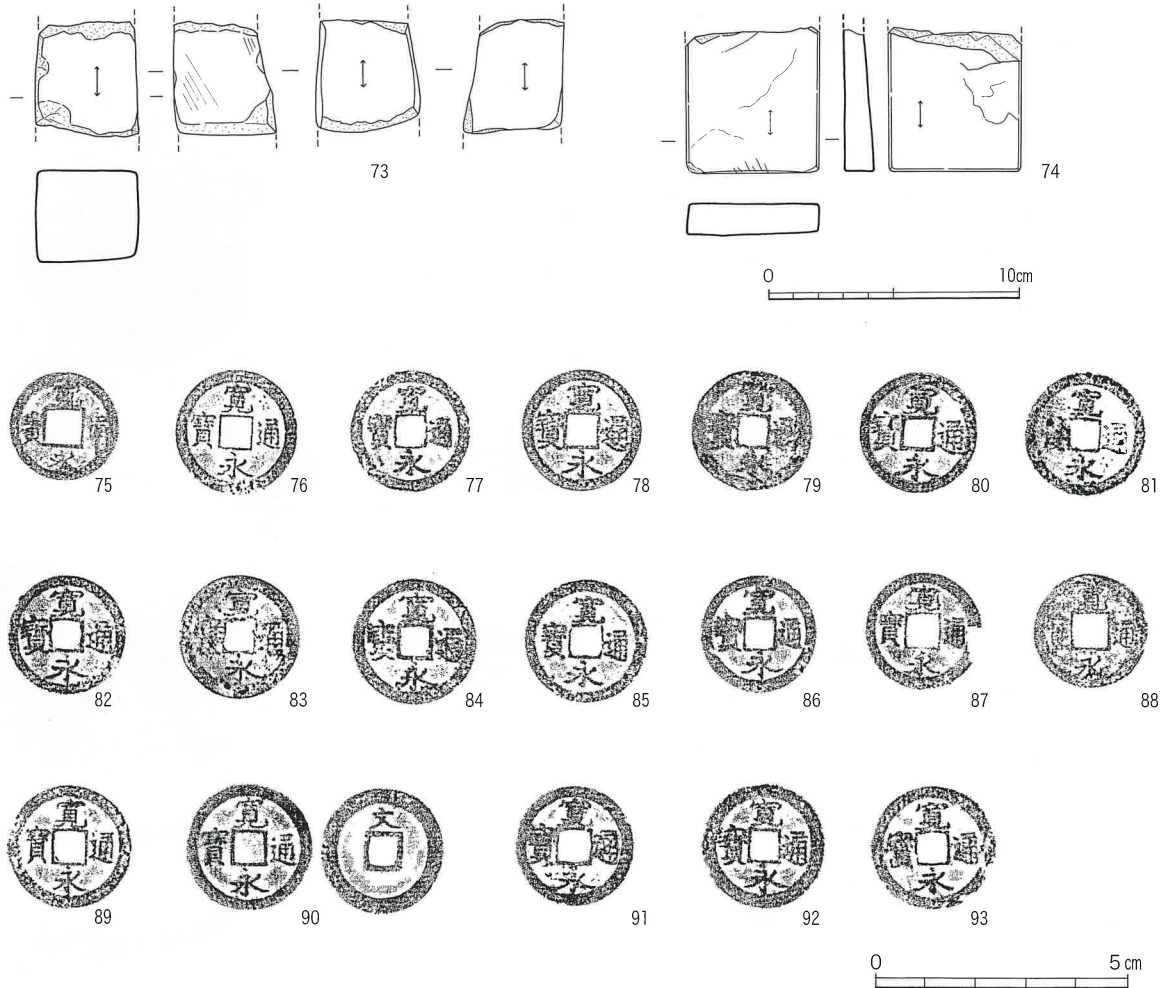
第4節 20調査区

5号土坑 (第36図)

1、4、6、7号土坑の東に位置する不定形土坑である。長軸約0.6m、短軸約0.37mであり、確認面から床面までは0.08m程度である。土坑の確認面の標高は2.630m、床面2.520mである。

2 出土遺物 (第44図～第51図)

本調査区の出土遺物の詳細は表4に記述している。



第51図 20調査区出土遺物 (1/3、2/3)

表4 20調査区出土遺物観察表

番号	遺構	出土土層	器種		大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
					口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
1	一括		磁器	碗	11.3	7.3	4.6		1/4 個体	肥前	外鉄釉、内透明釉	1630～1650年
2	一括		陶器	播鉢	29.2			口縁径30	口縁の1/5	備前	重ね焼き痕跡	17世紀
3	1号土坑		磁器	皿					破片	肥前		17世紀後半～18世紀前半
4	4号土坑		陶器	皿			5.4		底部完形	肥前		?
5	4号土坑		磁器	瓶					1/4 個体	肥前	瓢箪形	?
6	4号土坑	焼土4～5面間	陶器	播鉢	29.6			口縁径30.8	1/5 個体	丹波?	片口付き	16世紀末～17世紀前半
7	1号溝		磁器	碗	4.2				底の2/3	肥前	外鉄釉、内透明釉	1630～1650年
8	1号溝		磁器	染付蓋	4.6	現存高2.8		口縁径8.4	1/2 個体	肥前		17世紀
9		焼土2～3面間	磁器	碗	4.3				底完形	肥前	〇〇年製	17世紀末～18世紀前半
10		焼土2～3面間	陶器	播鉢	32.4				口縁の1/5	?	片口付き	?
11		焼土3面	磁器	皿			10.2		底の1/3	肥前	渦福	18世紀中頃～後半
12		焼土3面	青磁	香炉?			8		底の1/4	肥前		?
13		焼土3面	陶器	水注					破片	肥前	外灰釉、二次被熱	17世紀
14		焼土3面	磁器	瓶					口縁破片	肥前		?
15		焼土3面	陶器	蓋	17.6		2.1		口縁の1/5	?		?

第3章 調査の成果

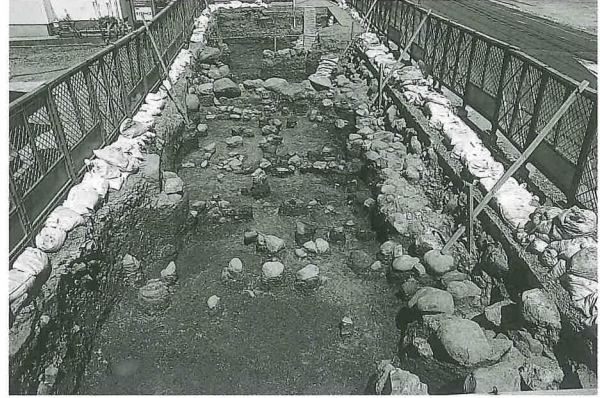
番号	遺構	出土土層	器種	大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期	
				口径他	器高他	底径他	胴部最大径他					
16		焼土3面	陶器	花生	23.5				口縁の1/2	肥前	薄端	17世紀後半～18世紀前半
17		焼土3面内土器集中部	陶器		12.2				口縁の1/5	肥前		?
18		焼土3面内土器集中部	陶器?		11.4				口縁の1/5	肥前	取手付	?
19		焼土3面内土器集中部	陶器	瓶				17.5	1/5 個体	肥前	ニ彩手、銅と鉄、透明釉と鉄釉	17世紀後半～18世紀前半
20		焼土3～4面間	磁器	碗	4.6				底完形	肥前		1630～1650年
21		焼土3～4面間	磁器	染付碗	11.2	6.2	5.2		1/5 個体	肥前		1630～1650年
22		焼土3～4面間	陶器	香炉			10.4		1/5 個体	肥前	刷毛目、香炉か灰落	17世紀末～18世紀前半
23		焼土3～4面間	磁器	染付碗			5		底の1/3	肥前		1630～1650年
24		焼土3～4面間	磁器	染付皿					底の1/5	肥前		17世紀後半～18世紀前半
25		焼土3～4面間	陶器	瓶					破片	備前		17世紀
26		焼土3～4面間	陶器	茶壺					破片	福岡上(あが野)	内面タタキ目、耳付き	17世紀前半
27		焼土3～4面間	陶器	香炉	15.6			口縁16.6,15.5	1/5 個体	肥前		17世紀後半～18世紀前半
28		焼土3～4面間	磁器	小杯	7.4	4.7	3		1/2 個体	肥前		17世紀?
29		焼土3～4面間	磁器	小杯	3.9	1.9	2		3/4 個体	瀬戸美濃		大正後半～昭和前半
30		焼土3～4面間	磁器	皿	5				底完形	肥前		17世紀前半
31		焼土3～4面間	磁器	皿	13.9	3.7	5		1/4 個体	肥前		17世紀前半
32		焼土3～4面間	陶器	瓶			10.8		胴部片	肥前		17世紀前半
33		焼土3～4面間	磁器	染付瓶			6.5		底完形	肥前		?
34		焼土3～4面間	磁器	染付皿	13.6	3.4	5		1/2 個体	肥前		1630～1650年
35		焼土3～4面間	磁器	碗			4.6		底完形	肥前		17世紀前半
36		焼土4面上層	陶器	皿	13.5	3.1	4.5		3/4 個体	肥前・佐世保・?	内面砂目	1610～1630年
37		焼土4面上層	陶器	皿	13.2	2.9	4.2		4/5 個体	肥前	内面砂目	1610～1630年
38		焼土4面	陶器	碗	11.4	6.9	4.8		1/5 個体	肥前	陶体染付	18世紀前半
39		焼土4面	陶器	蓋物	6.2			口縁9	口縁の1/5	関西	焼き締め、鉄絵、山水文	17世紀
40		焼土4面	磁器	碗			5.7		底完形	肥前	口縁を欠いて成形	?
41		焼土4面	磁器	染付皿	13.1	3.3	4.3		4/5 個体	肥前		17世紀前半
42		焼土4面	青磁	香炉	9.2	6.2	3.8		1/3 個体	肥前	三脚付	17世紀
43		焼土4面下層	磁器	皿			5.2		底完形	肥前		17世紀前半
44		焼土4面下層	陶器	皿	13	4.1	5.3		1/4 個体	肥前	砂目、溝縁皿	1600～1630年
45		焼土4面下層	陶器	碗	9.4			9.2	1/4 個体	肥前		17世紀前半
46		焼土下28	甕	甕	42				口縁の1/5	備前	表面は段々の小起伏	17世紀
47		焼土下33	陶器	碗	4.6				底完形	肥前	刷毛目、現川(うつつがわ)	17世紀末～18世紀前半
48		焼土4～5面間	磁器	大皿	34.7	5.4	14.4		1/5 個体	中国	中国青花大皿、ショウシュウ窯、漆抜き	1590～1640年
49		焼土4面下層21+31+34	陶器	鉢	8.5				1/4 個体	肥前	鉄絵	1590～1610年
50		焼土4～5面間	磁器	色絵碗					破片	肥前		17世紀後半
51		焼土4～5面間	磁器	碗	9.3				口縁破片	肥前	天目型、福福破	1610～1630年
52		焼土3～4面間	瓦	面戸瓦	長さ14.5	幅8.4	厚さ1.3		完形			
53		焼土3～4面間	瓦	軒丸瓦		幅11.2	厚さ2.1		略完形			
54		焼土3～4面間	土師質土器	鉢	28				口縁の1/5		表面繻掛、ナデ、内面指押え	
55		焼土3～4面間	土製品	土錘	長さ4.2	幅1.4	孔径0.5		略完形			
56		焼土3～4面間	土師質土器	鉢	26.2	11.1	14.4		1/5 個体		表面ナデ、底部ケズリ、内面へら磨き	
57		焼土3～4面間	磁器	染付皿			11.8		1/5 個体	肥前		
58		焼土4面内	土師質土器	坏	10.9	2.2～2.4	7		略完形		ロクロ調整、回転糸切り後板状圧痕	
59		焼土4面下層	土師質土器	坏	12.1	2.8～3	8.1		略完形		ロクロ調整、回転糸切り	
60		焼土4面下層	縄文土器						破片		縄文後期～晩期	
61		焼土4面下層	縄文土器	突帯文土器					破片		縄文晩期	
62		焼土4面下層	縄文土器						破片		縄文後期～晩期	
63		焼土4面下層	縄文土器	突帯文土器					破片		縄文晩期	
64		焼土3面	煙管	雁首	長さ6.8	幅1	火皿径1.4	重さ10.3g	破片			
65		焼土4面	煙管	雁首	長さ8.7	幅1.1	火皿径1.5	重さ8.6g	破片			
66		焼土4面	煙管	吸口	残存長5.6	幅0.9	吸口径0.5	重さ3g	破片			
67		焼土4面	銅製品	小柄	残存長10	幅1.5	厚さ0.5～0.6	重さ38.1g	破片			
68		焼土4面	鉄製品	鍵	長さ6.1	最大幅2.4	厚さ0.3～0.4	重さ9g	破片			
69		焼土4面	銅製品	つば付煙管	残存長4.5	幅0.8～1		重さ4.3g	破片			
70		焼土4面	鉄製品	小柄	残存長17.4	幅1.5～1.7	厚さ0.4	重さ49.2g	破片			
71		焼土4～5面	煙管	吸口	残存長6.8	幅1	吸口径0.3	重さ3.9g	破片			
72		焼土4面	煙管	雁首	長さ5.1～5.2	幅1.3	火皿径1.4	重さ15g	破片			
73		焼土3面	砥石		現存長4.5	現存幅4	厚さ3.5	重さ118.7g	破片		天草石	
74		焼土3～4面間	砥石		現存長5.6	現存幅5.2	厚さ1.3	重さ66.3g	破片		粘板岩	
75		焼土3面	錢貨	寛永通寶		径2.2		重さ1.9g	完形		「ハ」の新寛永	
76		焼土3面	錢貨	寛永通寶		径2.4		重さ3.7g	完形		「ハ」の新寛永	
77		焼土3～4面間	錢貨	寛永通寶		径2.5		重さ3g	完形		「ス」の古寛永	
78		焼土3～4面間	錢貨	寛永通寶		径2.4		重さ2.4g	完形		「ス」の古寛永	
79		焼土3～4面間	錢貨	寛永通寶		径2.4		重さ3.3g	完形		「ス」の古寛永	
80		焼土4面	錢貨	寛永通寶		径2.3		重さ3.4g	完形		「ス」の古寛永	
81		焼土4面	錢貨	寛永通寶		径2.4		重さ3.1g	完形		「ス」の古寛永	
82		焼土4面	錢貨	寛永通寶		径2.4		重さ3.4g	完形		「ス」の古寛永	
83		焼土4面	錢貨	寛永通寶		径2.4		重さ3.7g	完形		「ス」の古寛永	
84		焼土4面	錢貨	寛永通寶		径2.5		重さ3.8g	完形		「ス」の古寛永	
85		焼土4面	錢貨	寛永通寶		径2.5		重さ2.5g	完形		「ス」の古寛永	
86		焼土4面	錢貨	寛永通寶		径2.3		重さ3.1g	完形		「ス」の古寛永	
87		焼土4面	錢貨	寛永通寶		径2.3		重さ2.6g	完形		「ハ」の新寛永	
88		焼土4～5面	錢貨	寛永通寶		径2.3		重さ2.5g	完形		「ハ」の新寛永	
89		焼土4～5面	錢貨	寛永通寶		径2.5		重さ3.5g	完形		「ハ」の新寛永	
90		一括	錢貨	寛永通寶		径2.5		重さ4.2g	完形		「ハ」の新寛永、裏に「文」	
91		一括	錢貨	寛永通寶		径2.4		重さ4.5g	完形		「ス」の古寛永	
92		一括	錢貨	寛永通寶		径2.5		重さ3.3g	完形		「ス」の古寛永	
93		一括	錢貨	寛永通寶		径2.5		重さ2.5g	完形		「ス」の古寛永	

第4節 20調査区

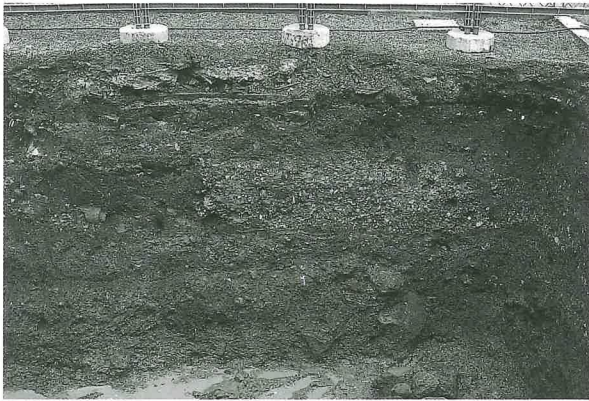
写真4



20調査区作業風景（東方向から）



20調査区全景（東方向から）



南側壁面（北方向から）



北側壁面（南東方向から）



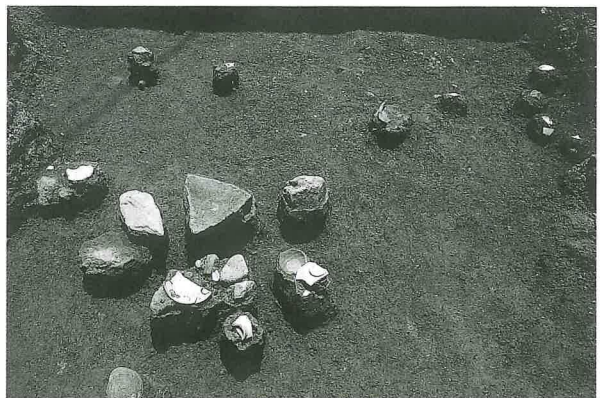
2号側溝（北方向から）



5号側溝（西方向から）



焼土3面1号土坑



焼土4面遺物出土状態

第5節 21調査区

21調査区は長さ約17m、幅約4～4.8mの長方形を呈する。地表面の標高は約4mである。調査区の出土遺構を俯瞰すると、調査区の東側半分には不定形の土坑が遺存し、西半分には側溝や集石遺構が検出されている。

土層は地表面から約1.4m程度掘ると、水の湧く青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山と変化している。層序は比較的整然と堆積しているが、約1.9mの堆積土内に焼土3面～焼土7面までの5回の焼土・炭化物層がパックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。5回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.01～0.02mから約0.4mの堆積があり、これらに挟まれた約0.2～0.35mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山土と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。青灰色シルト層の直上にある焼土6面は炭化物の層であり、他の火災遺構とは様相が異なる。

1 検出遺構（第52～58図、写真5）

1号側溝（第53図）

1号側溝は調査区の中央部やや西側に位置する。側溝は、現県道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝の溝幅は約0.3～0.4m程である。側溝の東片側には拳大～人頭大の川原礫が生まれ、西片側には人頭大～巨大な川原礫が整然と組まれていた。側溝の断面をみると、側溝の両側には拳大～人頭大の石垣の川原礫が10段前後に組まれていた。西片側には木杭が二本確認でき、側溝と嵩上げ土の補強用に使用されたことが推察できた。

側溝の確認面の標高は東片側で3.6m、西片側で3.72mであり、西側が高く整地されていた。石垣の基底部分は標高2.5m前後であり、石垣の側溝が1m以上も繰り返し組まれたことが判る。石垣を組む以前には、素掘りの溝が遺存していたことが堆積土層から推量できる。

2号側溝（第52図）

調査区の中央部の北壁に沿って遺存する側溝である。側溝の南片側には巨大な石と人頭大や拳大の石が片面を揃えて一列に配置されている。側溝は、現県道の宗近魚町線に平行に位置していた。検出面の側溝上面は標高3.35～3.5mで、下面では3.13～3.28mである。

3号側溝（第52図）

調査区の西端に位置する現在使用中の側溝である。人頭大の川原礫を溝の両端に並べたものである。溝幅は0.5m前後である。溝は現県道の宗近魚町線に接して直角に配置されている。

1号集石（第54図）

調査区の西南に位置する集石遺構である。掌大～人頭大の円礫を直径0.8m前後に集めたものである。

1号土坑（第52図）

調査区の中央部に位置する土坑である。平面形は不整形で、長軸約0.7m、短軸約0.6mであり、確認面から床面までは僅か0.1m程度である。確認面の標高は3.08m、床面は2.98mである。

2号土坑（第55図）

調査区の中央部、4号土坑に接する土坑である。平面形は不整形で、長軸約0.8m、短軸約0.6mであり、確認面から床面までは僅か0.16m程度であるが、片方に深さ0.6mを呈する柱穴様の落ち込み部分がある。土坑確認面の標高は3.1mである。

3号土坑（第52図）

調査区の中央部やや東側に位置する。平面形は不整形で、長軸約0.7m、短軸約0.65mであり、確認面から床面は0.1mと0.2mの段差がある。土坑確認面の標高は3.1m、床面は2.9mである。

4号土坑（第56図）

調査区の中央部北寄りに位置する不定形土坑である。平面形は隅丸の不整形で、長軸約1.45m、短軸約1mであり、確認面から床面までは0.15m程度である。土坑確認面の標高は3.1m、床面は2.95mである。

第5節 21調査区

5号土坑 (第52図)

5号土坑は長軸約0.5m、短軸約0.4mであり、確認面から床面までは0.2m程度である。土坑の確認面の標高は3.05mである。

6号土坑 (第57図)

調査区の東寄りに位置する不定形土坑である。平面形は隅丸の不整形で、長軸約1.45m、短軸約0.98mであり、確認面から床面までは0.25m程度である。土坑確認面の標高は3.08m、床面は2.8mである。

7号土坑 (第52図)

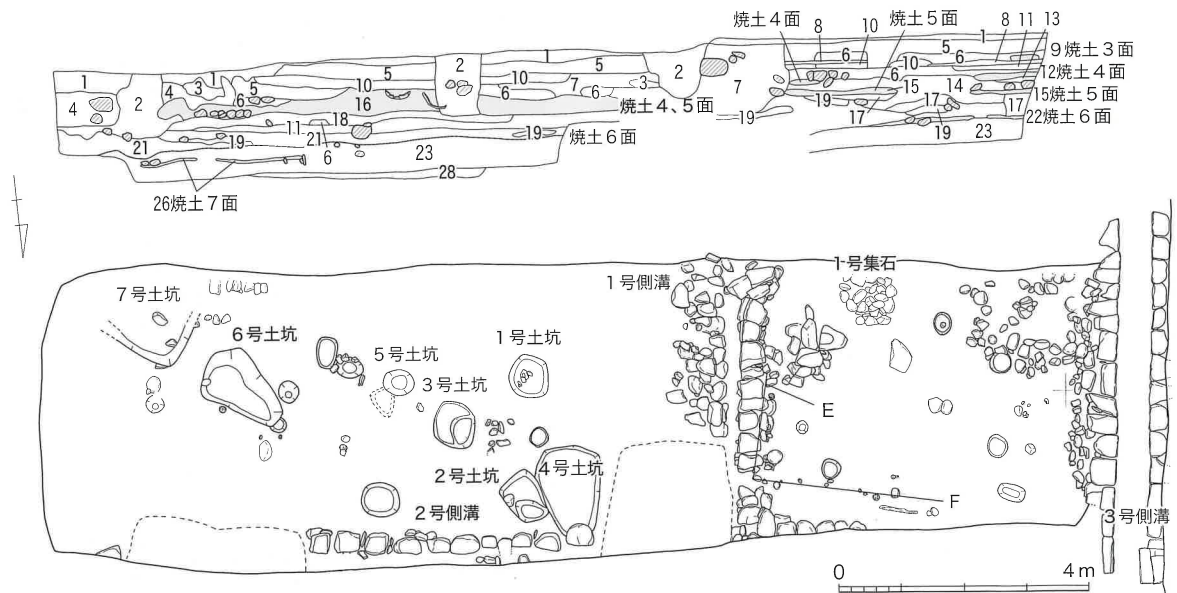
調査区の東寄りに位置する方形土坑である。北隅のコーナーを残すのみである。確認面から床面までは0.2m程度である。土坑確認面の標高は3.07m、床面は2.92mである。

最下層面杭列 (第58図)

現県道宗近魚町線に平行してはしる2号側溝と1号側溝が直角に接合する地点の最下層面で、木杭と中空の竹か葦の茎のような小さな杭列が0.15~0.2m置きに検出されている。小さな杭列は石組の側溝と同じように配置されており、石組み側溝の以前にはこの様な柵列状の側溝が配置されていた様相である。

2 出土遺物 (第59図~第64図)

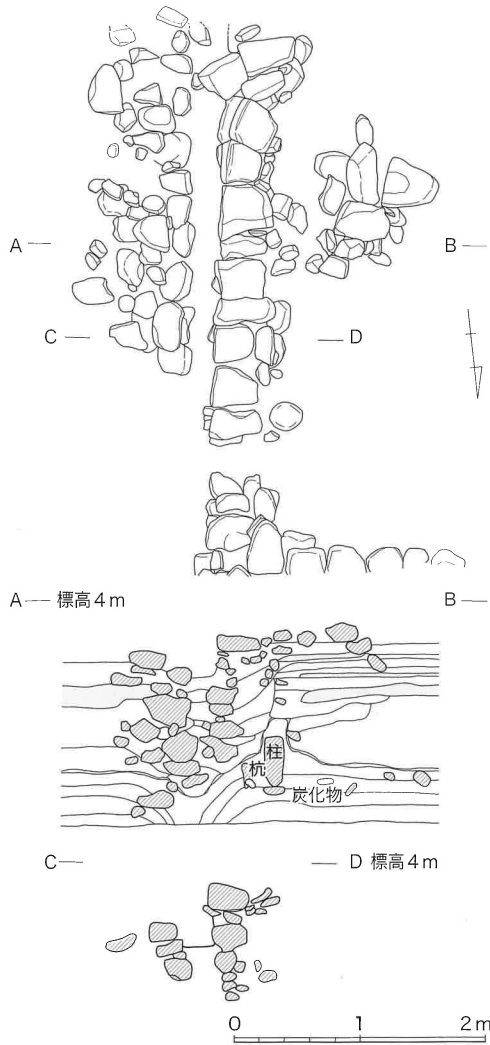
本調査区の出土遺物の詳細は表5に記述している。



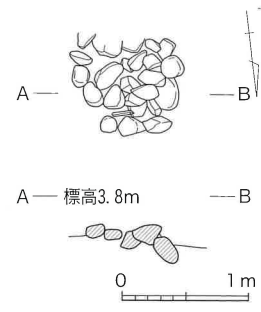
第52図 21調査区遺構配置図 (1/120)

【21調査区南壁土層説明】

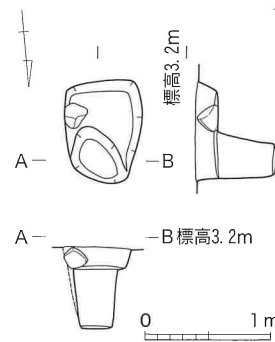
- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1 地表面 | 15 焼土5面 (炭化物、焼土塊を多く含む) |
| 2 攪乱層 (コンクリート片や鉄骨を含む) | 16 焼土4、5面
(焼土4、5面の区分が不明瞭。炭化物、焼土塊を多く含む) |
| 3 砂層 (砂礫の層) | 17 灰黄褐色砂質土 (小石を含む) |
| 4 茶褐色土 (焼土、炭化物を少量含む) | 18 茶褐色粘質土 (黄褐色土が混入) |
| 5 茶褐色土 | 19 淡灰褐色粘質土 (小石を含む) |
| 6 暗黄褐色土 (小石~人頭大の石を多く含む) | 20 黄褐色粘質土 |
| 7 暗茶褐色土 (炭化物を少量含む) | 21 灰褐色シルト (鉄分の沈着あり) |
| 8 暗灰白色砂質土 | 22 暗黒褐色土 (炭化物の層。焼土6面) |
| 9 焼土3面 (焼土と炭化物の層) | 23 青灰色シルト層 |
| 10 淡茶褐色土 (礫や小石を多く含む) | 24 青灰色シルト層 (黄褐色を帯びる) |
| 11 灰白色砂質土 (僅かに砂粒を含む) | 25 淡青灰色砂層 (小石を少量含む) |
| 12 焼土4面 (炭化物、焼土層) | 26 暗黒褐色土 (炭化物を含む。焼土7面) |
| 13 黄褐色土 | 27 青灰色砂質土層 |
| 14 灰茶褐色土 (砂質と粘土質が混在した層。炭化物や焼土粒を若干含む) | 28 地山 (砂礫堆積層) |



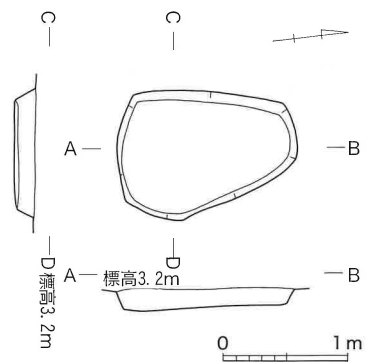
第53図 21調査区1号側溝実測図 (1/60)



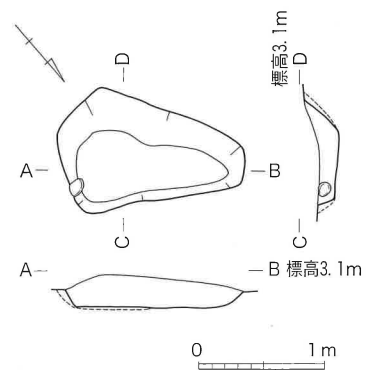
第54図 21調査区1号集石実測図 (1/60)



第55図 21調査区2号土坑実測図 (1/60)

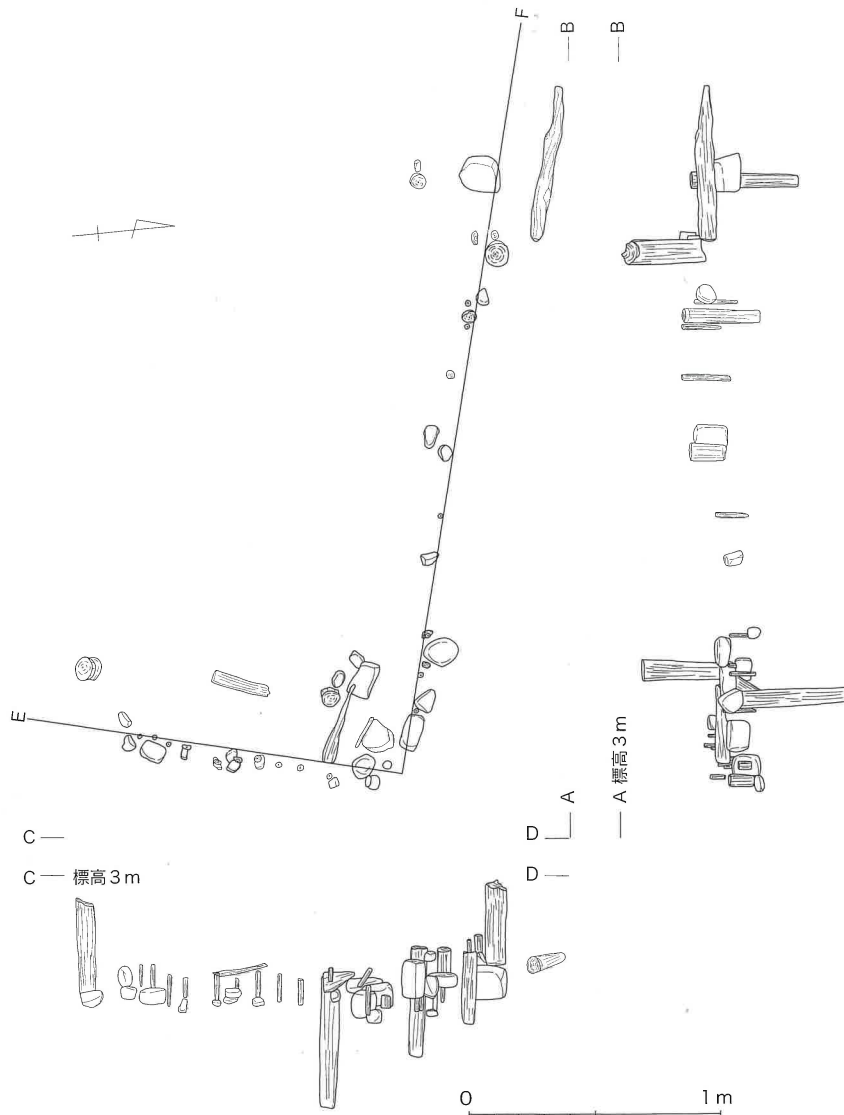


第56図 21調査区4号土坑実測図 (1/60)



第57図 21調査区6号土坑実測図 (1/60)

第5節 21調査区



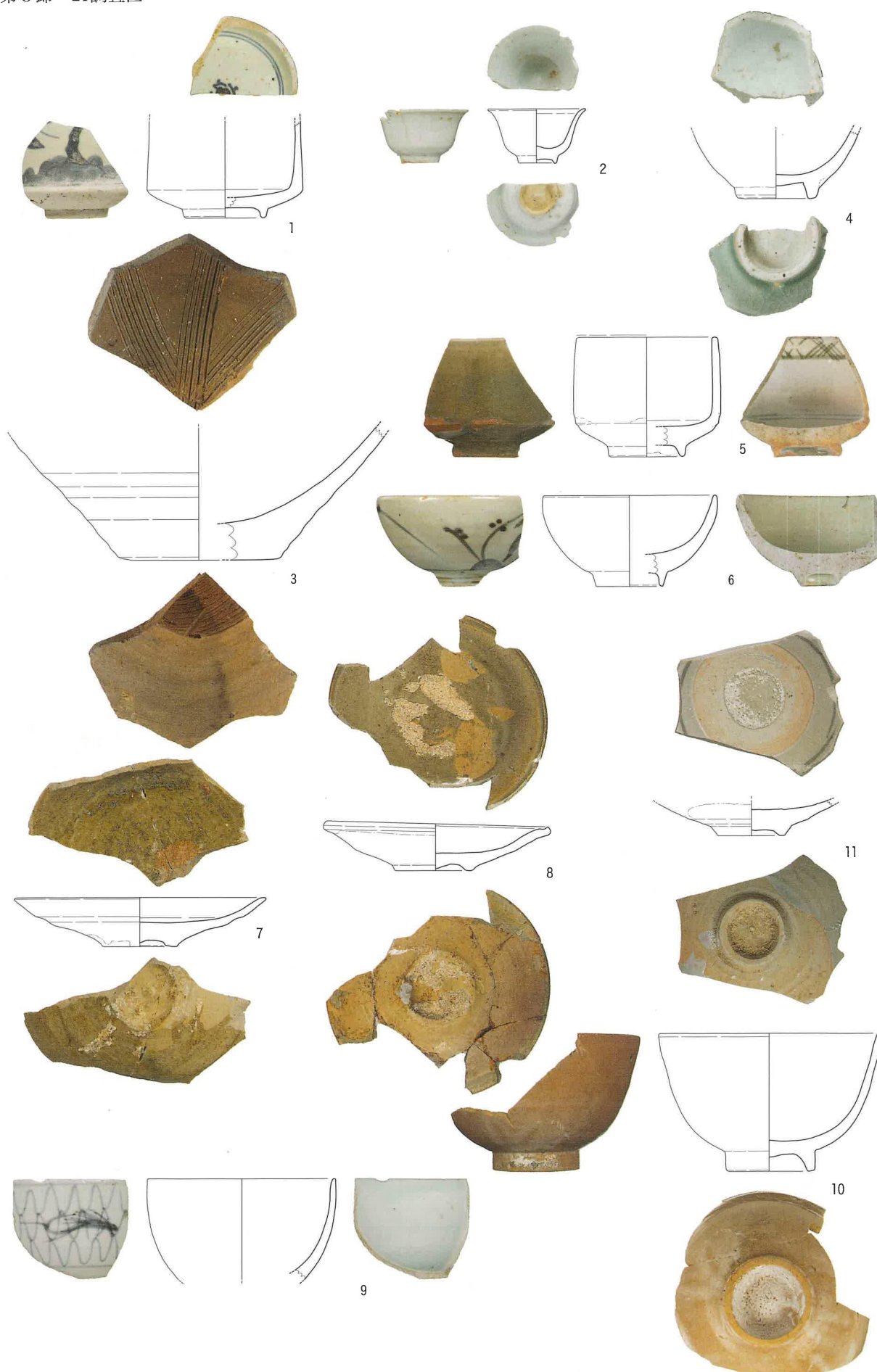
第58図 21調査区最下層面杭列実測図 (1/30)

表5 21調査区出土遺物観察表

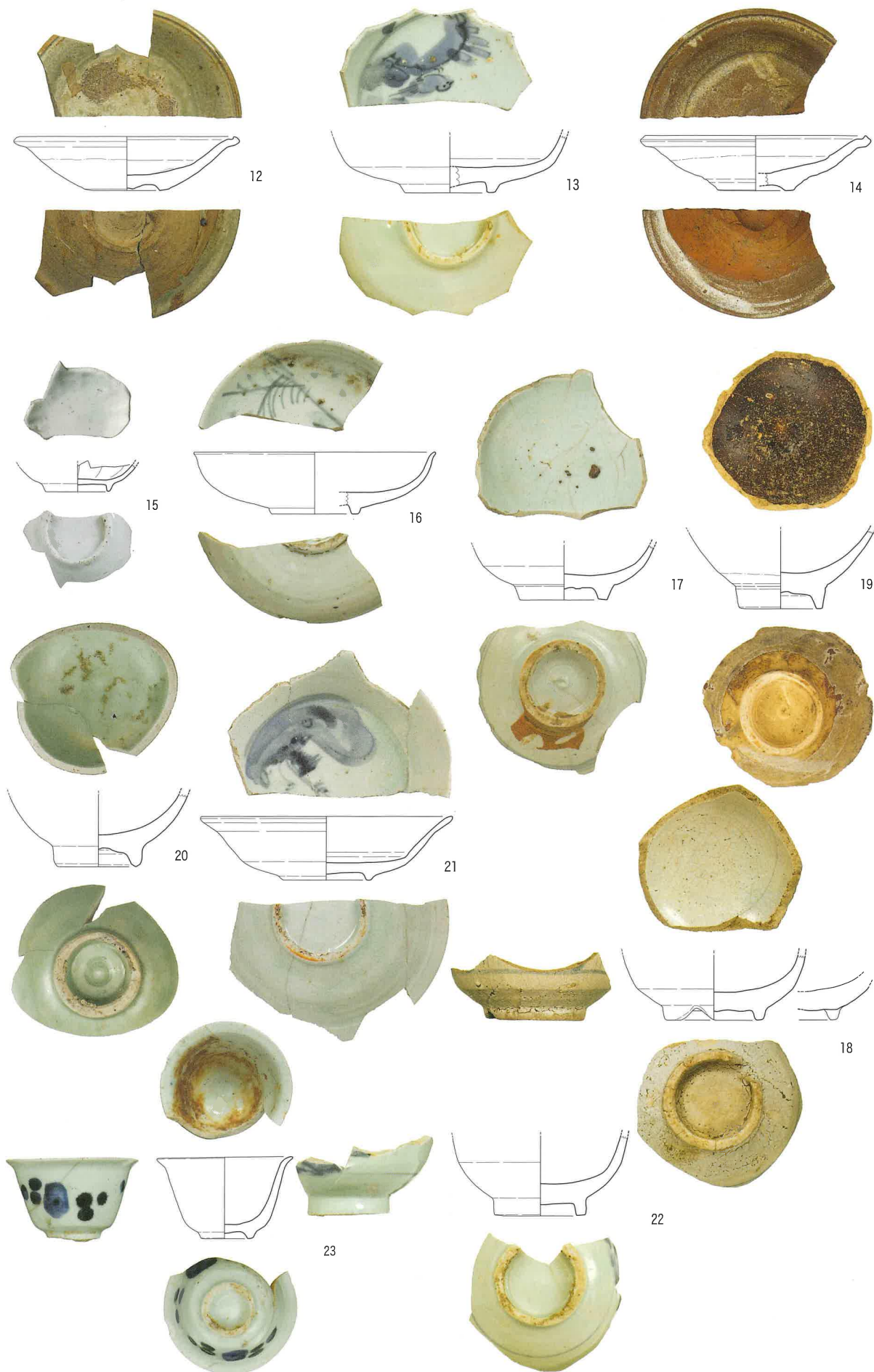
番号	遺構	出土土層	器種	大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
				口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
1	一括		磁器 染付碗			4.2	8.6	底部の1/4	肥前		18世紀後半
2	一括		磁器 小杯	5.3	3	2		2/3個体	肥前		1630～1650年
3	2号土坑		陶器 播鉢			8.8		底部の1/5	?		?
4	6号土坑		青磁 碗			4.2		底部の2/3	肥前		1630～1650年
5		焼土3～4面間	磁器 染付碗	7.4	6.4	4	8	1/4個体	肥前		18世紀後半
6		焼土3～4面間	磁器 染付碗	9.3	4.9	3.6		1/4個体	肥前	くらわんか、波佐見焼き、雪輪文・梅花文	18世紀後半
7		焼土3～4面間	陶器 皿	13.8	2.6	4		1/3個体	肥前	砂目	1600～1630年
8		焼土3～4面間	陶器 皿	12.2	2.5	4.3		1/2個体	肥前	砂目、溝縁皿	1600～1630年
9		焼土3～4面間	磁器 染付碗	10.2				口縁の1/5	肥前	一重網目文	17世紀中頃～後半
10		焼土3～4面間	陶器 碗	12	7.4	4.8		1/3個体	肥前		
11		焼土3～4面間	磁器 染付皿			3.8		底部完形	肥前	見込蛇目袖剥ぎ	18世紀後半
12		焼土4面	陶器 皿	11.7	2.9	3.6		1/3個体	肥前	砂目、溝縁皿	1600～1630年
13		焼土4面	磁器 染付皿			5		1/3個体	肥前		1630～1650年
14		焼土4面	陶器 皿	12	3	4.2		1/3個体	肥前	砂目、溝縁皿	1600～1630年
15		焼土4面	白磁 皿			3.5		底部の2/3	肥前	型打ち成形	17世紀後半
16		焼土4面	磁器 染付皿	13.2	3.3	4.8		口縁の1/5	肥前		1630～1650年
17		焼土4面	磁器 染付碗			4.8		底部完形	肥前		1630～1650年
18		焼土4面	磁器 染付碗	5.4				底部完形	肥前	割り高台	?
19		焼土4面	陶器 碗			4.6		底部完形	肥前	天目型	1630～1650年

第3章 調査の成果

番号	遺構	出土土層	器種		大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
					口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
20		焼土4面	青磁	碗			4.3		底完形	肥前		
21		焼土4面	磁器	染付皿	13.7	3.4	4.9		1/3個体	肥前		17世紀前半
22		焼土4面	磁器	染付碗	4.9				底部の4/5	肥前		1630～1650年
23		焼土4面+焼土4～5面接合	磁器	染付小杯	7.2	4.4	2.8		2/3個体	肥前	内面に紅付着	?
24		焼土4面No1+焼土4～5面②層	磁器	染付碗	4.6				胴底部の1/5	肥前		1630～1650年
25		焼土4面下層	陶器	碗	10.8	6.7	4		1/2個体	肥前	天目型	17世紀前半
26		焼土4～5面②層	磁器	染付碗	4.9				底部完形	肥前		?
27		焼土4～5面②層	磁器	染付瓶	現存長6.8	現存長1.9	4.8		底部完形	肥前	打ち欠き成形	?
28		焼土4・5～6面間の赤褐色土層	陶器	皿			4.2		底部完形	肥前	砂目	1600～1630年
29		焼土5～6面間+青灰色粘質土層	陶器	碗	10.3	6.1	4.2		完形	肥前	灰釉	1590～1610年
30		焼土5面	磁器	染付碗	11				口縁の1/5	肥前	天目型	1610～1630年
31		焼土5面	青磁	青磁碗	10.4				口縁の1/5	肥前		1630～1650年
32		焼土5面	陶器	小杯	7.4	4.1	3.6		1/3個体	肥前		1590～1610年
33		青灰色粘質土層	陶器	壺			21.7		破片	?		?
34		青灰色粘質土層	陶器	皿			4		底部完形	肥前	薬灰釉、岸岳系	1580～1600年
35		青灰色粘質土層	磁器	小杯	8.3				破片	中国	五彩	16世紀末～17世紀前半
36		青灰色粘質土層	白磁	皿	13.4	2.7	6.8		1/5個体	中国		16世紀
37		青灰色粘質土層	陶器	碗			4.4		底部の1/2	肥前	鉄釉、天目碗	?
38		青灰色粘質土層	陶器	皿			4		底部完形	肥前	胎土目	1590～1610年
39		焼土3～4面間	瓦	軒丸瓦		13.9			略完形		裏面布目、端部へラ切り。巴文	
40		焼土4面	陶器	壺底部			10.8		底部完形	備前	回転糸切り、板状尻痕、丸内に一の印刻	
41		焼土4面	土師質土器		14				破片		鐙状突起付、表裏煤付着、ロクロ調整	
42		焼土4面	縄文土器	深鉢口縁					破片		穿孔有り	
43		焼土5面	瓦	棧瓦		8.4			略完形		菊花文	
44		青灰色シルト層	縄文土器	口縁					破片		貼付け突起、沈線文	
45	7号土坑		瓦器	口縁	32.2				破片		表裏指押え、表面ナデ、ケズリ	
46	7号土坑		縄文土器	肩部					破片		磨消縄文	
47		焼土2～3面	煙管	吸口	残存長4.6	幅1	吸口径0.6	重さ5.2g	破片			
48		焼土3面	煙管	雁首	長さ7.5	幅1.1	火皿径1.8	重さ11.3g	破片			
49		焼土3面	銅製品		長さ2.6	幅1.15		重さ2.4g	破片		楕円状の輪	
50		焼土3～4面	煙管	雁首	長さ3.3	幅0.7	火皿径1.6	重さ5.7g	破片			
51		焼土4面	煙管	吸口	残存長5.5	幅0.9	吸口径0.3～0.4	重さ3g	破片			
52		焼土4面	煙管	吸口	残存長8.6	幅1.1	吸口径0.4	重さ8.4g	破片			
53		焼土4面	煙管	雁首	長さ4.7	幅0.6		重さ3.2g	破片			
54		焼土4面	鉄製品	角釘	長さ12	幅0.4～0.9		重さ15.7g	破片			
55		焼土4面	煙管	雁首	長さ7.2	幅1.4		重さ10.5g	破片			
56		焼土4～5面	煙管	雁首	長さ7.8	幅1		重さ4.9g	破片			
57		焼土4～5面	煙管	雁首	長さ6.9	幅0.7	火皿径1～1.4	重さ5.9g	破片			
58		焼土4～5面間整地層	銅製品	柄縁	長さ3.9	幅2.2		重さ4.9g	破片			
59		青灰色シルト層	煙管	吸口	残存長5.5	幅1	吸口径0.3	重さ3.6g	破片			
60		青灰色シルト層	鉄製品	毛抜き	長さ7.9	幅0.6～1.2	厚さ0.2	重さ5.5g	破片			
61		青灰色シルト層	鉄製品	角釘	長さ12.3	幅0.5～0.6		重さ11g	破片			
62	一括		煙管	吸口	残さ6.5	幅1	吸口径0.4	重さ3g	破片			
63		焼土4～5面	硯		現存長4.9	幅5.5	厚さ1	重さ42g	破片			
64		焼土5面	硯		現存長4.6	幅2.1	厚さ0.9	重さ15.7g	破片			
65		焼土5面	砥石		現存長8.8	幅6.3	厚さ1.7	重さ15.7g	破片			
66		焼土5面	砥石		現存長3	幅4.9	厚さ0.7	重さ20.8g	破片			
67		焼土3面	銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ3.1g	完形		「ス」の古寛永	
68		焼土3面	銭貨	寛永通寶		径2.4		重さ3.4g	完形		「ス」の古寛永	
69		焼土3面	銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ3.3g	完形		「ス」の古寛永	
70		焼土3～4面	銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ3.4g	完形		「ス」の古寛永	
71		焼土4面	銭貨	寛永通寶		径2.4		重さ2.5g	完形		「ス」の古寛永	
72		焼土4面	銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ2.5g	完形		「ス」の古寛永	
73		焼土4面	銭貨	寛永通寶		径2.4		重さ2.5g	完形		「ス」の古寛永	
74		焼土4面	銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ3.4g	完形		「ス」の古寛永	
75		焼土4～5面間整地層	銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ3g	完形		「ス」の古寛永	
76		焼土4～5面間整地層	銭貨	寛永通寶		径2.3		重さ2.2g	完形		「ス」の古寛永	
77		焼土4～5面間整地層	銭貨	寛永通寶		径2.4		重さ3.1g	完形		「ス」の古寛永	
78		焼土4～5面間整地層	銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ2.9g	完形		「ス」の古寛永	
79		焼土4～5面間整地層	銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ2.9g	完形		「ス」の古寛永	
80		焼土4～5面間整地層	銭貨	祥〇〇寶		径2.5		重さ2.9g	完形			
81		焼土5～6面間	銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ2.7g	完形		「ス」の古寛永	
82	1号土坑		銭貨	寛永通寶		径2.4		重さ2.2g	完形		「ス」の古寛永	
83	7号土坑		銭貨	寛永通寶		径2.6		重さ3.5g	完形		「ハ」の新寛永、裏「文」有り	
84	一括		銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ3.3g	完形		「ス」の古寛永	
85	一括		銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ3.9g	完形		「ス」の古寛永	

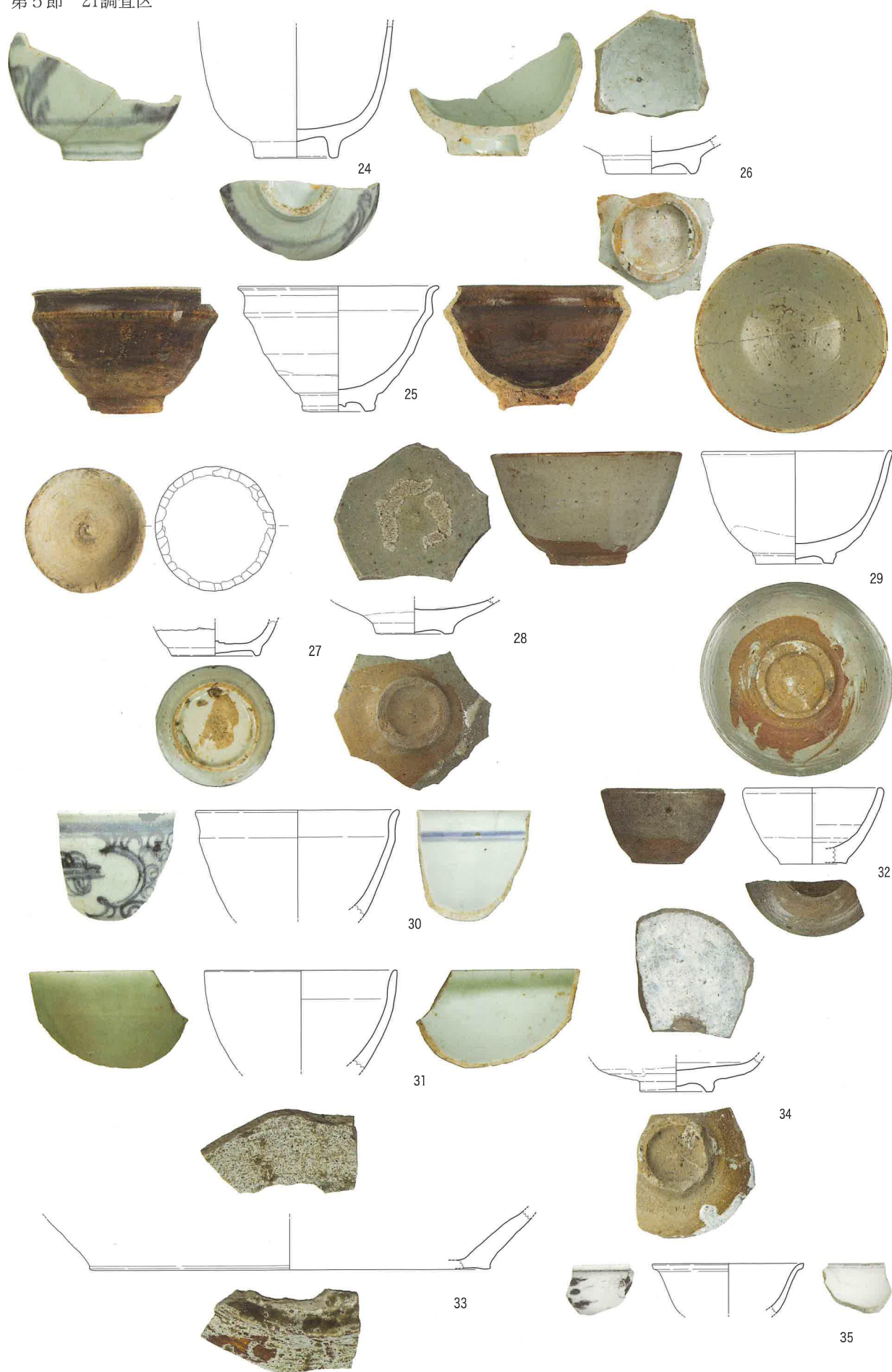


第59図 21調査区出土遺物 (1/3)



第60図 21調査区出土遺物 (1/3)

第5節 21調査区

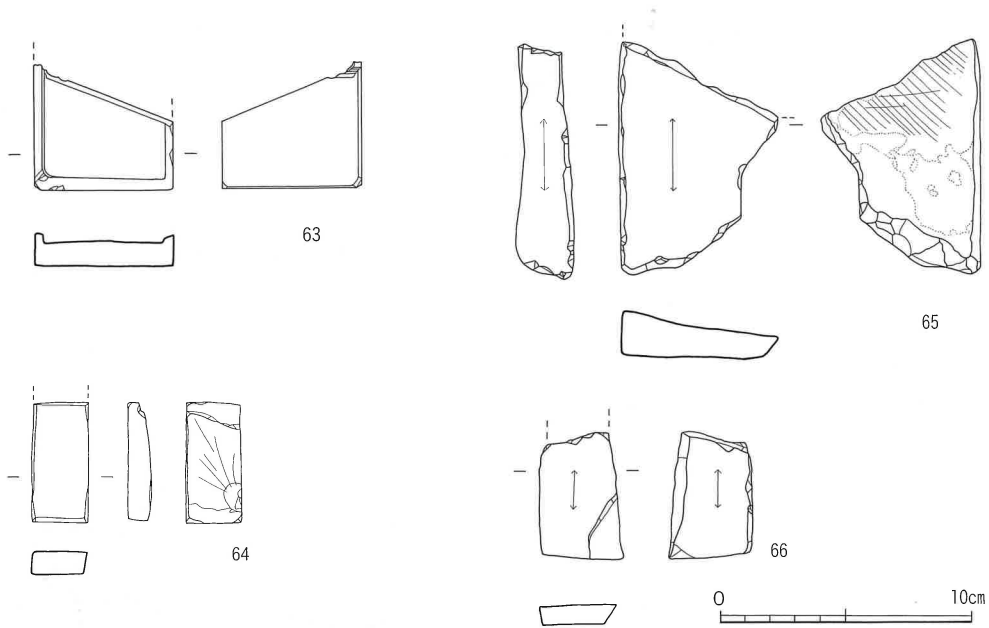


第61図 21調査区出土遺物 (1/3)

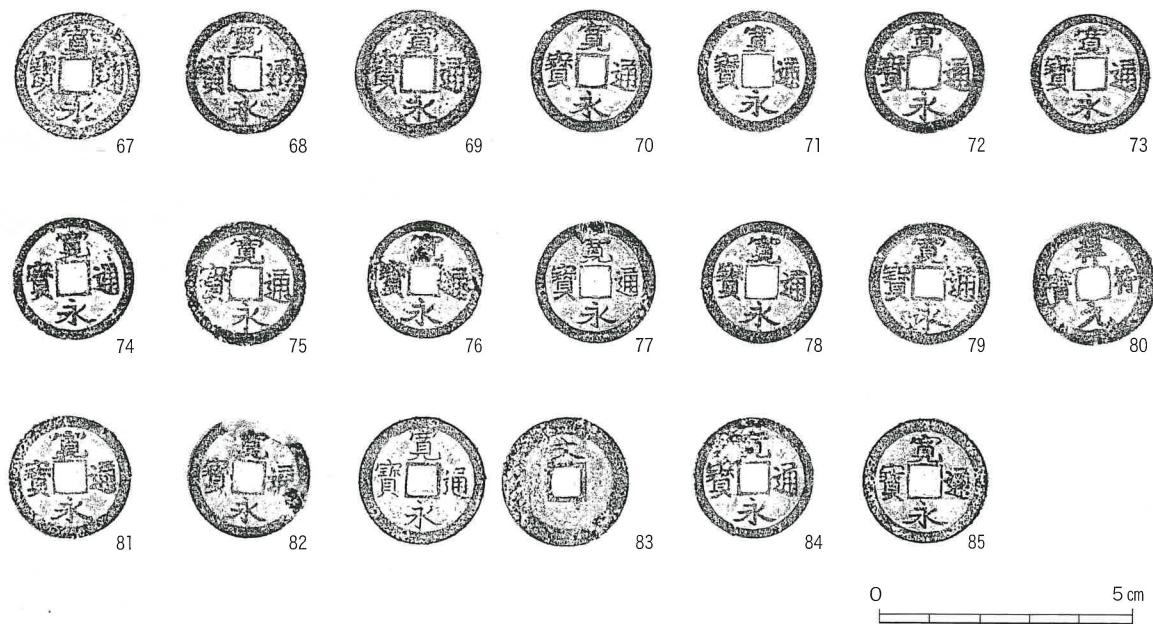


第62図 21調査区出土遺物 (1/3)

※39、40、45は1/6



第63図 21調査区出土遺物 (1/3)



第64図 21調査区出土遺物 (2/3)



21調査区作業風景（北東方向から）



調査区全景（西方向から）



1号側溝（北方向から）



南壁土層（北方向から）



1号側溝断面（北方向から）



集石遺構



最下層遺構



最下層出土の掘立柱痕跡

第6節 22調査区

22調査区は長さ約11.4m、幅約4～6.3mの長方形を呈する。調査区の中央部と西端部には現代の側溝が確認できる。現側溝の全体幅はどちらも0.9mで、側溝間の間口は4.7mである。一方、調査区の東端には1号側溝が検出されている。ちなみに、中央部の現側溝から1号側溝間の間口は約4.7～4.8mであり同じ区画と考えられる。地表面の標高は東の区画で約3.9m、西の区画で約4mである。調査区の出土遺構を俯瞰すると、側溝、集石遺構、土坑、柱穴等が検出されている。

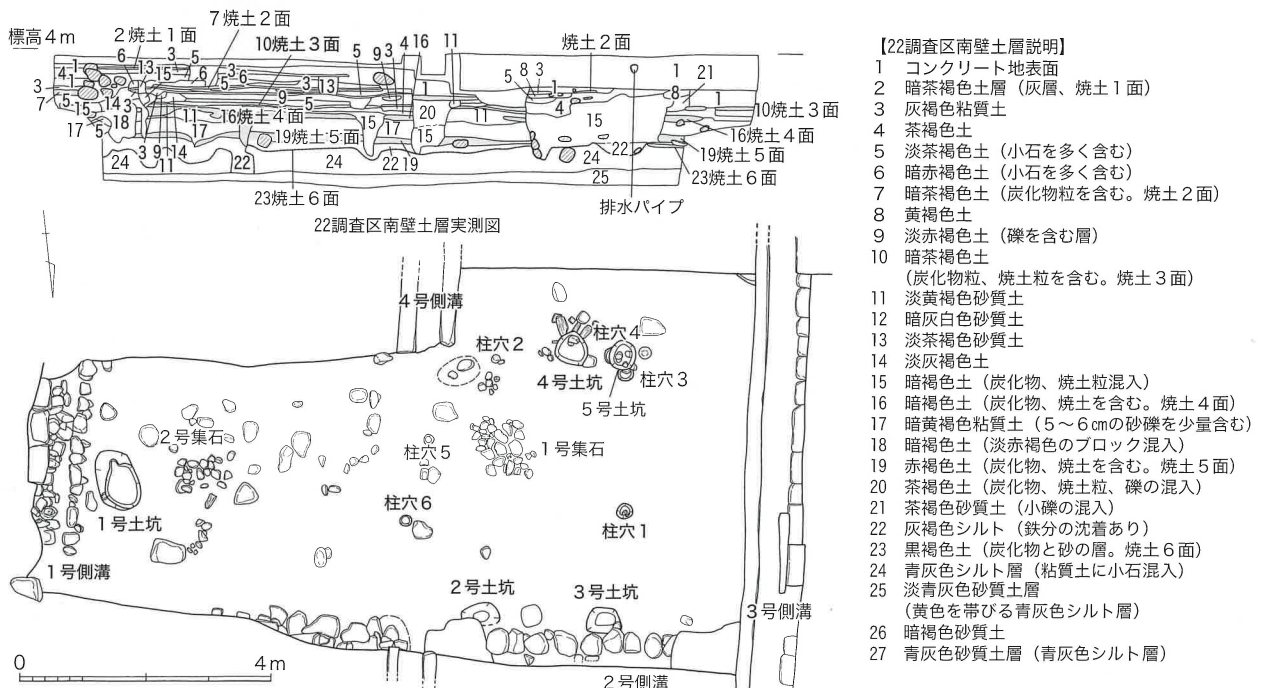
土層は地表面から約1.3m程度掘ると、水の湧く青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山へと変化している。層序は比較的に整然と堆積しているが、約2mの堆積土内に焼土1面～焼土6面までの6回の焼土・炭化物層がパックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。5回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.01～0.02mから約0.1mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1～0.2mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山土と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。青灰色シルト層の直上にある焼土6面は炭化物の層であり、他の火災遺構とは様相が異なる。

1 検出遺構 (第65～70図、写真6)

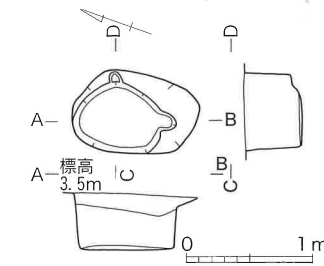
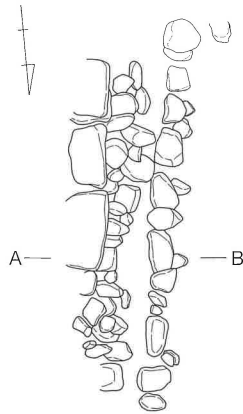
1号側溝 (第66図)

1号側溝は調査区の東端に位置する。側溝は、現県道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝の全体幅は約1m、溝幅は約0.2～0.3m程である。側溝の東片側には拳大～人頭大の川原礫が生まれ、上面に巨石を乗せている。西片側には拳大～人頭大の川原礫が整然と並んでいた。側溝の断面をみると、側溝の両側には拳大～人頭大の石垣が8段前後に生まれ、西片側には4段の石垣が組まれていた。

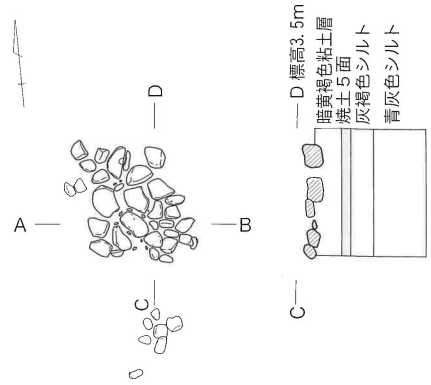
側溝の確認面の標高は東片側で4.03mであり現地表面に出ている状態である。石垣の基底部は標高2.7m前後であり、石垣の側溝が1.4m以上も繰り返し組まれたことが判る。石垣を組んだ間には、焼土3面や焼土5面が遺存しており、土層堆積の推移が推量できる。



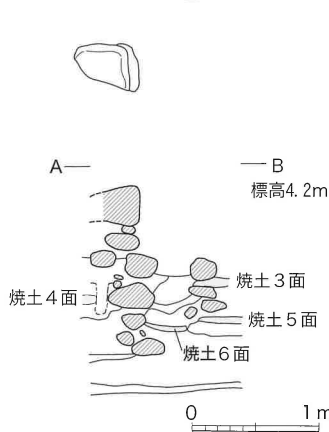
第65図 22調査区遺物配置図 (1/120)



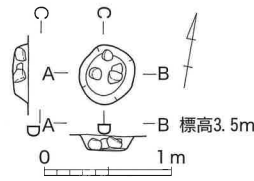
第67図 22調査区1号土坑実測図 (1/60)



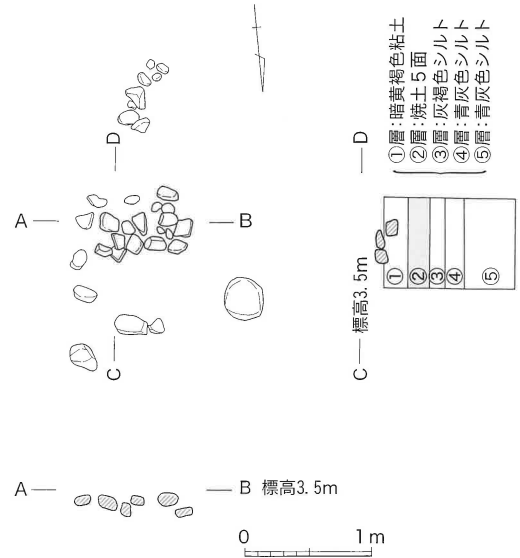
第69図 22調査区1号集石実測図 (1/60)



第66図 22調査区1号側溝実測図 (1/60)



第68図 22調査区5号土坑実測図 (1/60)



第70図 22調査区2号集石実測図 (1/60)

2号側溝 (第65図)

調査区の北壁に沿って遺存する側溝である。側溝の南片側には巨大な石と人頭大や拳大の石が片面を揃えて一列に配置されている。側溝は、現県道の宗近魚町線に平行に位置していた。検出面の側溝上面は標高3.35~3.5mで、下面では3.13~3.28mである。

1号集石 (第69図)

調査区の中央部に位置する集石遺構である。拳大~掌大の円礫を直径1~1.2m前後に集めたものである。確認面の標高は3.4m、床面は3.3mである。焼土5面の最上層の暗黄褐色粘土層中に確認できる。

2号集石 (第70図)

調査区の中央部東寄りに位置する集石遺構である。拳大~掌大の円礫を短径0.5、長径1mの長方形に集め、周辺にも石を集めたものである。確認面の標高は3.4m、床面は3.3mである。焼土5面の最上層の暗黄褐色粘土層中に確認できる。

1号土坑 (第67図)

調査区の東端に位置する土坑である。平面形は不整楕円形で、長軸約1m、短軸約0.65mであり、確認面から床面までは0.45m程度である。確認面の標高は3.35m、床面は2.9mである。

2号土坑 (第65図)

調査区中央部の北壁に位置する不整楕円形の土坑である。一部攪乱されているが、平面形は不整長方形で、長軸約0.65m、短軸約0.4mであり、確認面から床面までは0.8m程度である。土坑確認面の標高は3.25mである。

第6節 22調査区

3号土坑（第65図）

調査区の北壁寄りの西端に位置する。平面形は不整楕円形で、長軸約0.6m、短軸約0.4mであり、確認面から床面は0.3mである。土坑確認面の標高は3.25m、床面は2.95mである。

4号土坑（第65図）

調査区の南寄りに位置する土坑である。平面形は不整楕円形で、長軸約0.55m、短軸約0.5mであり、確認面から床面までは0.25m程度である。土坑確認面の標高は3.35m、床面は3.1mである。

5号土坑（第68図）

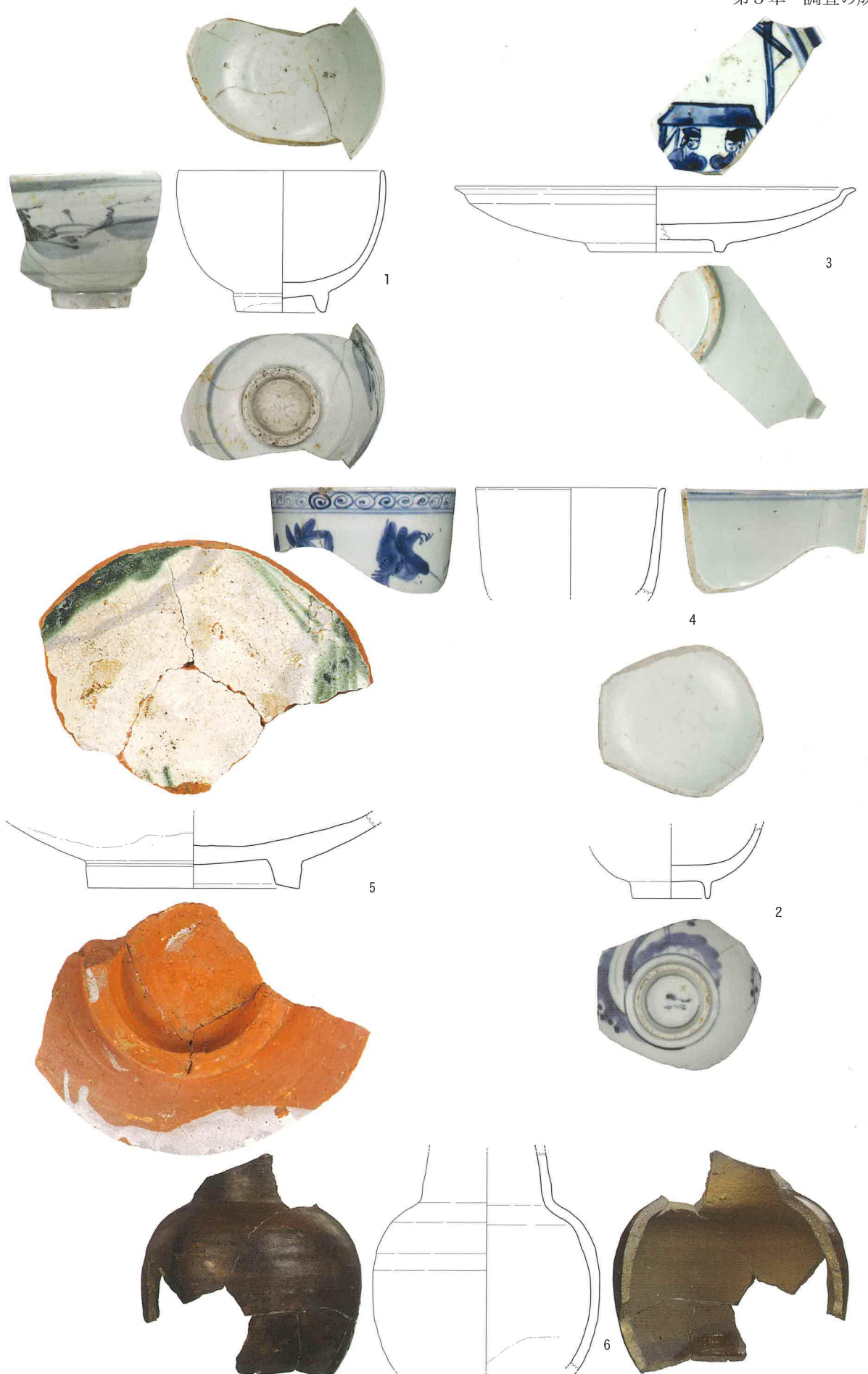
4号土坑に隣接する円形の土坑である。直径は0.45mであり、確認面から床面までは0.1m程度である。中に川原礫が4個入っていた。土坑の確認面の標高は3.4mである。

2 出土遺物（第71～74図）

本調査区の出土遺物の詳細は表6に記述している。

表6 22調査区出土遺物観察表

番号	遺構	出土土層	器種		大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
					口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
1	1号土坑		磁器	染付碗	11	5.7	4.6		1/3 個体	肥前	畳付砂付着	1630～1650年
2	5号土坑		磁器	染付碗			4.2		底部完形	肥前		17世紀末～18世紀前半
3	5号土坑		磁器	染付皿	21.5	3.6	7.2		1/5 個体	肥前	赤壁の戦い図	1630～1650年
4	柱穴1		磁器	染付碗	10.3				口縁の1/2	肥前		17世紀前半
5		焼土4面	陶器	碗			11.4		底部の2/3	肥前	ニ彩手、内面砂目	17世紀前半～18世紀後半
6		焼土4面	陶器	瓶・壺				12.4	1/4 個体	肥前		1630～17世紀第3四半期
7		焼土4面	青磁	碗	11.2	4.8	4.4		略完形	肥前	見込蛇目軸剥ぎ、畳付砂付着	17世紀前半
8		焼土4面	陶器	鉢	10.6				底部の1/3	肥前	割り高台、見込砂目	17世紀前半
9		焼土4面	磁器	染付瓶	1.8			7	口縁完形	肥前	タコ唐草文	18世紀後半
10		焼土4面	磁器	染付皿	13	3	4.3		3/4 個体	肥前・初期伊万里	砂目積み、焼成不良	1610～1630年
11		焼土4面	磁器	碗			4.6		底部完形	肥前	天目形、外鉄軸、内透明軸	17世紀前半
12		焼土4面	陶器	瓶			5.7		底部完形	肥前	糸切痕跡	?
13		焼土4～5面間	磁器	染付碗	9.8	7	4.3		1/2 個体	肥前		1630～1650年
14		焼土5面	陶器	筒型碗	9.4	8.1	5.2		1/3 個体	肥前		17世紀前半
15		焼土5～6面間	磁器	染付蓋	5.1	4.1		蓋最大径8.4	1/2 個体	肥前	獅子型摘み	17世紀前半
16		焼土5～6面間	陶器	鉢	37	12	11.6		2/3 個体	肥前	割り高台、ニ彩手、見込砂目	17世紀後半～18世紀前半
17		焼土5面+5号土坑	磁器	染付瓶				10.4	1/4 個体	肥前	二次焼成	1630～1640年
18		焼土5面+焼土5面+焼土5面+焼土5面+焼土5面+焼土5面+焼土5面+焼土5面+焼土5面+焼土5面	瓶	瓶			11.4	17.6	1/3 個体	備前	底部へラ記号、内面剥落多い	17世紀
19		灰褐色シルト層	磁器	染付碗	11				1/5 個体	肥前	漆接ぎ	17世紀前半
20		灰褐色シルト層	陶器	皿	23.1				口縁破片	肥前	溝縁皿	1600～1630年
21		焼土5～6面間	瓦質土器	鉢	29.2	7	24		1/5 個体		表面指押え後へラ削り、内面指押え	
22	5号土坑		土師質土器	トリベ	5.2	2.5			完形		指押え調整	
23		焼土4面	煙管	吸口	残存長7.5	幅1	吸口径0.5	重さ5g	破片			
24		焼土5面	銅製品	小柄	残存長12.8	幅1.5	厚さ0.4	重さ30.9g	破片			
25		焼土5面	鉄製品	輪	残存長2.8		厚さ0.4～0.5	重さ5.6g	破片			
26		焼土5～6面間	銅製品	小柄	残存長11.4	幅1.5	厚さ0.4～0.6	重さ25.2g	破片			
27		焼土4面	砥石		現存長8.1	幅5	厚さ3.6～4.1	重さ204.4g	破片			
28		焼土4面	銭貨	寛永通寶			径2.4	重さ3g	完形		「ス」の古寛永	
29		焼土5～6面間	銭貨	寛永通寶			径2.5	重さ2.4g	完形		「ス」の古寛永	

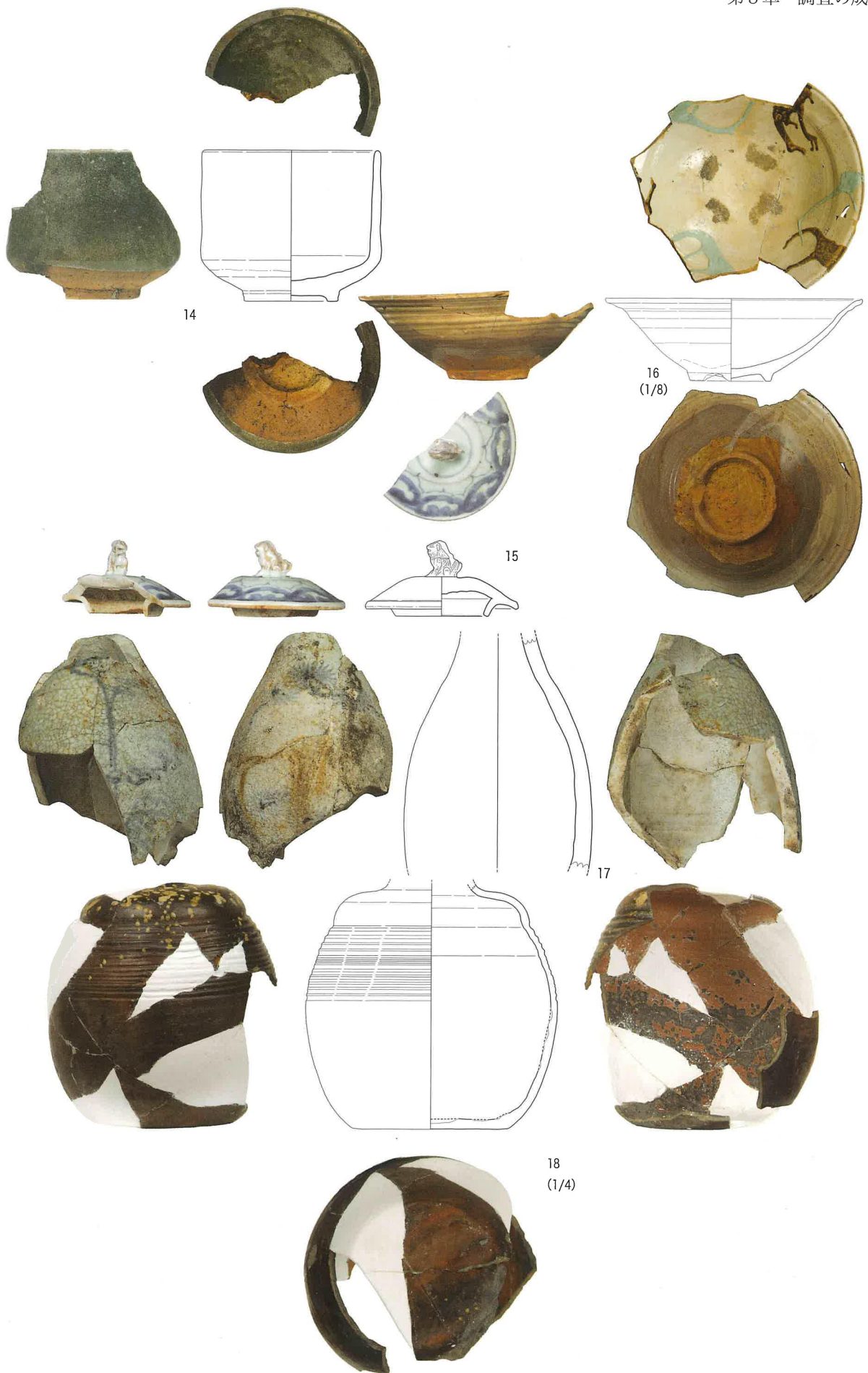


第71図 22調査区出土遺物 (1/3)



第72図 22調査区出土遺物 (1/3)

※17は1/8



第73図 22調査区出土遺物 (1/3)

※16は1/8、18は1/4

第6節 22調査区



第74図 22調査区出土遺物 (1/3) ※28、29は2/3



22調査区全景（東方向から）



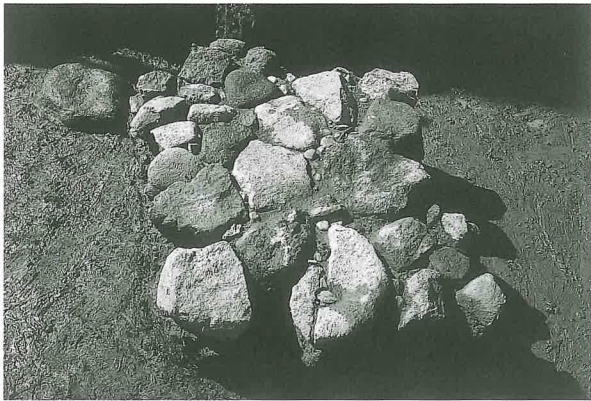
南壁土層（北方向から）



南壁土層（北方向から）



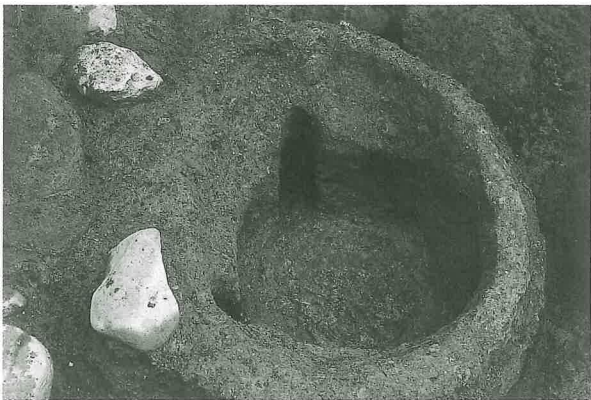
1号溝（北方向から）



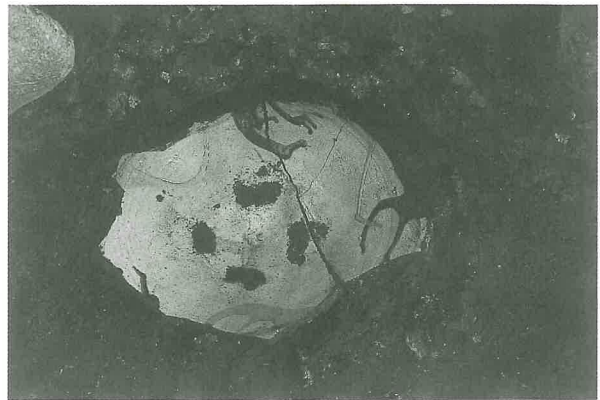
1号集石（北方向から）



2号集石（南方向から）



1号土坑（北方向から）



遺物出土状態

第7節 23調査区

23調査区は長さ約6 m、幅約5.9mの方形を呈する。調査区の東端部には現代の側溝が確認できる。地表面の標高は約6 mである。調査区の出土遺構を俯瞰すると、集石や石の並びが確認できるが、狭い調査区内での全体像は判らない。

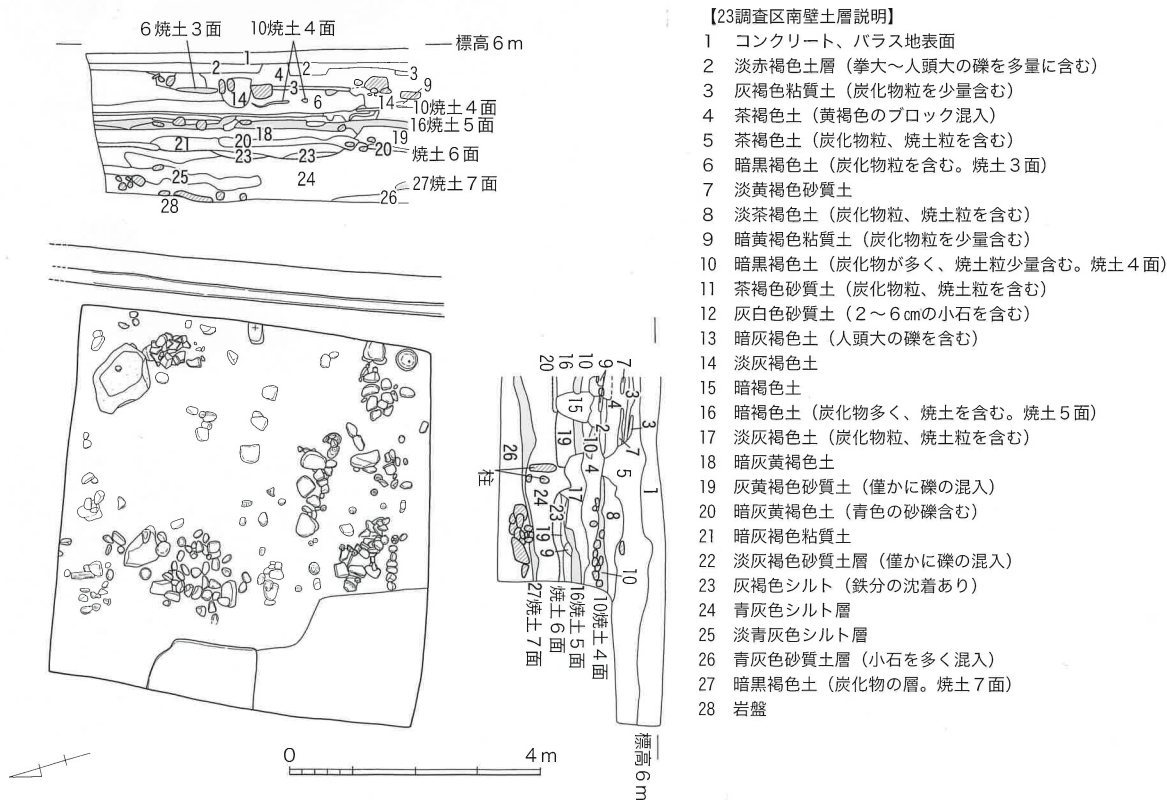
土層は地表面から約1.6m程度掘ると、水の湧く青灰色シルト層となり、その下は砂礫を混じえた地山へと変化している。層序は比較的に整然と堆積しているが、約2.6mの堆積土内に焼土3面～焼土7面までの5回の焼土・炭化物層がパックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。5回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.01～0.02 mから約0.2mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1～0.6mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山土と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。青灰色シルト層の直上にある焼土6面は炭化物の層であり、他の火災遺構とは様相が異なる。

1 検出遺構 (第75図、写真7)

集石や人為的な配置をもつ石を確認したが建物を復元できるものではなかった。基礎の一部と想定される。

2 出土遺物 (第76図～第83図)

本調査区の出土遺物の詳細は表7に記述している。

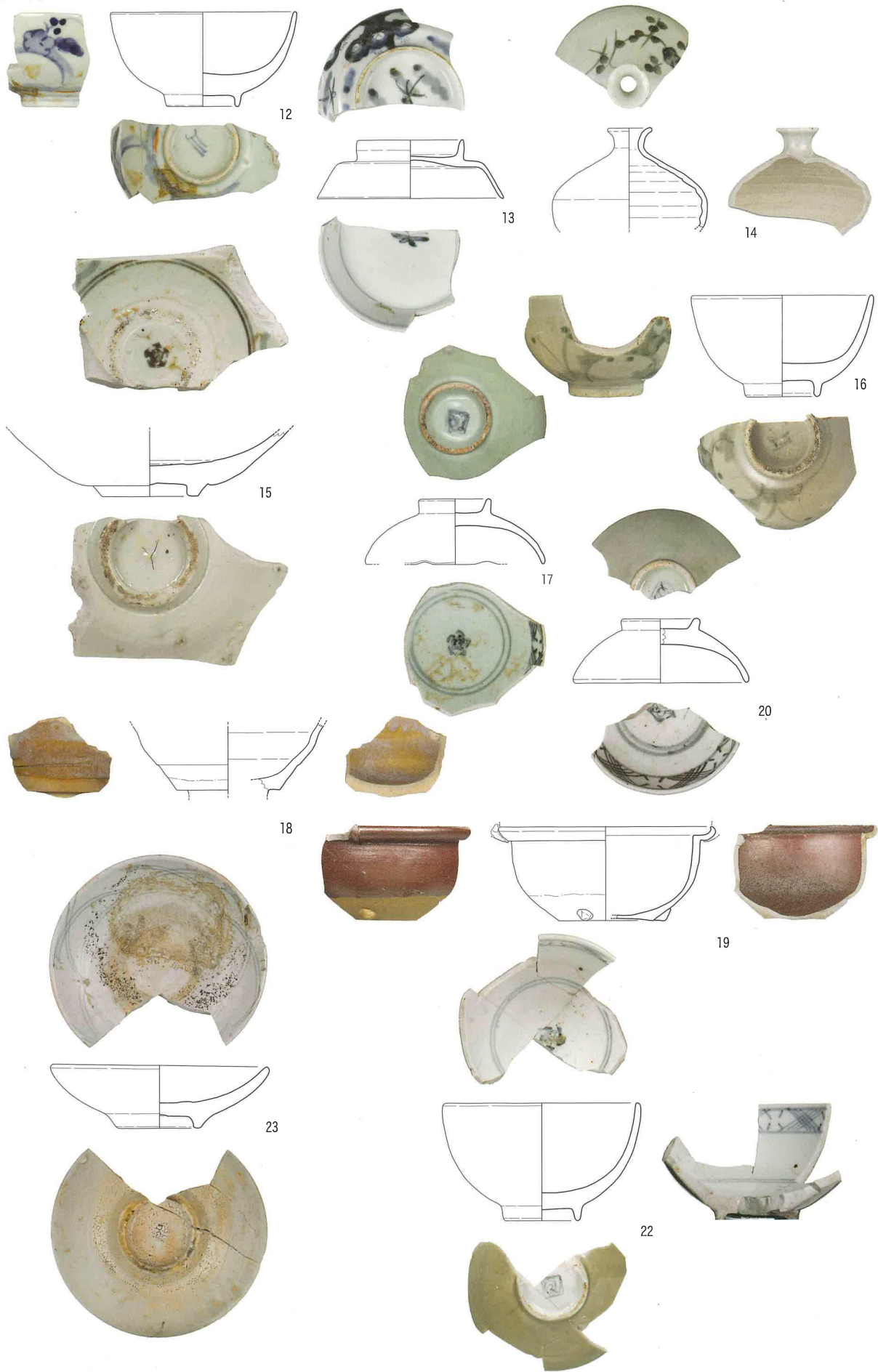


第75図 23調査区遺構配置図 (1/120)



第76図 23調査区出土遺物 (1/3)

第7節 23調査区



第77図 23調査区出土遺物 (1/3)



第78図 23調査区出土遺物 (1/3)

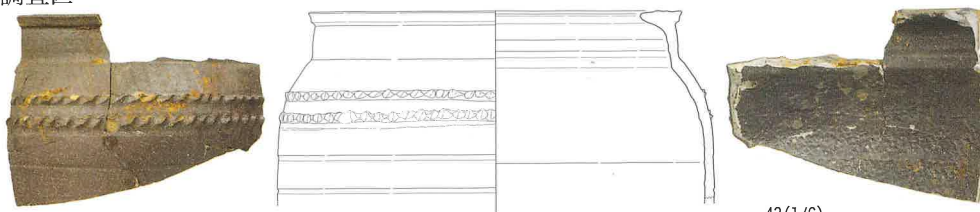


第79図 23調査区出土遺物 (1/3)

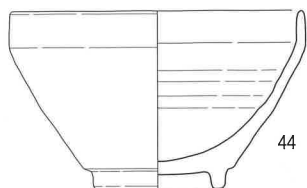


第80図 23調査区出土遺物 (1/3) ※40は1/4

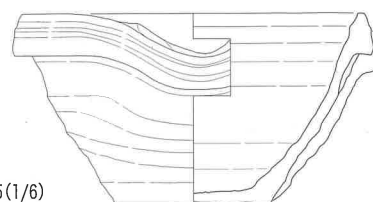
第7節 23調査区



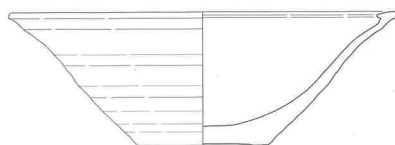
43(1/6)



44



45(1/6)



46(1/6)

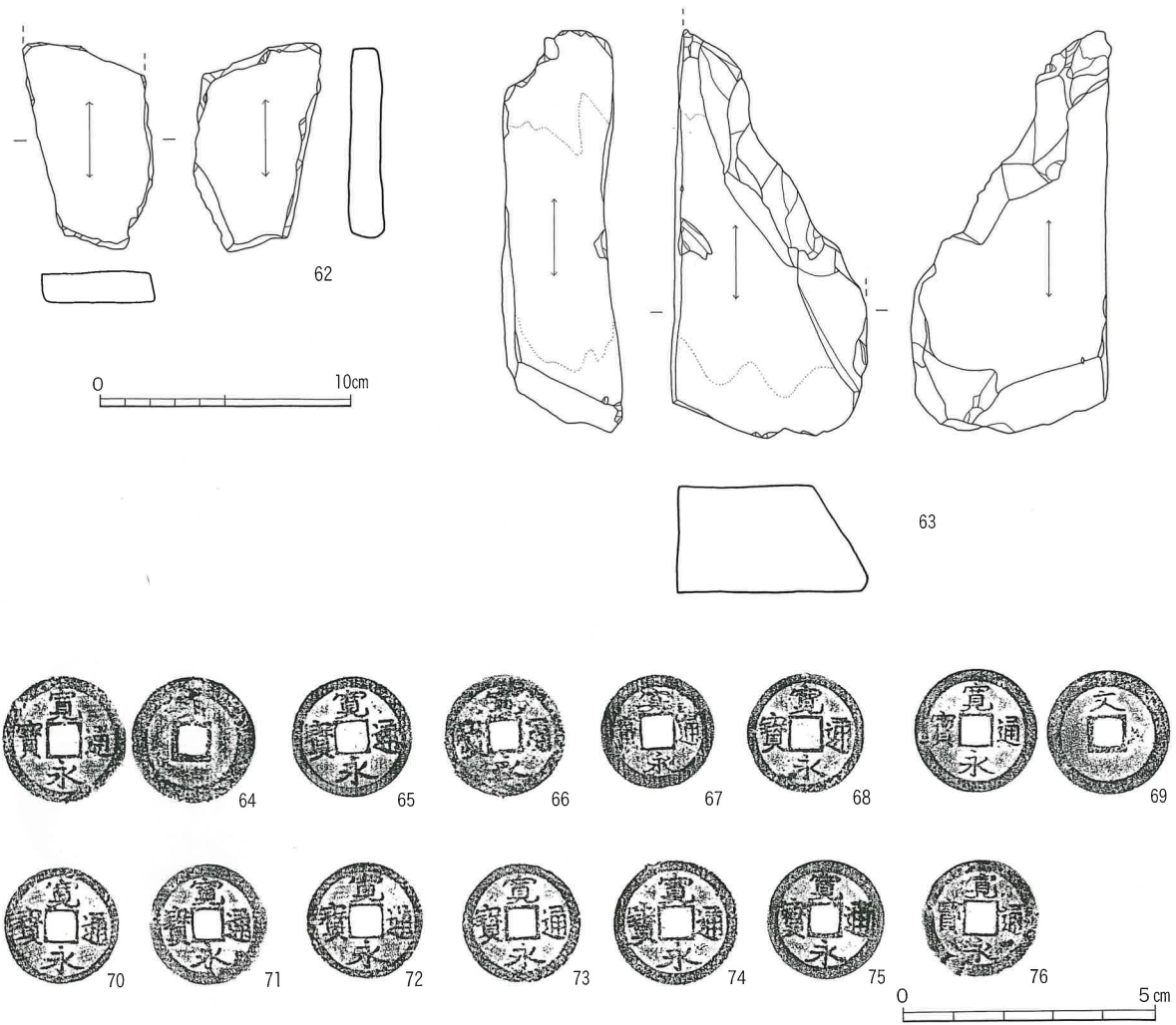


第81図 23調査区出土遺物 (1/3)

※43、45、46は1/6



第82図 23調査区出土遺物 (1/3)



第83図 23調査区出土遺物 (1/3、2/3)

表7 23調査区出土遺物観察表

番号	遺構	出土土層	器種	大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
				口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
1	一括		磁器 染付小杯	6.7	4.8	3.1		1/3 個体	肥前	量付砂付着	17 世紀
2	一括		磁器 染付小杯	6.6	3.8	2.8		1/3 個体	肥前	量付砂付着	17 世紀
3	一括		陶器 鉢			8.3		底部の 1/5	関西系		18 世紀後半以降
4	一括		磁器 染付小杯	6.8	4.6	3.1		1/2 個体	肥前		?
5	一括		土瓶蓋 土瓶蓋	8.7	2.1		蓋最大径8.9	略完形	関西系		18 世紀後半以降
6	一括		磁器 染付皿	13.5	3.8	4.5		3/4 個体	肥前	見込み釉剥ぎ、高台砂付着	18 世紀後半
7		焼土 2～3 面間	磁器 磁器皿	12.8	2.7	5.6		3/4 個体	瀬戸美濃	口縁小波状	?
8		焼土 3 面	磁器 染付皿	9.7	2	4.8		略完形	肥前	コンニャク印判、二次焼成	17世紀末～18世紀前半
9		焼土 3 面	磁器 染付猪口	4.5			4.8	口縁の 1/3	肥前	タコ唐草文	18 世紀後半
10		焼土 3 面	燈火具 燈火具	5.3	5	4.4	6	1/2 個体	関西系		18 世紀後半以降
11		焼土 3～4 面間	磁器 染付小杯	6.9	4.8	3.2		1/2 個体	肥前	高台砂付着	?
12		焼土 3～4 面間	磁器 染付碗	10	5.1	3.9		1/3 個体	肥前		18 世紀後半
13		焼土 3～4 面間	磁器 染付蓋	10.2	3.2	5.8		2/3 個体	肥前	広東碗に対応	1780～1810 年
14		焼土 3～4 面間	磁器 染付瓶	2.3			8.6	1/4 個体	肥前	ピン付け油壺	?
15		焼土 3～4 面間	磁器 染付皿			5.3		底部完形	肥前	コンニャク印判、五弁花文、蛇の目軸剥ぎ	18 世紀後半
16		焼土 3～4 面間	磁器 染付碗	9.8	5.4	4		口縁の 1/3	肥前		18 世紀後半

第3章 調査の成果

番号	遺構	出土土層	器種	大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
				口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
17		焼土3～4面間	磁器 染付蓋	9.7	3.5	4		底部完形	肥前		18世紀後半～末
18		焼土3～4面間	陶器 碗					破片	萩		19世紀前半
19		焼土3～4面間	陶器 鍋	11.7	6	7		1/4個体	関西系	ミニチュア、ままごと道具	18世紀後半以降
20		焼土3～4面間	磁器 染付蓋	9.4	3.4	4.2		1/3個体	肥前		18世紀後半～末
21		焼土3～4面間	陶器 陶器片口	31.6				口縁の1/5	肥前	外刷毛目、片口付き	17世紀後半～18世紀前半
22		焼土3～4面間	磁器 染付碗	10.4	6.3	4		1/3個体	肥前	高台砂付着	18世紀後半
23		焼土3～4面間	磁器 染付皿	11.7	3.5	4.7		3/4個体	肥前	見込蛇目釉剥ぎ	18世紀後半
24		焼土3～4面間	磁器 磁器蓋物	4.6	2.3	2.8		1/4個体	肥前	色絵、ミニチュア、ままごと道具	18世紀以降
25		焼土4面	磁器 染付皿	14.8	3.3	5		底部の1/3	肥前	高台砂付着	1630～1650年
26		焼土4面	陶器 播鉢			10		底部完形	肥前		17世紀
27		焼土4面	磁器 清花小杯	再加工径5.4	0.8	2.7		底部完形	中国	景德鎮窯、周縁再加工	1590～1640年
28		焼土4面	磁器 仏飯器	7.8	6.2	4		2/3個体	肥前		?
29		No.3	磁器 皿	13.1	3.6	4.4		1/2個体	肥前		18世紀
30		No.4	青磁 皿	15.8	2.5	9.6	最大径16	1/5個体	肥前		?
31		焼土4面	磁器 染付皿	13.2	3.3	4.4		1/2個体	肥前	高台砂付着	1630～1650年
32		焼土4面	陶器 皿	13.8	3.3	4.7		2/3個体	肥前	砂目	1600～1630年
33		焼土4面	陶器 碗	10.7	8	4.7		2/3個体	関西系	透明釉、銅緑釉	17世紀後半～18世紀前半
34		焼土4～5面	陶器 碗	16.2				口縁の1/5	肥前	口縁内傾	17世紀前半
35		焼土4～5面	磁器 皿	13.5	2.6	4		4/5個体	肥前		1630～1650年
36		焼土4面+焼土4～5面間整地層	陶器 碗	13.9	8.2	5.9		略完形	肥前	内外面灰釉	17世紀前半
37		焼土4・5・6面	陶器 碗	9	5.2	3.2		1/3個体	信楽系		18世紀後半
38		焼土4・5・6面	磁器 皿			6.4		底部の1/4	肥前	タコ唐草文、焼き接ぎ	18世紀前半
39		焼土5面	青磁 皿	13.2	5.7	5.4		1/5個体	肥前	外青磁釉、内鉄釉	1630～1650年
40		焼土5面	陶器 鉢	19.4				口縁の1/3	肥前	口縁肥厚	17世紀前半
41		淡青灰色砂質土層+焼土	陶器 鉢			10.4		底部完形	肥前		17世紀前半
42		淡青灰色砂質土層+焼土5面	磁器 染付筒型碗	10.3	6.8	5.4		口縁の1/3	肥前	二次被熱	1640～1650年代
43		青灰色シルト(焼土7面より上)	陶器 甕	29			34.2	約1/10個体	肥前	口縁内傾、胴部刻目突帯、洗線	?
44		淡青灰色砂質土層	磁器 染付碗	11.4	6.9	4.9		1/2個体	肥前	天目型	1610～1630年
45		焼土4面	陶器 播鉢	27.1～28	13.6～15	12.3		完形	備前	8条の櫛描条線	
46		焼土4面	陶器 播鉢	30.8	10.6	10.3		略完形	肥前	13条の櫛描条線、回転糸切り底	
47		焼土4・5・6面	土師器 トリベ	7.2	3.7			完形		指押さえ、錆付着	
48		焼土4・5・6面	土師器 トリベ	7.8	3.3			完形		指押さえ、錆付着	
49		焼土4・5・6面	土師器 トリベ	4.7	2.4			完形		指押さえ、錆付着	
50		焼土4・5・6面	土師器 トリベ	4.2	1.9			完形		指押さえ、錆付着	
51		焼土4・5・6面	土師器 トリベ	3.7	1.7			完形		指押さえ、錆付着	
52		焼土4・5・6面	土師器 トリベ	5.1	2.2			完形		指押さえ、内面錆付着	
53		焼土4・5・6面	土師器 トリベ	4.4				略完形		指押さえ、外面錆付着	
54		焼土5面	土師器 燈明皿	11.2	2～2.4	8.4		完形		回転糸切り、ロクロ調整、表裏錆付着	
55		淡青灰色砂質土層	土師器 皿	9.2	1.9	6.4		完形		二次被熱	
56		焼土3～4面	煙管 吸口	残存長4.5	幅1	吸口径0.4	重さ6.5g	破片			
57		焼土4面	煙管 吸口	残存長5.8	幅1	吸口径0.4	重さ4.2g	破片			
58		焼土5面	煙管 雁首			火皿径1.6	重さ3.3g	破片			
59		焼土5面	鉄製品 角釘	残存長9.2	幅0.5		重19.5g	破片			
60		青灰色シルト土層	銅製品 飾金具	残存長6.8			重16.4g	完形			
61	一括		鉄製品 カスガイ	残存長18.4	幅1.2		重171.1g	完形			
62		焼土4面	砥石	残存長7.5	幅4.4	厚さ1.2	重73.9g	破片			
63		焼土5面	砥石	残存長14.9	幅7.6	厚さ4.2	重589.6g	破片			
64		焼土3面	銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3.4g	完形		「ハ」の新寛永、裏面「文」	
65		焼土3面	銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ3.5g	完形		「ス」の古寛永	
66		焼土3面	銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3.8g	完形		「ス」の古寛永	
67		焼土3～4面間	銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ2.8g	完形		「ス」の古寛永	
68		焼土3～4面間	銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ3.2g	完形		「ス」の古寛永	
69		焼土4～5面間	銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3.1g	完形		「ハ」の新寛永、裏面「文」	
70		焼土5面	銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ2.7g	完形		「ス」の古寛永	
71		焼土5面	銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3g	完形		「ス」の古寛永	
72		焼土5面	銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ3.6g	完形		「ス」の古寛永	
73		焼土5面	銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ3.7g	完形		「ス」の古寛永	
74	一括		銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3.1g	完形		「ス」の古寛永	
75	一括		銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ2.7g	完形		「ス」の古寛永	
76	一括		銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ2.3g	完形		「ハ」の新寛永	



23調査区全景（西方向から）



南壁面（北方向から）



東壁面（西方向から）



焼土3面甕出土状態



焼土3・4面整地層 遺物出土状態（東方向から）



遺物出土状態



焼土4面 遺物出土状態



焼土5面 遺物出土状態

第8節 24調査区

24調査区は長さ約8.6m、幅約6.4mの長方形を呈する。調査区の東端部には現代の側溝が確認できる。調査区の西端には1号側溝が検出されている。1号側溝の東側には無数の礫が配置されており、幾つかは並ぶ礫もあるが判断ができない。地表面の標高は北壁で約6.5mである。調査区の出土遺構を俯瞰すると、側溝、集石遺構、埋甕、柵状遺構等が検出されている。柵状遺構は石垣側溝の下層に登場するもので、その前身と考えて良い。

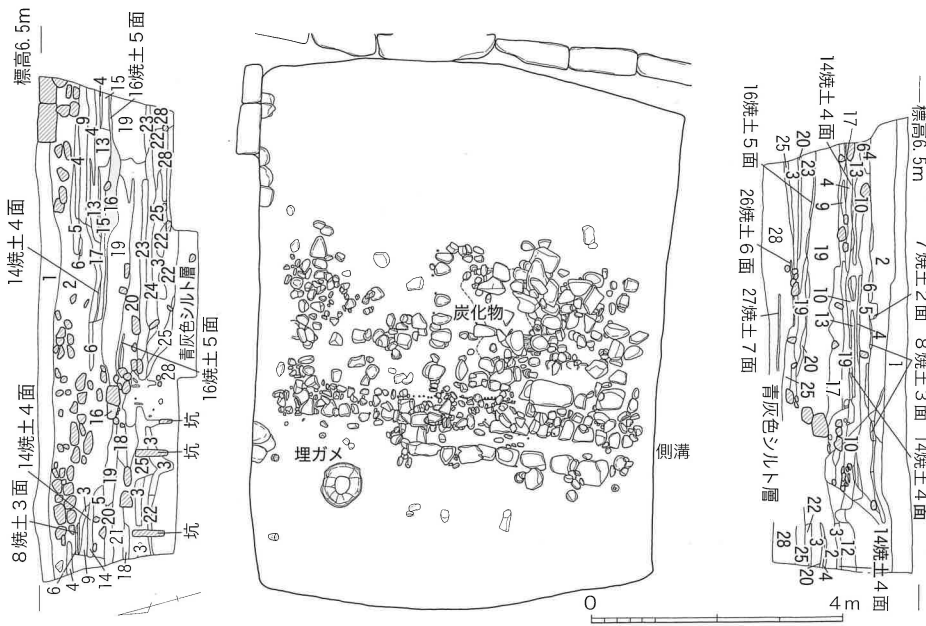
土層は地表面から約2.5m程度調査した。層序は比較的に整然と堆積しているが、約2.5mの堆積土内に焼土3面～焼土7面までの5回の焼土・炭化物層がパックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。5回の焼土・炭化物層はそれぞれ約0.01～0.02mから約0.15mの堆積があり、これらに挟まれた約0.1～0.5mの黄褐色土層は礫を含む人為的な搬入土であった。この搬入土は山土と想定され、遺物を殆ど含まない。つまり、火災の度に土砂を搬入し、地表面の嵩上げが行われたことが判明した。

1 検出遺構 (第84～86図、写真8)

1号側溝 (第85図)

1号側溝は調査区の東端に位置する。側溝は、現県道の宗近魚町線に直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝の全体幅は約1.3～1.7m、溝幅は約0.25～0.3m程である。側溝の東片側には人頭大の川原礫の長軸を溝と直角に並べ、周辺を拳大～人頭大の礫で補強し、その外側に巨石を据えていた。西片側には人頭大の川原礫の長軸を溝と平行に整然と並べていた。側溝の断面をみると、側溝の両側には拳大～人頭大の石垣が2～3段に組まれていた。

側溝の確認面の標高は東片側で5.650～5.420m、西片側で5.42mであり、石垣の基底部は標高5m前後である。



第84図 24調査区遺構配置図 (1/120)

【24調査区南壁土層説明】

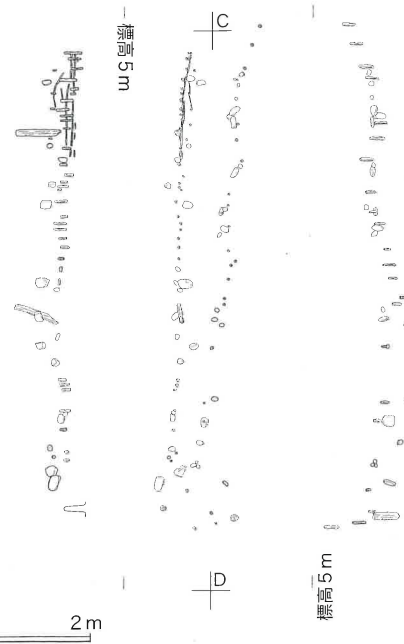
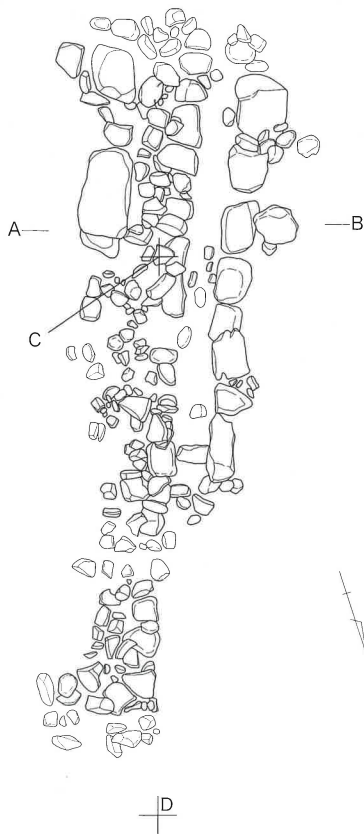
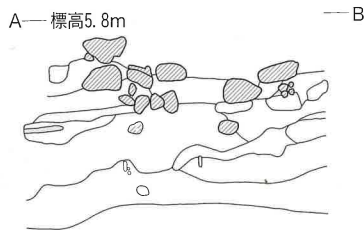
- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 1 バラス地表面 | 15 淡黄褐色土 (小さな礫を含む) |
| 2 茶褐色土 (炭片や焼土粒を含む) | 16 焼土5面 |
| 3 淡黄褐色砂質土 (炭化物粒を少量含む) | 17 淡灰褐色土 (炭化物粒を含む) |
| 4 灰褐色粘質土 | 18 灰褐色砂質土 (炭化物粒を含む。鉄分の沈着) |
| 5 淡茶褐色土 | 19 淡赤褐色土 (径10cm前後の礫を混入) |
| 6 暗黄褐色土 | 20 灰茶褐色土 (炭化物粒を多く含む) |
| 7 焼土2面 | 21 淡茶褐色粘質土 |
| 8 焼土3面 | 22 暗黄褐色砂質土 (鉄分の沈着) |
| 9 黄褐色粘質土 ((小石を多く含む) | 23 淡茶褐色砂質土 (炭化物や礫の混入有り) |
| 10 茶褐色砂質土 (炭化物粒を含む) | 24 暗灰褐色土 (炭化物粒を少量含む) |
| 11 灰白色砂質土 | 25 灰褐色シルト層 (小石粒を含む。鉄分の沈着) |
| 12 茶褐色土 (黄褐色のブロック混入) | 26 焼土6面 (炭化物のみ含む) |
| 13 暗茶褐色土 (小さな礫を含む) | 27 焼土7面 (炭化物粒を含む) |
| 14 焼土4面 | 28 青灰色シルト層 (小石粒を含む) |
| | 29 灰褐色土 (径2～10cm前後の礫を混入) |

柵状側溝（第86図）

1号側溝の真下の青灰色シルト層の直上面で、直径0.07～0.08m前後の木杭と竹か葦の茎のような中空の小指の太さほどの棒の列が0.05～0.08m置きに検出されている。それらには細い横木が0.03～0.05m置きに出土しており、柵のように編まれた様相と把握された。このような柵列は平行に二列あり、広い所で約0.4mの間隔、狭い所で約0.25mの間隔をあけていた。このような施設は1号側溝の下、厳密には1号側溝の東片側の石垣の下に配置されており、石組み側溝の以前にはこの様な柵列状の側溝が配置されていた様相である。

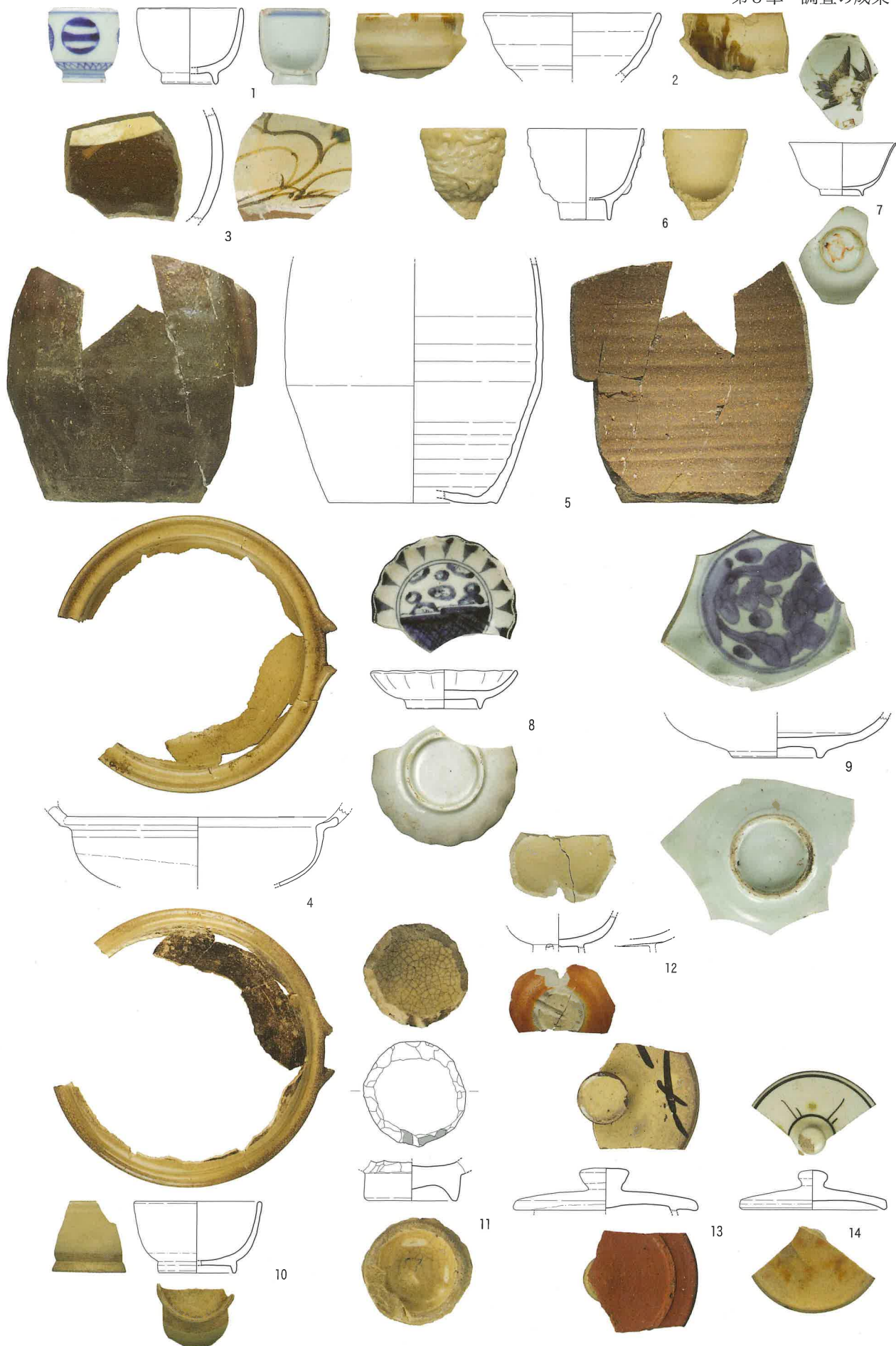
2 出土遺物（第87図～第93図）

本調査区の出土遺物の詳細は表8に記述している。



第85図
24調査区1号側溝実測図（上部遺構）（1/60）

第86図
24調査区柵状側溝実測図（下部遺構）（1/60）

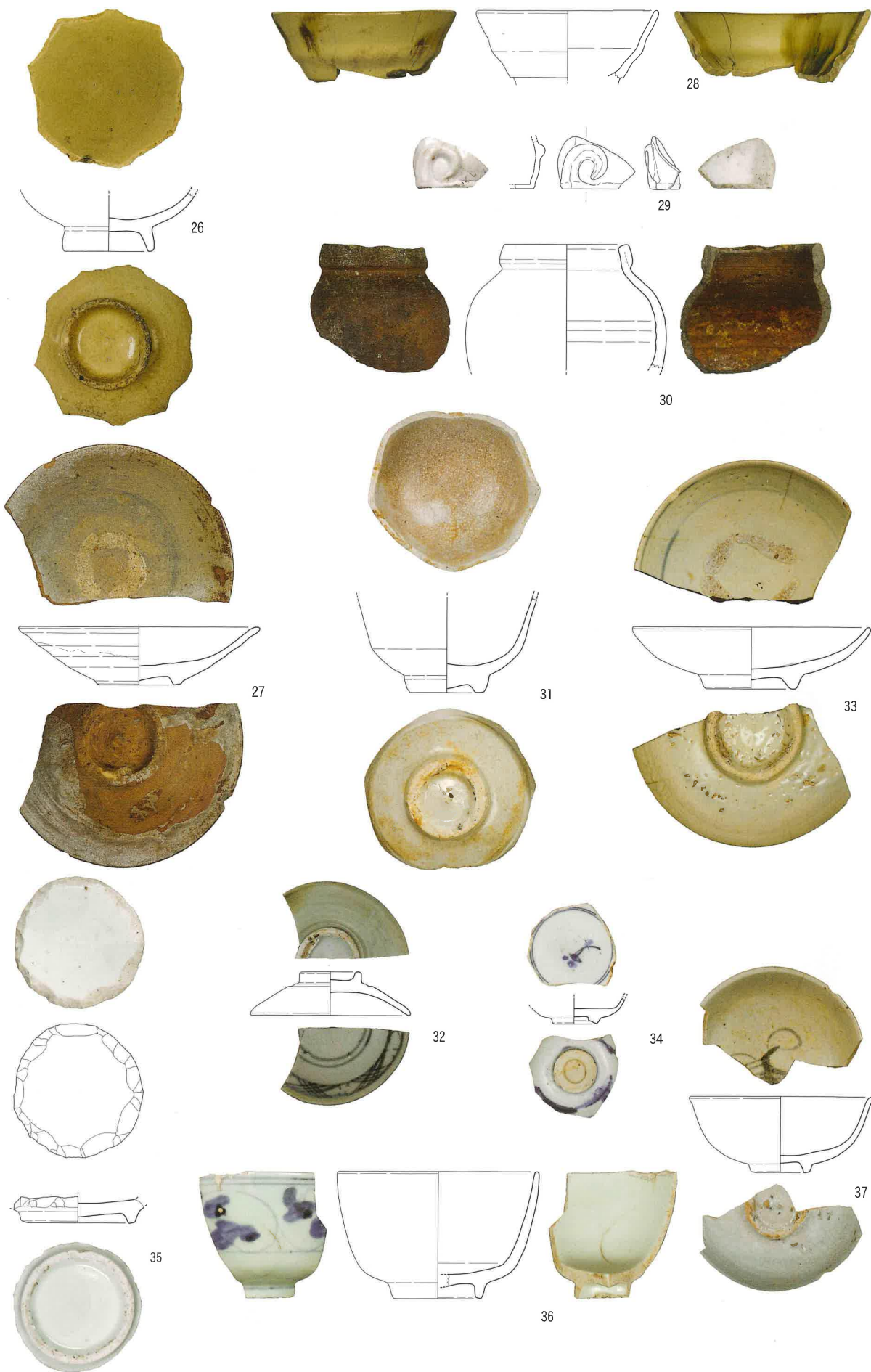


第87図 24調査区出土遺物 (1/3)

第8節 24調査区



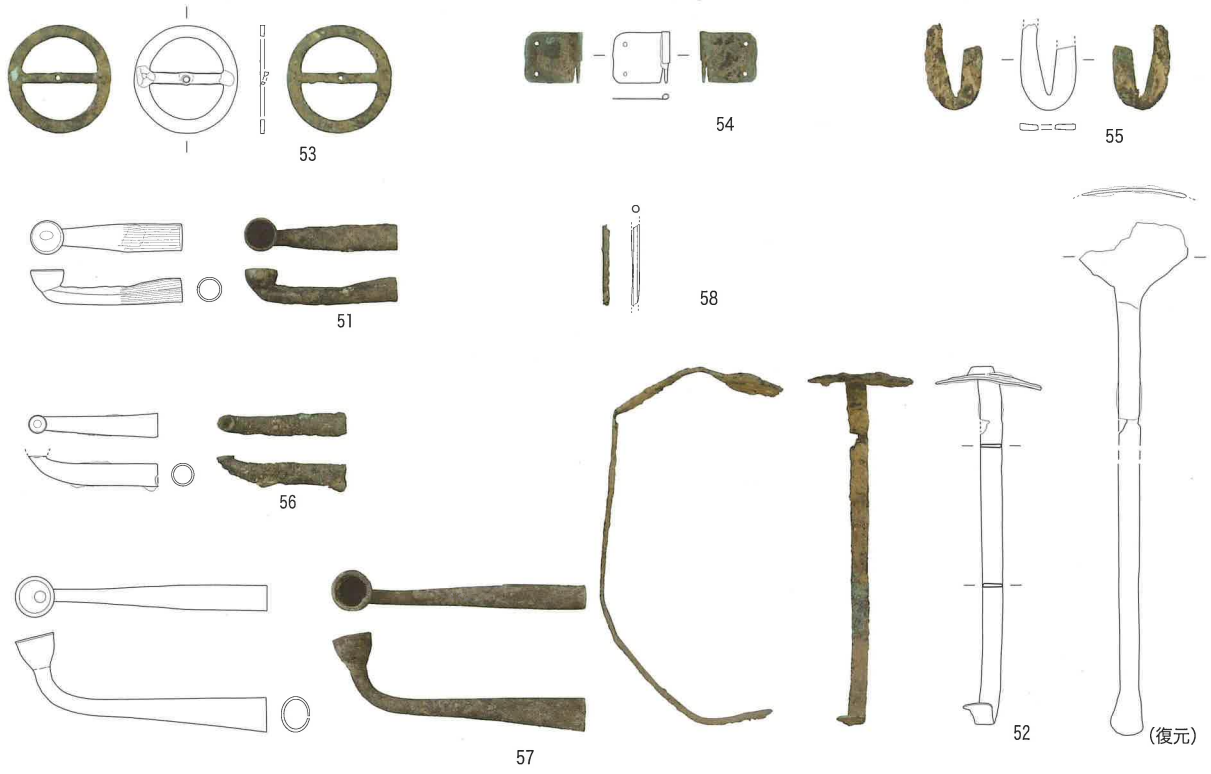
第88図 24調査区出土遺物 (1/3)



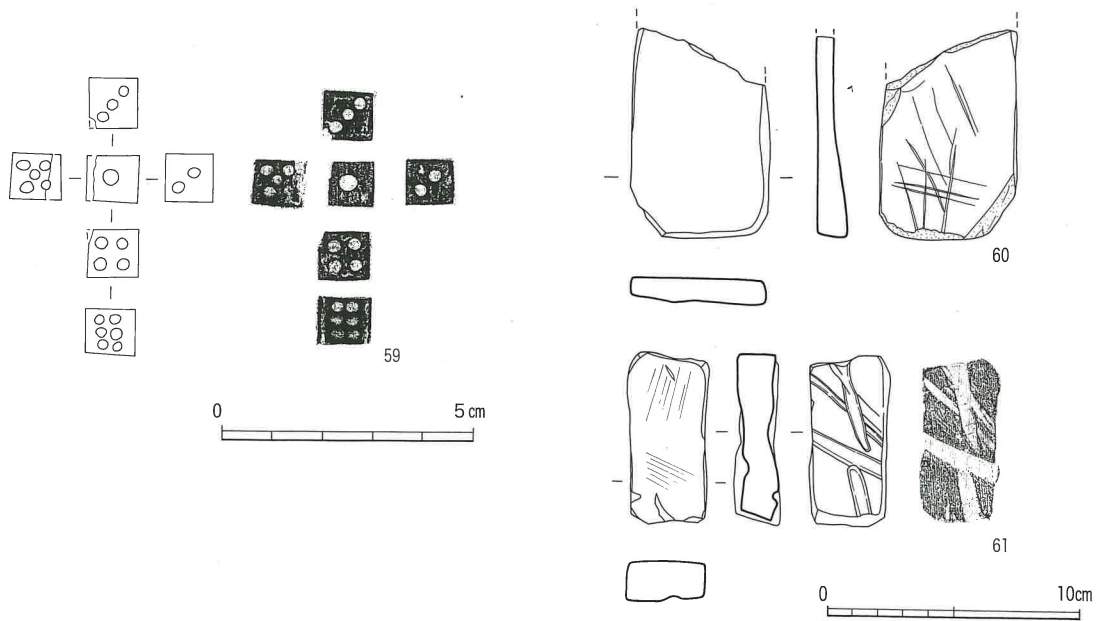
第89図 24調査区出土遺物 (1/3)



第90図 24調査区出土遺物 (1/3)

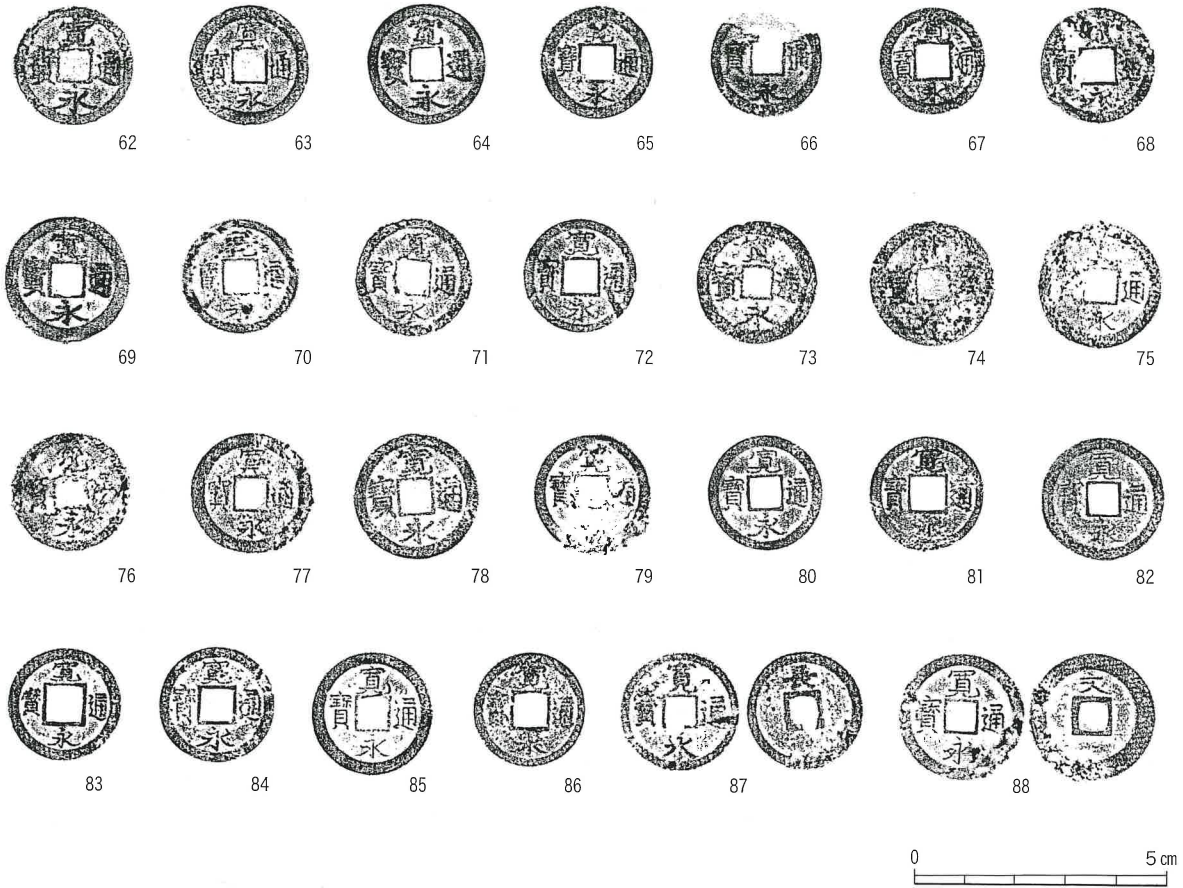


第91図 24調査区出土遺物 (1/3)



第92図 24調査区出土遺物実測図 (2/3、1/3)

第8節 24調査区



第93図 24調査区出土遺物 (2/3)

表8 24調査区出土遺物観察表

番号	遺構	出土土層	器種	大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
				口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
1	一括		磁器 染付碗	5.7	4.2	3		1/4 個体	瀬戸美濃		19世紀中頃
2	一括		碗 碗	9.6				1/5 個体	萩		19世紀前半～中頃
3	一括		陶器 土瓶					破片	関西系		18世紀末～19世紀
4	一括		陶器 土鍋	15.2				1/2 個体	関西系		18世紀後半以降
5	一括		陶器 瓶・壺			9.4	14.4	底部の1/4	中国南部	灰釉、二次被熱	17世紀頃、
6	一括		陶器 碗	6.4	5	2.8		口縁の1/5	信楽系		19世紀中頃、幕末～明治以降
7	一括		小杯 小杯	5.9	2.9	2.4		3/4 個体	瀬戸美濃	焼き接ぎの赤文字	19世紀中頃
8	一括		磁器 皿	8	2.1	4		2/3 個体	肥前	口縁花弁状起伏	18世紀後半
9	一括		磁器 染付皿	5				底部完形	肥前		1630～1650年
10	一括		陶器 小杯	6.9	3.9	4.2		1/3 個体	関西系		18世紀後半～19世紀
11	一括		陶器 碗	再加工径6	2.2	4.9		底部完形	肥前	周縁加工、打欠部爆付着	17世紀後半～18世紀前半
12		焼土2～3面	磁器 碗			2.8		底部の4/5	肥前	切り高台	18世紀以降
13		焼土2～3面	陶器 土瓶蓋	10.2	2.4			蓋の1/4	関西系	撮み付	18世紀末～19世紀
14		焼土3面	陶器 土瓶蓋	7.9	2.2			1/4 個体	関西系	撮み付	18世紀末～19世紀
15		焼土3面	磁器 碗	10.9				口縁の1/5	肥前	端反り碗、焼き接ぎ	1810～1860年
16		焼土3面	磁器 瓶			3.8		底部完形	肥前		?
17		焼土3面	陶器 土瓶	5.6			9.6	1/3 個体	関西系		18世紀末～19世紀
18		焼土3面	磁器 香炉	9.4			8.6	口縁の1/3	肥前		18世紀以降
19		焼土3～4面	磁器 香炉	8.8			8.4	口縁の1/5	肥前		18世紀以降
20		焼土3～4面	磁器 小杯	6	2.8	2.9		1/3 個体	瀬戸美濃		19世紀中頃
21		焼土3～4面	陶器 燈明皿	7.8	1.6	3.3		1/3 個体	信楽系	内面飾描	18世紀後半～19世紀中頃
22		焼土3～4面	磁器 染付碗	5.7		3.2		1/5 個体	肥前		19世紀前半～中頃
23		焼土3～4面	磁器 染付碗	9.6	4.7	3.6		完形	肥前	くらわんか、波佐見焼き、雪輪文・梅花文	18世紀後半

第3章 調査の成果

番号	遺構	出土土層	器種	大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
				口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
24		焼土3~4面	磁器 染付碗	10.8	4.4	4		3/4 個体	肥前	高台砂付着、見込蛇目軸剥ぎ	18世紀後半
25		焼土3~4面	陶器 土瓶	9.7				口縁の1/5	関西系	口縁肥厚	18世紀末~19世紀
26		焼土4面	陶器 碗			4.8		底部完形	肥前		17世紀後半~18世紀前半
27		焼土4~5面	陶器 皿	13	3.1	4.7		1/2 個体	肥前	見込砂付着	1600~1630年
28		焼土4~5面	陶器 碗	9.8				口縁の2/3	萩		19世紀前半~中頃
29		焼土4~5面	磁器 水滴					破片	肥前・有田	色絵、犬の置物、水滴	17世紀末~18世紀前半
30		焼土5面	陶器 壺	6.8			11	口縁の1/5	信楽系・丹波	油壺、カネ(鉄漿)壺	16世紀末~17世紀前半
31		焼土5面	陶器 碗			4		1/2 個体	肥前		17世紀前半
32		焼土5~6面	磁器 染付蓋	8.7	2.4	3.4		1/4 個体	肥前		18世紀後半
33		焼土5~6面	磁器 皿	12.8	3.3	4.8		1/2 個体	肥前	見込み砂目、高台砂付着	1610~1630年
34		焼土5~6面	磁器 清花小杯			2.3		底部完形	中国		1590~1640年
35		焼土6面	磁器 皿	再加工径7.1		6.1		底部完形	肥前	周縁打欠加工	?
36		焼土6面	磁器 染付碗	10.8	6.8	4.8		1/4 個体	肥前		17世紀前半
37		焼土6面	磁器 染付皿	9.8	4.1	3.2		1/2 個体	肥前		17世紀前半
38		焼土6面	磁器 染付皿	13.1	3.8	4.7		1/3 個体	肥前	高台砂付着	1610~1630年
39	一括		陶器 火鉢	25				破片		7箇所の穿孔	
40	一括		土師器	9.6	1.8	7		1/2 個体		回転糸切、二次被熱	
41		焼土4~5面	瓦 瓦加工品			厚さ1.7		完形			
42		焼土5~6面	土師器 トリベ	6.5	3.2			完形		指押え、緑青色、赤褐色、黒色の錆	
43		焼土5~6面	土師器 トリベ	4.8	2.3			完形		指押え	
44		焼土5~6面	土師器 トリベ	5.6	2.5~2.9			完形		指押え、緑青色の錆	
45		焼土5~6面	土師器 トリベ	4	1.8			完形		指押え、黒色の錆	
46		焼土5~6面	土師器 トリベ	4.5	1.8~2			完形		指押え	
47		焼土5~6面	土師器 トリベ	3.9	2			完形		指押え	
48		焼土6面	土師器 トリベ	6.2	3.1			1/4 個体		指押え、鉄錆付着	
49		焼土6面	土師器 トリベ	3.9	1.9			完形		指押え、軸かけ	
50		焼土6面	土師器 トリベ	4.6	2.2			完形		指押え	
51		焼土3面	煙管 雁首	長さ6	幅1	火皿径1.3	重さ8.7g	破片			
52		焼土3~4面	銅製品 金具	現存長14.1	幅0.8~1.2	厚さ0.1~0.15	重さ22g	破片			
53		焼土3~4面	銅製品 飾り金具	現存長4.2	幅4.3	厚さ0.15	重さ10.6g	破片		中央部の穿孔径0.15	
54		焼土4面	銅製品 蝶番	現存長2.3	幅2	厚さ0.05~0.2	重さ1.9g	破片		一对の穿孔(留穴)	
55		焼土5~6面	銅製品 切羽	現存長3.5	幅2.3	厚さ0.15	重さ4g	破片			
56	一括		煙管 雁首	長さ5.1	幅0.9		重さ6.3g	破片			
57	一括		煙管 雁首	長さ10	幅1.3	火皿径1.5	重さ14.1g	破片			
58	一括		銅製品 管	現存長3.2	幅0.2~0.3	孔径0.15	重さ0.5g	破片			
59	一括		サイコロ	木製 長さ1	幅1		重さ1.1g	完形			
60	一括		砥石	現存長7.7	幅5.5	厚さ0.7~1.2	重さ65.8g	破片		緑色片岩、表面光沢	
61		焼土6面	砥石	現存長6.6	幅3	厚さ1.5	重さ59.2g	破片		天草石	
62		焼土2~3面	銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ2.7g	完形		「ス」の古寛永	
63		焼土3~4面	銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ2.1g	完形		「ス」の古寛永	
64		焼土3~4面	銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ3.5g	完形		「ス」の古寛永	
65		焼土3~4面	銭貨 寛永通寶		径2.2		重さ2.1g	完形		「ス」の古寛永、裏面「元」	
66		焼土3~4面	銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ2g	完形		「ハ」の新寛永	
67		焼土3~4面	銭貨 寛永通寶		径2.1		重さ2g	完形		「ハ」の新寛永	
68		焼土3~5面	銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ2.1g	完形		「ス」の古寛永	
69		焼土3~5面	銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3.4g	完形		「ハ」の新寛永	
70		焼土4面	銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ3.3g	完形		「ハ」の新寛永	
71		焼土4面	銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ2.5g	完形		「ハ」の新寛永	
72		焼土4~5面	銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ2.5g	完形		「ハ」の新寛永	
73		焼土5面	銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3g	完形		「ス」の古寛永	
74		焼土上	銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3.4g	完形		「ス」の古寛永	
75		焼土上	銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3.5g	完形		「ス」の古寛永	
76		焼土上	銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ3.3g	完形		「ハ」の新寛永	
77		焼土上	銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3g	完形		「ハ」の新寛永	
78	一括		銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3.7g	完形		「ス」の古寛永	
79	一括		銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ3.1g	完形		「ハ」の新寛永	
80	一括		銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ3.1g	完形		「ハ」の新寛永	
81	一括		銭貨 寛永通寶		径2.2		重さ2.7g	完形		「ハ」の新寛永	
82	一括		銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3.8g	完形		「ハ」の新寛永	
83	一括		銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ2.6g	完形		「ハ」の新寛永	
84	一括		銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ2.4g	完形		「ハ」の新寛永	
85	一括		銭貨 寛永通寶		径2.4		重さ3.4g	完形		「ハ」の新寛永	
86	一括		銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ1.9g	完形		「ハ」の新寛永	
87	一括		銭貨 寛永通寶		径2.3		重さ2.6g	完形		「ハ」の新寛永、裏面「長」	
88	一括		銭貨 寛永通寶		径2.5		重さ3.5g	完形		「ハ」の新寛永、裏面「文」	



24調査区全景（西方向から）



1号側溝（北方向から）



北壁面（南方向から）



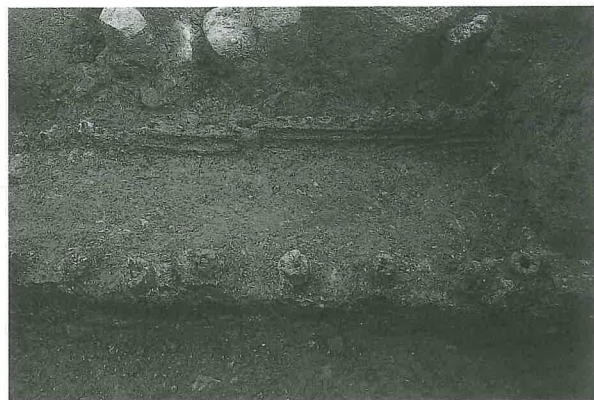
配石（南方向から）



柵状側溝（南方向から）



柵状側溝（北方向から）



柵状側溝（西方向から）



柵状側溝（西方向から）

第9節 25調査区

25調査区は長さ約9.5m、幅約5.7mの長方形を呈する。調査区の東端部には側溝が確認できた。側溝の西側一帯は工事によって全体的に攪乱されており調査対象にはならなかった。地表面の標高は東の方で約6.6m、西の方で約7.1mである。

1 検出遺構 (第94、95図、写真9)

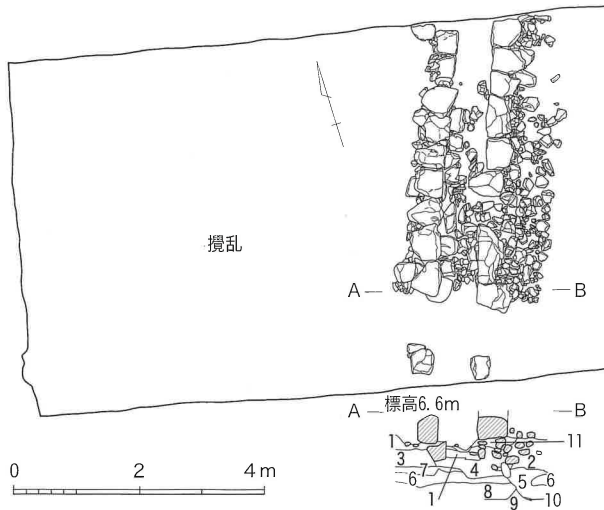
1号側溝 (第94、95図)

側溝は調査区の東端に位置するが現代に限りなく近い所産である。側溝は、現県道の宗近魚町線にほぼ直角に配置されており、南方の谷川へと続くものと推察できる。側溝の全体幅は約1.8m、溝幅は約0.25~0.3m程である。側溝の断面をみると、側溝の両側には拳大~人頭大の川原礫が組まれ、上面に巨石を乗せている。西片側は巨石が二段に積まれた所もあった。

側溝の確認面の標高は6.5~6.6mであり現地表面とほぼ同じである。石垣の基底部は標高5.8m前後である。

2 出土遺物 (第96図)

本調査区の出土遺物の詳細は表9に記述している。



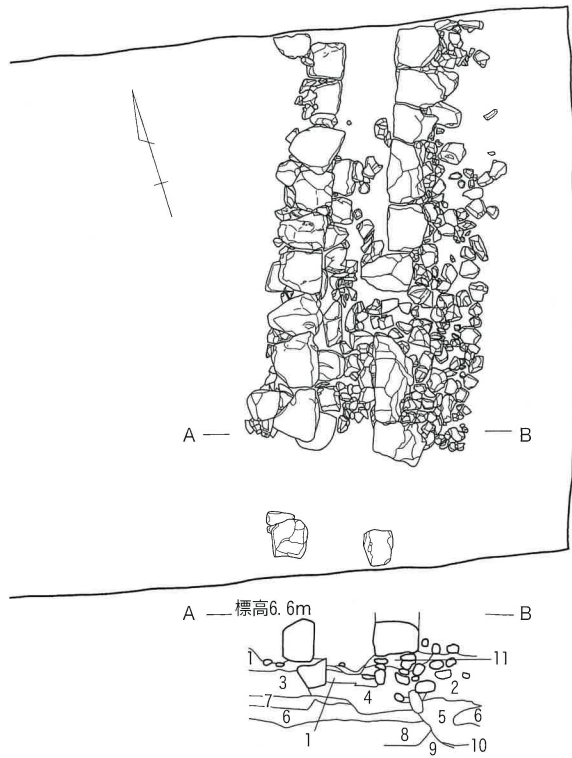
【25調査区南壁土層説明】

- 1 暗灰褐色土 (炭片や焼土粒を含む)
- 2 淡灰褐色土 (僅かに炭片や焼土粒を含む)
- 3 茶褐色土 (黄褐色のブロック混入)
- 4 灰褐色土 (黄褐色と淡赤褐色のブロック混入)
- 5 灰黄褐色土 (径2~3cm前後の淡赤褐色の石を含む)
- 6 淡黄褐色砂質土 (小石を含む)
- 7 淡赤褐色土 (小石を多量に含む)
- 8 淡黄褐色砂質土 (炭化物や礫の混入有り)
- 9 暗黄褐色砂質土 (暗黄褐色ブロックや礫の混入。鉄分の沈着)
- 10 黒褐色土 (厚さ7cmの炭化物層。焼土5面)
- 11 淡茶褐色土

第94図 25調査区遺構配置図 (1/120)

表9 25調査区出土遺物観察表

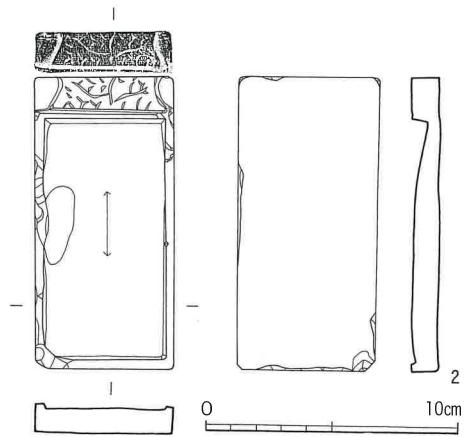
番号	遺構	出土土層	器種		大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
					口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
1	一括		磁器	染付碗	10	5.7	3.8		2/3 個体	肥前	型紙刷り	明治10年代
2	一括		視		長さ11.5	幅5.5	厚さ1	重さ150.1	完形			
3	一括		銭貨	寛永通寶		径2.4		重さ2.9g	完形		「ス」の古寛永	
4	一括		銭貨	寛永通寶		径2.5		重さ3.5g	完形		「ス」の古寛永	



第95図 25調査区遺構配置図 (1/60)



1



第96図 25調査区出土遺構実測図 (1/3、2/3)

写真9



1号溝出土状態 (南方向から)

第10節 26調査区

26調査区は長さ約19m、幅約5.3mの長方形を呈する。調査区の東端部と西端部には現代の側溝が確認できた。現宗近魚町線の下には道路に平行する側溝があると推量される。調査区の北壁に検出された礫の並びは側溝の石垣と見做される。地表面の標高は約8.8mである。

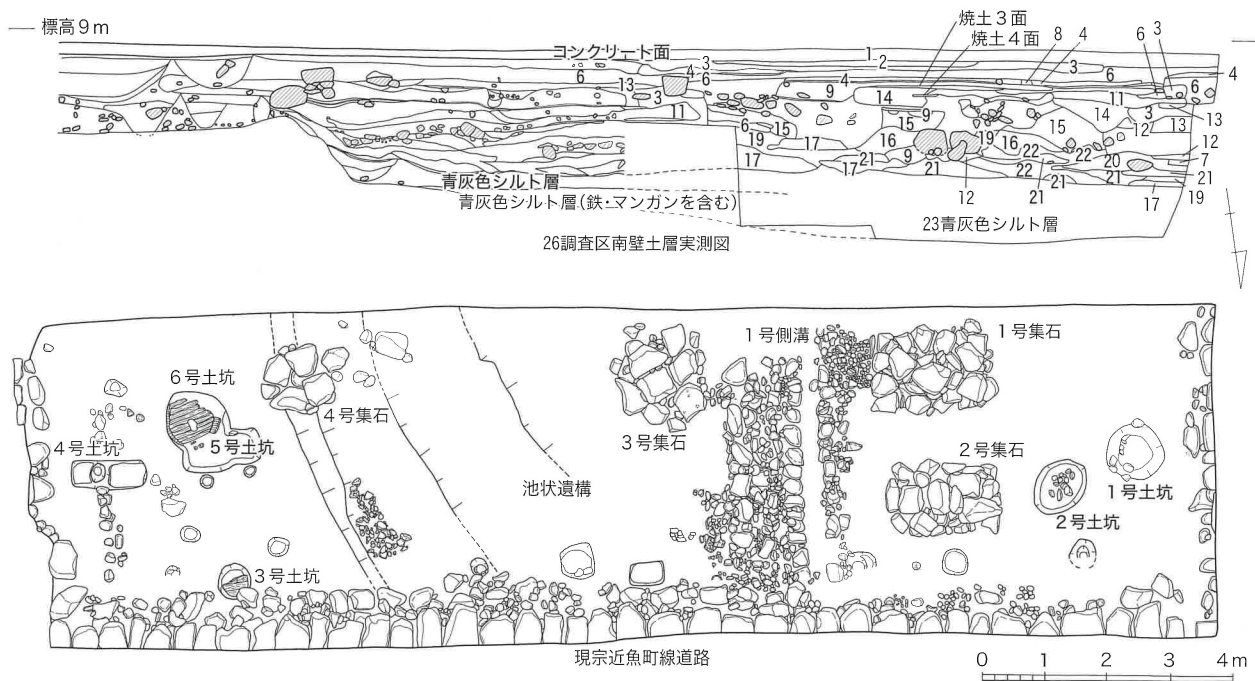
調査区で確認できた遺構としては、側溝、集石、土坑等であるが、調査区の東端から約4mの所から急に斜めの掘り込みの遺構があり、調査区全体に及んでいた。巨大な池状の遺構か何かの遺構であるが、遺構の北、西、南への展開は確認できてはいない。この中に遺存する遺構は、池状の遺構を埋め立てた後に構築されたものである。

26調査区の土層は、東端では地表面から約1.1~1.4m程度で地山となる。地山は調査区東端から西へ約5mの地点で地表から2.1mとなり、調査区西端で層序は地表から約3mとなる。地山の急激な変化は池状遺構に起因するものである。池状遺構内の土層は、深い部分で底から約1m程度に青灰色シルトが堆積しており、その上は人為的に埋められた黄褐色土の山土や礫の層が約1m以上も堆積していた。堆積土内には表土下約0.6~0.8mの地点で焼土3面~焼土4面と推量される焼土・炭化物層がパックされており、火災の痕跡が顕著に確認できた。これらの火災面は池状遺構の外まで確認できることから、焼土3面~焼土4面の頃には既に池状遺構は埋められていたことになる。

1 検出遺構 (第97~104図、写真10)

池状の遺構 (第97図)

26調査区の東端から西へ4mの地点で、池状遺構の掘り込みラインを確認している。池状の掘り込みは、標高7.7mの地山から斜めに掘り込まれたもので、底部は標高6.7mである。底部は徐々に深くなり標高5.9mの所まで



第97図 26調査区遺構配置図 (1/120)

【26調査区南壁土層説明】

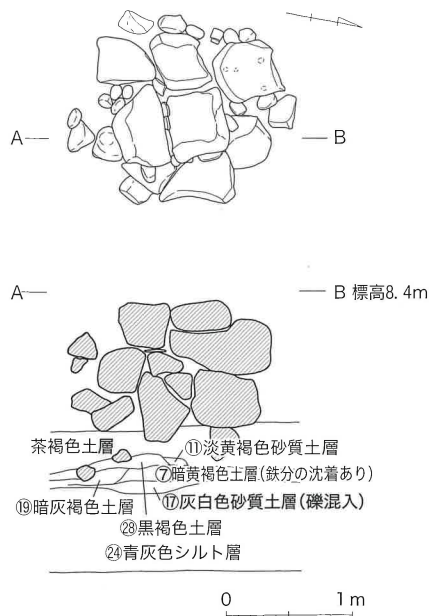
- | | |
|------------------------------|--|
| 1 コンクリート地表面 | 14 暗茶褐色砂質土 (炭片や礫を多く含む) |
| 2 明茶褐色砂質土 (部分的に炭片を含む) | 15 淡灰褐色土 |
| 3 茶褐色土 | 16 淡灰褐色土 (鉄分の沈着) |
| 4 淡黄褐色砂質土 (小石粒を含む) | 17 灰白色砂質土 (10cm前後の礫混入。灰褐色砂質土 (炭化物粒を含む。鉄分の沈着) |
| 5 暗黒褐色土 | 18 灰白色砂質土 (10cm前後の瓦片混入) |
| 6 暗茶褐色土 (径10cm前後の礫や瓦片を混入) | 19 暗灰褐色土 (黄褐色の岩が混入。鉄分の沈着) |
| 7 暗黄褐色土 | 20 暗灰黄褐色砂質土 |
| 8 灰白色砂質土 | 21 灰黄褐色砂質土 |
| 9 黄褐色砂質土 | 22 淡灰黄褐色砂質土 |
| 10 灰褐色粘質土 (炭化物粒を含む) | 23 青灰色シルト層 (小石粒を含む。鉄分の沈着) |
| 11 淡灰黄褐色砂質土 (径3~10cm前後の礫を混入) | 24 暗黒褐色土 (焼土3面) |
| 12 暗褐色土 (炭化物や礫の混入有り) | 25 暗黒褐色土 (焼土4面) |
| 13 茶褐色砂質土 (炭片や小さな礫を含む) | 26 暗黒褐色土 (焼土4面) |

確認できた。池状遺構の確認ラインは心持ち弧状を呈するが、遺構は調査区全体に及び、南方、北方、西方への展開は推測の域を超えるものである。池状遺構の中に位置する遺構は、これが人為的に埋められた後に構築されたものである。

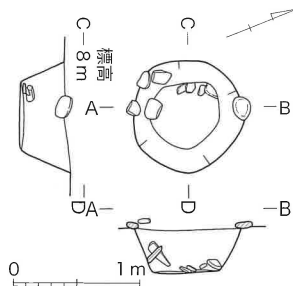
1号側溝 (第98図)

側溝は調査区の中央やや西に位置する。側溝は、現県道の宗近魚町線にほぼ直角に配置されている。側溝の全体幅は約2m前後、溝幅は約30cm程である。側溝の両側には人頭大の川原礫が配置され、周辺に拳大の礫を置き補強したものである。西片側の南端には一辺1.5mの方形の敷石面が遺存していた。東片側は側溝に沿って幅1.3m、長さ3.7mの範囲に拳大～人頭大の礫が敷き詰められていた。敷石の範囲の東側縁辺部には巨石を側溝と平行に配置していた。敷石内には焼け石を含み、瓦片や京焼風陶器碗を含んでいた。池状遺構の埋め戻し後の所産である。

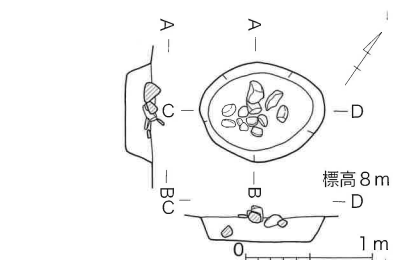
側溝の断面をみると、側溝の確認面の標高は7.85m、基底は7.6mであり、何段にも積まれてはいない。



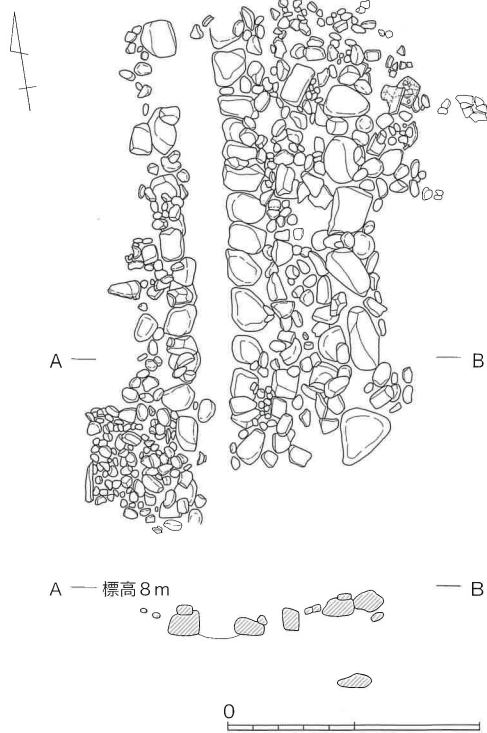
第99図 26調査区 3号集石実測図 (1/60)



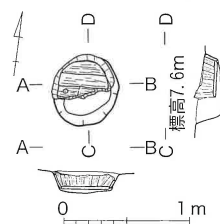
第100図 26調査区 1号土坑実測図 (1/60)



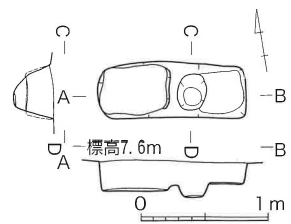
第101図 26調査区 2号土坑実測図 (1/60)



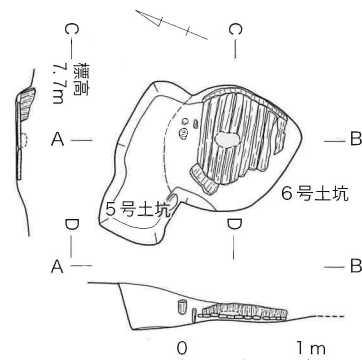
第98図 26調査区 1号側溝実測図 (1/60)



第102図 26調査区 3号土坑実測図 (1/60)



第103図 26調査区 4号土坑実測図 (1/60)



第104図 26調査区 5号、6号土坑実測図 (1/60)

1号、2号集石（第97図）

調査区の西側に位置する集石遺構である。1号、2号集石は平面形態や大きさ、遺存位置等から一対として機能したものとも推察できる。1号集石は長方形を呈し、長軸2m、短軸1.4mで、確認面から基底部までは1.5mである。2号集石は長方形を呈し、長軸1.9m、短軸1.2mで、確認面から基底部までは1号集石と同じである。集石は巨大な凝灰岩と川原礫が組まれており、建物の礎石の様相を呈する。確認面の標高は約8.5mであり、基底部は7mである。青灰色シルト層の直上の埋め土にまで達していた。池状遺構の埋め戻し後の所産である。

3号集石（第99図）

調査区の中央部南壁に沿って位置する集石である。平面形は長方形を呈し、長軸1.8m、短軸1.5mで、確認面から基底部までは1.3mである。集石は巨大な凝灰岩と川原礫が組まれており、建物の礎石の様相を呈する。確認面の標高は8.3mであり、基底部は7.2～7mである。青灰色シルト層の直上の埋め土にまで達していた。池状遺構の埋め戻し後の所産である。

4号集石（第97図）

4号集石は調査区の東端付近の池状遺構の縁に位置している。平面形は楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.2mで、確認面から基底部までは0.7mである。集石は巨大な凝灰岩と川原礫が組まれており、建物の礎石の様相を呈する。確認面の標高は約8.5mであり、基底部は約7.8mである。池状遺構の埋め戻し後の所産である。

1号土坑（第100図）

調査区の西端に位置する円形土坑である。平面の直径は0.9mを呈する。確認面から底部までは約0.4mの深さである。底部に幾つかの川原礫が遺品している。確認面の標高は約7.9mである。池状遺構の埋め戻し後の所産である。

2号土坑（第101図）

調査区の西端に位置する楕円形土坑である。平面の長径は1m、短径は0.8mを呈する。確認面から底部までは約0.2mの深さである。中央上部に幾つかの川原礫が遺品している。確認面の標高は約7.9mである。池状遺構の埋め戻し後の所産である。

3号土坑（第102図）

調査区の東端の北壁付近に位置する円形土坑である。平面の直径は約0.55mを呈する。確認面から底部までは約20cmの深さである。土坑内には桶の底部片が半分程度遺品している。確認面の標高は約7.4mである。

4号土坑（第103図）

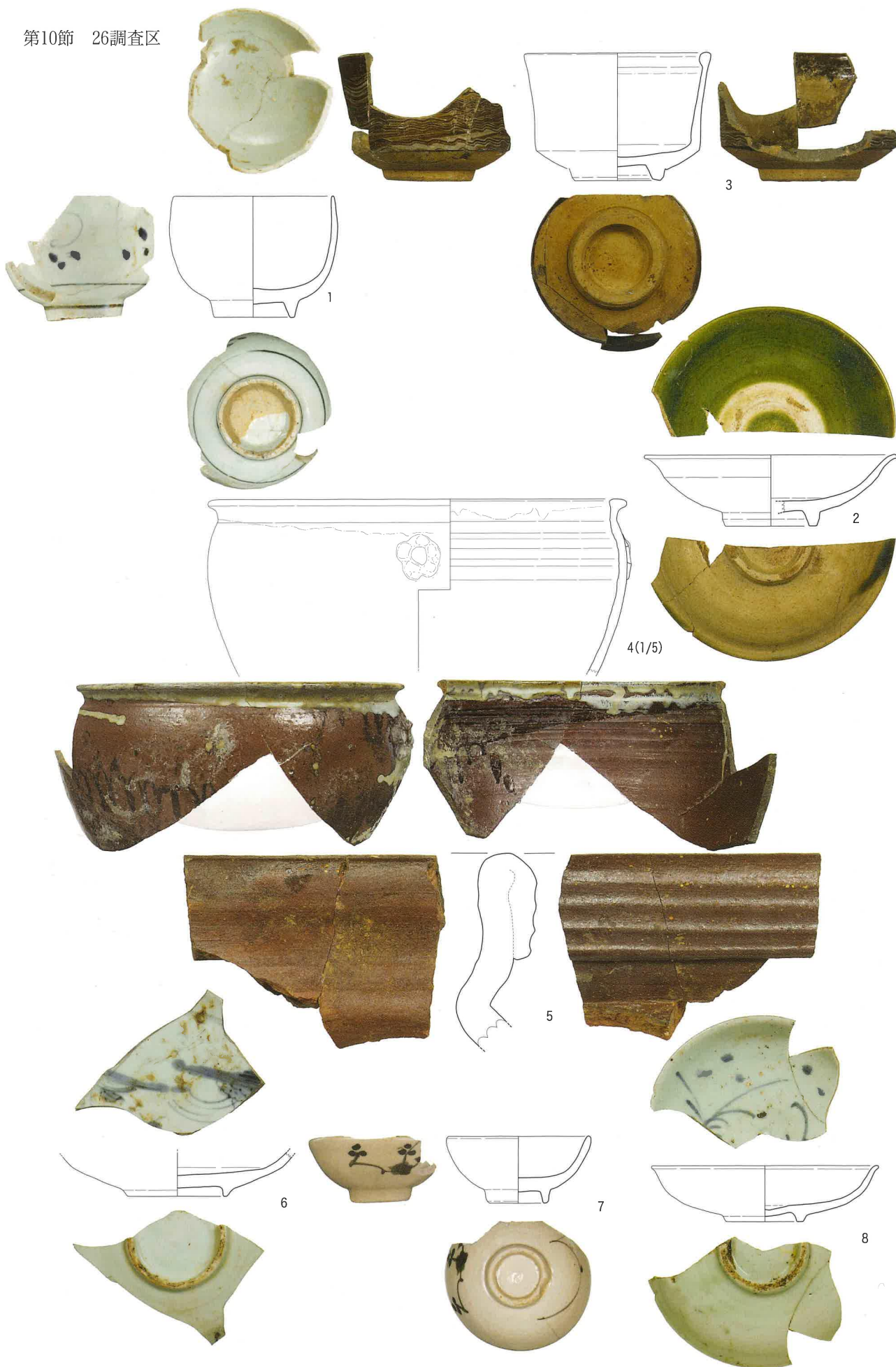
調査区の東端に位置する長方形土坑である。平面の長軸は約1.2m、短軸は0.45mを呈する。確認面から底部までは約0.25～0.3mの深さである。確認面の標高は約7.5mである。

5号、6号土坑（第104図）

調査区の東端に位置する長方形土坑と円形土坑である。5号土坑は長方形を呈し、長軸は約1.3m、短軸は0.55～0.6mを呈する。確認面から底部までは約0.37mの深さである。確認面の標高は約7.55mで底部の標高は7.2mである。6号土坑は直径約1mの円形であり、中に桶の底部が遺存していた。底部の標高は7.25mである。

2 出土遺物（第105図～第110図）

本調査区の出土遺物の詳細は表10に記述している。



第105図 26調査区出土遺物 (1/3)

※4は1/5



第106図 26調査区出土遺物 (1/3)

※14は1/5



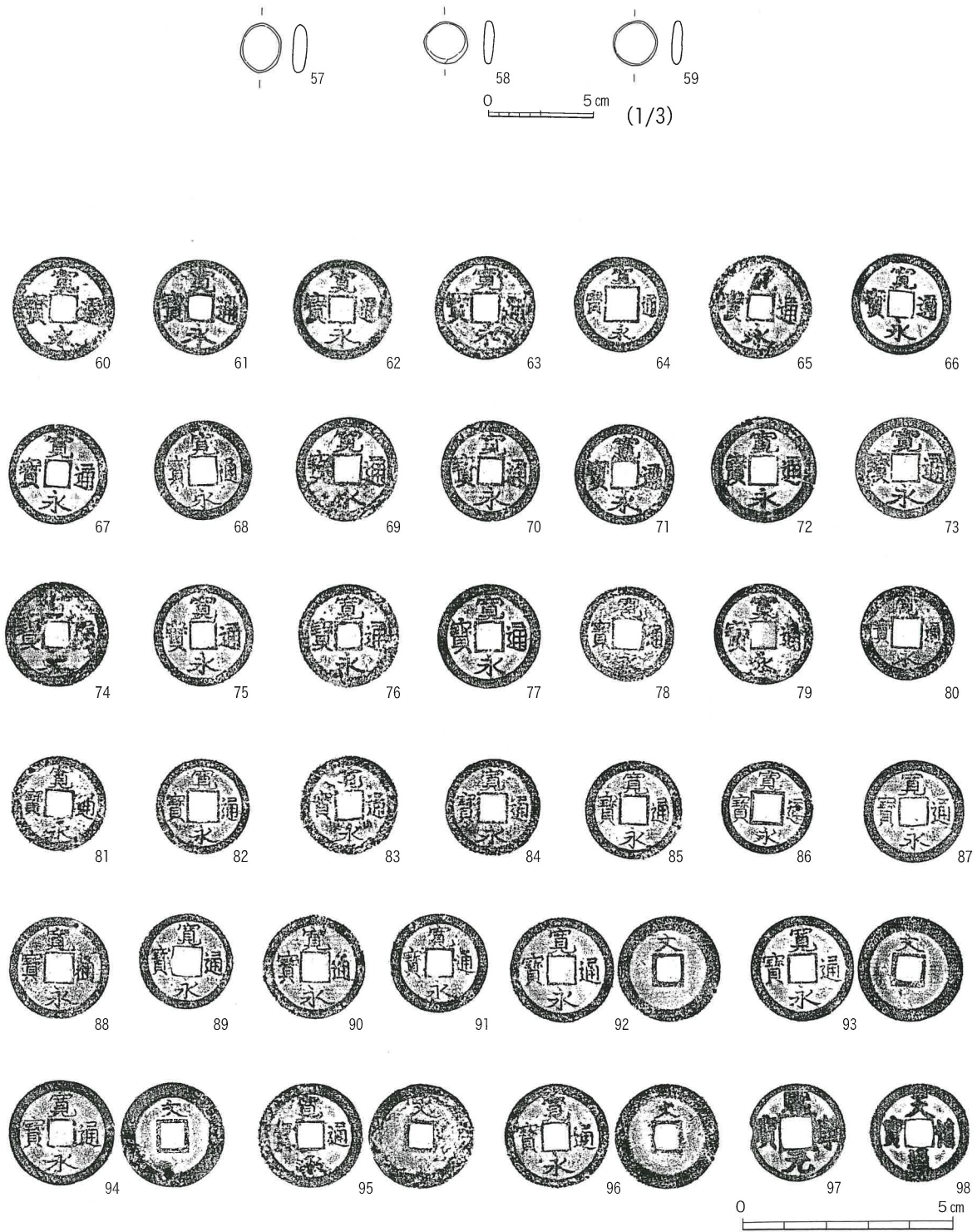
第107図 26調査区出土遺物 (1/3)



第108図 26調査区出土遺物 (1/3)



第109図 26調査区出土遺物 (1/3)



第110図 26調査区出土遺物 (2/3)

第10節 26調査区

表10 26調査区出土遺物観察表

番号	遺構	出土土層	器種		大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
					口径他	器高他	底径他	胴部最大径他				
1	一括		磁器	染付碗	9	6.8	4.5	9.6	2/3 個体	肥前	内面露胎	1630～1650年
2	一括		陶器	皿	14.4	4	5.2		1/2 個体	肥前	見込蛇目釉剥銅緑釉・嬉野内/山窯	1690～1740年
3	一括		陶器	香炉・灰落し	10.6	7.1	4.9		1/3 個体	肥前	外刷毛目	1690～1740年
4	一括		陶器	甕	39				口縁の1/5	?	花卉状貼り付け文	?
5	一括		陶器	大甕					破片	備前	凹線文	16世紀末
6	一括		磁器	染付皿			5.6		底部の2/3	肥前	高台砂付着	1630～1650年
7	一括		磁器	碗	8	3.7	3.4		4/5 個体	?		18世紀後半
8	一括		磁器	染付皿	12.8	3.1	4.4		1/3 個体	肥前	高台砂付着	1630～1650年
9	一括		磁器	小杯	6.8	4.4	2.8		2/3 個体	肥前	外反口縁	?
10	一括		磁器	染付碗	8.5	4.4	2.9		1/3 個体	肥前		17世紀末～19世紀前半
11	一括		磁器	染付碗	10	4.6	4		3/4 個体	肥前		18世紀後半
12	一括		磁器	小杯	5.5	4.3	2		3/4 個体	肥前	白磁	1630～1650年
13	一括		陶器	播鉢					口縁の1/10	?		18世紀～19世紀前半
14	一括		陶器	甕	19.6				口縁の1/10	?	肥厚口縁	?
15	一括		磁器	染付碗	10.8	6.1	4.4		略完形	肥前	大明年製くずれ	18世紀後半
16	一括		磁器	染付碗	13.7	5.7	6		1/4 個体	肥前	大明製化年製	17世紀後半
17	一括		磁器	皿	12.8	3.5	4.4		3/4 個体	肥前	見込蛇目釉剥	17世紀後半～18世紀前半
18	一括		磁器	皿	4.9、3.1	0.8	1.6		2/3 個体	肥前	白磁、型打整形	明治以降・近代、色絵を溶かす物
19	1号溝		磁器	瓶	2.2				口縁完形	肥前		18世紀
20	No.2		陶器	碗	12	7.8	4.6		2/3 個体	肥前	銅緑釉、透明釉	17世紀後半～18世紀前半
21		暗赤褐色砂質土層	陶器	碗	11	7.2	5.3		2/3 個体	肥前	内外透明釉	17世紀後半～18世紀前半
22		暗赤褐色砂質土層	陶器	碗	11.8	7.3	5.2		2/3 個体	肥前	内外鉄釉	1630～1650年
23		暗赤褐色砂質土層	磁器	染付碗	8.6	6.1	5.5		2/3 個体	肥前		17世紀後半
24	1号土坑		陶器	碗	11.8				1/5 個体	肥前		
25	1号土坑		土師器	皿	9.6	2	5.8		1/2 個体		回転糸切、ロクロ調整	
26	2号土坑		土師器	皿			6.6		破片		回転糸切、ロクロ調整	
27	一括		陶器	碗			4.6		1/3 個体	肥前		
28	一括		磁器	瓶			7.6		底部の2/3	肥前		
29	一括		染付	皿					破片	肥前		
30	一括		陶器	碗			4.6		底部	肥前		
31	一括		染付	皿	13.4	3.2	6.4		1/5 個体	肥前		
32	一括		磁器	?	15.2				1/3 個体	肥前		
33	一括		瓦器	瓦器	30.8				破片		ロクロ調整、内外指頭痕	
34	一括		瓦	軒丸瓦		14.4		厚さ3.4	破片		巴文	
35	一括		土師器	皿	9.6	1.7	7.7		略完形		回転糸切後板状圧痕	
36	一括		土師器	燈明皿	9.9	2.2	5.1		1/3 個体		煤付着、回転糸切	
37	一括		土師質	土師質	31.5				破片		ロクロ調整	
38	一括		土師器	皿	7.2	1.8			略完形		手づくね	
39	一括		土師器	皿	10.4	1.6	7.7		1/2 個体			
40	一括		陶器	円盤加工品		0.5			略完形	?		
41		最下層	染付	碗					破片	肥前		
42	2号土坑		煙管	吸口	残存長6	幅1	吸口径0.4	重さ3g	破片			
43		暗茶褐色砂層	煙管	雁首	長さ7.2	幅1.4	火皿径1.9	重さ11.4g	破片			
44		暗茶褐色砂層	煙管	吸口	残存長4.8	幅1	吸口径0.4	重さ3.4g	破片			
45	一括		煙管	雁首	長さ3.7	幅0.8	火皿径1.7	重さ5.8g	破片			
46	一括		煙管	吸口	残存長5.6	幅1	吸口径0.4	重さ4.7g	破片			
47	一括		煙管	雁首	長さ8.7	幅1.2	火皿径1.9	重さ11.1g	破片			
48	一括		煙管	吸口	残存長6.2	幅1	吸口径0.5	重さ5.9g	破片			
49	一括		煙管	吸口	残存長6.7	幅1	吸口径0.5	重さ6g	破片			

第3章 調査の成果

番号	遺構	出土土層	器種		大きさ (cm)				残存度	推定産地	特徴	時期
					口径他	器高他	底径他	胴器最大径他				
50	一括		煙管	吸口	残存長 4.2	幅 1	吸口径 0.4	重さ 2.7g	破片			
51	一括		煙管	雁首	長さ 6.9	幅 1	火皿径 1.6	重さ 7.4g	破片			
52	一括		カンザシ	カンザシ	長さ 25.6	幅 0.9	厚さ 0.2	重さ 11.4g	完形			
53	一括		銅製品	銅製品	長さ 1.9	幅 1	厚さ 0.7	重さ 1.1g	破片			
54	一括		銅製品	切羽	長さ 4.4	幅 2.7	厚さ 0.5	重さ 12.2g	破片			
55	一括		銅製品	銅製品	長さ 3	幅 1.7	厚さ 0.1	重さ 2.3g	破片			
56	一括		銅製品	銅製品	長さ 5.9	幅 2	厚さ 0.4	重さ 3.7g	破片			
57	一括		基石		長さ 2.4	幅 2	厚さ 0.7	重さ 3.9g	完形			
58	一括		基石		長さ 2.1	幅 2.1	厚さ 0.5	重さ 3g	完形			
59	一括		基石		長さ 2	幅 2	厚さ 0.4	重さ 2g	完形			
60	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 4.9g	完形		「ス」の古寛永	
61	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.3		重さ 3.1g	完形		「ス」の古寛永	
62	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.4		重さ 3.6g	完形		「ス」の古寛永	
63	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.8g	完形		「ス」の古寛永	
64	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.2		重さ 2.5g	完形		「ス」の古寛永	
65	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.2g	完形		「ス」の古寛永	
66	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3g	完形		「ス」の古寛永	
67	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.4		重さ 3.9g	完形		「ス」の古寛永	
68	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.4		重さ 2.7g	完形		「ス」の古寛永	
69	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.9g	完形		「ス」の古寛永	
70	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.4		重さ 3.7g	完形		「ス」の古寛永	
71	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.4		重さ 3.5g	完形		「ス」の古寛永	
72	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 4g	完形		「ス」の古寛永	
73	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.4g	完形		「ス」の古寛永	
74	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 2.9g	完形		「ス」の古寛永	
75	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 2.9g	完形		「ス」の古寛永	
76	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.4g	完形		「ス」の古寛永	
77	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.5g	完形		「ス」の古寛永	
78	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.3		重さ 2.7g	完形		「ス」の古寛永	
79	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.4		重さ 4.1g	完形		「ス」の古寛永	
80	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.3		重さ 2.6g	完形		「ス」の古寛永	
81	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.3		重さ 3g	完形		「ハ」の新寛永	
82	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.3		重さ 2.3g	完形		「ハ」の新寛永	
83	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.4		重さ 2.6g	完形		「ハ」の新寛永	
84	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.3		重さ 2.6g	完形		「ハ」の新寛永	
85	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.4		重さ 3g	完形		「ハ」の新寛永	
86	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.2		重さ 2.3g	完形		「ハ」の新寛永	
87	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.6g	完形		「ハ」の新寛永	
88	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.6g	完形		「ハ」の新寛永	
89	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.3		重さ 2.8g	完形		「ハ」の新寛永	
90	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 2.8g	完形		「ハ」の新寛永	
91	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.4		重さ 2.8g	完形		「ハ」の新寛永	
92	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.5g	完形		「ハ」の新寛永、裏面「文」	
93	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.4g	完形		「ハ」の新寛永、裏面「文」	
94	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 2.8g	完形		「ハ」の新寛永、裏面「文」	
95	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.2g	完形		「ハ」の新寛永、裏面「文」	
96	一括		銭貨	寛永通寶		径 2.5		重さ 3.3g	完形		「ハ」の新寛永、裏面「文」	
97	一括		銭貨	熙寧元寶		径 2.3		重さ 3g	完形			
98	一括		銭貨	天〇通寶		径 2.4		重さ 2.7g	完形			



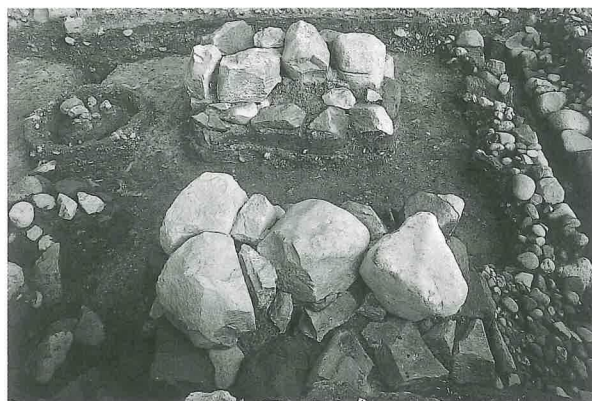
26調査区全景（西方向から）



調査区全景（東方向から）



1号側溝（北方向から）



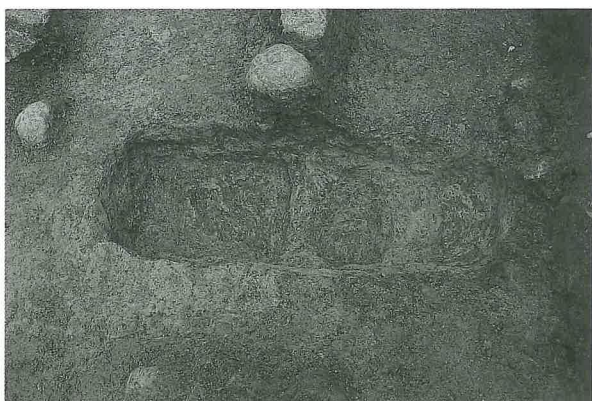
1号集石（下）、2号集石（上）（南方向から）



池状遺構・南壁土層面（北方向から）



池状遺構・北壁土層面（南方向から）



4号土坑（南方向から）



6号土坑（南方向から）

第11節 27調査区

1 調査の概要 (第111図、写真11)

27調査区は谷町の酢屋・志保屋坂と町屋の道路との交差点に接する南東地区にあたる。文化12年の町屋敷絵図上ではこの交差点から東へ3筆分が調査対象地であった。3筆すべてが志保屋長右エ門の屋敷にあたる。西部の屋敷については、水路や埋設物等への影響を考慮して西半部を調査対象地から除外した。溝2は最も西の志保屋長右エ門屋敷と中央の屋敷との境、溝4は中央の志保屋長右エ門屋敷と東の屋敷との境を区画する溝と推定される。調査対象地は現道の南縁が側溝と重なり、調査範囲はその内側となったため、町屋敷の間口部分は調査できていない。また、南側の水路と接する町屋最奥部は調査範囲外であったため、南限界の状況は把握できていない。調査の結果、溝や建物基礎部分の一部などを確認した。特に溝は石組みを伴う排水溝であり、区画を示す。出土遺物としては、主に17世紀初頭頃から19世紀間の陶磁器類や銭貨、キセルなどがある。

2 基本層序 (第112、113図)

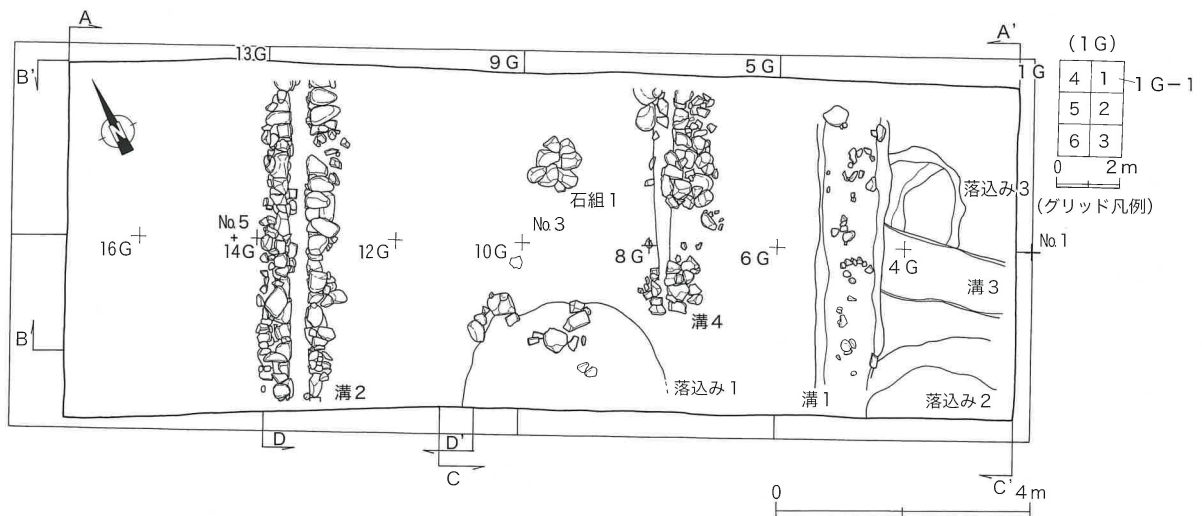
土層の堆積状態は、現道路面から谷の自然堆積土（シルト層）まで約1.5m、地山礫層まで約2mで達するが、シルト上層の堆積土は火災痕跡と造成土を交互に積み重ねた人為的な整地を示していた。焼土面は各時期の生活面といえるものであり、6面を確認した。

西辺の土層断面B-B'（第113図）では、1～92層を観察できた。上層から1～4層が現在の造成土である。焼土面（生活面）は上から1面から6面までを確認した。生活面は焼土・炭化物主体層の上に、主に地山の混礫黄褐色土を用いた整地層の上面である。この1面（5層）は最後の焼土面で北端部にわずかに残る。2面（11層）は北端部で被熱赤変しているが、以南では黒変硬化する。3面（13層上面）は、2面のほぼ直下にあり連続的に確認できる。4面（20層）は、被熱黒変しており、その下に整地層（礫・砂利層）が0.3m堆積する。5面（90層）は被熱上面から赤色、黒色、黒赤褐色と被熱の状況が観察できた。整地層は29層である。

北辺の土層断面A-A'（第112図）では、東半部は4面及び21層を掘り下げる大きな造成が確認できる。

南辺の土層断面C-C'（第112図）では、中央部から東部にかけて複数の掘込み、造成の痕跡がみられる。

各面・各層の時期は、5面が直上の23層出土遺物から17世紀中頃、6面は直上の89層出土遺物から17世紀前半と考えられる。また、6面下の91・92層から1600年前後の陶磁器類が出土している。また、22区の焼土面との対応関係は、4面が22区3面、5面が22区4面、6面が22区5面に相当するものと考えられる。



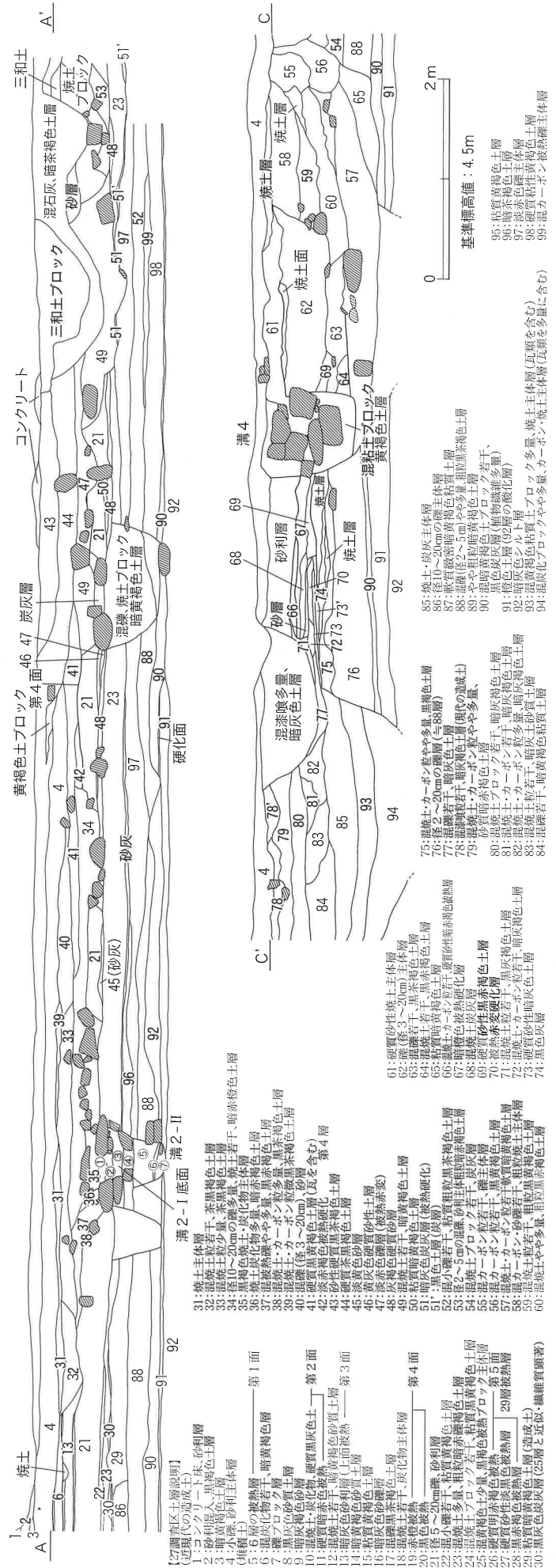
第111図 27調査区遺構配置図 (1/120)

3 検出遺構 (第111、114、115図)

溝1 (第114図) は、調査区東部の4Gと6G間に位置する。南北に延びる溝である。主軸方向は北62度東を指向するが、町屋の街路に対して直交する。確認面での規模は長さ約5m、幅1m~1.5m、底面幅0.7m~0.9m、深さ0.15m程度である。北辺の土層断面では、49層及び5面を切って構築されていた。溝内には径0.1m~0.4m程度の礫が若干堆積していた。

溝2 (第115図) は、調査区西部の12Gと14G間に位置する。街路に対して直交する石組の溝である。新旧2条の溝 (2-I・II) が上下に確認できた。溝2-I (新) は、埋没後その上に2・3面が形成されており、3面以前に構築されたこととなる。検出面での規模は長さ5.3m、幅0.25m、深さ0.5m程度である。北辺の土層断面A-A'では、49層及び5面を切って構築されていた。石組は内面に向けて面を揃えた状態で検出された。石材はほとんど加工されていない川原石が用いられていた。石組の積み方は、0.3m~0.4mの川原石を2~3段積み、その空隙に0.1m~0.2mの円礫を充填する手法が採られていた。川原石は平坦面を内側に向けているが、長楕円形のものには細い方を外にやや下向きに傾斜させ据えていた。裏込めには小礫が用いられていた。溝2-Iの時期は溝底面から出土した陶磁器類が17世紀前半代であり、これ以降の構築であることを示しており、上下の堆積土出土遺物の時期とも整合する。

溝2-II (旧) は5面下に構築されていた。検出面での規模は長さ約5m、幅0.2m、深さ0.4m程度である。北辺の土層断面A-A'では、97層以降、5面以前に構築されていた。石組は面を揃えた状態で検出され、石材に川原石が用いられていた。石積は1段が残り、西側の石列は南北両端付近を欠くが、径0.1m~0.2mの礫が1列、東側の石列は径0.3mの礫が1列残っていた。石組は完存しておらず、石材が取り去られた状態であった。残存する石組は表面が被熱していた。また、西側石列の外側に径2cmの杭列が1列確認できた。石組以前の施設と思われるが、明確でない。



第112図 27調査区北辺A-A' 土層断面図 (1/60)

このように溝2は新旧があってもほぼ同一位置が維持されており、境界施設を示すものといえよう。

溝3（第114図）は、調査区東辺から北西方向に延び溝で、主軸方向は北50度西を指向し、町屋の街路に対しては斜行する。西端部は溝1付近で消失する。確認面での規模は検出長2m、幅約1m、深さ0.2m程度である。現在の造成土下で検出したものであり、近世末から近代に構築されたものと想定される。

溝4（第111図）調査区東部の4Gと6G間に位置する。南北に延びる溝である。主軸方向は北60度東を指向するが、町屋の街路に対して直交する。石組をもつが遺存状態はよくない。確認面での規模は長さ3.5m、幅は底面で0.2m～0.3mである。北辺の土層断面では、2・3面以降の構築と考えられる。石組は径0.2m～0.4m程度の礫が東辺に残っていた。

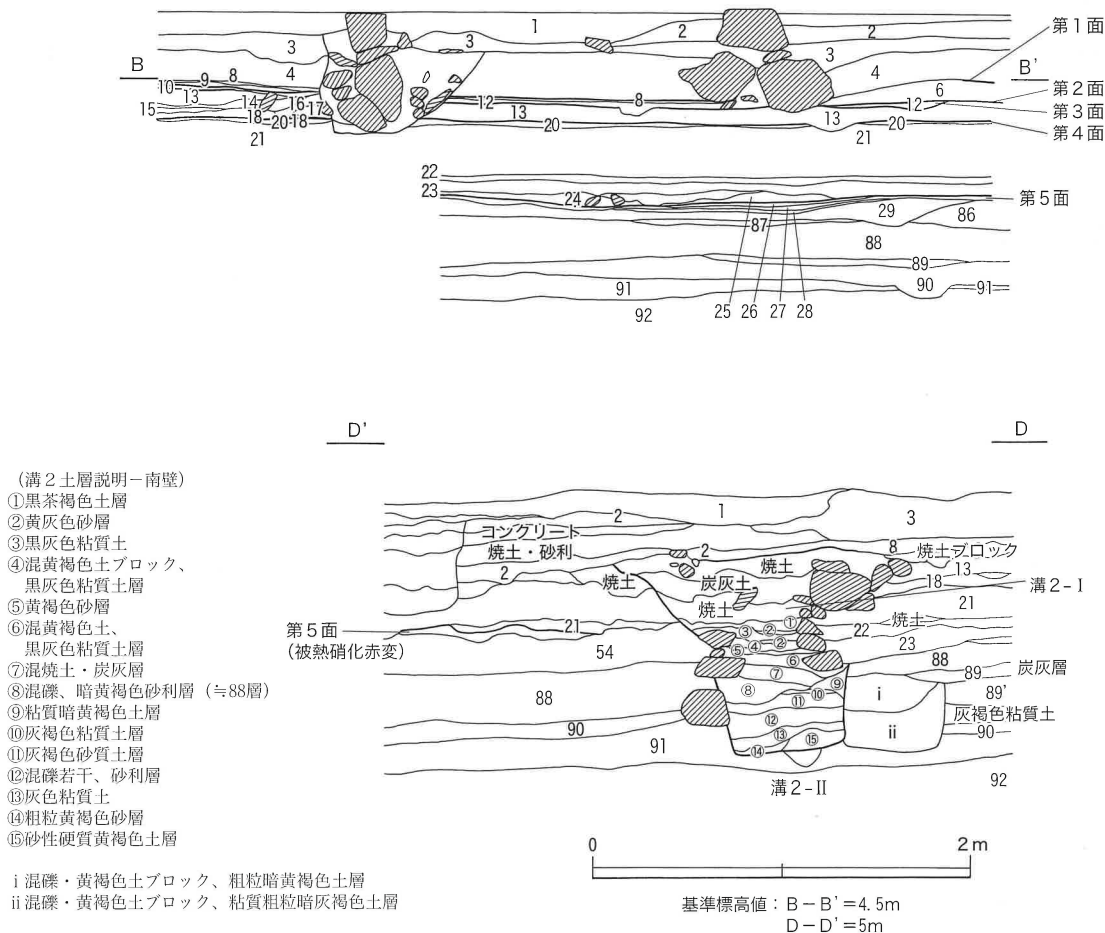
このように、街路から直交して南部の谷川へと延びる溝は排水溝と境界施設の機能をもつ。

落込み1（第111図）は調査区南辺中央で検出した。土層断面C-C'でみるように、現在の造成土下に構築されたものである。幅4.5m、深さ1m以上の規模をもち近世末から近代にかけて造成されたものと想定される。検出面では円形の範囲を確認した。

落込み2（第114図）は調査区南東隅に検出した。土層断面C-C'では、5面以前の構築と考えられる。径3m、深さ1m以上である。

落込み3（第114図）は調査区東辺付近に位置する。溝1・3に切られており、全体の形状は不明であるが、径2m、深さ0.5m程度と想定される。堆積土には焼土、炭化材を多く含んでおり、落込み2と同様に「焼土整理坑」（註1）と考えられる。

註1：「焼土整理坑」（『日本橋一丁目遺跡』日本橋一丁目遺跡調査会他、2003）



第113図 27調査区西辺B-B'、南辺D-D' 土層断面図 (1/40)

石組1（第111図）は調査区中央部の7G-5に位置する。0.3m~0.4m程度の川原石7個を配している。深さ0.15mの掘り込みをもち建物基礎の一部と思われる。

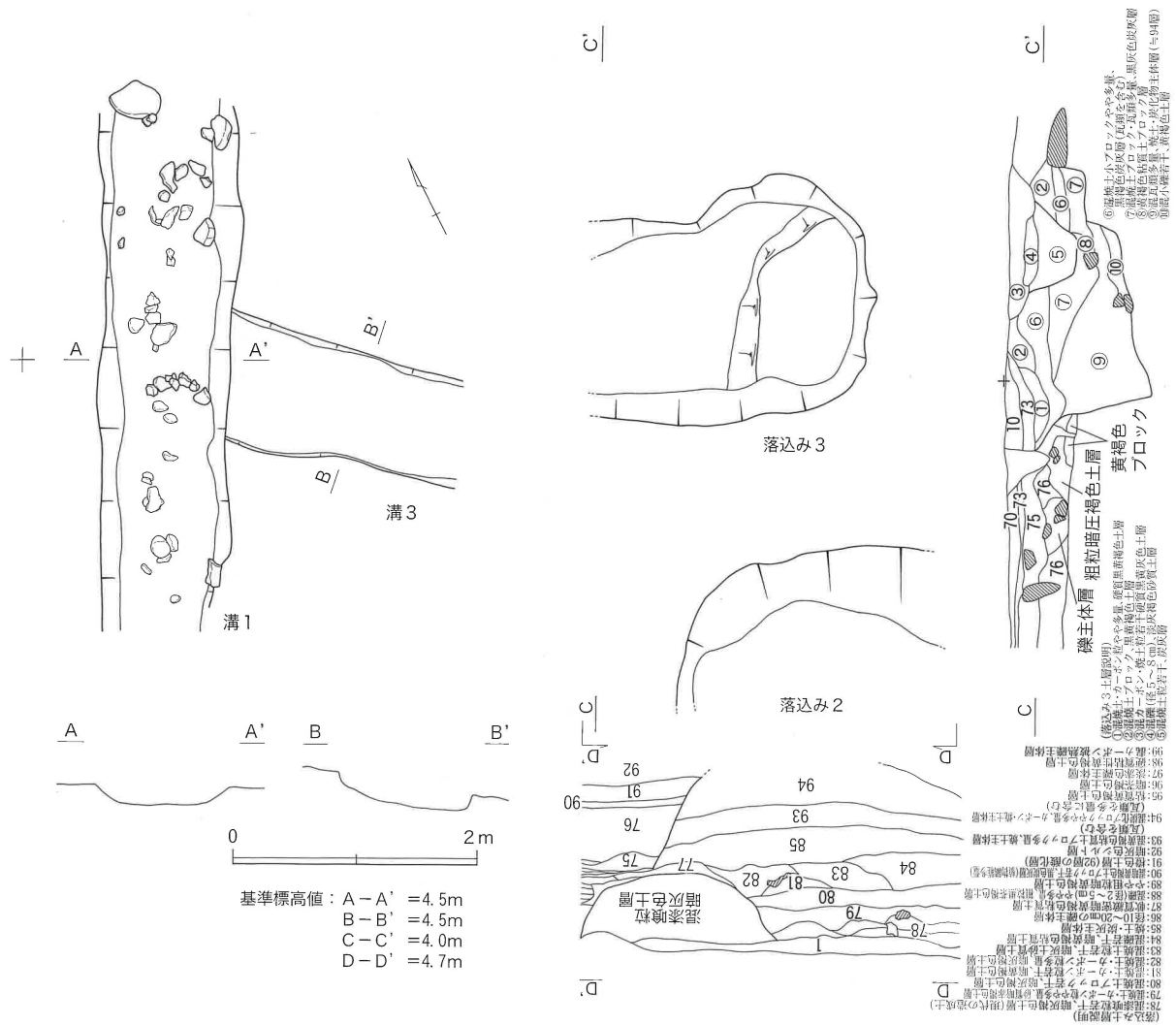
4 出土遺物（第116~128図、表11・12）

27調査区から出土した遺物はコンテナ50箱と多量であった。このうち磁器45点、陶器61点、土師質土器14点、金属製品他21点、瓦類9点、銭貨76点の計226点を図示した。

陶磁器類（第116~122・125図、表11）

溝2（2-1）では磁器小杯・碗・皿・鉢、陶器碗・皿などが出土した。陶器皿8、11、12は1600年~1630年の製作年代であるが、他の陶磁器類は1630年~1650年を示している。溝4では15の17世紀末~18世紀前半と考えられる「大明成化年製」銘の染付が出土している。

各層の出土陶磁器類は、5面直上の23層中に染付小杯・皿、陶器では鉢などがみられた。特徴的なものとして、38は伊賀（伊賀・美濃）の花入で17世紀初頭の貴重な例といえる。133はベトナム産の焼締陶器長胴瓶上半部である。この5面の時期は、出土陶磁器が1630年~1650年代を示しており、ほぼ17世紀中頃といえよう。6面をなす90層から1600年~1630年代の染付碗・皿、青磁皿、陶器鉢・皿が出土している。特に71は岸岳系陶器皿で藁灰釉を施し、1580年~1600年と古い時期を示している。直上の89層からは17世紀前半の染付が出土している。6面は17世紀前半の時期といえよう。造成面もしくは生活面よりも下層となるシルト上層から1600年~1630年代の陶器が出土している。



第114図 27調査区溝1・3、落込み2・3実測図（1/60）

土師質皿（第126図、表11）

溝2、23層・29層、88層、90層などから出土した15点を図示した。口径8.2cm～14.4cm、器高1.1cm～2.7cm、底径5.7cm～8.8cmの大きさである。

瓦類（第124図、表11）

落込み2・3などから出土した軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、棧瓦を図示した。軒丸瓦の瓦当文様は巴文である。

物差し（第123図108、表11）

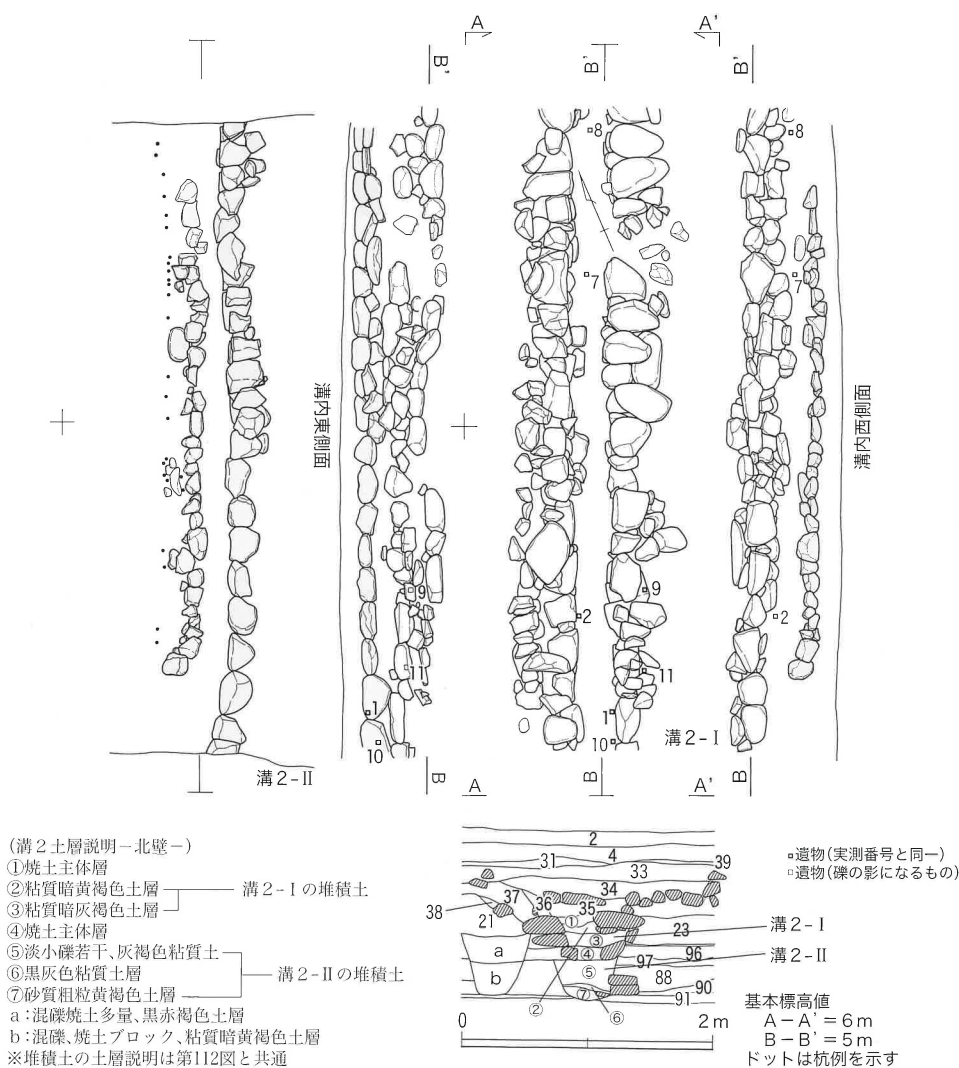
骨角製で約7cmが残る。1目盛3mmを刻んでいる。

金属製品（第123図88～107、表11）

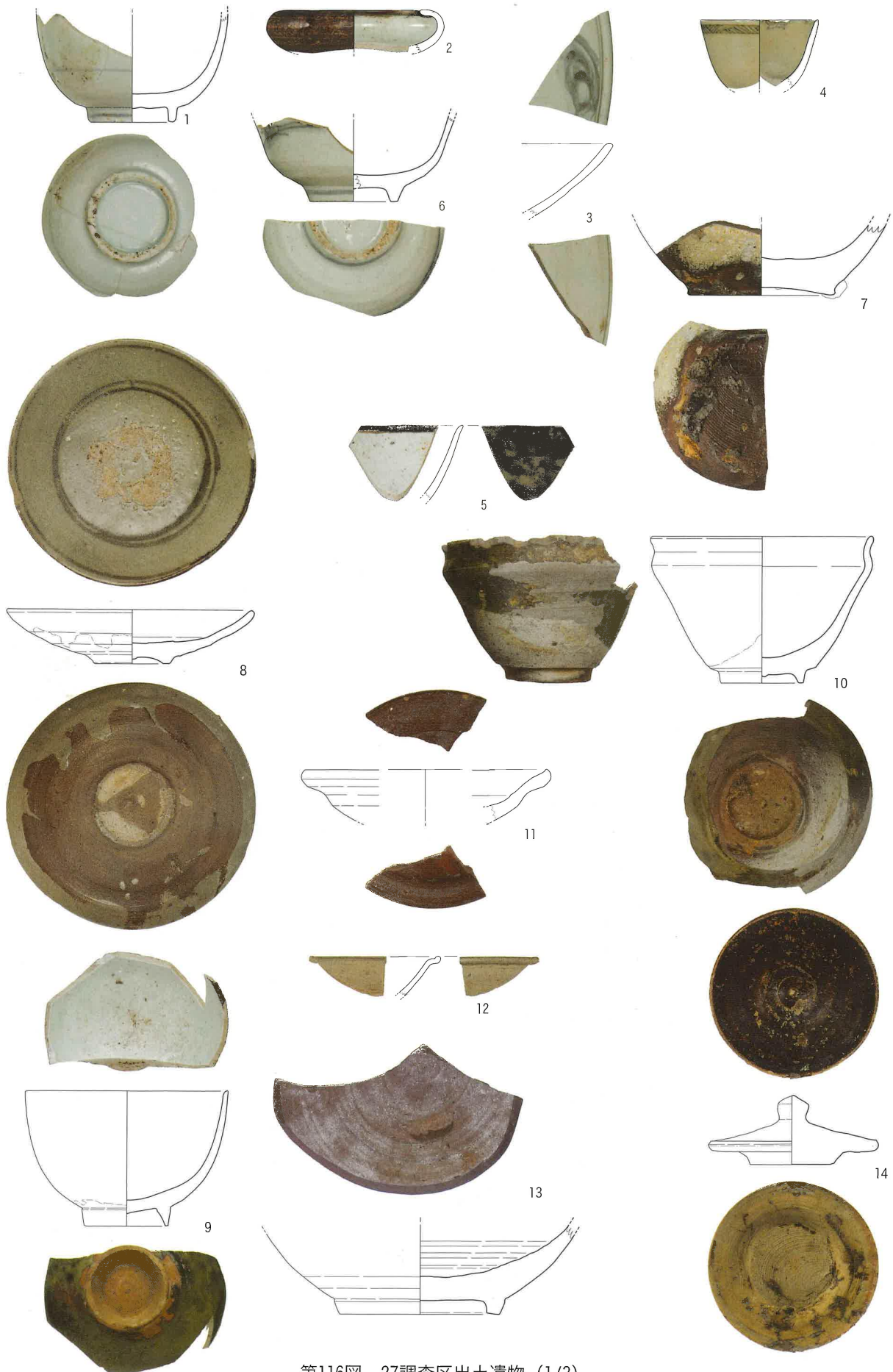
煙管の吸口、雁首10点、毛抜き、小柄4点、小型の鍵などが出土した。

銭貨（第127・128図、表12）

「古寛永銭」61点、「新寛永銭」6点、新旧不明の「寛永通寶」2点の他、中国銭「皇宋通寶」・「紹聖通寶」・「元豊通寶」・「元祐通寶」などが7点、計76点の拓影を掲載した。



第115図 27調査区溝2（I・II）実測図（1/60）



第116図 27調査区出土遺物 (1/3)



第117図 27調査区出土遺物 (1/3)

第11節 27調査区



第118図 27調査区出土遺物 (1/3) ※38は1/4



第119図 27調査区出土遺物 (1/3)

第11節 27調査区



第120図 27調査区出土遺物 (1/3)

※56は1/4



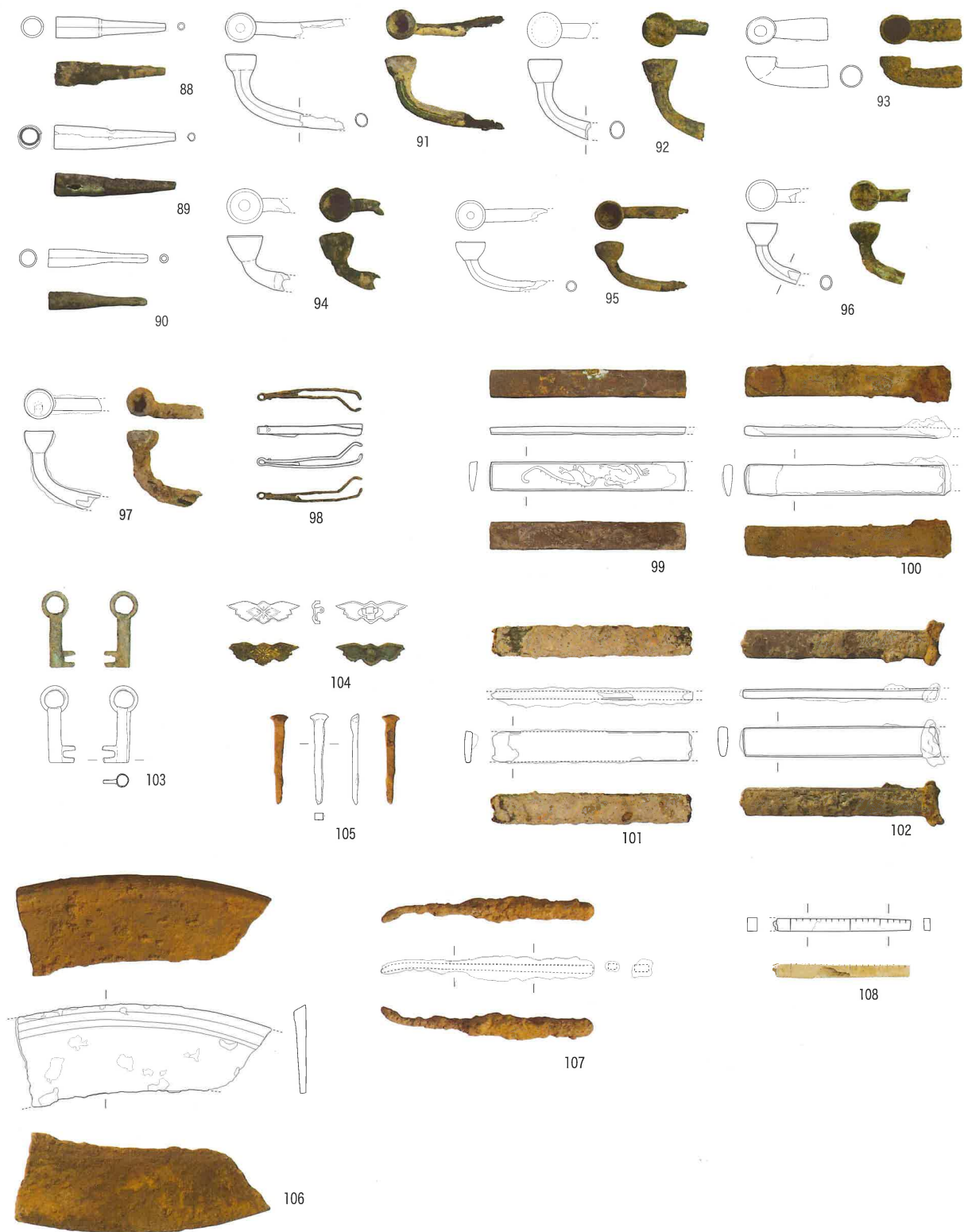
第121図 27調査区出土遺物 (1/3)

※67・77は1/4

77 (1/4)



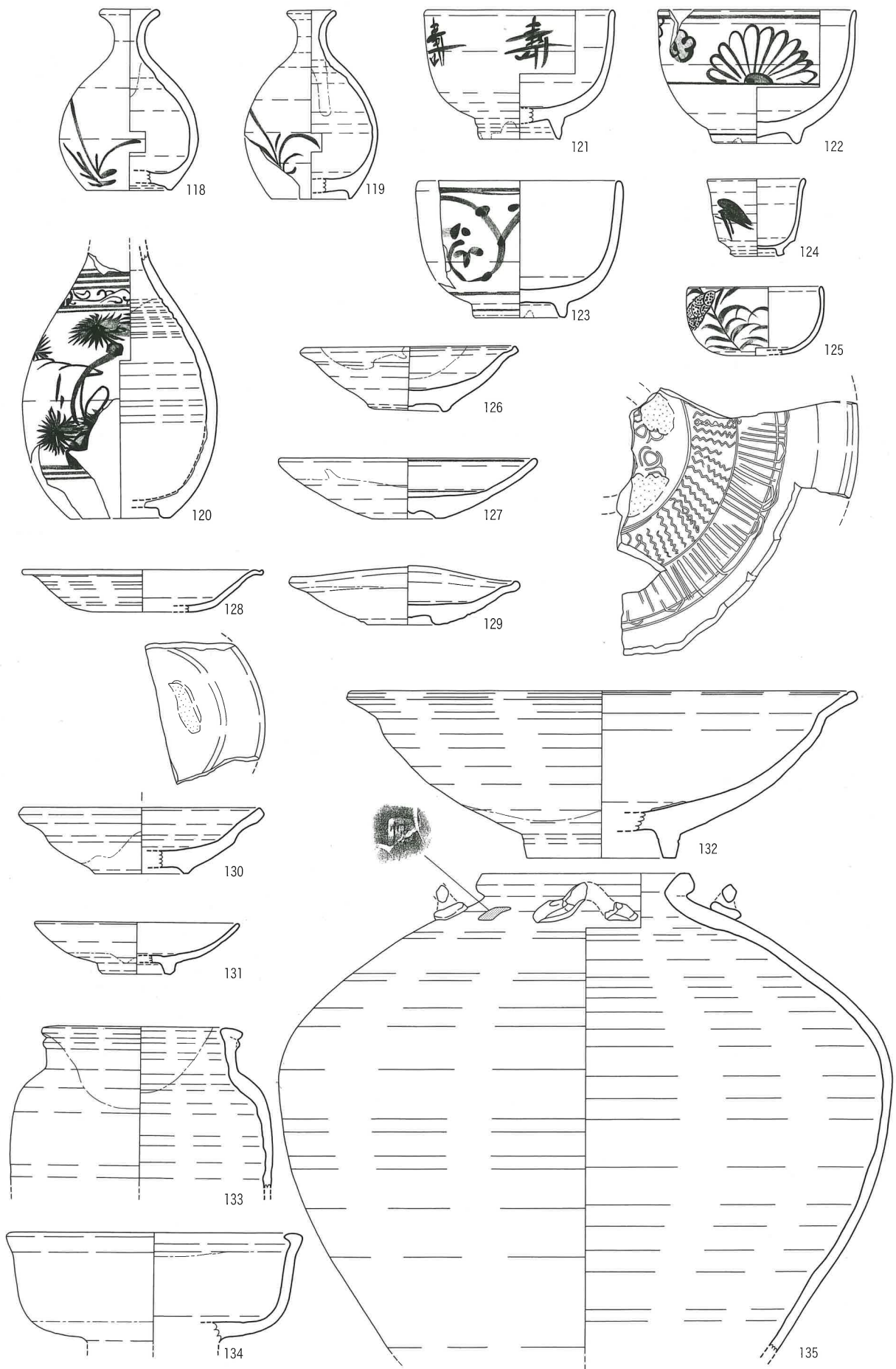
第122図 27調査区出土遺物 (1/3)



第123図 27調査区出土遺物 (1/3)

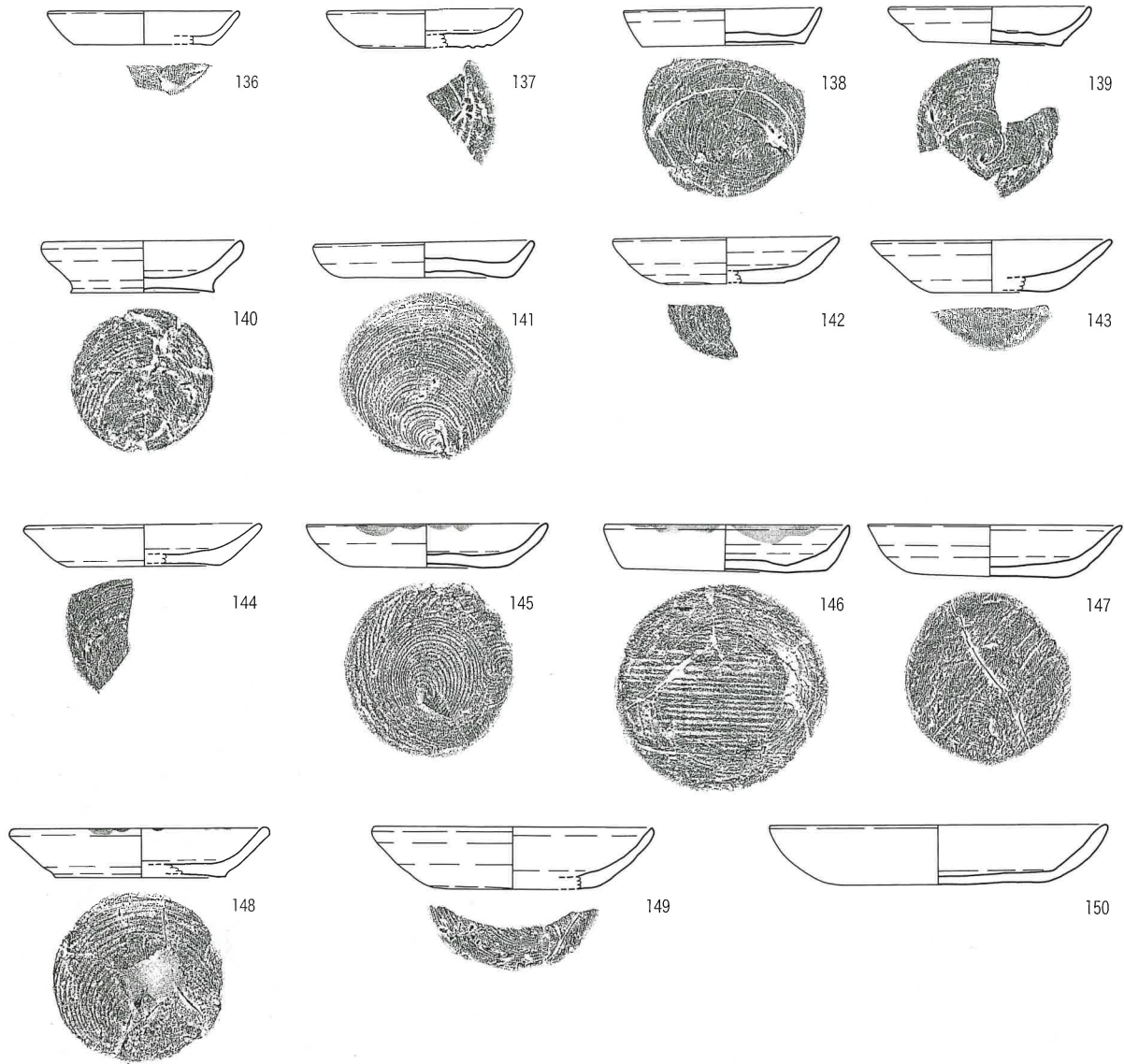


第124図 27調査区出土遺物 (1/4)

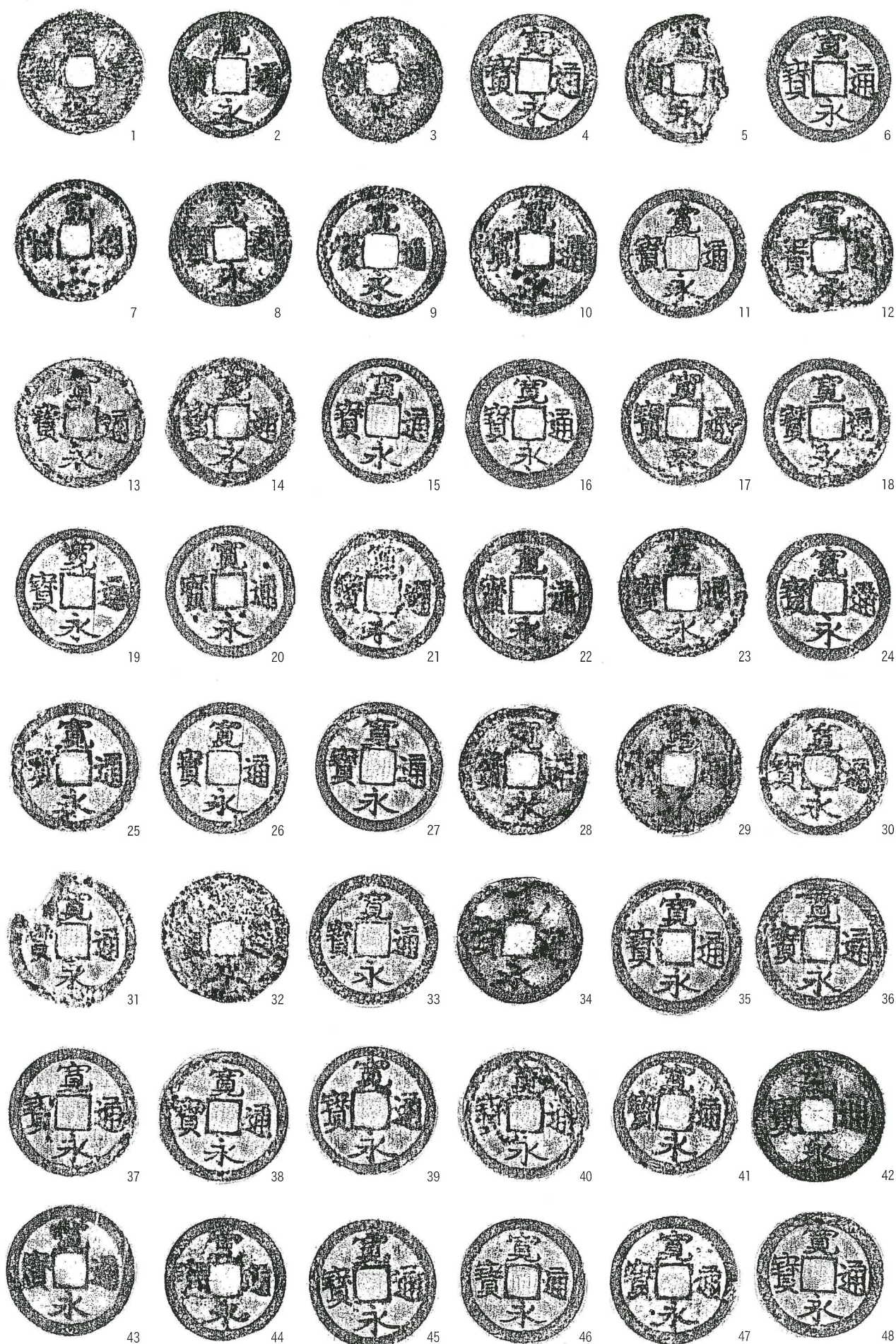


第125図 27調査区出土遺物 (1/3)

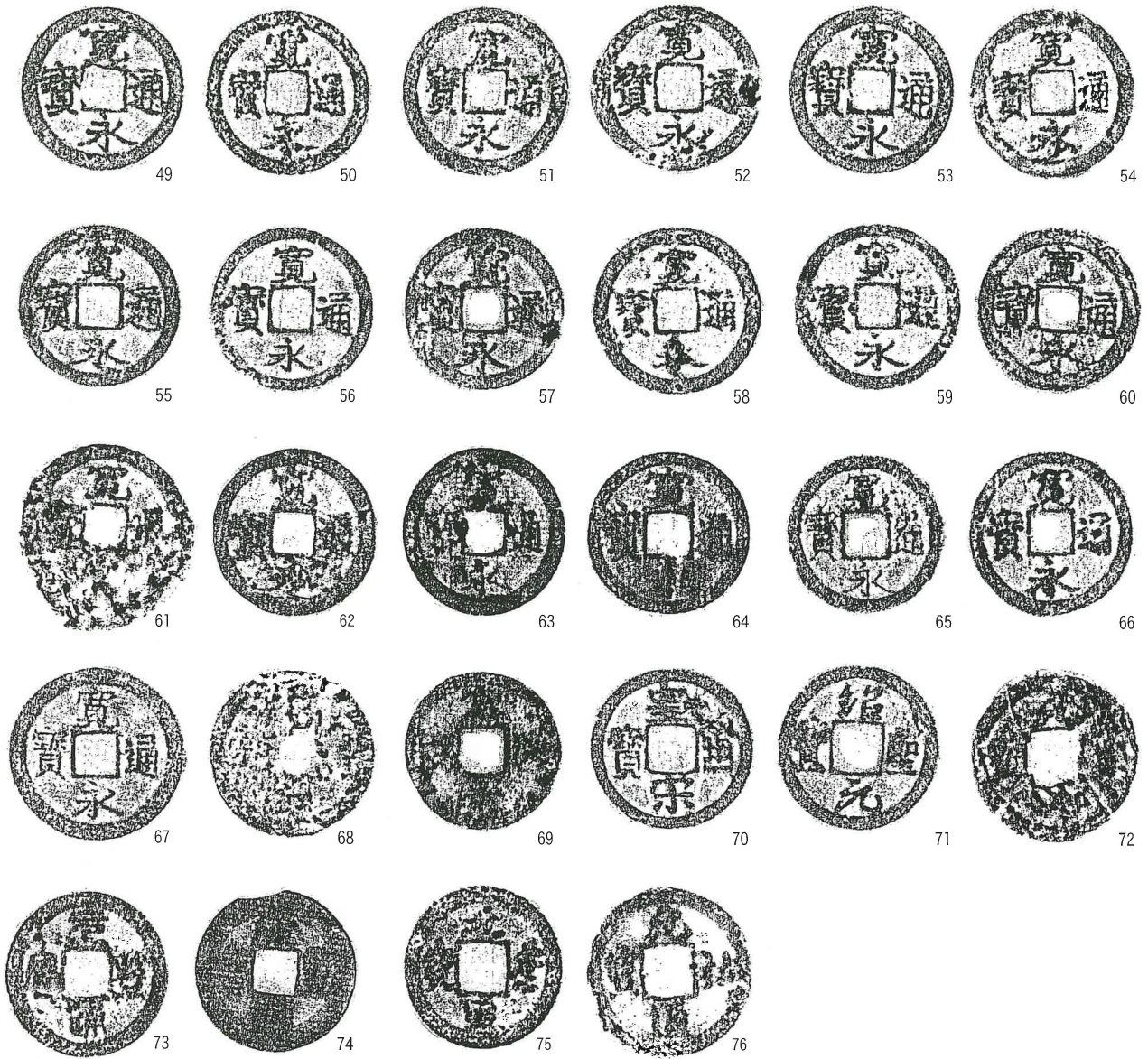
第11節 27調査区



第126図 27調査区出土遺物 (1/3)



第127図 27調査区出土銭貨 (原寸)



第128図 27調査区出土銭貨（原寸）

表11 27調査区出土遺物観察表

図版番号	遺物番号	グリッド名	遺構名	出土土層	器種		大きさ (cm)				推定産地	特徴	残存度	時期	備考
							口径	器高	底径	胴部最大径					
116	1		溝2		磁器	染付碗			4.5		肥前		体部1/3個体	1630～1650	
	2		溝2	覆土上層	磁器	磁器鉢?	7.4				肥前	外面鉄釉、内面透明釉	口縁	1630～1650	
	3		溝2	覆土上層	磁器	磁器皿?					肥前		口縁	1630～1650	
	4		溝2	南部覆土	磁器	磁器小杯	6.4				肥前		口縁		
	5		溝2	南部覆土	磁器	磁器碗					肥前	外面鉄釉、内面透明釉	口縁	1630～1650	
	6		溝2		磁器	磁器碗			4.8		肥前		底～体1/3	1630～1650	
	7		溝2	覆土上層	陶器				8		肥前	糸切	底部		
	8		溝2	覆土上層	陶器	皿	13.3	2.9	4.2		肥前	砂目	ほぼ完形	1600～1630	
	9		溝2		陶器	碗	11	7	4.6		肥前	内面透明釉	1/3個体	1630～1650	
	10		溝2		陶器	碗	11.8	7.7	4.4		肥前	天目形	口縁破片	17C前半	
	11		溝2		陶器	皿	13				肥前	唐津	口縁	1600～1630	
	12		溝2	南部覆土	陶器	皿					肥前	溝縁皿	口縁	1600～1630	
	13		溝2	覆土上層	陶器	鉢			8.6			外面クロ整形	底部		
116	14	6G⑤	溝4	A層礫中	陶器	蓋	9.1	3.7			肥前	鉄釉、砂目、高取・上野系	完形	1610～1630?	
117	15		溝4	③層中	磁器	染付碗			5.5		肥前	「大明成化年製」	底部	17C末～18C前半	
	16	4G①	落込3	南壁側	陶器	碗	10.7				肥前	陶胎染付	口～体1/4	18C前半	
	17	2G⑤	東端部焼土	表土下102から110	磁器	染付小杯	6.6	3.6	2.7		肥前		口縁1/3		
	18	2G①④	東端部焼土	表土下70～82cm	磁器	染付碗			5		肥前		底部3/4	17C後半?	
	19	2G⑤	東端部焼土	表土下102から110	磁器	染付碗			4.7		肥前		底部	17C後半?	
	20		東端部焼土	表土下102から110	磁器	染付碗			4.6		肥前		1/2個体	1630～1650	
	21	2G⑤	東端部焼土	表土下102から110	磁器	碗	11				肥前	外面鉄釉、内面透明釉	口～体1/3	1630～1650	
	22	4G①	東端部焼土	表土下102から110	磁器	染付皿			6		肥前		底部1/5		
	23	1G②	東端部焼土	表土下80～102cm	陶器	碗			4.7		肥前	内外面鉄釉	底～体		
	24	3G③	東端部焼土	表土下102から110	陶器	碗					肥前	陶胎染付	口～体破片	18C前半	
	25	3G②	東端部焼土	焼土上面	陶器	碗	10				肥前	陶胎染付	口～体1/5	18C前半	
	26	2G	東端部焼土	表土下52～70cm	陶器	鉢			10		肥前	唐津 割高台	底部	17C	
	27	1G⑤	東端部焼土	表土下70～82cm	陶器	描鉢						堺産描鉢	口～体破片	17C末～18C	
	28	5G		10	～23層間の整地層	陶器	陶器	11.4			肥前	内外面鉄釉	口縁		
117	29			13		陶器	碗	12.1	7	4.8	肥前	天目形	1/3個体	17C前半?	
118	30	11G④		23	中層	磁器	染付小杯	6.5	4	2.8	肥前		口縁大半欠く	17C前半	
	31	11G～12G		23	中層	磁器	染付皿	12	3.5	4.6	肥前		口縁一部欠く	1630～1650	
	32	11G②		23	上面	磁器	染付皿			7.5	肥前		底部	1630～1650(?)	
	33	7G③		23	下層	磁器	染付皿	12.4	3.3	4.6	肥前		1/4個体	1630～1650(?)	
	34	11G②		23	上面	磁器	皿	13			肥前		口縁	1630～1650(?)	
	35	北壁面		23	上層	磁器	皿	13	3.4	5	肥前	二次被熱	1/2個体	1630～1650	
	36	11G②		23	上面	陶器	灰落?				肥前		口縁		
	37	11G⑤		23	中層	陶器	鉢	10.7	9.9	8.6	肥前	象嵌文様、三鳥手	ほぼ完形		
118	38	12G		23	中層	陶器	花入	6.4	27.3+		伊賀	美濃・伊賀	1/4個体	17C初頭	
119	39	14G④		23	下層	陶器	鉢	8.7	4.5	4.6	肥前	外面鉄釉	2/3個体	17C前半?	
	40	9G		23	～21・45層中	陶器	瓶	1.2	7.8	3.5	備前	鉄釉底部糸切	ほぼ完形	17C前半	
	41	7G④		23		陶器	皿	22.4	2.4	11.4	肥前		1/2個体	17C前半	
	42	14G⑤		29		磁器	染付碗	10	6.8	5.1	肥前	鉄釉・染付掛分け	1/4個体	1630～1650	
	43	14G⑤		29	90	陶器	陶器香炉?				肥前		口縁破片		
	44	14		29		磁器	皿	13.5	2.9	4.5					
	45	5		47	覆土上層	陶器	蓋	7.3							
	46	4G②		52		磁器	碗	10.6	7.2	4.5	肥前	鉄釉・染付掛分け	2/3個体	1630～1650	
	47	7			焼土層	陶器	鉢								
	48	10G⑤		54		陶器	蓋	9.4	3.3		肥前	糸切、高取・上野系	口縁大半欠く	17C初頭?	
	49	4G⑤		70	73	陶器	皿	13.2	3.1	4.4	肥前	砂目、内面鉄釉	完形	1600～1630	
	50	6G		73		磁器	染付碗	10.2	7.4	4.6	肥前		1/4個体	1610～1630	
119	51	6G		73		磁器	染付碗	12.1			肥前		口～体1/3	17C前半	
120	52	6G		73		磁器	染付皿	14.5	4.3	5.1	肥前		1/3個体	1610～1630?	

第11節 27調査区

図版 番号	遺物 番号	グリッド名	遺構名	出土土層	器種		大きさ (cm)				推定 産地	特徴	残存度	時期	備考
							口径	器高	底径	胴部 最大径					
120	53	6 G		73	白磁	小杯	6.4	4	3		肥前		2/3 個体		
	54	6 G		73	陶器	碗			5		肥前	外面鉄袖、内面透明釉	底～体 1/3	1630～1650	
	55		南壁	85	陶器	鉢									
	56	12 G		88	陶器	花入?		19.3+	8.4		?		体部 1/2		
	57	16 G		89	磁器	染付碗	10.7				肥前		1/2 個体	17 C 前半	
	58	7 G		89	磁器	染付皿	13.2	3.8	5		肥前		1/3 個体	17 C 前半	
	59	16 G①		90	磁器	染付碗	11.5	7.8	4.8		肥前		1/2 個体		
	60	8 G		90	上層	磁器	染付碗	10.3	7.4	5.4	肥前	二次被熱	1/4 個体	17 C 初～前半	
	61	6		90	磁器	染付皿	13.9	4.6	5.1						
	62	8 G		90	上層	磁器	染付皿			5	肥前		底部	17 C 初～前半	
	63	10		90		青磁	皿	17	3.2	7.2					
	64	8 G		90	上層	陶器	鉢				肥前	象嵌文	底部	17 C 初～前半	
	65	9 G		90	陶器	皿	12.7	3.4	4.8		肥前	砂目、溝緑皿	口縁一部欠く	1600～1630	
120	66	9 G		90	陶器	皿	11.7	2.8	4.2		肥前		口縁一部欠く	1600～1630	
121	67	13		90	陶器	甕	17.6	22.9	15.4	20.7					
	68	13 G⑥		90	陶器	碗	11.8	7.7	5.1		肥前	唐津	口縁大半欠く	17C 初頭～前半	
	69	14 G③		90	陶器	碗	11.9	7.2	4.8		肥前		ほぼ完形	17C 初頭～前半	
	70	9 G①④		90	陶器	碗			5.2		肥前	透明釉	底部	17 C 前半	
	71	10 G③⑥		90	陶器	皿	11.8	4.7	4.8		肥前	薬灰釉 岸岳系二次被熱	ほぼ完形	1580～1600	
	72	16 G①		90	陶器	灰落?	15	6.9	7.4		肥前	唐津	1/3 個体		
	73	4 G		90	陶器	皿	11.7	3.1	4.2		肥前	砂目、溝緑皿、二次被熱	完形	1600～1630	
	74	4 G		91	陶器	陶器?			5.3		肥前		底部	17 C 前半	
	75	10 G③⑥		91	陶器	碗	10.5	6.1	4.2		肥前		1/4 個体	1590～1610	
	76	4 G		91	陶器	瓶			4.2	6.3	肥前		底～胴部	17 C 前半	
121	77	8 G		91	陶器	插鉢			9.5		肥前		底部	17 C 前半	
122	78	8 G		92	磁器	染付碗	11.6	7+			肥前	外面「福」文	1/4 個体	1610～1630	
	79	8 G		92	陶器	皿			4.8		肥前		底部		
	80	8 G		92	陶器	皿	12.8	3.6	5.1		肥前	唐津 砂目	底部	1600～1630	
	81	3 G	サブトレ		磁器	染付碗	11.2	7.1	4.2		肥前		口縁一部欠く	17 C 中～後半	
	82	3 G	サブトレ		青磁	碗			4		肥前	茶緑色釉	底部		
	83	6 G⑤		A層	陶器	小杯	6	3.6	2.5		肥前		口縁大半を欠く	1630～1650	
	84				磁器	小杯	5.4	3	2.4						
	85	3		サブトレ一括	陶器	碗			4.7						
	86	2		表土 F82～110cm 焼土層	磁器	花瓶		7+	5.4	8.4					
122	87	1 G③	壁面		陶器	皿	12.8	3.5	4.2		肥前	溝緑皿、砂目	1/4 個体	1600～1630	
図版 番号	遺物 番号	グリッド名	遺構名	出土土層	器種		大きさ (cm)				推定 産地	特徴	残存度	時期	備考
							長さ (径)	最大幅	厚さ	重量 (g)					
123	88		調査区		一括	煙管	5.6	1.1		5.1			吸口		
	89		調査区		一括	煙管	6.1	1.2		5.1			吸口		
	90		調査区		一括	煙管	5	0.9		4.1			吸口		
	91	5				煙管	6+	1.5		5+			雁首残欠		
	92	6				煙管	3+	1.7		10+			雁首残欠		
	93	8				煙管	4+	1.5		6+			雁首残欠		
	94		調査区		一括	煙管	3+	1.8		6+			雁首残欠		
	95		溝2		覆土	煙管	5+	1.5		5+			雁首残欠		
	96	13				煙管	2+	1.5		4.5+			雁首残欠		
	97	4				煙管	3.8+	1.4		9+			雁首残欠		
	98	2				毛抜き	5.3	0.4	0.2	3.1			完形品		
	99			灰褐色粘土層		銅製品(小柄)	9.8	1.4	0.4	20.8		文様	柄		
	100	10		91		銅製品(小柄)	10.3	1.5	0.4	20.1			柄		
	101	5		47	焼土層	銅製品(小柄)	10+	1.5	0.3	24+			柄		
123	102	14		29		銅製品(小柄)	10+	1.5	0.5	26+		文様	柄		

第3章 調査の成果

図版 番号	遺物 番号	グリッド名	遺構名	出土土層		器種	大きさ (cm)				推定 産地	特徴	残存度	時期	備考
							長さ (径)	最大幅	厚さ	重量 (g)					
123	103	9		23		鍵	3.8	1.8	0.6	3.7			完形品		
	104	11		23		飾金具(目貫)	3.6	1.2	0.6	3.3			完形品		
	105	14		88		釘	4.5	0.9	0.4	3.5			完形品		
	106	3		90	23~90	鉄製品				100+					
	107	15		88		鉄製品		0.7	0.5	13+					
123	108		調査区		一括	物差し	7+	0.7	0.5						
124	109	3	落込み3			軒丸瓦	15.5		2.5				瓦当面		
	110	4	落込み2		一括	軒丸瓦	15.4		2.5				1/2		
	111		落込み3		一括	軒丸瓦							1/3		
	112					軒丸瓦							1/4		
	113		落込み3		一括	軒平瓦		4.6	2.8				2/3		
	114	2			東端焼土	軒平瓦		4.4	2.4				1/4		
	115	8		57		棧瓦			1.9				軒丸部		
	116	10		57		丸瓦	26	13.8	2				1/2		
124	117	10		57		丸瓦			1.8				2/3		
図版 番号	遺物 番号	グリッド名	遺構名	出土土層		器種	大きさ (cm)				推定 産地	特徴	残存度	時期	備考
							口径	器高	底径	胴部 最大径					
125	118	3・7 G		23		磁器 染付小瓶	3.3	9.7	4.6		肥前	西有田広瀬窯、外面釉の文様	1/4 個体	1640~1650	
	119	7 G		23		磁器 染付小瓶	2.7	10.1	4.4		肥前	西有田広瀬窯、外面釉の文様	1/4 個体	1640~1650	
	120	14・16 G		23		磁器 染付瓶			6.9		肥前	松、竹の文様、内面油?付着	1/2 個体	1630~1640	
	121	9・10 G		23		磁器 染付碗	10.2	4.3	4.8						
	122	14 G		90・92		磁器 染付碗	10.7	7.2	4.8		肥前		1/2 個体	1630~1640	
	123	3 G		90	整地層	磁器 染付碗	11	7.4	3				ほぼ完形	近世	
	124		調査区		一括	陶器 小杯	5.4	4.1							
	125	8 G		64		陶器 小碗	7.4		4.2				1/4 個体	近世	
	126	7 G				陶器 杯	11.8	3.7	3				1/4 個体	近世	
	127	11 G		23		陶器 皿	14	3.2			肥前	鉄釉	1/4 個体	1610~1640	
	128	2 G			焼土層	陶器 皿			4.1		肥前	嬉野内野山、砂目づみ	1/3 個体	1610~	
	129	4 G			焼土層	陶器 皿	12	3.1	5.2				一部欠損	近世	
	130	12 G		23		陶器 皿	13.2	3.5	12.5		肥前	砂目づみ	1/4 個体	1600~1620	
	131	2 G	溝3-東端焼土	覆土		陶器 銅緑釉掛皿	11	2.8	8		肥前	嬉野内野山			
	132	2・5・10G		3・4・90		陶器 大皿	27.5	8.9			肥前	三島手、砂目づみ	1/4 個体	17 C中~後半	
	133	9・10・16G		23・27		陶器 長胴瓶	8.6				ベトナム	ベトナム焼締陶器	上半部	17 C	
	134	12 G		23	上面	陶器 火入れ	16		6		肥前	線香立?銅緑釉	底部を欠1/2	17 C中~末	
125	135	7~12		23・25・54・60		陶器 四耳壺	11.2				福建省		1/3 個体	17 C、明後半	
126	136	6 G		48		土師質 小皿	8.2	1.4	5.7				1/6 個体		
	137	5 G		21・27		土師質 小皿	8.4	1.6	6.9				1/5 個体		
	138		東端焼土	表土下	52~76	土師質 小皿	8.5	1.1	6				1/2 個体		
	139	4 G	東端焼土			土師質 小皿	8.6	1.7	6				1/3 個体		
	140	11 G		88		土師質 小皿	8.6	2.2	7.3				1/4 個体		
	141		溝2		覆土上層	土師質 小皿	9.5	1.6	5				2/3 個体		
	142	13 G		90	下層	土師質 小皿	9.7	1.9	5.6				1/4 個体		
	143	3 G	東端焼土			土師質 小皿	10.2	2.2	6.6				1/4 個体		
	144	14 G		29		土師質 小皿	10.2	1.8	7				1/4 個体		
	145		溝2		覆土上層	土師質 小皿	10.3	1.9	8.8				ほぼ完形		
	146	16 G		8・9		土師質 小皿	10.5	2.1	7.2				ほぼ完形		
	147	13 G		90		土師質 小皿	10.8	2.2	7.2				ほぼ完形		
	148	10 G		90	直上	土師質 小皿	11.1	2.1	7.2				一部欠損		
	149	12 G		23		土師質 小皿	12	2.7	9.3				口~底部の一部		
126	150	10・12G		23・27・88		土師質 小皿	14.4	2.5					1/2 個体		

第11節 27調査区

表12 27調査区出土銭貨観察表

図版 番号	番号	グリッド 名	遺構名	出土土層		種類	大きさ		備考
							径 (cm)	重量 (g)	
127	1	14 G		21		古寛永	2.3	3.8	
	2	10 G		23	上面	古寛永	2.3	3.2	
	3	10 G		23	上面	古寛永	2.3	3.3	
	4	10 G		23		古寛永	2.4	3.9	
	5	11 G		23		古寛永	2.4	2.7	一部欠損
	6	11 G		23		古寛永	2.4	4	
	7	12 G		23	上面	古寛永	2.3	2.7	
	8	12 G		23	上面	古寛永	2.3	2.7	
	9	12 G		23	上面	古寛永	2.3	3.1	
	10	12 G		23		古寛永	2.4	2.9	
	11	13 G		23		古寛永	2.4	3.4	
	12	14 G		23	下層	古寛永	2.5	3.2	一部欠損
	13	16 G		23	下層	古寛永	2.4	2.6	
	14	4 G		23		古寛永	2.4	3.3	
	15	4 G		23		古寛永	2.4	2.3	
	16	6 G		23		古寛永	2.4	2.8	
	17	5 G	溝4	48	礫下	古寛永	2.4	2.1	
	18	4 G		52		古寛永	2.4	2.7	
	19	10 G		60		古寛永	2.4	3.6	
	20	4 G		70		古寛永	2.4	3.5	
	21	6 G		73		古寛永	2.4	2.4	
	22	12 G		88		古寛永	2.4	3	
	23	12 G		88		古寛永	2.4	2.9	
	24	12 G		88		古寛永	2.4	2.7	
	25	15 G		88		古寛永	2.4	2.9	
	26	7 G		89		古寛永	2.4	3.3	
	27	7 G		89		古寛永	2.4	3.3	
	28	9 G		89		古寛永	2.4	3.2	
	29	16 G		90		古寛永	2.3	3.7	
	30	16 G		90		古寛永	2.4	3.1	
	31	3 G		90	整地	古寛永	2.4	2.9	
	32	5 G		90		古寛永	2.4	2.7	
	33	15 G		91		古寛永	2.4	2.2	
	34	16 G		91		古寛永	2.4	3.7	
	35	5 G		92		古寛永	2.5	3.5	
	36	4 G		70・73		古寛永	2.4	4.2	
	37	4 G		70・73		古寛永	2.4	4	
	38	4 G		70・73		古寛永	2.4	4.2	
	39	4 G		70・73		古寛永	2.4	4.1	
	40	4 G		70・73		古寛永	2.4	2.8	
	41	4 G		70・73		古寛永	2.4	2.6	
	42		調査区	一括		古寛永	2.4	3.3	
	43		東端焼土	表土		古寛永	2.4	2.9	
	44	1 G	東端焼土	表土下	0.8～1 m	古寛永	2.3	3.3	
127	45	2 G		壁面		古寛永	2.4	2.9	

図版 番号	番号	グリッド 名	遺構名	出土土層		種類	大きさ		備考
							径 (cm)	重量 (g)	
127	46	10 G				古寛永	2.4	4.1	
	47	10 G				古寛永	2.4	2.4	
127	48	12 G				古寛永	2.4	3.5	
128	49	13 G				古寛永	2.4	4.4	
	50	14 G				古寛永	2.4	3.5	
	51	16 G				古寛永	2.4	2.4	
	52	4 G	サブトレ		一括	古寛永	2.4	3.9	
	53	4 G	サブトレ		一括	古寛永	2.4	3.5	
	54	4 G			焼土層①	古寛永	2.4	3.1	
	55		調査区		一括	古寛永	2.4	4.5	
	56		調査区		一括	古寛永	2.4	3	
	57		調査区		一括	古寛永	2.4	3.7	
	58		東端焼土			古寛永	2.4	2.7	
	59		溝2			古寛永	2.4	3.1	
	60		溝2		上面一括	古寛永	2.4	3.7	
	61	14 G		23	下層	古寛永?	2.5	3.5	
	62	13 G		88	上層	新寛永	2.4	2.7	
	63	6 G①		70・73		新寛永	2.4	3	
	64	12 G		一括		新寛永	2.3	2.8	
	65	1 G		表土下	0.22m	新寛永	2.3	2.7	
	66	13 G				新寛永	2.4	4.1	
	67					新寛永	2.5	4	
	68	5 G		90		寛永通寶	2.4	3	
	69					寛永通寶	2.3	2.4	
	70	4 G		70		皇宋通寶	2.4	2.6	北宋銭初鑄1038年
	71	4 G		70		紹聖元寶	2.4	3.1	北宋銭初鑄1094年
	72	6 G		92		「・・・寶」	2.4	2.5	一部欠損
	73	9 G		23		元豊通寶	2.4	2.1	一部欠損
	74	6 G		76		元豊通寶	2.3	2.7	北宋銭
	75	7 G		一括		元豊通寶	2.3	3.5	北宋銭
128	76	16 G		89		元祐通寶	2.4	2.4	

第11節 27調査区

写真11



27調査区遠景
(南方向から)



全景
(西方向から)



溝1
(南方向から)



溝2-II
(南方向から)



溝4
(南方向から)



調査西壁土層状態
(東方向から)

第12節 28調査区

1 調査の概要 (第129図、写真12)

28調査区は谷町の酢屋・志保屋坂と町屋の道路との交差点に接する南西地区にあたる。絵図ではこの交差点から西へ5筆分が調査対象地であった。東から2筆が丸屋平兵エ、西に向かって和嶋屋(壺)助、楠屋為右エ門、山里屋兵助の屋敷と考えられる。このうち最も東部に位置する丸屋平兵エ屋敷については、地下に埋設物等があるため調査対象地から除外した。溝は各屋敷の区画する境界施設といえる。溝3が2筆の丸屋の間、溝1が丸屋と和嶋屋の間、溝4が和嶋屋と楠屋の間にそれぞれ設けられている。

調査の結果、溝や建物基礎部分の一部などを確認した。特に溝は石組みを伴う排水溝である。出土遺物として、主に17世紀初頭頃から19世紀間の陶磁器類、漆器、銭貨などがある。

2 基本層序 (第130～133図)

土層の堆積状態は、現道路面から谷の自然堆積土の21層まで約1.2m、35層(シルト)まで約1.6m、地山礫層まで約2mで達する。27調査区と同様に自然堆積土の上には火災痕跡と造成土が互層となる人為的な整地がみられた。焼土面は各時期の生活面といえるものであり、3面を確認した。焼土(生活)面の呼称は27調査区と共通とする。土層は51層に区分できた。

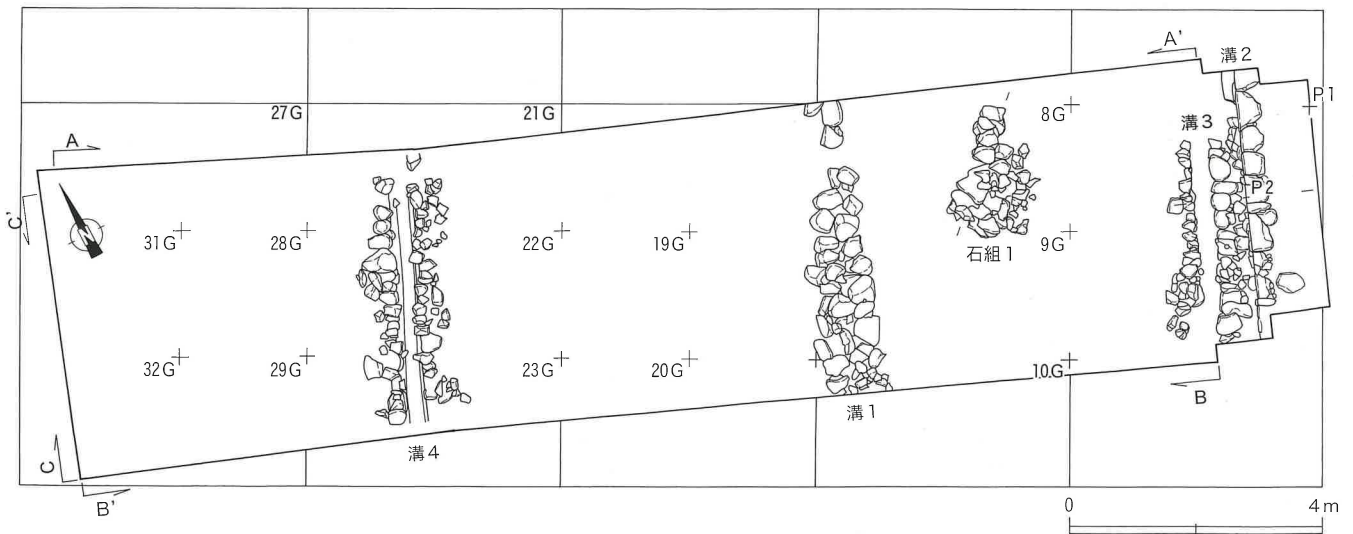
北辺の土層断面A-A'(第130図)の東半部では、上層から1-①～⑧層が現在の造成土である。焼土面(生活面)は4面から6面までを確認した。生活面は焼土・炭化物主体層の上に、主に地山の混礫黄褐色土を用いた整地層の上面である。4面(6層)は地表下0.5mの焼土面としては最上層となる。砂礫の造成土、焼土・炭灰層下が5面(12層上面の被熱硬化面)となる。6面は砂礫の造成土(29層)上面の被熱硬化面である。

29層以下の堆積土は32層が自然堆積土で、33層は薄い砂層で冠水痕跡を示す。34層は砂粒を含む黒灰色土層、21層・35層は灰色シルト層、36層は礫層となる。

南辺の土層断面B-B'(第132図)では、西部では北辺と同様の土層を確認できるが、溝4の位置には溝4と構築時期が前後する2条の溝がほぼ同一位置の上下に造られており、地表には現在のコンクリート製排水溝がある。溝以東の土層状態は北辺よりも大きな改変の痕跡を示している。

西辺の土層断面C-C'(第133図)では、層中に石組などもあるが、頻繁に造成された痕跡がみられる。

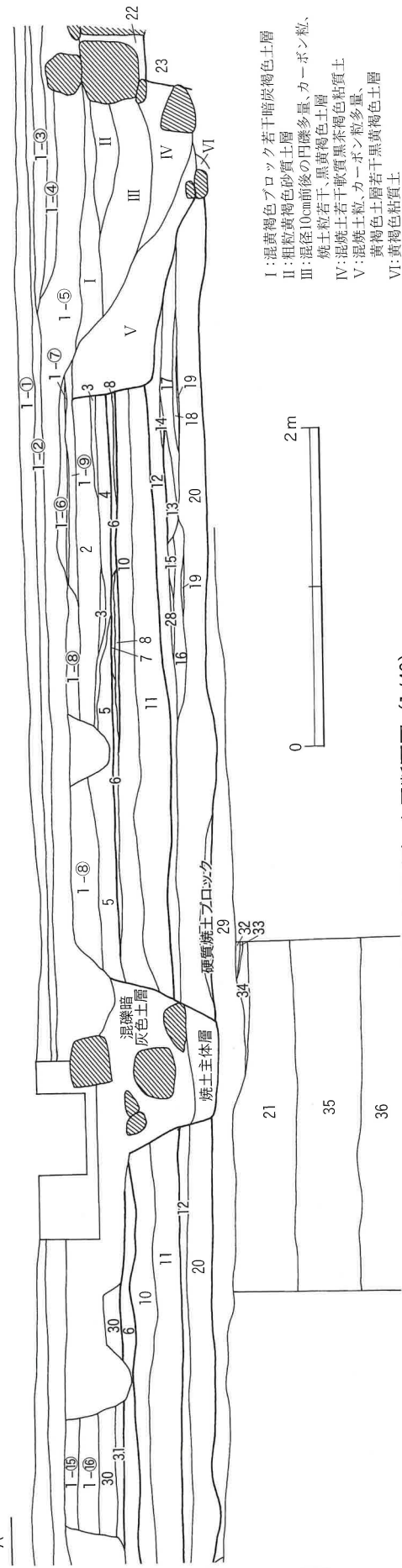
各面・各層の時期は、5面は下層の20層・20'層から17世紀前半の陶磁器類が出土しており、ほぼ17世紀中頃、6面は直下の29層の出土遺物から17世紀前半と考えられる。また、6面下の29層直下の21層から1600年前後の陶磁器類が出土している。27調査区の焼土面との対応関係に矛盾はない。



第129図 28調査区遺構配置図 (1/120)

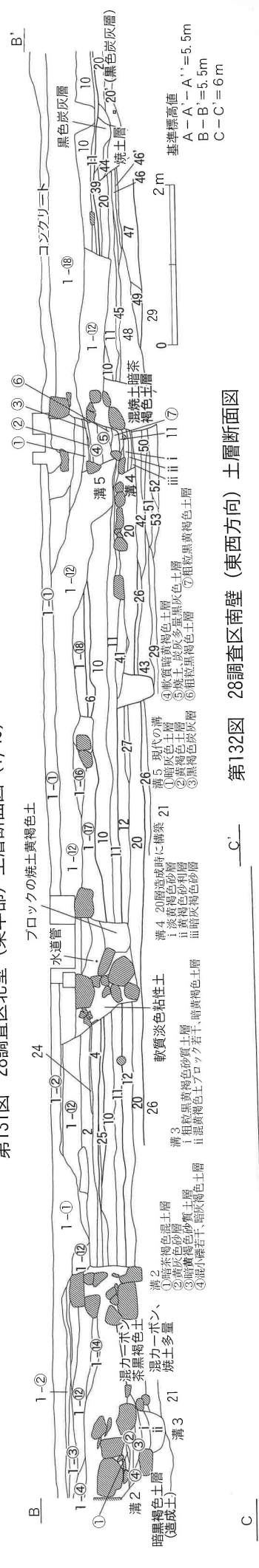


第130図 28調査区北壁 (東西方向) 土層断面図

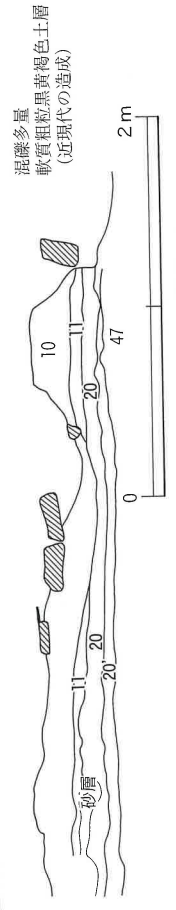


第131図 28調査区北壁 (東半部) 土層断面図 (1/40)

- I: 混黄褐色ブロック若干暗炭褐色土層
- II: 粗粒黄褐色砂質土層
- III: 混黄褐色土層、カーボン粒、焼土粒若干、黒黄褐色土層
- IV: 混焼土若干軟質黒茶褐色粘質土
- V: 混焼土粒、カーボン粒多量、黄褐色土層若干黒黄褐色土層
- VI: 黄褐色粘質土



第132図 28調査区南壁 (東西方向) 土層断面図



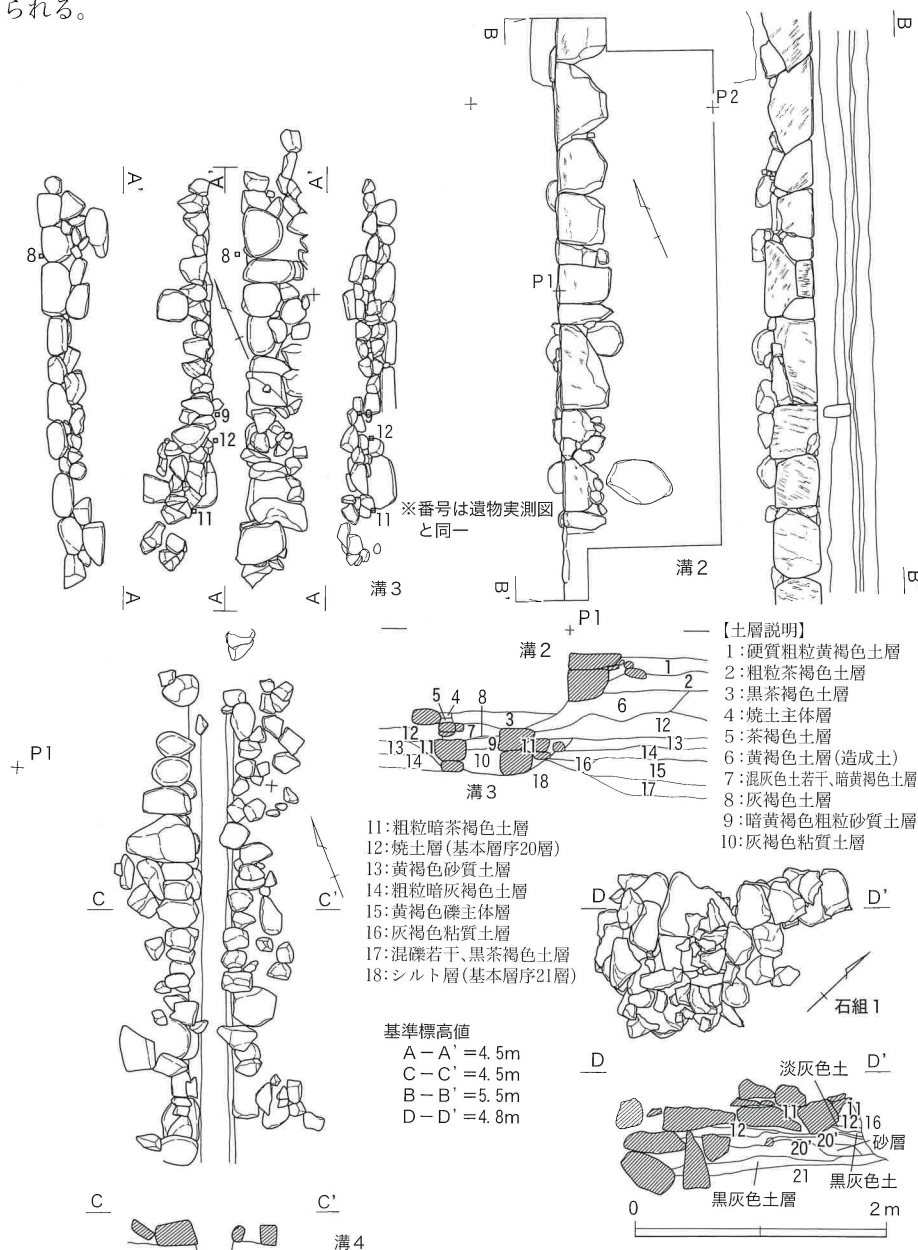
第133図 28調査区西壁 (南北方向) 土層断面図 (1/40)

3 検出遺構 (第129、134~136図)

溝1 (第129図) は、調査区東部中央寄りの13Gと16G間に位置する。南北に延びる溝である。主軸方向は北21度東を指向するが、町屋の街路に対して直交する。確認面での規模は長さ約5m、幅1m、深さは土層断面で見ると、0.8m程度である。6層を切って構築されており、4面以降に造られている。

溝2 (第134図) は、調査区東辺部に位置する。街路に対して直交する石組の溝と考えられるが、対岸の西側には石組が残っていない。検出面での規模は長さ約5mである。土層断面では、石組直上に現在の造成土が0.45m盛られていた。石組は4面を平坦に加工した0.2m~0.71mの石材が用いられていた。石組の空隙には小礫や白色の粘土が充填されていた。石組上面には被熱痕跡が顕著であった。構築状況や土層堆積状態から近世末以降の構築と考えられる。この溝の底面下に溝3が位置する。

溝3 (第134図) は、溝2下に造られた石組の溝である。主軸方向は北22度東を指向し、町屋の街路に対して直交する。確認面での規模は長3.6m、土層断面での幅0.3m、深さ0.4mである。石組は2~3段残っており、基部に0.3mの川原石を用いている。時期は溝2に切られているため、構築面を確認できないが、出土遺物から17世紀後半と考えられる。



第134図 28調査区溝2・3・4、石組1実測図 (1/60)

第12節 28調査区

溝4 (第134図) 調査区東部25Gと28G間に位置する石組の溝である。主軸方向は北25度東を指向し、町屋の街路に対して直交する。確認面での規模は長さ4.3m、幅は0.35m、深さ0.3mである。石組は径0.2m程度の礫が主に残っていた。土層断面A-A'の所見から、4面以降の構築と考えられる。出土遺物は17世紀後半を示している。溝1～4は絵図上の屋敷境界と一致する。

その他の遺構 (第134、135、136図) として、石組や配石などを確認した。10層面では石組2・3、建物基礎と考えられる石組1～3が調査区西部にみられた。12・20・26層面では石組4～6、石列などを確認した。46層面では石組7・8を確認した。最下層の21層面では杭列が確認できたが、上層から打ち込まれたものと考えられる。

4 出土遺物 (第137図～第147図、表13、14)

28調査区から出土した遺物はコンテナ60箱であった。このうち磁器50点、陶器31点、土師質土器・土製品6点、漆器1点、瓦類2点、金属製品13点、銭貨47点の計160点を図示した。

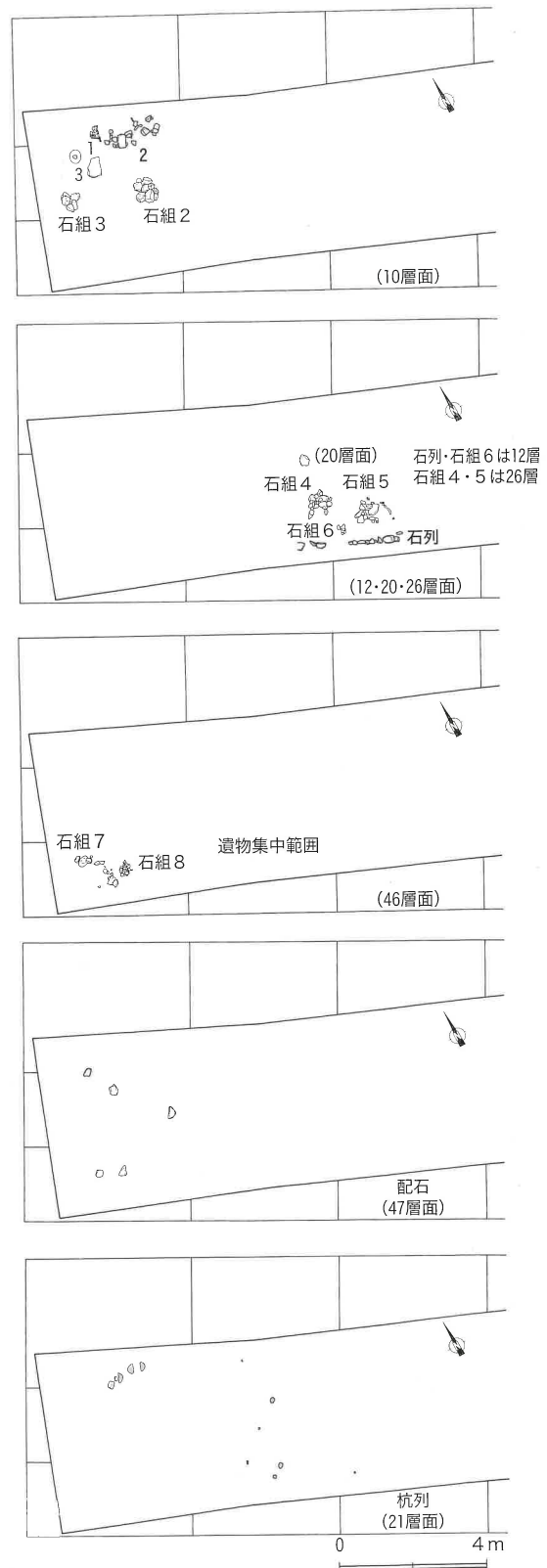
陶磁器類 (第137～142図、第144～146図、表13)

石組1の周辺から白磁小杯・染付碗・皿などが出土した。1～3は1600年～1630年の製作年代である。5の青花皿は16世紀後半であり、古い磁器も混じる。溝3では8の染付碗、10・12の17世紀後半の陶器が出土している。溝4では14の白磁、1の陶器碗など17世紀後半の陶磁器類が出土している。

各層の陶磁器類についてみると、4面下層の11層から26の陶器皿、99の陶器刷毛皿など17世紀後半の陶器類が出土した。5面を形成する12層から1630年～1650年を示す29の染付小杯がみられるなど、概ね1630年～1650年の陶磁器類が主体である。21層 (シルト層) から1590年～1600年を示す46の朝鮮唐津藁灰釉瓶が出土しており注目される。同層上層から出土した45の染付碗は1630年～1650年と新しい。上部からの混入の可能性を考えておきたい。23層出土の90はベトナム産焼締長胴甕である。

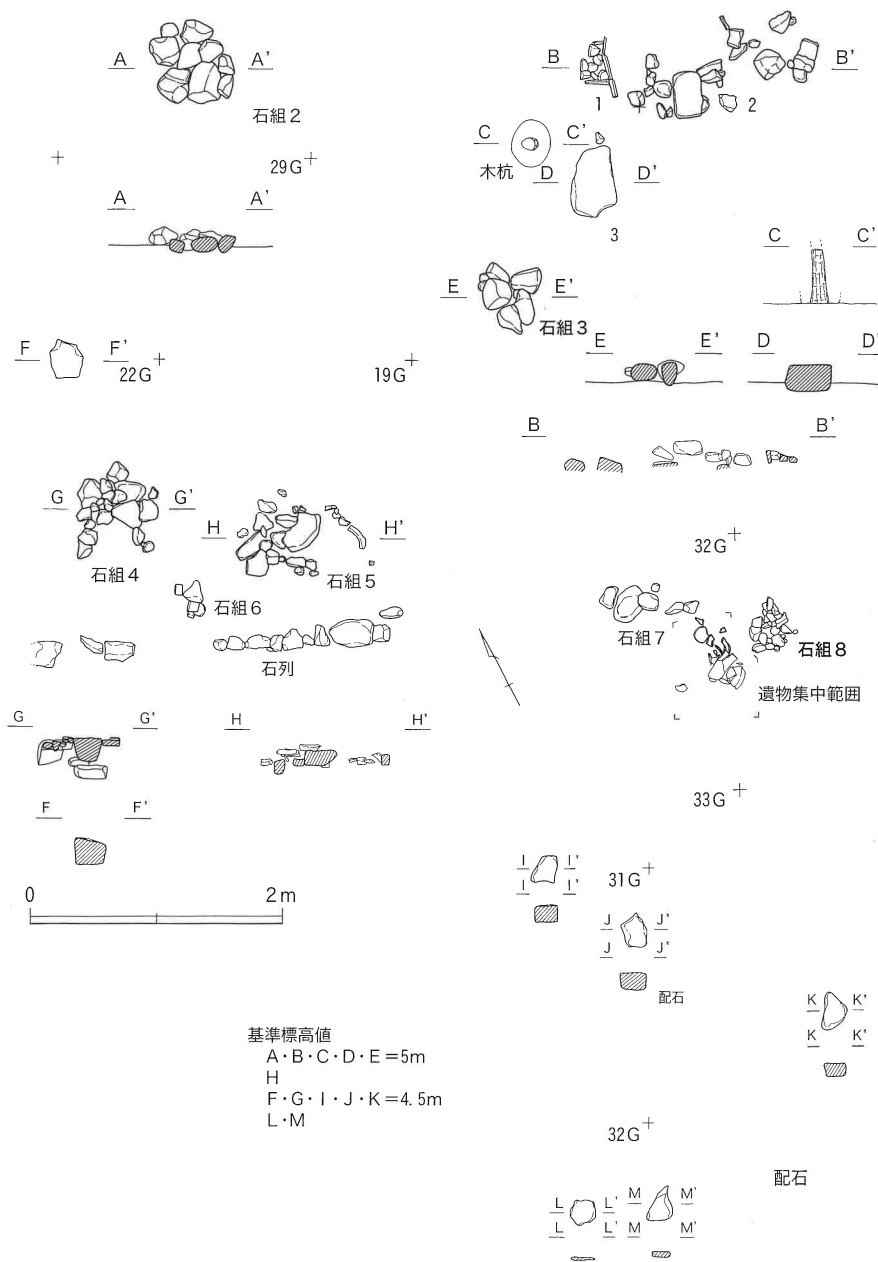
56は漆器碗であるが、漆膜の分析から当時の普及品と確認された。(註1)

(註1) 大分県立歴史博物館主幹研究員山田拓伸氏の教示による。



第135図 28調査区各層の遺構 (1/200)

土師質鉢・小皿3点（第146図96～98）、瓦類2点（第143図71・72）を図示した。金属製品（第143図58～70）には煙管の雁首8点、刀装具、鉸と思われる銅製品などがある。銭貨（第147図1～47、表14）は、「古寛永銭」36点、「新寛永銭」7点の他、中国銭「政和通寶」・「洪武通寶」・「元豊通寶」4点が出土した。



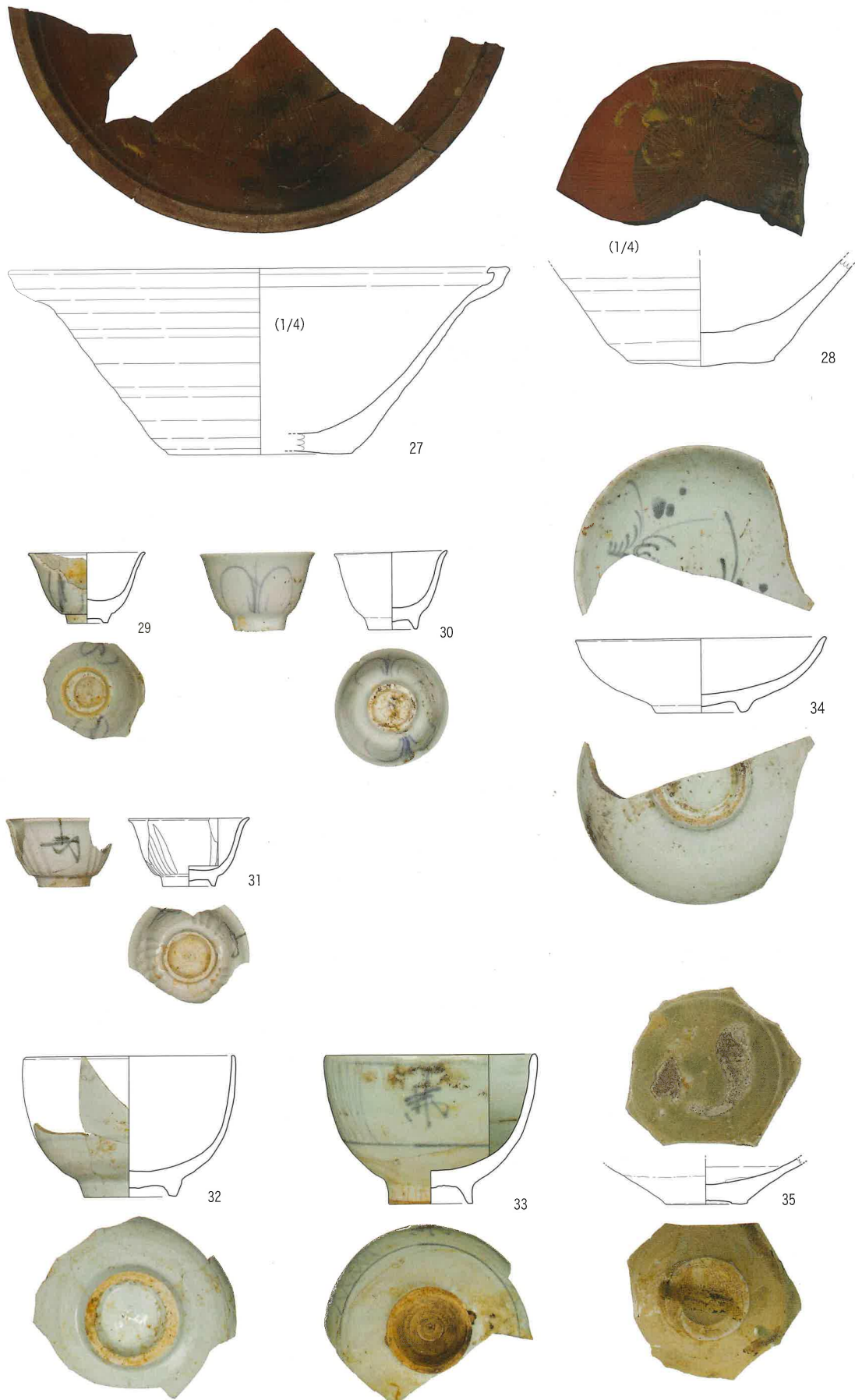
第136図 28調査区遺構（石組2～8、配石）実測図（1/60）



第137図 28調査区出土遺物 (1/3)



第138図 28調査区出土遺物 (1/3)



第139図 28調査区出土遺物 (1/3)

※27・28は1/4

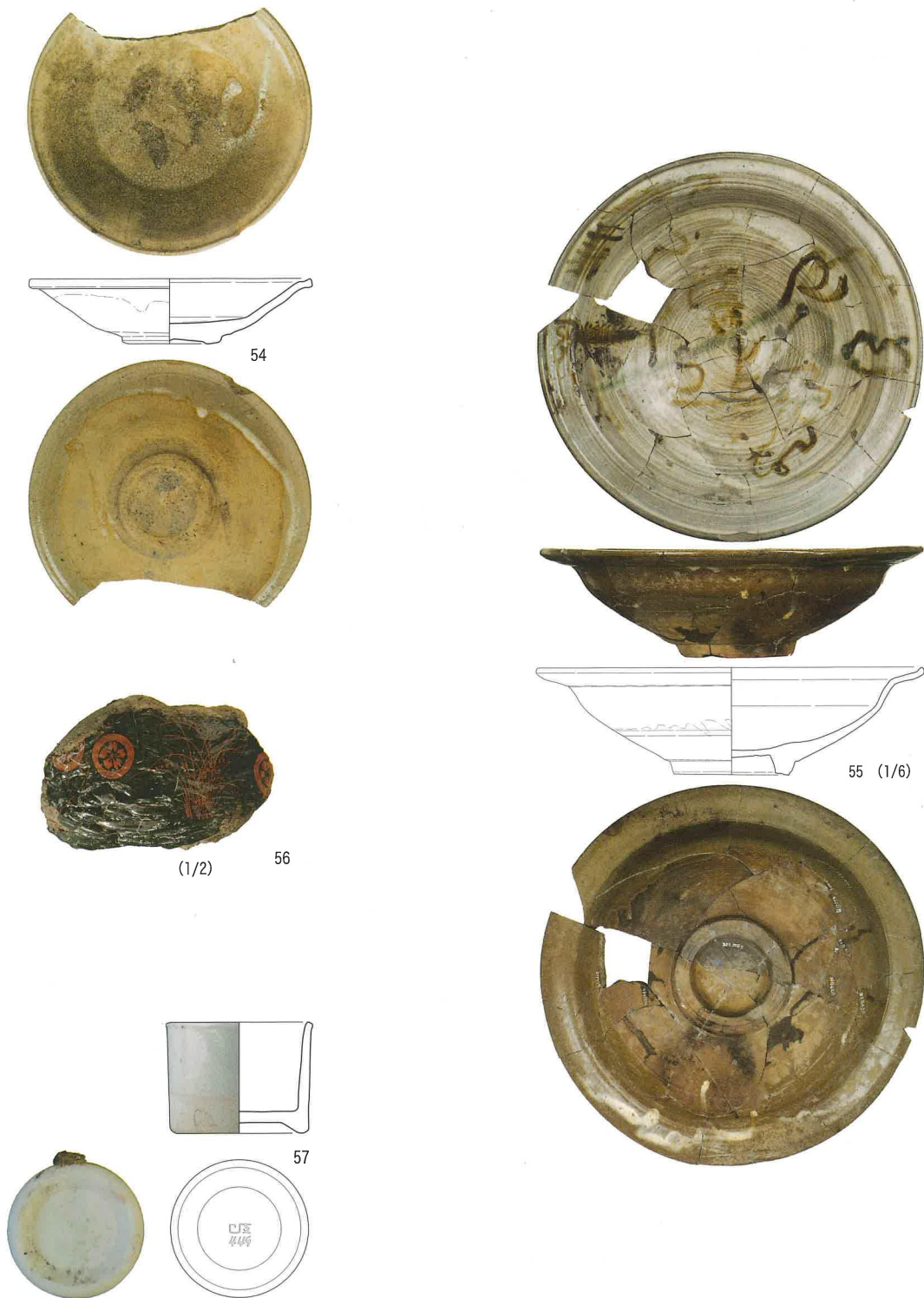


第140図 28調査区出土遺物 (1/3)

※42・43は1/4



第141図 28調査区出土遺物 (1/3) ※44は1/4、51は1/6

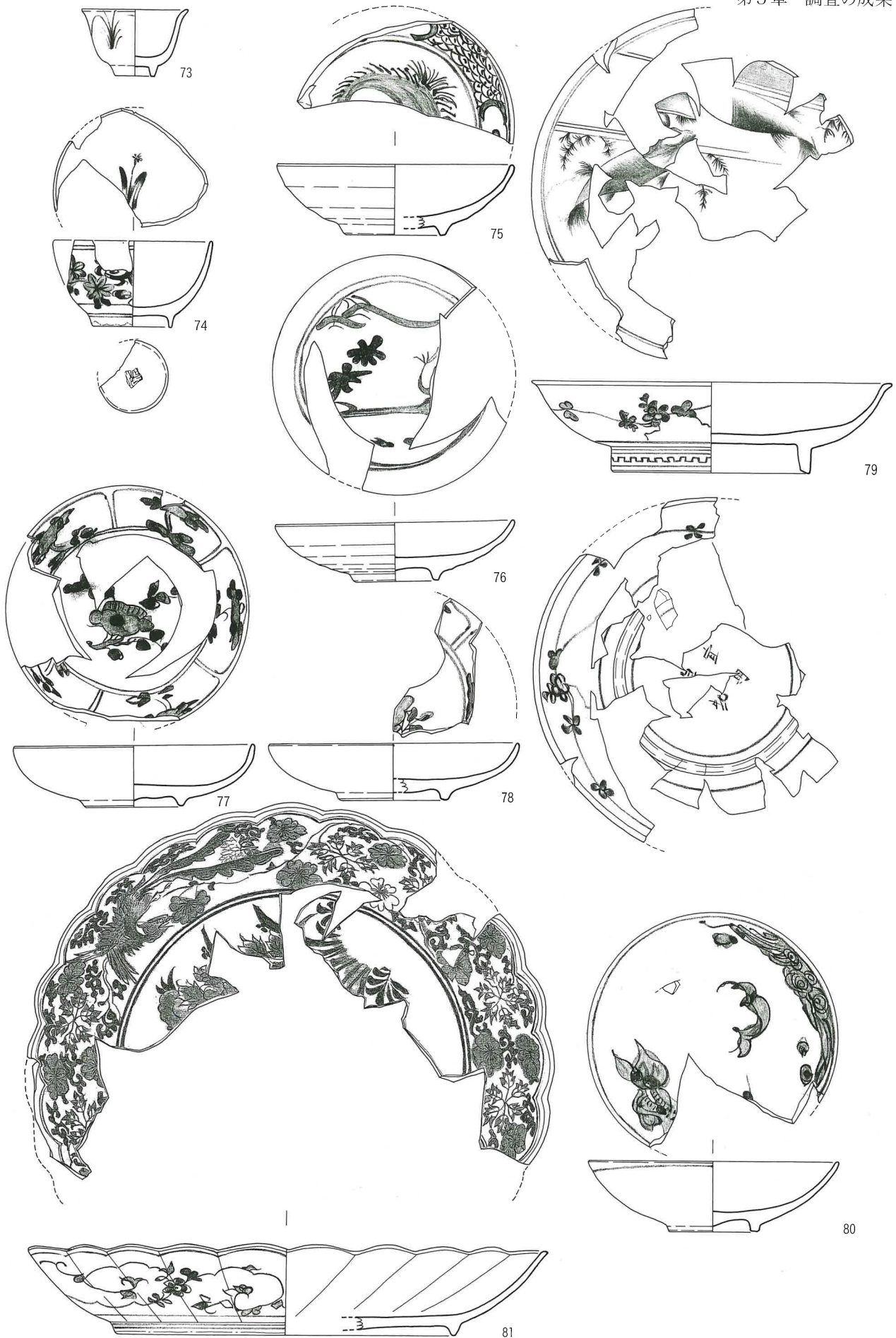


第142図 28調査区出土遺物 (1/3)

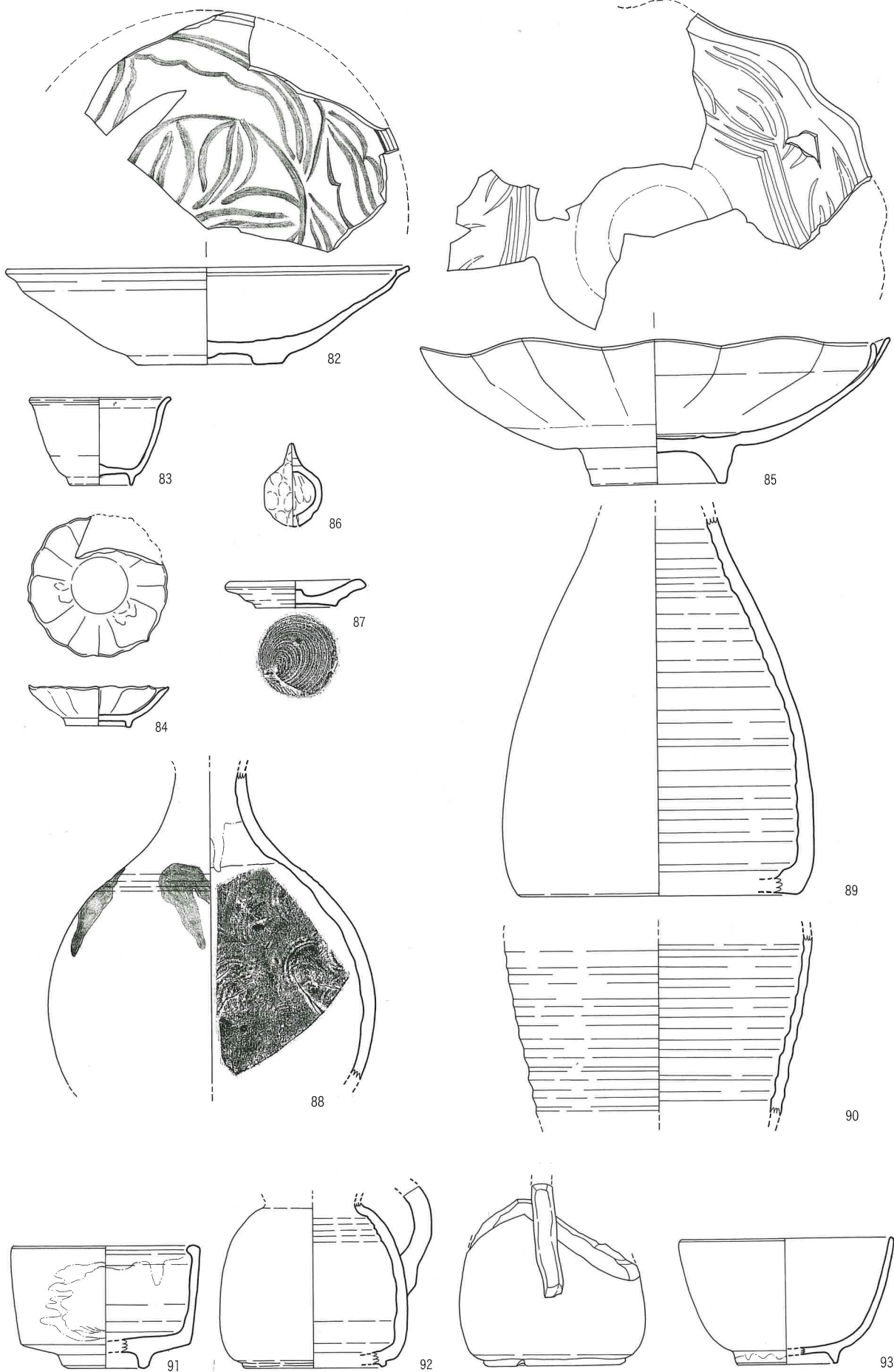
※56は1/2、55は1/6



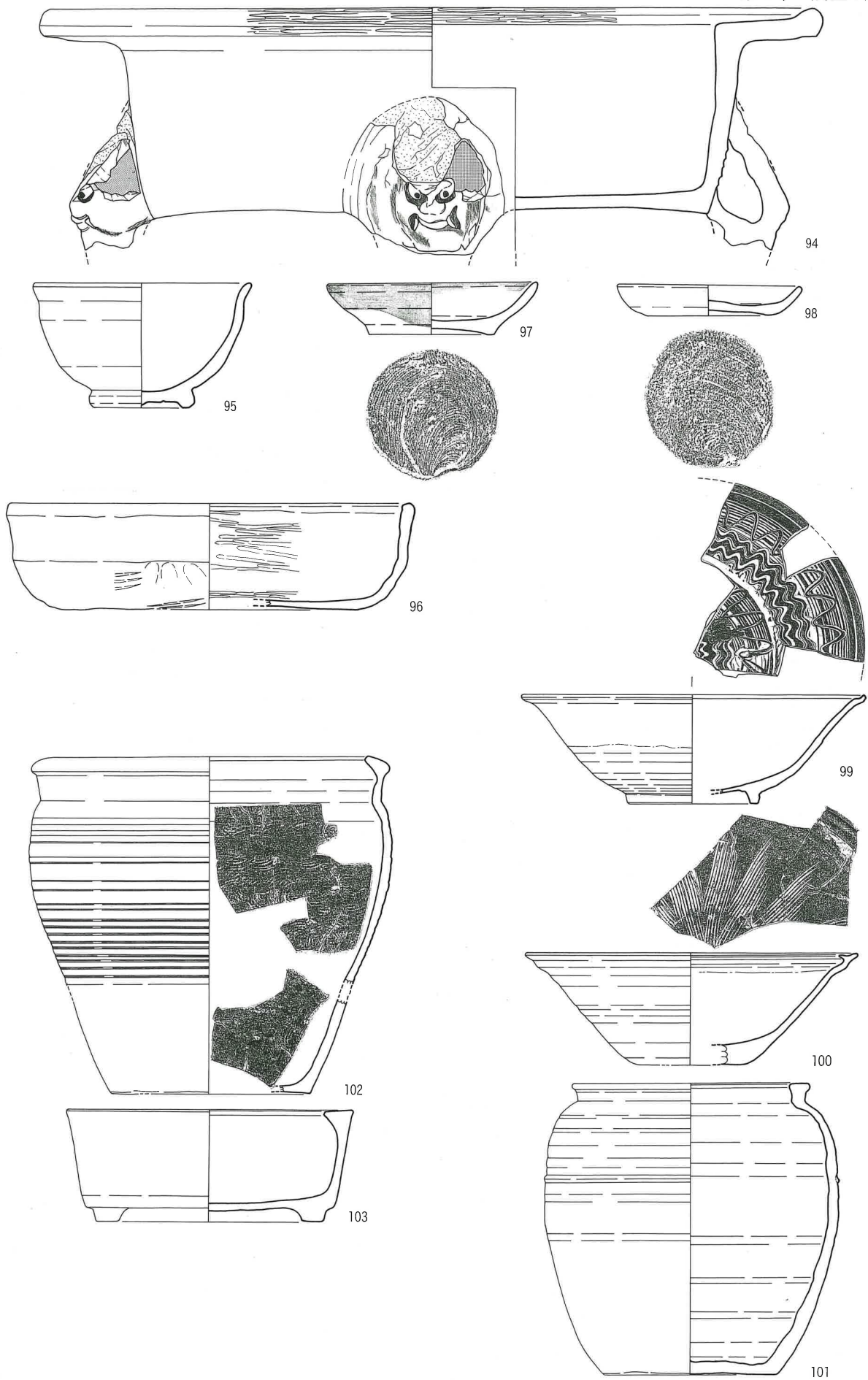
第143図 28調査区出土遺物 (1/3)



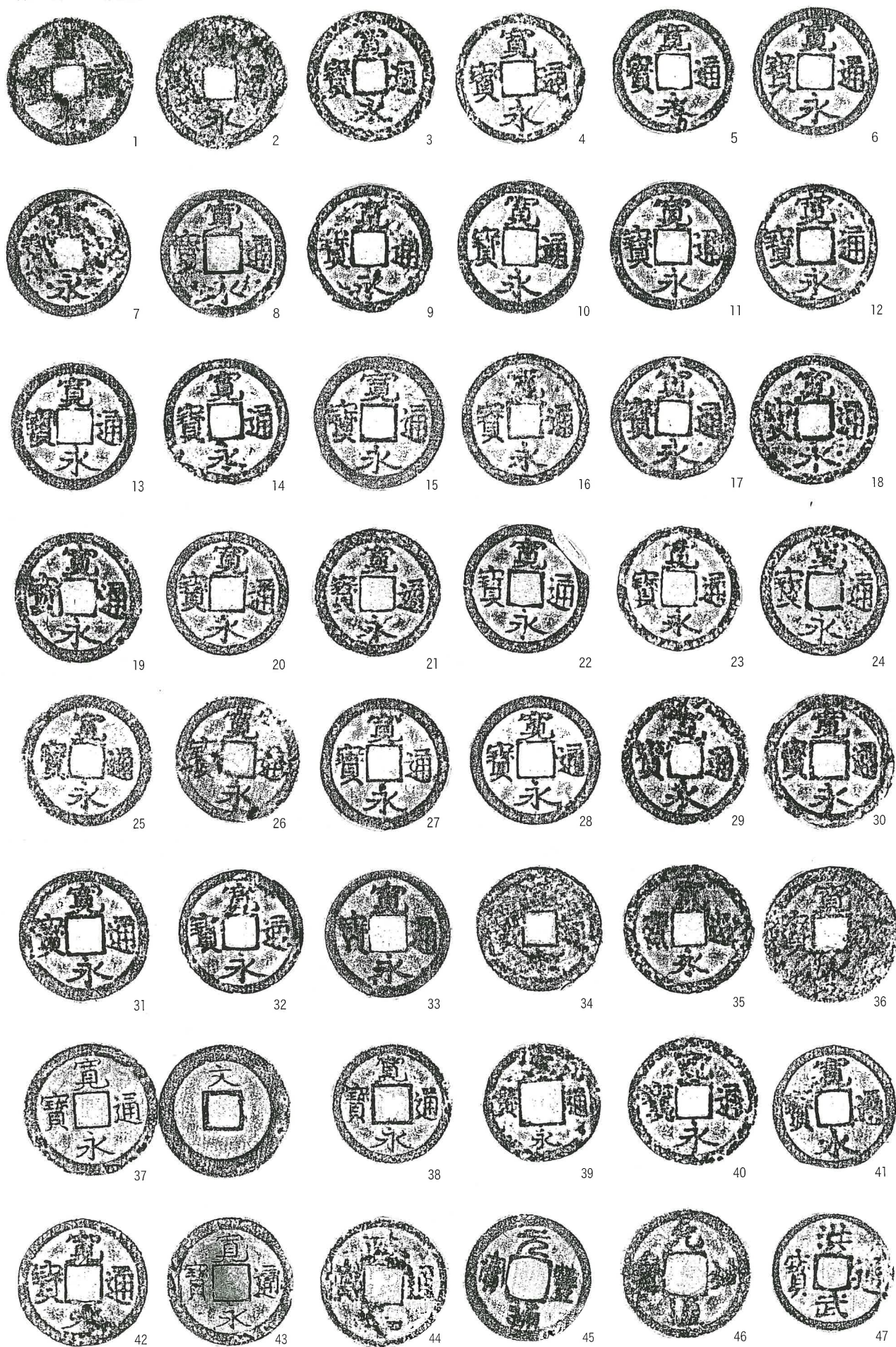
第144図 28調査区出土遺物 (1/3)



第145図 28調査区出土遺物 (1/3)



第146図 28調査区出土遺物 (1/3)



第147図 28調査区出土銭貨（原寸）

表13 28調査区出土遺物観察表

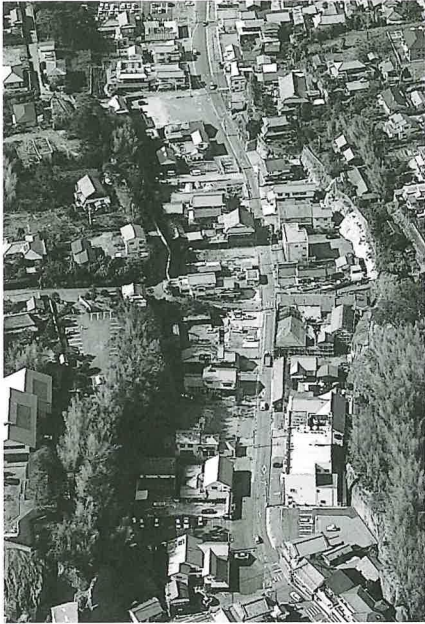
図版番号	遺物番号	グリッド名	遺構名	出土土層		器種		大きさ (cm)				推定産地	特徴	残存度	時期	備考	
								口径	器高	底径	胴部等最大径						
137	1		石組1		覆土	白磁	小杯			2.2			肥前	鎬文	底～体部下半	1630～1650年	
	2		石組1		覆土	磁器	染付碗			4.6			肥前	内面露胎	底部1/3	1630～1650年	
	3		石組1	②		磁器	染付碗			4.6			肥前		体部下半	1630～1650年	
	4		石組1		覆土	磁器	皿						肥前		底部1/5		
	5		石組1	②		磁器	青花皿	12.8	2.6	7.8		中国		底部1/3	16C後半		
	6		溝2周辺	21		磁器	染付皿	12.9	3	4.8		肥前		1/2個体	1630～1650年		
	7					磁器	染付皿					肥前		口縁破片	17C後半		
	8		溝3			磁器	染付碗	10.1	7.3	4.6		肥前		1/3個体	17C後半		
	9		溝3			青磁	瓶		1.0+	6.6		肥前		頸部			
	10		溝3		東西ベルト	陶器	鉢	19.3				肥前	二彩手	口縁破片	17C後半		
	11		溝3			陶器	皿			4.2		肥前	唐津 砂目	底部1/2	1600～1630年		
	12		溝3			陶器	碗	11.7	7.2	5.1		肥前		1/2個体	17C中～後半		
	13		溝4		底面一括	磁器	染付皿			8		肥前	底部「福」	底部1/3	保留		
	14		溝4			白磁	白磁	12.1				肥前		口縁1/5	17C後半		
137	15		溝4			青磁	碗	11.4	4.7	4.2		肥前		口縁1/6			18と接合
138	16		溝4			陶器	碗			5.6		肥前		底部	17C後半		
	17	22	溝5			白磁	碗	12	6.2	4.7		肥前					
	18		杭2		基部	磁器	碗	10.6				肥前		口縁破片	17C中～後半		
	19		杭2		基部	陶器	陶器灰落し			6.7		肥前	外面鉄釉、内面露胎	底部1/3			
	20					磁器	人形		5.5		2.3	肥前	高麗聖人灯心押さえ人形	ほぼ完形	1630～1650年		
	21	14 G			一括	磁器	染付小杯	6.1	3.7	2.4		肥前	鎬文「壽」(略字)体部外2箇所	1/2個体	1630～1650年		
	22	16 G		11		磁器	染付碗	8.8	5.1	4.4		肥前		1/3個体	保留		
	23	8・9 G		11		磁器	香炉	6.3	6.6	6		肥前	外面青海波、桃、牡丹、菊	ほぼ完形			蓋付
	24	13 G		11		磁器	染付皿	13.4	3.2	5		肥前		1/3個体	1630～1650年		
	25	13 G		11		磁器	染付皿					肥前		口縁破片			
	26	23 G		11	上層	陶器	皿			5.1		肥前	京焼風陶器底部「清水」	底部	17C後半		
138	27	8・9 G		11		陶器	搦鉢	34	12.6	12.5					1/3個体		
139	28	8・9 G		11		陶器	搦鉢			10					底部		
	29	12 G		12		磁器	染付小杯	5.9	3.5	2.1		肥前		1/2個体	1630～1650年		
	30	13 G		12		磁器	染付小杯	5.7	3.9	2.5		肥前		完形			
	31	19 G		20		磁器	染付小杯	6	3.4	2.6		肥前	鎬文	1/2個体	1630～1650年		
	32	13 G		20		磁器	染付碗	10.7	7	4.7		肥前		底～体部下半	1630～1650年		
	33	19 G		20		磁器	染付碗	10.6	7.4	4.3		肥前		口～体部1/3	1630～1650年?		
	34	8・12 G		20		磁器	染付皿	12.7	3.7	4.7		肥前		1/2個体	1630～1650年		
	35	5 G		20		陶器	皿			4.2		肥前	唐津 砂目	底部	1600～1630年		
139	36	13 G		20		磁器	染付瓶	1.8	9.2	4.6	9.4	肥前	外面鉄釉	完形			
140	37	15 G		20		磁器	染付碗	8.2	4.3	4.4		肥前		1/4個体			
	38	西南部		20		磁器	染付仏飯器	8.8	7.5	4.8		肥前		1/2個体			
	39	西南部		20		磁器	染付皿						内面指跡、鳥文	1/2個体	1630～1650年?		
	40	23 G		20		陶器	碗			5		肥前?		底部			
	41	19 G		20	下層	陶器	碗	15.2	6.4	6				1/4個体			
	42	22 G		20	上層	陶器	片口	17.7				肥前	唐津	口縁	17C前半		
	43	7・8 G		20		陶器	鉢	30.4				肥前	二彩手、刷毛目	1/5個体	17C後半～17C前半		
140	44	19 G		20	上層	陶器	瓶							胴部1/3			
141	45	5 G		21		磁器	染付碗	10.4						1/4個体	1630～1650年		
	46	20 G		21		陶器	瓶		18.5+	8.5	11.2	肥前	朝鮮唐津薬灰釉	口縁欠く	1590～1600		
	47	31 G		29		陶器	皿	12.9	3.3	3.8		肥前	溝緑皿、砂目	1/2個体	1600～1630年		
	48	22 G		42		青磁	碗	10.6	7.5	4.3		肥前	天目形	1/4個体	1630～1650		
	49	22 G	石列周辺			磁器	染付碗	11.4	6.2	4.6		肥前		1/3個体	1630～1650		
	50	22 G	石列周辺			陶器	碗	11.7	7.8	5.1		肥前		口縁大半欠く	17C後半		
	51	22 G		11・42	攪乱?	磁器	染付大皿			11.7		肥前	山水文	底部	1630～1650		
	52	24 G			造成土中	陶器	碗	13.2				肥前	唐津 溝緑皿	1/4個体	1600～1630年		
141	53	西半部			一括	陶器	碗			4.9		肥前	内外面鉄釉	底部			
142	54	29・32 G	遺物集中範囲	46		陶器	皿	12.8	2.9	4.4			溝緑皿	ほぼ完形			

第12節 28調査区

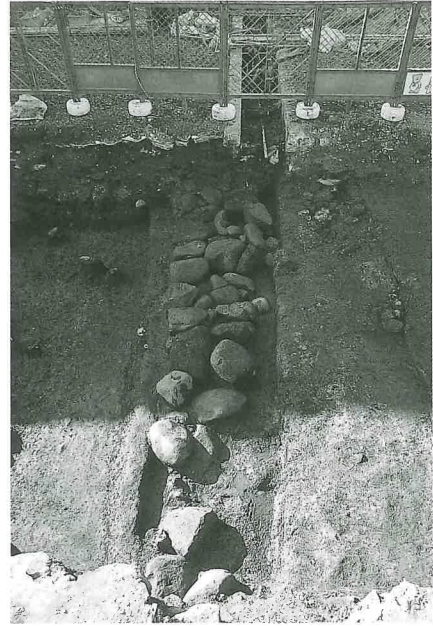
図版番号	遺物番号	グリッド名	遺構名	出土土層		器種		大きさ (cm)				推定産地	特徴	残存度	時期	備考
								口径	器高	底径	胴部等最大径					
142	55	29・32 G	遺物集中範囲	46		磁器	大皿	34.6	9.8	10.3				ほぼ完形		
	56						漆器碗									
142	57	24 G			一括	磁器	磁器	6.6	5.1	6.3			「岐 449」	完形	近代(昭和10~20)	
図版番号	遺物番号	グリッド名	遺構名	出土土層		器種		大きさ (cm)				推定産地	特徴	残存度	時期	備考
								長さ(径)	最大値	厚さ	重量(g)					
143	58	9		10			煙管	7.8	1.5		6.7			雁首		
	59	16					煙管	7.3	1.6		7.3			雁首		
	60	19		11			煙管	4.5	1.5		5.7		肩をもつ	雁首		
	61	19		12			煙管	6.9+	1.7		10+			雁首残欠		
	62	22		12			煙管	8+	1.5		9+			雁首残欠		
	63	22		11			煙管	4.5+	1.5		4.5+			雁首残欠		
	64	31		10			煙管	7.7	1.9		20.5			雁首		
	65		調査区西南部				煙管	4.8+	1.7		7+			雁首残欠		
	66	29			焼土層		飾金具	2.3	2.2	0.05	1.2					
	67	28		11			銅製品						鉉?	残欠		
	68	16		6			鉄釘	6.1	1.4	0.8	21.2					
	69	6		33			包丁	22+	4.1	0.3	85+		刃渡 18.5	中茎を欠く		
	70	14		12			刀装具	4	2.3	0.8	6.9			柄縁		
	71	12		11			軒丸瓦							瓦当面		
143	72		溝 3				軒丸瓦							瓦当面 2/3		
図版番号	遺物番号	グリッド名	遺構名	出土土層		器種		大きさ (cm)				推定産地	特徴	残存度	時期	備考
								口径	器高	底径	胴部等最大径					
144	73	5・8・29		12・20		磁器	染付小杯	6.4	2.4	4		肥前		1/2 個体		
	74	12・19		11		磁器	染付碗	9.6	5.1	4.8				1/4 個体		
	75			20		磁器	染付皿	13.2	3.9	5.8		肥前	見込みに鶴?の文様	1/2 個体	1610~1630	
	76	12・14・16		12・15		磁器	染付皿	13.4	3.2	4.7		肥前	山水文	4/5 個体	1640~1650	
	77	20・29・32		20・47・107		磁器	染付皿	13.4	3.4	5.4		肥前	見込みに椿文	4/5 個体	1630~1640	
	78			20		磁器	染付皿	14	3.2	6		肥前		破片	1630~1640	
	79	31・32		10・20		磁器	染付皿	12.2	5.5	11.9		肥前		1/2 個体		
	80	16・28		20		磁器	染付皿	14	3.9	4.9		肥前	有田猿川、雲文	2/3 個体	1620~1640	
144	81	16・17・18・19		11		磁器	染付大皿	29.7	5	19		肥前	有田長吉谷窯、菊花型、牡丹模様	1/3 個体	1660~1670	上質の皿
145	82	20		11		磁器	青磁皿	21	5.2	7.8		肥前		1/3 個体	1630~1640	
	83	32		10		磁器	白磁碗	7.4	4.7	3.3				1/3 個体		
	84	13・14		10		磁器	白磁皿	8	2.2	3.7		中国				
	85	13・15 G		8・11		磁器	鉢	25	7.6	7.2		肥前	銅緑袖掛け分け、外面透明釉	1/3 個体	17C 第四半~18C	
	86	19		11		素焼	土鈴		4.5					1/2 個体		
	87	28				陶器	小皿	7.4	1.2	3.6				1/3 個体		
	88					陶器	蓋	7.6	1.4	4.4		瀬戸美濃	鉄釉、壺類の蓋	完形	16C 末~17C 前	
	89	6・9・12・16・22・31		11・15・28		陶器	瓶			15		備前		1/2 個体	16C 末~17C 前	
	90	5 G		23		陶器	長胴甕					ベトナム	ベトナム焼縮陶器	胴部	1630~1640	
	91	30			焼土層	陶器	抹茶碗	10.2	6.5	4.2				1/3 個体		
	92	20		11		陶器	水注			7.4		備前	火摩文様、手付き		16C 末~17C 前	
145	93	31・32		20・102		陶器	碗	11.2	6.6	5.4				1/2 個体		
146	94	19・20・22 G		11		瓦質	火鉢					肥前			江戸	
	95	18・29		20・21		陶器	碗	11.8	6.7	5.8		萩?		口縁1/2を欠く		
	96	3	溝と3G接合			土師質	鉢	21.8	5.7	16						
	97	20		20		土師質	小皿	11.5	2.8	6.9				1/2 個体		
	98	20		20	上層	土師質	小皿	10.1	1.7	6.9			灯明皿	ほぼ完形		
	99	15・17・20		11		陶器	ハケメ皿	36.8	11.8	14		肥前		1/4 個体	17C 後~18C 前	
	100	21・25	溝 5	29		陶器	備前播鉢			35.6		備前		1/4 個体		
	101	8・9・10	土坑 9	14・17		陶器	備前甕	26	31.5	18.8		備前		1/3 個体		
	102	9・22・30・32		20		陶器	備前甕					備前		破片		
146	103	9		11		土師質	角鉢			12.1						

表14 28調査区出土銭貨観察表

図版 番号	番号	グリッド 名	遺構名	出土土層		種類	大きさ		備考
							径 (cm)	重量 (g)	
147	1		調査区	10		古寛永	2.4	3.4	
	2	15 G		11		古寛永	2.4	3.7	
	3	15 G		11		古寛永	2.4	2.9	
	4	17 G		11		古寛永	2.4	3.5	
	5	17 G		11		古寛永	2.3	2.2	
	6	18 G		11		古寛永	2.4	3.1	
	7	18 G		11		古寛永	2.4	3.6	
	8	19 G		11	上層	古寛永	2.4	3.3	
	9	19 G		11	上層	古寛永	2.3	2.6	
	10	31 G		11		古寛永	2.4	3.1	
	11	12 G		12		古寛永	2.4	3	
	12	12 G		12		古寛永	2.3	5.1	
	13	12 G		12		古寛永	2.4	2.5	
	14	12 G		12		古寛永	2.4	3.2	
	15	18 G		12		古寛永	2.4	2.8	
	16	5 G		18		古寛永	2.4	2.9	
	17	15 G		20		古寛永	2.3	4.5	
	18	19 G		20	下層	古寛永	2.4	2.5	
	19	31 G		20	上層	古寛永	2.4	3.5	
	20	9 G		20		古寛永	2.3	2.7	
	21	9 G		20		古寛永	2.3	3.3	
	22		遺構①	20		古寛永	2.4	2.5	
	23		遺構①	20		古寛永	2.3	2.1	
	24	28 G		39		古寛永	2.4	4.1	
	25	11 G		88		古寛永	2.3	2.4	
	26	32 G		102		古寛永	2.3	2.7	
	27	18 G	サブトレ			古寛永	2.4	3	
	28	18 G	サブトレ			古寛永	2.4	3.5	
	29	22 G			一括	古寛永	2.5	2.3	
	30	26 G	遺構			古寛永	2.5	3.6	
	31	29・30 G	サブトレ			古寛永	2.4	3.4	
	32		遺構①			古寛永	2.3	2.8	
	33		調査区		一括	古寛永	2.4	2.8	
	34	16 G		11	上層	古寛永?	2.3	2.3	
	35	12 G		12		古寛永?	2.4	3	
	36	29 G			焼土層	古寛永?	2.5	3.9	
	37	26 G				新寛永	2.5	3.1	文銭
	38	21 G		6		新寛永	2.3	2.4	
	39	13 G		8		新寛永	2.2	2.6	
	40	30 G		10		新寛永	2.4	3.2	
	41	9 G		11		新寛永	2.3	3.2	
	42	6 G		17		新寛永	2.4	3.7	
	43	30 G			焼土層	新寛永	2.4	3.5	
	44	17 G		11		政和通寶	2.4	2.9	北宋銭初铸1111年
	45	31 G		12		元豊通寶	2.4	3.2	北宋銭初铸1078年
	46	32 G		107		元豊通寶	2.4	2.7	北宋銭初铸1086年
147	47	19 G		11	下層	洪武通寶	2.2	4.3	明初铸 1368年



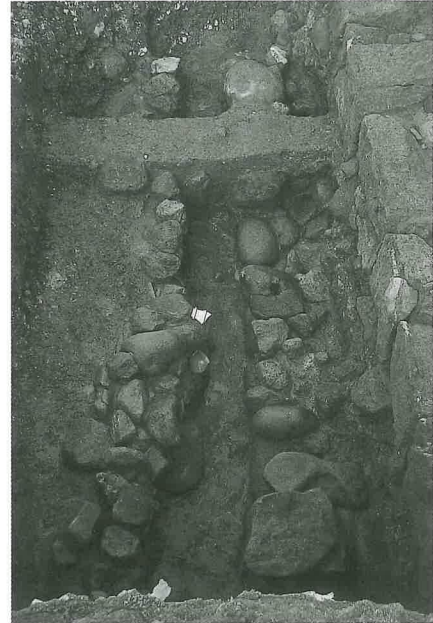
28調査区遠景
(東上方向から)



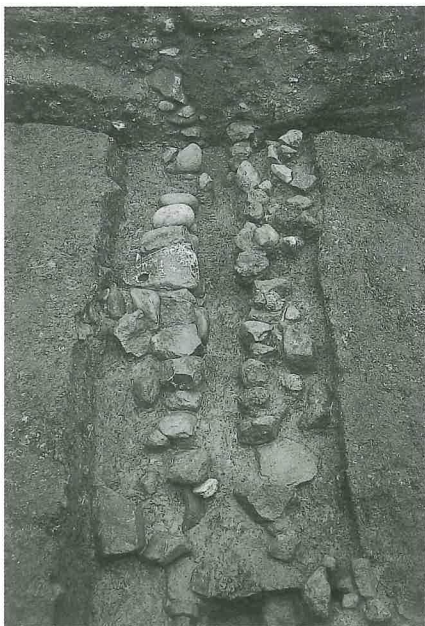
溝1全景
(北方向から)



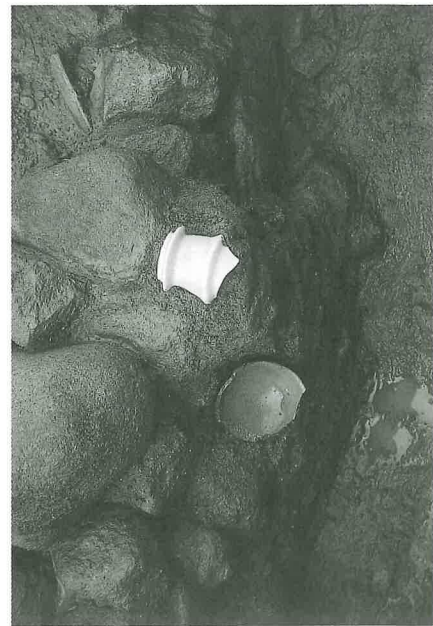
溝2全景
(南方向から)



溝3全景
(南方向から)



溝4全景
(南方向から)



溝3遺物出土状態
(南方向から)

第13節 29調査区

1 調査の概要 (第148図、写真13)

29調査区は谷町の酢屋・志保屋坂と町屋の道路との交差点に接する南東地区にあたる。絵図ではこの交差点から西へ5筆目から2筆目が調査対象地であった。2筆は東から山里屋兵助、油屋丈吉の屋敷にあたる。山里屋敷については、28調査区の西部に当たるが、遺構配置の確認と西端部下層が未調査のため、その部分を調査対象とした。各屋敷の境は、溝4が楠屋為右エ門と山里屋兵助屋敷との境、溝3が山里屋兵助と油屋丈吉の屋敷との境を区画する溝と推定される。

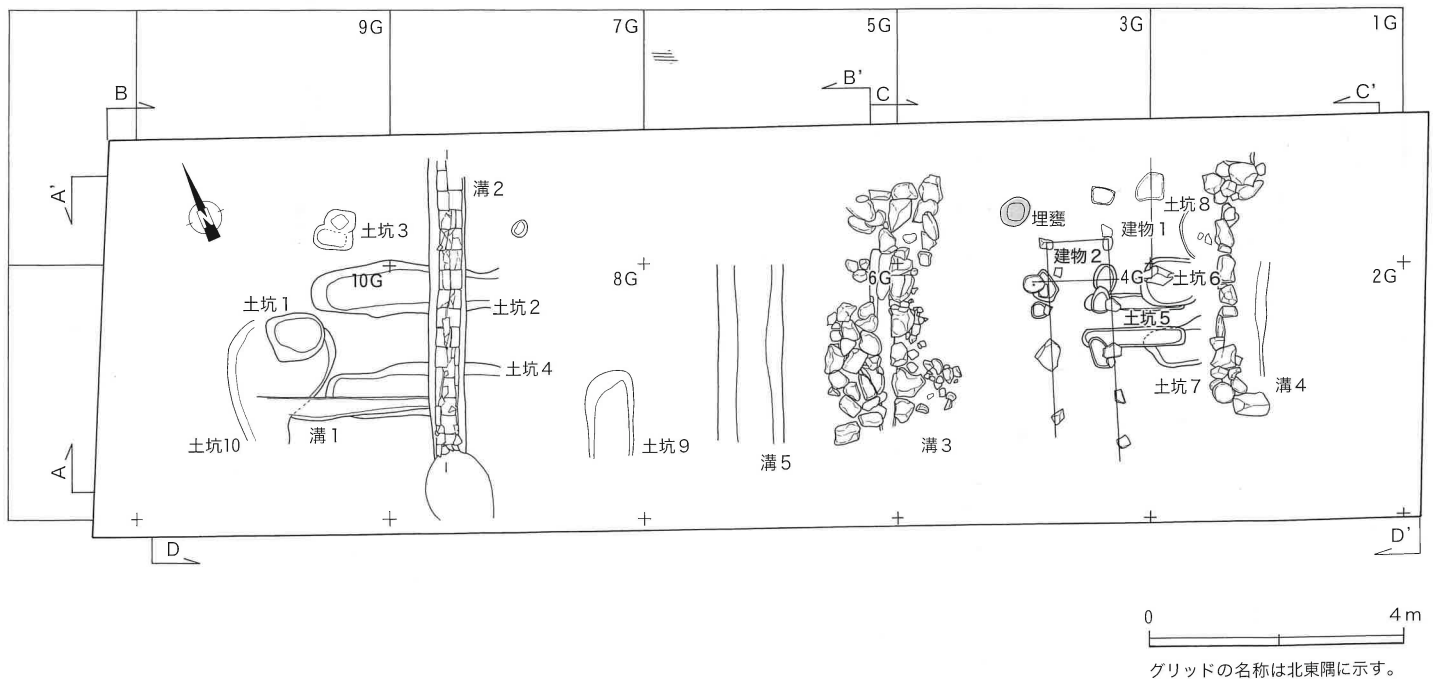
調査の結果、溝、土坑や建物基礎部分の一部などを確認した。特に区画となる溝は石組みを伴う排水溝であった。

出土遺物として、主に17世紀初頭頃から18世紀後半の陶磁器類、金属製品、銭貨などがある。

2 基本層序 (第149～153図)

土層の堆積状態は、現道路面から谷の自然堆積土（シルト層）まで約1.8mで達するが、シルト上層の堆積土は火災痕跡と造成土を交互に積み重ねた人為的な整地を示していた。焼土面は各時期の生活面といえるものであり、8面を確認した。

西辺部の土層断面A-A' (第149図) では、1～24層を観察できた。上層から1-①・②の2層が現在の造成土である。焼土面（生活面）は上から1面～8面までを確認した。生活面は焼土・炭化物主体層の上に、主に地山の混雑黄褐色土を用いた整地層の上面である。1面（2層上面）は焼土層（3層）の上に堆積する硬化砂層で北端部付近に若干残る。2面は造成土（5層）の上面で被熱赤変している。北半部に残る。3面（12層）は造成土（7層）上面の砂層である。4面は焼土層（14層）上面の硬化面である。5面は造成土（19層）の上層（18層）である。6面は造成土（22層）上の炭化物層（20層）である。7面は造成土（23層）上面の被熱硬化面である。8面は最下層の造成土（24層）上面の被熱硬化面である。3面～8面は北半部が大きく改変され、南端部付近に残る。



第148図 29調査区遺構配置図 (1/120)

北辺部の土層は東西で大きく異なるため、土層断面図を西半部B-B'（第150、152図）と東半部C-C'（第151図）に分けて作成した。中央部から東半部にかけて複数の掘込み、造成の痕跡がみられる。

南辺部D-D'では、西端部でA-A'と共通し、4面～8面を確認できた。中央付近では、7層を掘削する造成がみられ、東半部では9層（シルト層）に及ぶ大きな改変が顕著であった。

各面・各層の時期は、3面が直下の7層出土遺物から18世紀後半、4面は直下の14層出土遺物から18世紀前半、5面が17世紀前半以降、7面は直下の23層の出土遺物から17世紀中頃と考えられる。また、9面から1600年前後の陶磁器類が出土している。7面が27調査区の5面と対応し、シルト層の遺物は17世紀初頭頃と同様であった。

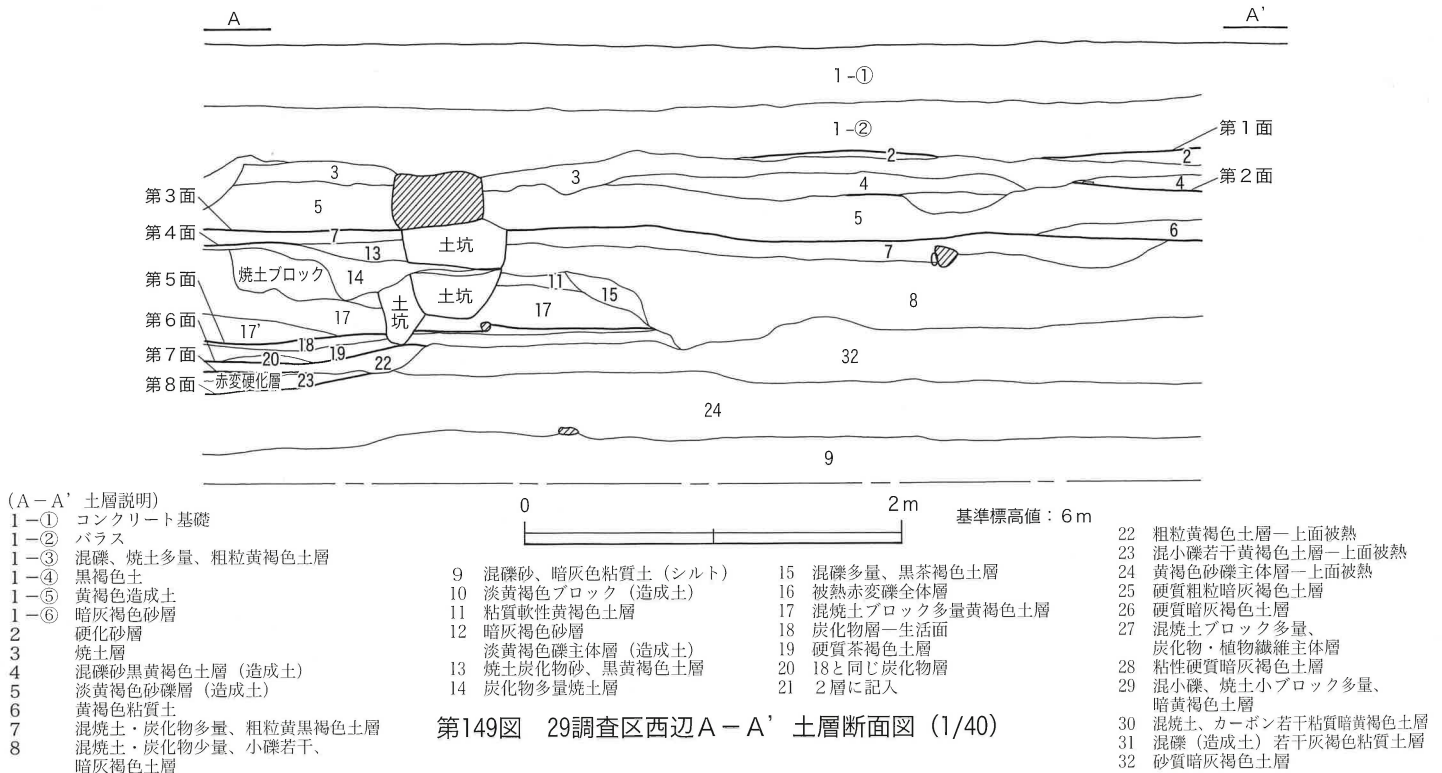
3 検出遺構（第148、154～159図）

溝1（第154図）は、調査区西部のほぼ10Gに位置する。東西に延びる溝である。主軸方向は北68度西を指向し、町屋の街路と平行する。確認面での規模は長さ2.5m、幅0.2m～0.3m、深さ0.1m程度である。土坑4を切って作られている。

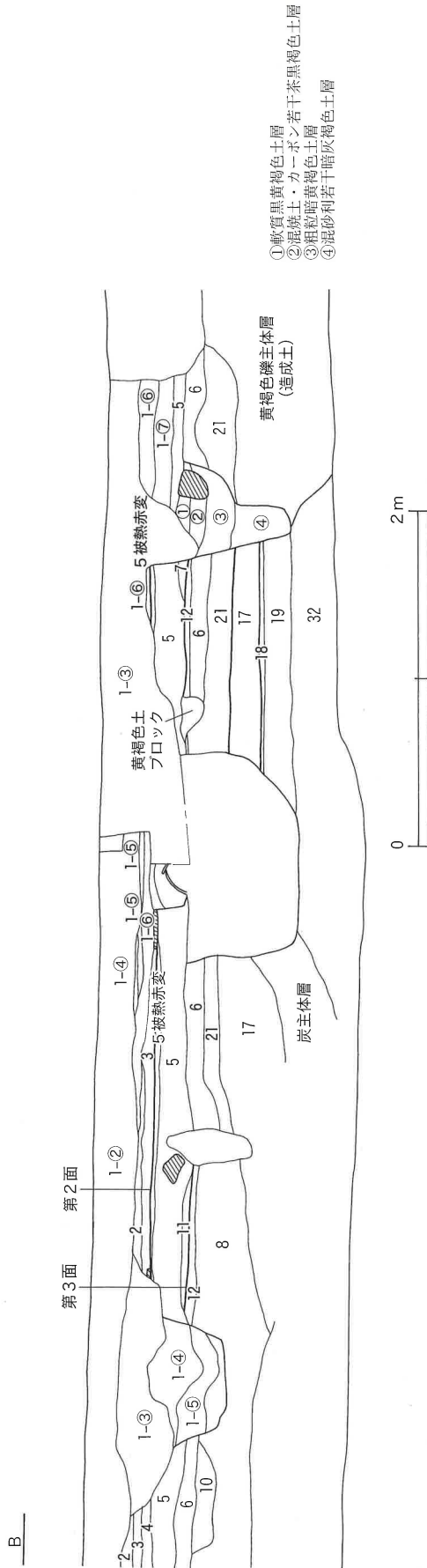
溝2（第155図）は、調査区西部の8Gと10G間に位置する。主軸方向は北20度東を指向し、街路に対して直交する溝である。構築方法に特徴がある。溝掘形に平瓦を並べ底面とし、これを挟むように両側面から瓦を合わせて被覆している。底面・被覆瓦が断面で三角形をなす。掘形規模は確認長3.4m、幅0.4m～0.45m、深さ0.15m～0.2mである。北辺の土層断面B-B'では、2面を切って構築されており、近世末・近代～の遺構と考えられる。

溝3（第156図）は6Gに位置する。5面下に構築されている。主軸方向は北22度東を指向し、街路に対して直交する石組の溝である。検出面での規模は長さ約4m、幅1.5mの範囲に石材の広がりが見られる。溝は幅0.2m、深さ0.2m程度を確認できる。北辺の土層断面B-B'では、溝3と対応する位置には近代以降の面から掘り込まれた溝があり、南辺ではやはり現地表からの溝がみられる。溝が位置を変えずに作り替えられた結果といえる。溝の時期は近代以降と考えられる。

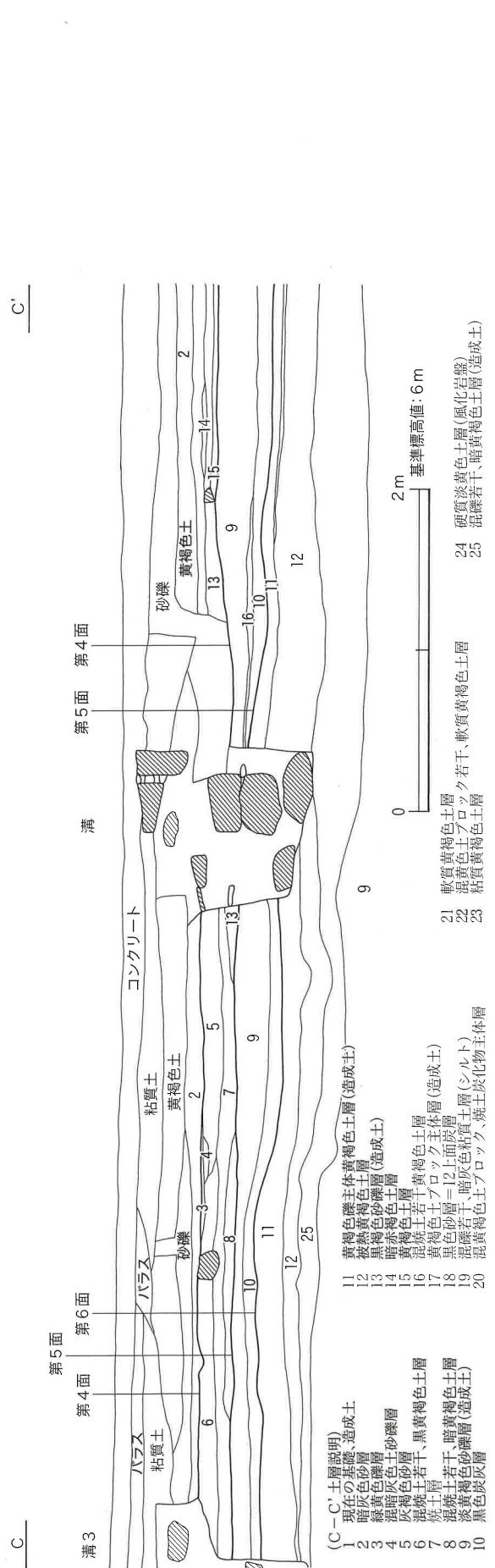
溝4（第157図）調査区東部の2Gと4G間に位置する。南北に延びる溝である。主軸方向は北22度東を指向し、町屋の街路に対して直交する。石組をもつが遺存状態はよくない。確認面での規模は長さ6m程度であるが両端部は不明確である。また、東側の石組は欠失している。溝は北辺の土層断面C-C'東部では、現道路面の下から掘り込んでいるが、平面図で示した石組はその底面付近に残る。現在の排水溝は下位の溝の位置を踏襲して設置されている。



第149図 29調査区西辺A-A' 土層断面図 (1/40)



第150図 29調査区北辺西半部土層断面図 (1/40)



第151図 29調査区北辺東半部C-C'土層断面図 (1/40)

- ①軟質黒黄褐色土層
- ②混砂土・カーボン若干茶黒褐色土層
- ③粗粒暗黄褐色土層
- ④混砂利若干暗灰褐色土層

- (C-C'土層説明)
- 1 現在の基礎 造成土
 - 2 暗灰色砂層
 - 3 凝黄褐色土層
 - 4 凝黄褐色土層
 - 5 凝黄褐色土層
 - 6 灰褐色砂層
 - 7 凝砂土層
 - 8 凝砂土層
 - 9 凝砂土層
 - 10 凝砂土層

- 11 黄褐色土主体層 (造成土)
- 12 黄褐色土主体層 (造成土)
- 13 黄褐色土主体層 (造成土)
- 14 黄褐色土主体層 (造成土)
- 15 黄褐色土主体層 (造成土)
- 16 黄褐色土主体層 (造成土)
- 17 黄褐色土主体層 (造成土)
- 18 黄褐色土主体層 (造成土)
- 19 黄褐色土主体層 (造成土)
- 20 黄褐色土主体層 (造成土)

- 21 軟質黄褐色土層
- 22 混砂土フロック
- 23 粘質黄褐色土層
- 24 軟質淡黄色土層 (風化岩盤)
- 25 混砂若干、暗黄褐色土層 (造成土)

建物1・2（第159図）は3G東南区、4G東半区に位置する。建物1は土層断面C-C'の5層面に礎石が配置され、南東隅と北、西に各1石の計3石が残っていた。建物2は1間×4間以上の建物と想定される。礎石は北辺2石と東辺4石、西辺3石が残る。礎石は16層面に配置されており、17世紀後半～18世紀前半の構築と考えられる。

埋甕（第158図）は3G南中央付近に位置する。掘形は底径0.3mの規模を確認できた。深さは0.1mほど残る。甕は底部から胴下部にかけて残っていた。掘形は土層断面C-C'の2層より上部からの掘り込まれているものと考えられる。

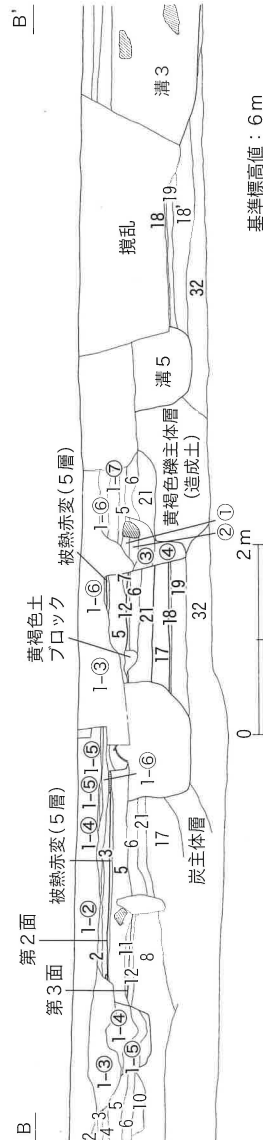
土坑（第154図）は1～10の10基を検出した。土坑1～4、9、10は7G～10Gに、土坑5～8は1・2・4Gに位置する。土坑1は径0.9mの円形を呈する。内部に礫が充填されており、建物基礎の可能性もあるが、周辺にその痕跡は発見されていない。土坑2・4は東西方向に長い楕円形を呈し、ともに確認長約3m、幅0.8m程で、2面よりも上層から掘り込まれている。土坑3は土層断面B-B'7層よりも上層から掘り込まれている。土坑5は1.5m×0.3mの長楕円形を呈す。掘込み面は土層断面C-C'13層上部と考えられる。土坑6・7・8は径0.7m程の円形を呈し、16層以上から掘り込まれている。

4 出土遺物（第160～164図、表15、16）

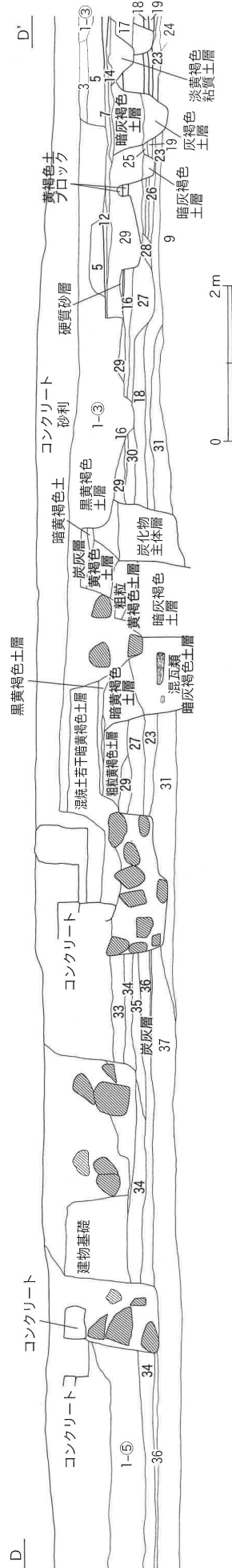
29調査区から出土した遺物はコンテナ52箱と多量であった。このうち磁器35点、陶器17点、土師質土器など6点、瓦類6点、金属製品17点、銭貨92点の計174点を図示した。

陶磁器類（第160～162図）

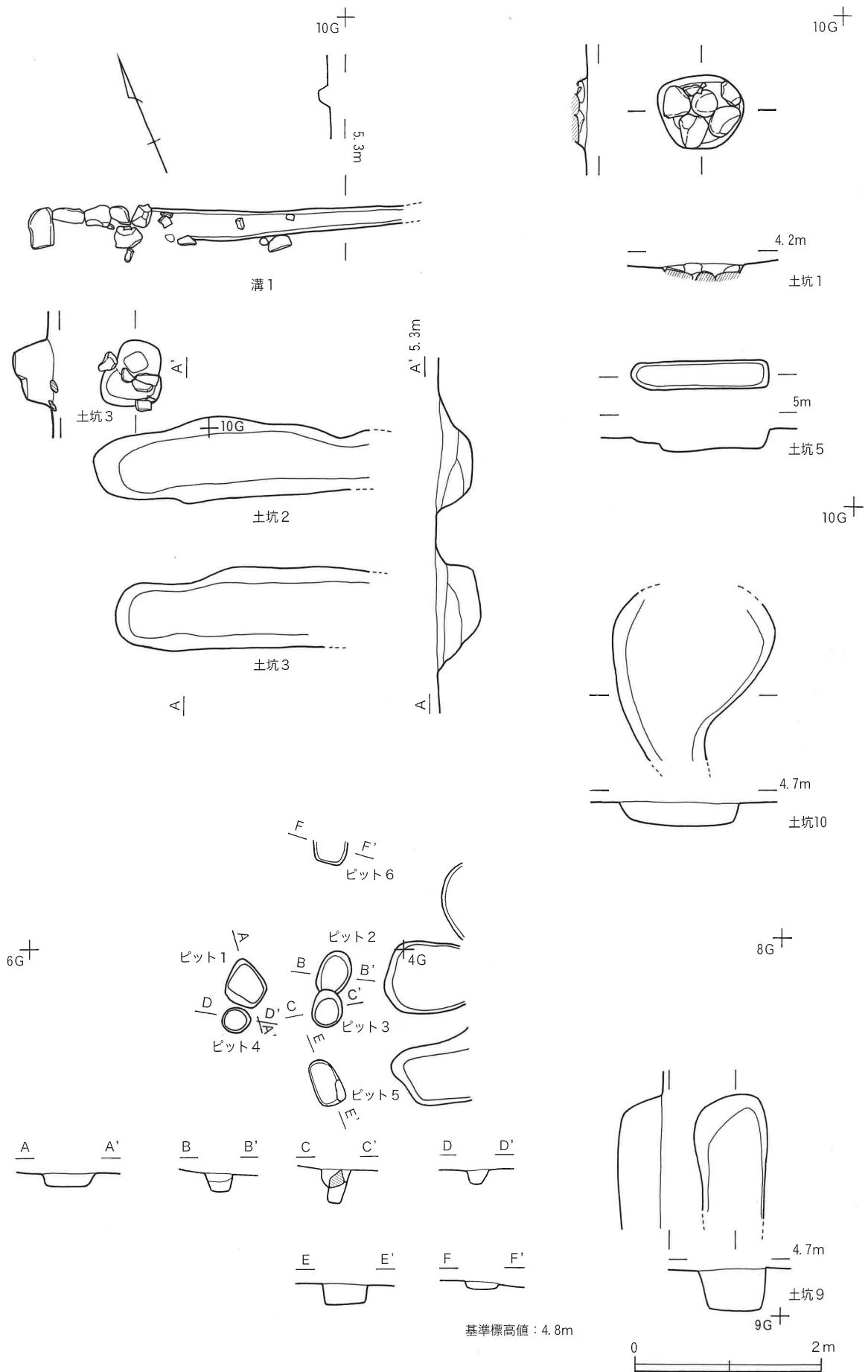
各層の出土陶磁器類は、3面直下の7層中に1630～1650年、1690～1740年及び18世紀後半の染付碗（9・10・11）がみられた。4面直下の14層には1630～1650年の染付小杯（22）、17世紀末～18世紀前半の陶器香炉（24）が出土している。5面下層の19層から1600～1630年の唐津が出土している。7層下層の23層から17世紀中頃の時期を示す染付碗、青花碗、陶器蓋（40、41、43）がみられる。ただ、46の陶器香炉は17世紀末～18世紀前半を示しており、上層からの混入の可能性がある。



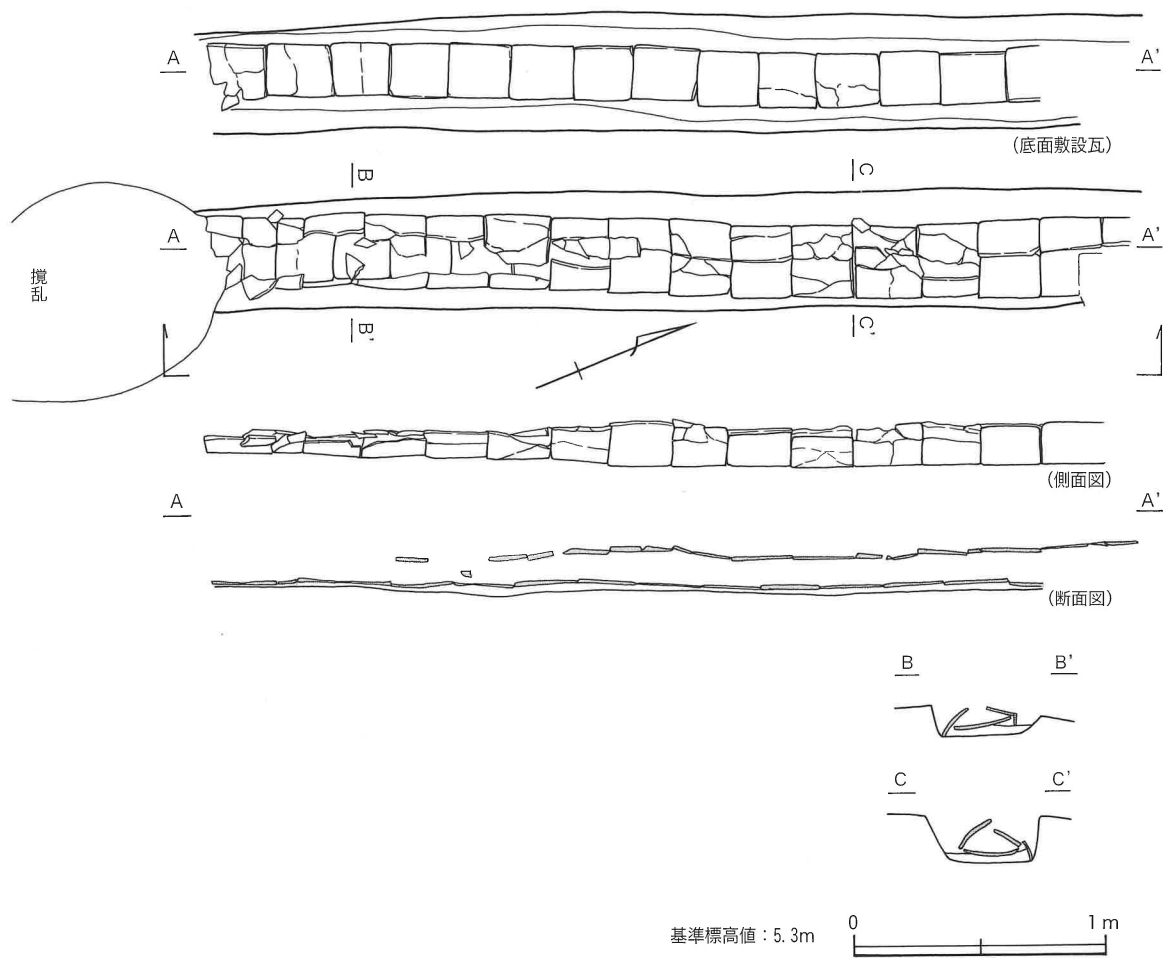
第152図 29調査区北辺西半部B-B' 土層断面図 (1/80)



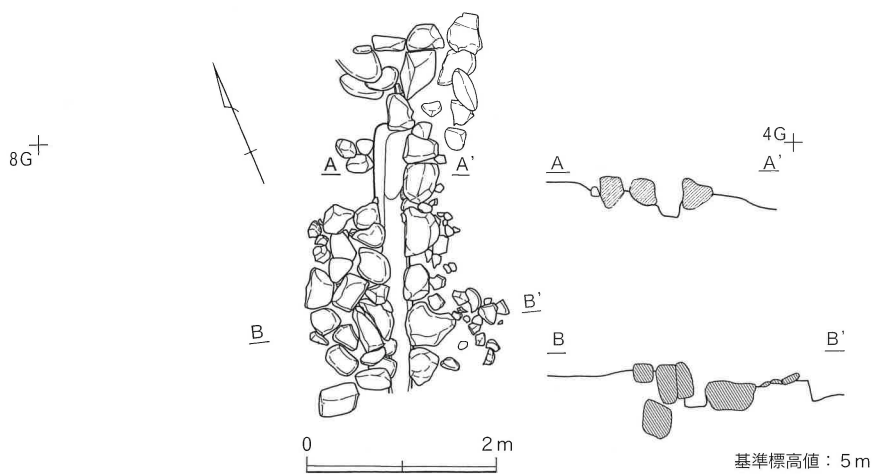
第153図 29調査区南辺D-D' 土層断面図 (1/80)



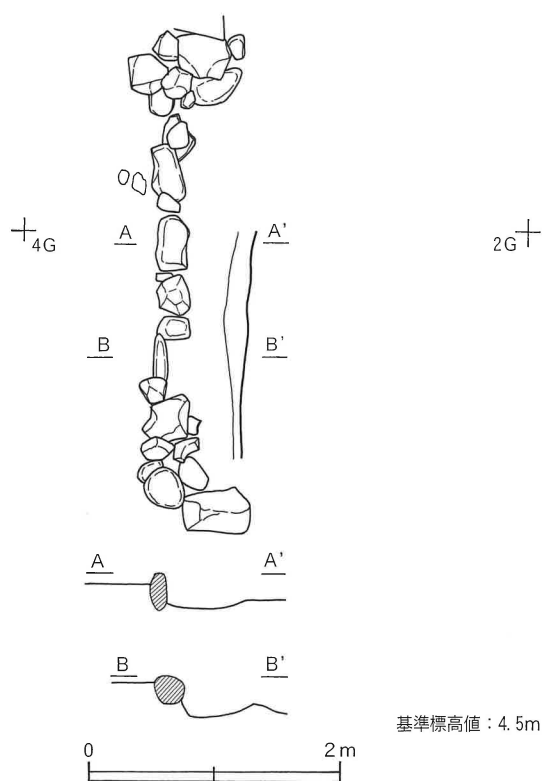
第154図 29調査区溝1、土坑1・2・3・5・9・10、ピット1～6実測図 (1/60)



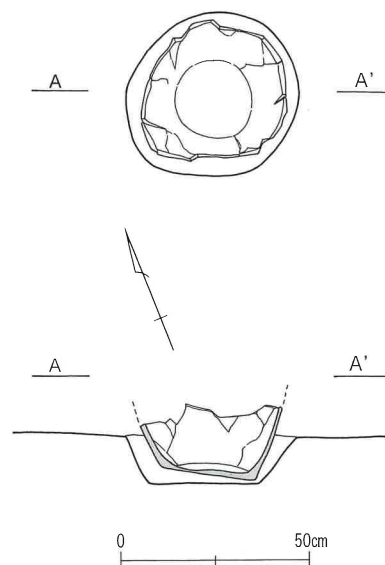
第155図 29調査区溝2実測図 (1/30)



第156図 29調査区溝3実測図 (1/80)



第157図 29調査区溝4実測図 (1/60)



第158図 29調査区埋甕実測図 (1/20)

9層のシルト上層から1580年～1640年代の青花小杯(13)、17世紀代の陶器碗が出土しており、28調査区のシルト層出土遺物の時期と矛盾はない。

土師質皿 (第165図78～82)

9層・14層、17層から出土した5点を図示した。口径8.8cm～11.1cm、器高1.7cm～2.1cm、底径5.8cm～9.6cmの大きさである。

瓦類 (第164図66～71)

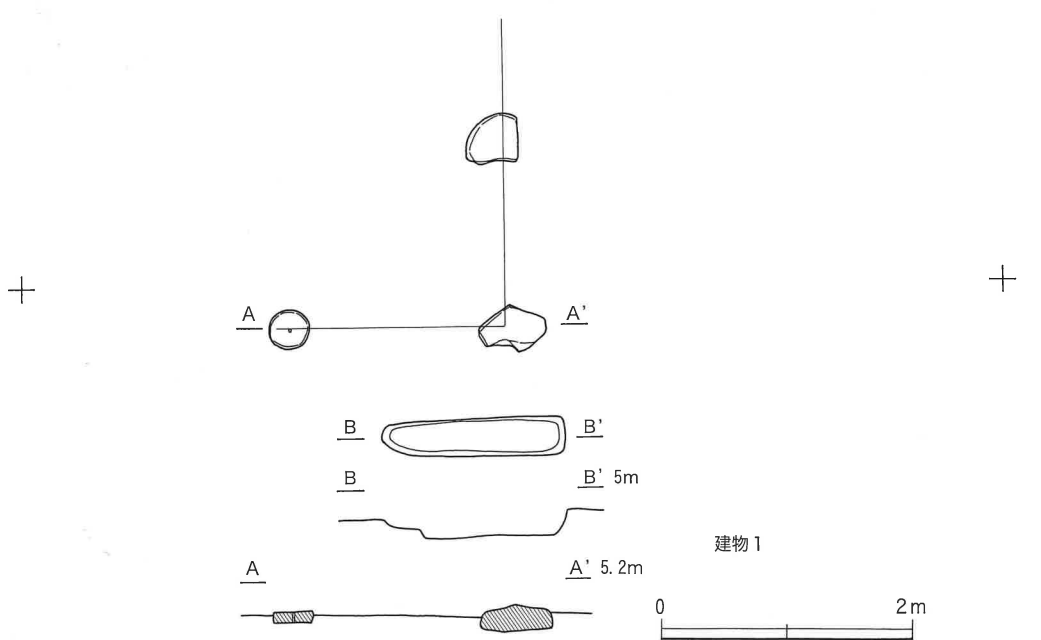
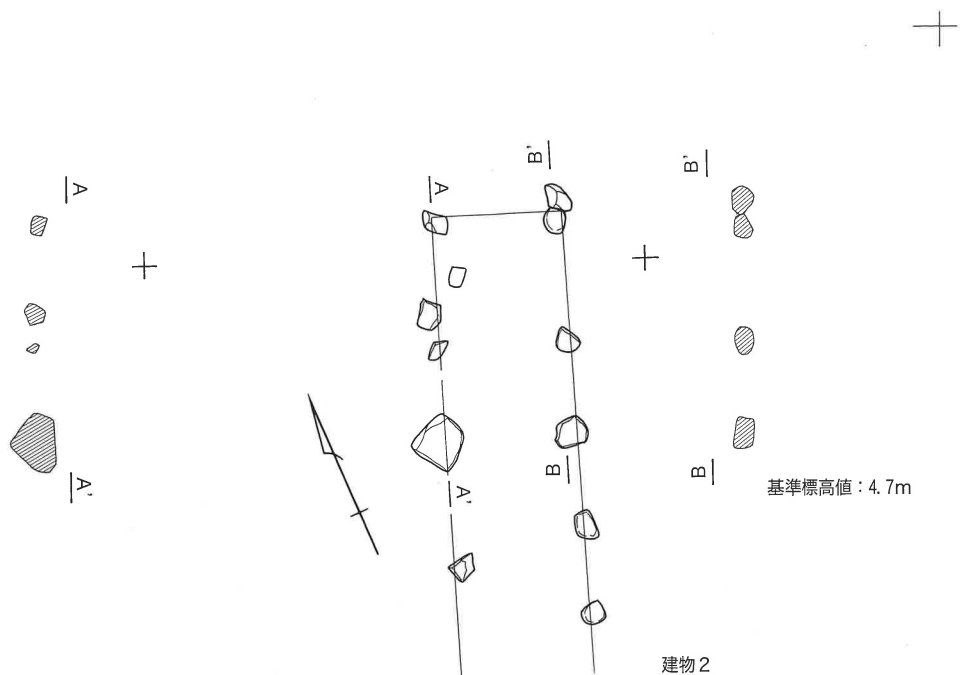
溝2の構築材である平瓦42点のうち、6点を図示した。長さ24.2cm～25.3cm、幅22cm前後、厚さ2cm程度である。溝の被覆に用いた瓦は相互に接する側縁部を打ち欠いて調整している。

金属製品 (第163図49～65)

煙管の吸口3点、雁首6点出土した。鏡(58)は完形品である。径9.7cm、厚さ0.5cm、重さ235gである。60～62は小柄と思われる。表面に線刻などの装飾がみられる。65は錘と考えられる。重さ41.9gである。64は頭巻釘である。59は銅製品の表面の一部であろう。

銭貨 (第166図～第167図)

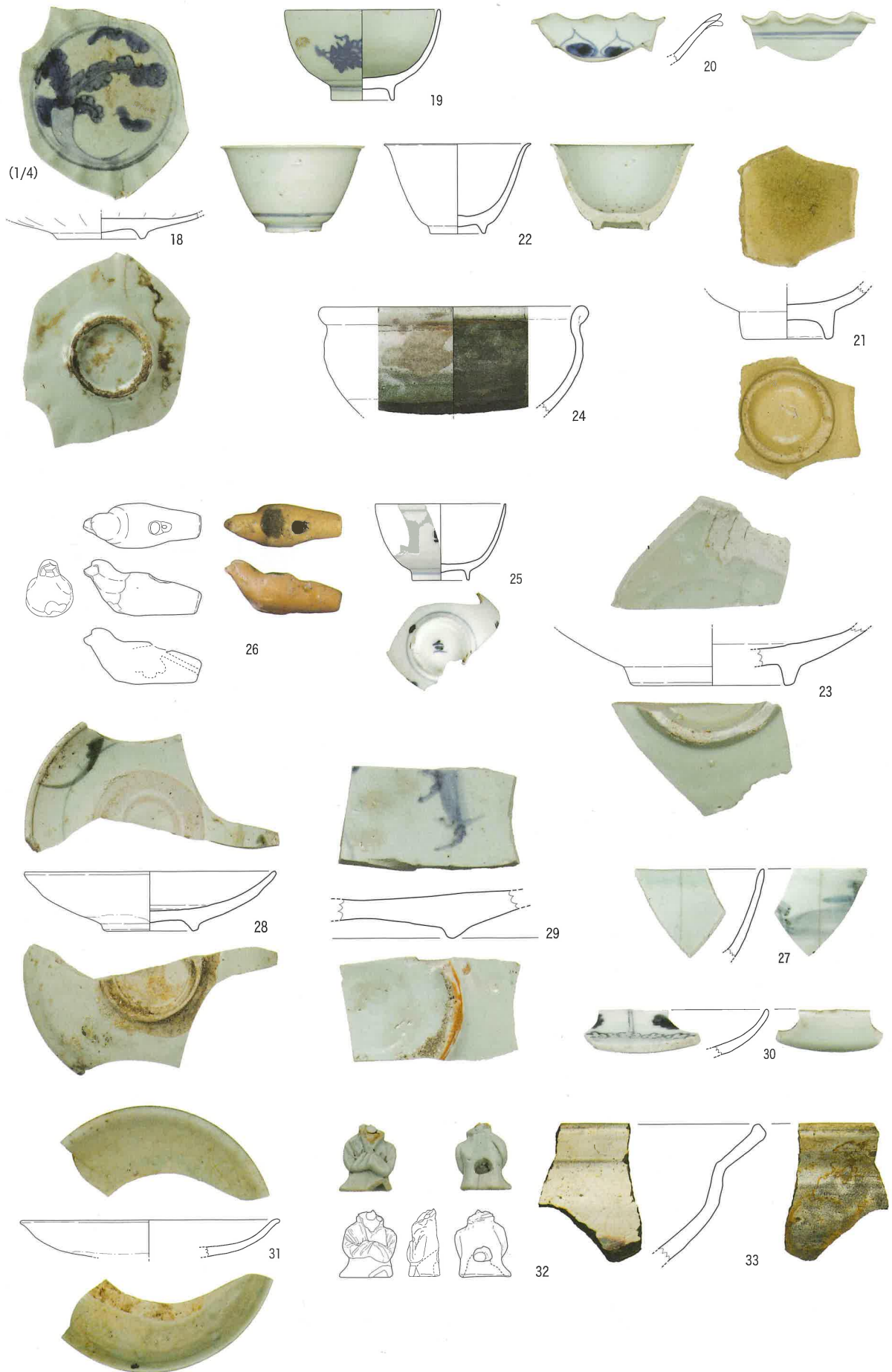
「古寛永銭」69点、「新寛永銭」17点、中国銭「皇宋通寶」1点、「永楽通寶」2点、「開元通寶」、「洪武通寶」、「紹聖元寶」各1点など計92点の拓影を掲載した。



第159図 29調査区建物1・2実測図 (1/60)



第160図 29調査区出土遺物 (1/3) ※4・17は1/4



第161図 29調査区出土遺物 (1/3)

※18は1/4



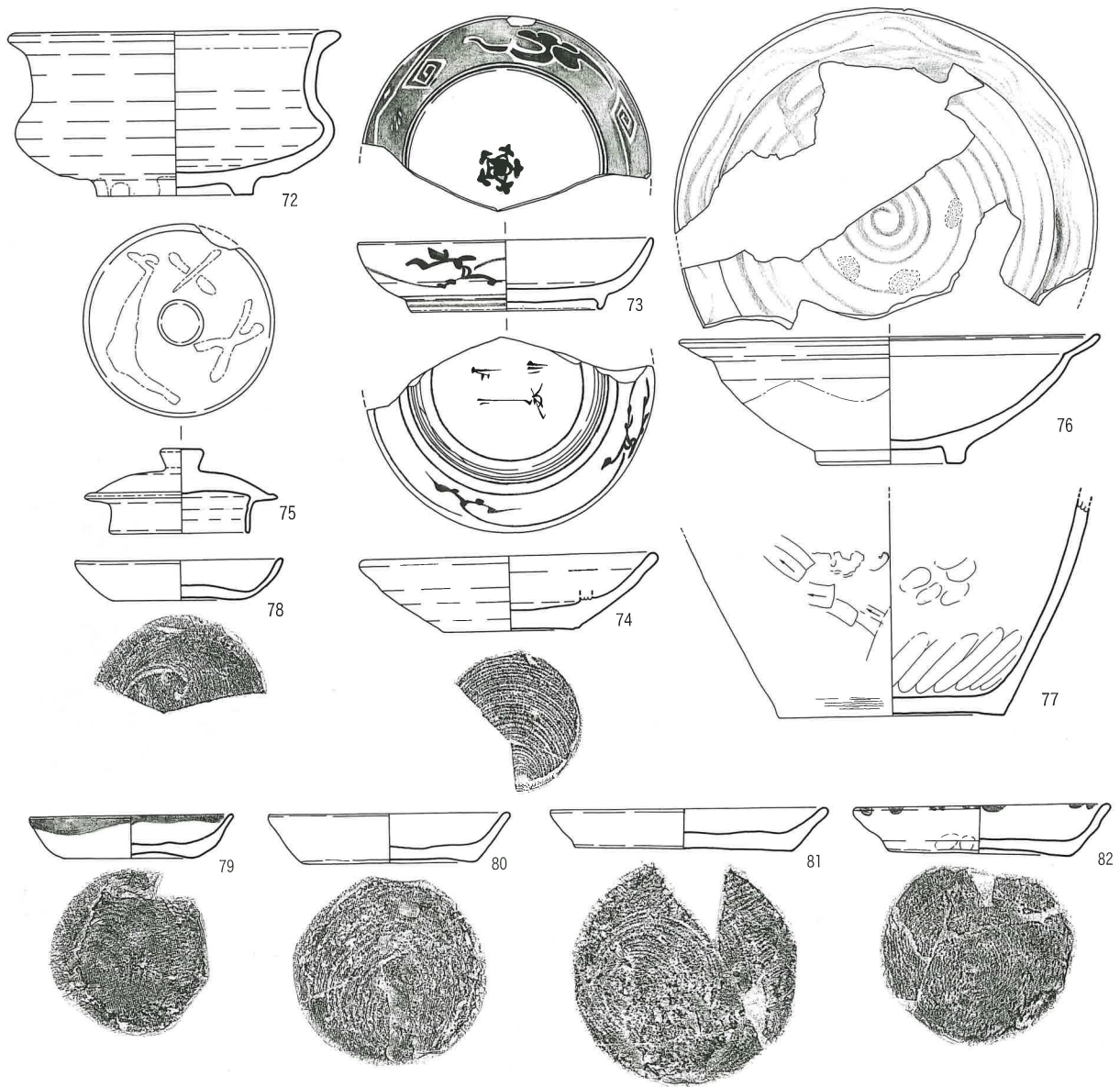
第162図 29調査区出土遺物 (1/3)



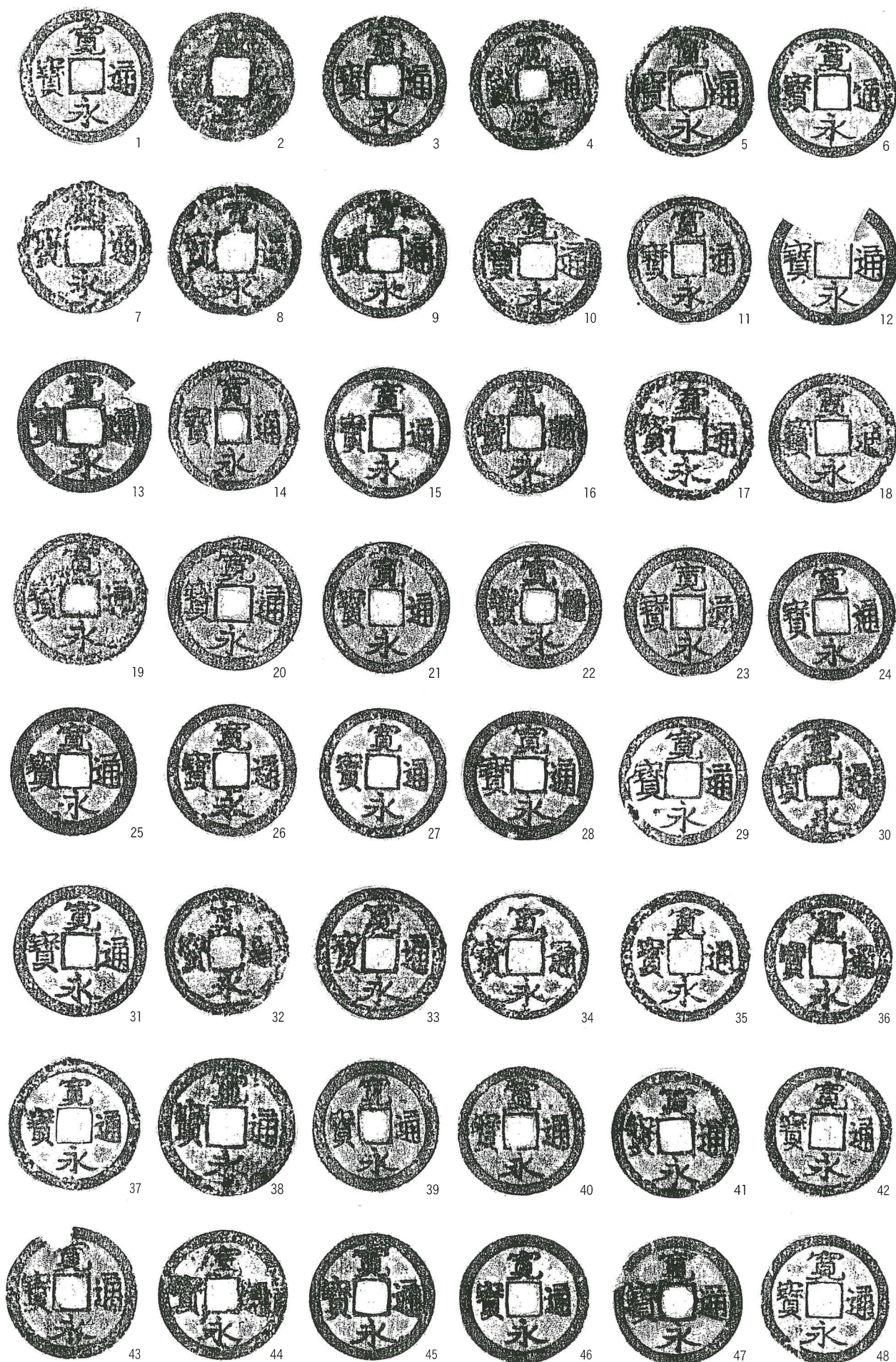
第163図 29調査区出土遺物 (1/3)



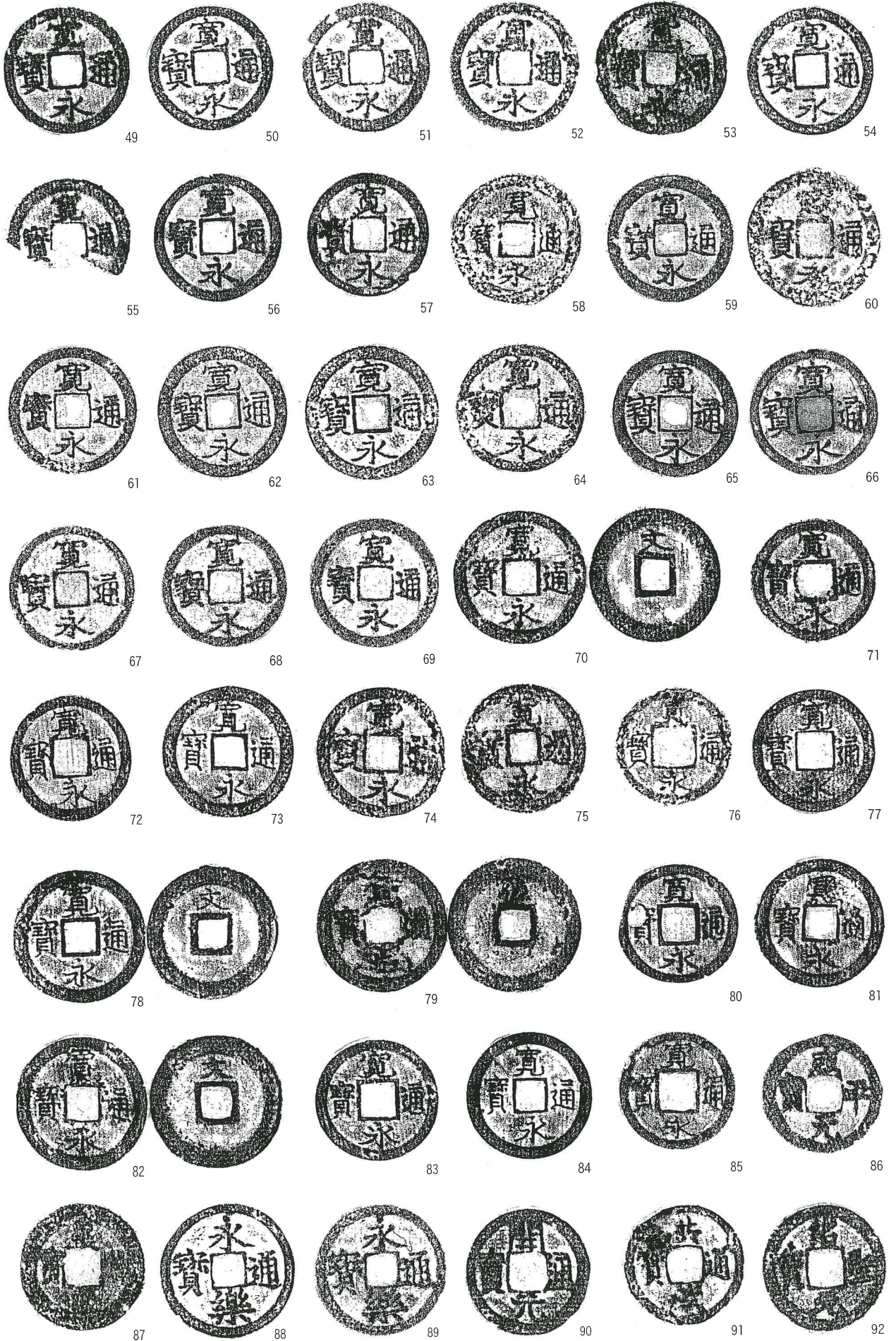
第164図 29調査区出土遺物 (1/8)



第165図 29調査区出土遺物 (1/3)



第166図 29調査区出土銭貨（原寸）



第167図 29調査区出土銭貨 (原寸)

表15 29調査区出土遺物観察表

図版 番号	遺物 番号	グリッド名	遺構名	出土土層	器種		大きさ (cm)				推定 産地	特徴	残存度	時期	備考
							口径	器高	底径	胴部 最大径					
160	1		土坑2	覆土中	青磁	瓶					肥前		破片	?	
	2		土坑7	覆土中	磁器	染付瓶	7.2				肥前		口縁1/2	?	徳利
	3		土坑9	覆土中	陶器	瓶				10.7	肥前		体部1/2	?	徳利
	4	調査区			陶器	皿			13.1		肥前	銅緑釉	底部	?	
	5		トレンチ2	2	磁器	染付小杯	5.5	1.8	2.4				口縁部1/3欠	18世紀後半	
	6	9G-②		5	磁器	染付小杯			2.2		肥前		底～体部	1630～1650	
	7	8G-②		6	磁器	皿	13.1	3.4	4.8		肥前		1/2 個体	?	二次焼成
	8	5G-④		6	陶器	蓋	15.1	4.5			関西系		1/3 個体	18C後半以降	
	9	3・4G	遺物集中範囲	7	磁器	染付碗	10.2				肥前		1/3 個体	1630～1650	二次焼成
	10	5G-④		7	磁器	染付碗			4.2		肥前	底部に「渦福」字銘	底部1/4	1690～1740	
	11	3・4G	遺物集中範囲	7	磁器	染付碗	8.8				肥前		口縁1/3	18C後半	
	12	3・4G	遺物集中範囲	7	青磁	香炉					肥前		破片		
	13	8G-②		9	磁器	青花小杯	5.1	3.3	2		中国		2/3 個体	1580～1640	
	14	10G-②		9	青磁	鉢							口縁破片		
	15	10G-③		9	陶器	碗			4.7		肥前	卵白色透明釉	底～体1/3	17C代	
	16	4G-①		12	磁器	染付碗	9.6	7.2	4.4		肥前		1/4 個体	1630～1650	
160	17	4G-①		12	磁器	染付皿			10		肥前		底部1/5	1630～1650	
161	18	4G-③		12	磁器	染付皿			6.3			型打整形、見込に「無文」	底部	1630～1650	
	19	9G-②		12	磁器	染付碗	8.2	4.8	3.3		肥前	コンニャク判	1/3 個体	1630～1650	
	20	1G-④		12	磁器	染付皿					肥前	波緑	口縁破片	1630～1650	
	21	9G-②		12	陶器	碗			4.6		肥前		底部	17C代	
	22	8G-③		14	磁器	染付小杯	7.8	4.6	3		肥前		1/2 個体	1630～1650	
	23	8G-③		14	磁器	皿(?)			8.8				底部1/3		
	24	8G-③		14	陶器	香炉	14				肥前		口～体部1/5	17C末～18C前半	
	25	10G-①		17	磁器	染付小碗	7	3.9	3		肥前		口～底部1/4	17C後半	
	26	8		14	陶器	鳩笛	6.3(長さ)	2.3					完形		
	27	8G-④		17	磁器	染付碗					肥前		破片	1630～1650	
	28	10G-①		17	磁器	染付皿	13.3	3.1	5.2		肥前	見込蛇の目割ぎ	口～底部1/4	18C後半	
	29	8G-③		17	磁器	染付皿					肥前		底部1/6	1630～1650	
	30	8G-④		17	磁器	染付皿					肥前		破片	1630～1650	
	31	10G-①		17	磁器	皿	13.6				肥前		口縁1/3		
	32	8G-③		17	磁器	高麗聖人							顔面欠失	1630～1650	
161	33	10G-①		17	陶器	鉢					肥前		口縁破片	17C末～18C前半	二次焼成
162	34	8G-③		17	瓦質	鉢					豊後	在地	口縁破片		
	35	8G		18	磁器	染付碗	10	6.8	3.8		肥前		ほぼ完形		
	36			18	磁器	染付皿	12.6	3.8	4.4		肥前		2/3 個体		
	37	10G-①		18	磁器	染付皿					肥前		1/5 個体		
	38	10G-②		19	陶器				4		肥前	唐津砂目	底部	1600～1630	
	39	8G-①		21	陶器	人形					関西系	「軟質施釉陶器人形」	顔面欠失	17C～18C	
	40	8G-①		23	磁器	染付碗	9.7				肥前		口縁破片	17C中葉	
	41	8G-①		23	磁器	青花碗			6.3		中国		口～底部1/3	1580～1640	
	42	10G-①		23	磁器						肥前		口縁破片		
	43	8G-③		23	青磁	碗	10						口縁1/4	1630～1650	
	44	8G-③		23	陶器	蓋	6.7				関西系		口縁破片		
	45	8		27	磁器	高麗聖人		5.3					完形		
	46	8G-③		23	陶器	香炉	15				肥前		1/5 個体	17C末～18C前半	24と近似
	47	9G-②		一括	磁器	染付小杯	6.8	4	2.8		肥前		1/3 個体	17C後半	
162	48	6G-④		一括	陶器	蓋	9	2.9			筑前	高取・上野系(?)	1/2 個体	1600～1620	※『鶴崎御茶屋跡』第12図2

※『鶴崎御茶屋跡』第12図2
(平成14年、大分県教育委員会)

第13節 29調査区

図版番号	遺物番号	グリッド名	遺構名	出土土層		器種		大きさ (cm)				推定産地	特徴	残存度	時期	備考
								長さ(径)	最大値	厚さ	重量(g)					
163	49	2		20		煙管	6.1 +	1		5.2			雁首(火皿を欠く)			
	50	2		19		煙管	6.3	0.9		4.4			吸口			
	51	2			一括	煙管	7.9 +	1		9.8			雁首(火皿を欠く)			
	52	8			一括	煙管	6.6	1		3			吸口			
	53	8		17		煙管	5.4 +	1.5		4.4			雁首			
	54	8		17		煙管	8 +	1.7		14			雁首			
	55	10		27		煙管	2.5 +	1.6		7.2			雁首			
	56	18		23		煙管	5.3 +	1		3			吸口			
	57		土坑9			煙管	2.9 +	1.9		4.9			雁首			
	58		埋藏周辺			鏡	9.7		0.5	235			つまみをもつ			
	59		溝4			銅製品	6.9 +	1.1	0.2	6.3						
	60	8		14		銅製品	11.6 +	2	0.7	61.7						
	61		調査区		一括	小柄	9.7	1.5	0.5	15.6						
	62	8		19		鉄製品	10 +	1.5	0.5	18.1			銅張線刻			
	63	2			一括	鉄製品	9 +			21			釘状金具			
	64	6			一括	釘	11.6	2.2	0.5	12.2			頭巻釘			
163	65	10		17		銅製品(鍾)	3.3	1.4	1.4	41.9			完形品			
164	66		溝2			平瓦	25.3	22.3	2.1				側面を打ち欠き加工		溝2の部材	
	67		溝2			平瓦	24.5	14 +	2.3				側面を打ち欠き加工		溝2の部材	
	68		溝2			平瓦	24.2	23.1	1.7				側面を打ち欠き加工		溝2の部材	
	69		溝2			平瓦	24.2	22.1	1.5				側面を打ち欠き加工		溝2の部材	
	70		溝2			平瓦	24.6	22.7	1.9				側面を打ち欠き加工		溝2の部材	
164	71		溝2			平瓦	24.8	22.3	1.7				側面を打ち欠き加工		溝2の部材	
図版番号	遺物番号	グリッド名	遺構名	出土土層		器種		大きさ (cm)				推定産地	特徴	残存度	時期	備考
								口径	器高	底径	胴部最大径					
	72	2			一括	青磁	香炉	14.4	7	6.8				1/2 個体		
	73		土坑9			磁器	染付皿	12.6	3			肥前	全面透明釉	1/2 個体	近世	
	74	9		18		陶器	托	13	3.2	5.8			内面釉	口一部、底部		
	75	8		21		陶器	蓋	8.4	3.6	6			天井部に施釉	ほぼ完形	近世	
	76	2			一括	陶器	大鉢	36	11	12		肥前	外面褐釉、内面黄白釉	1/2 個体	近世	砂目
	77	3		7		陶器	甌			21			内外面ヨコナデ	底部付近	近世	
	78	10		9		土師質	小皿	8.8								
	79	10		14		土師質	小皿	8.8	1.8	5.8				ほぼ完形		
	80	8		14		土師質	皿	10.4	2.1	7.6				口一部、底部		
	81	8		17		土師質	皿	12	1.7	9.6				4/5 個体		
165	82	10				土師質	小皿	11.1	2	8				4/5 個体	江戸	

表16 29調査区出土銭貨観察表

図版番号	番号	グリッド名	遺構名	出土土層		種類	大きさ		備考
							径 (cm)	重量 (g)	
166	1		第2トレンチ	2		古寛永	2.4	2.5	
	2	8 G		5		古寛永	2.3	3.3	
	3	5 G		6		古寛永	2.4	5	
	4	8 G		7		古寛永	2.4	3.5	
	5	5 G		7		古寛永	2.4	3.1	
	6	8 G		7		古寛永	2.4	3.5	
	7	10 G		8		古寛永	2.4	2.1	
	8	8 G		8		古寛永	2.4	2	
	9	9 G		8		古寛永	2.4	2.8	
	10		調査区	9		古寛永	2.4	3.5	
	11	1 G		10		古寛永	2.3	2.5	
	12	3・4 G		10	一括	古寛永	2.4	1.7	
	13	3・4 G		10		古寛永	2.4	2.1	
	14	3 G		10		古寛永	2.4	3.4	
	15	3 G		10		古寛永	2.4	3.6	
	16	3 G		10		古寛永	2.3	3.6	
	17	4 G		10		古寛永	2.4	2.7	
	18	1 G		11		古寛永	2.4	2.2	
	19	1 G		11		古寛永	2.4	2.8	
	20	1 G		11		古寛永	2.5	2.6	
	21	1 G		11		古寛永	2.4	2.8	
	22	1 G		11		古寛永	2.3	3	
	23	1 G		11		古寛永	2.4	3.5	
	24	3 G		11		古寛永	2.4	2	
	25	4 G		11		古寛永	2.4	3	
	26	4 G		11		古寛永	2.3	3.6	
	27	4 G		11		古寛永	2.4	3.3	
	28	4 G		11		古寛永	2.4	3.1	
	29	10 G		12		古寛永	2.4	3.3	
	30	8 G		12	上面	古寛永	2.3	3.5	
	31	8 G		12	上面	古寛永	2.4	4.2	
	32	10 G		14		古寛永	2.3	1.2	
	33	10 G		14		古寛永	2.4	3.5	
	34	8 G		14		古寛永	2.3	4.3	
	35	8 G		14		古寛永	2.4	3.4	
	36	8 G		14		古寛永	2.4	3	
	37	8 G		17		古寛永	2.4	3.9	
	38	8 G		17		古寛永	2.5	4	
	39	2 G		19		古寛永	2.4	3.5	
	40	2 G		19		古寛永	2.4	2.6	
	41	8 G		19	上面	古寛永	2.4	4.4	
	42	8 G		19	上面	古寛永	2.4	2.4	
	43	8 G		21		古寛永	2.4	2.8	
	44	8 G		21		古寛永	2.4	3.3	
	45	8 G		21		古寛永	2.4	3.7	
	46	8 G		23		古寛永	2.4	3.6	
	47	8 G		23		古寛永	2.4	2.5	
166	48	8 G	23		古寛永	2.4	2.8		
167	49	8 G	27		古寛永	2.4	2.8		
	50	8 G	27		古寛永	2.3	2.9		
	51	8 G	27		古寛永	2.4	2.9		
	52	8 G	27		古寛永	2.4	2.9		
	53	9 G	27		古寛永	2.4	3		
	54	9 G	27		古寛永	2.4	3.5		
	55	10 G			古寛永	2.3	1.2		
	56	6 G	溝		古寛永	2.4	4.2		
	57	6 G	溝		古寛永	2.3	2.5		
	58		第1トレンチ		古寛永	2.4	2.9		
	59		土坑2	一括	古寛永	2.4	3.4		
	60		土坑3		古寛永	2.5	3		
	61		土坑4		古寛永	2.4	3.7		
	62		土坑6		古寛永	2.4	2.2		
	63		土坑6		古寛永	2.5	3.7		
	64		土坑9		古寛永	2.4	2.5		
	65		溝3	一括	古寛永	2.4	3.7		
	66		溝4	一括	古寛永	2.4	3.5		
	67		溝状遺構1	一括	古寛永	2.4	3.1		
	68		溝状遺構1	一括	古寛永	2.3	2.3		
	69		溝状遺構1	一括	古寛永	2.4	3.5		
	70	10 G		8	新寛永	2.5	3	文銭	
	71	5 G		6	新寛永	2.3	2.6		
	72	5 G		7	新寛永	2.3	2.9		
	73	6 G		7	新寛永	2.4	4.6		
	74	3・4 G		10	新寛永	2.4	4.1		
	75	3 G		10	新寛永	2.4	3		
	76	8 G		17	新寛永	2.3	2.6		
	77	3 G			新寛永	2.3	3		
	78	5 G			新寛永	2.5	4	文銭	
	79	6 G			新寛永	2.5	4	背佐	
	80	6 G			新寛永	2.3	2.5		
	81	6 G			新寛永	2.4	3.1		
	82	6 G			新寛永	2.5	3.5	文銭	
	83	8 G			新寛永	2.3	2.6		
	84		溝2		新寛永	2.4	3.5		
	85		溝3	一括	新寛永	2.2	2		
	86		溝4	一括	新寛永	2.3	1.7		
	87	3 G			皇宋通寶	2.4	2.9		
	88	2 G			永樂通寶	2.5	2.6		
	89		溝状遺構1	一括	永樂通寶	2.5	3.8		
	90			12	開元通寶	2.3	2.7	南唐銭	
	91	2 G		20	洪武通寶	2.2	2.3	明銭初鑄 1368年	
167	92	3・4 G		10	紹聖元寶	2.3	2.6	北宋銭	



29調査区完掘時全景
(東方向から)



建物2全景
(南方向から)



埋甕出土状態
(南方向から)



溝2全景
(南方向から)



溝3全景
(南方向から)



土坑1～5全景
(南方向から)

第4章 文献資料調査

はじめに

大分県教育庁埋蔵文化財センターが、平成15年～平成18年7月に実施した杵築城下町遺跡（杵築市大字杵築字中町・谷町）の発掘調査では、杵築城下町の成立から、その後の推移の過程を物語る興味深い成果が得られた。とりわけ、調査地区から、火災によるものとみられる計6面の焼土層が検出されたことは注目に値しよう。これらの焼土層は、1・2面については年代が判然としないものの、出土遺物から3面は17世紀後半～18世紀前半、4面は17世紀前半～17世紀中頃、5面は17世紀初め頃～17世紀前半、6面は17世紀初め頃のものとは比定されている。火災は、木造家屋が密集していた近世城下町にとって、そこに暮らす人々の生命と財産をおびやかすもつとも恐ろしい災害の一つであった。そのため、城下町では、火災を起ささないためのさまざまな措置が講じられていたが、実際には上述した焼土層が示すように、近世を通じてたびたび火災が発生していたのである。

以上の調査成果をふまえ、小稿では、文献資料からみた杵築藩城下町の火災と防火政策について検討することにした。もとより、上述した焼土層を、文献資料に記されたある特定の火災と結びつけることは難しいが、「杵築藩城下町の火災に関して、文献資料からいったい何がわかるのか」という視点に立って叙述を行う。なお、今回の発掘調査範囲は、城下町の町人居住区（旧中町・谷町）に該当しており、小稿における叙述の対象もこの町人居住区に限定することをあらかじめ断っておきたい。

1 杵築藩城下町に関する文献資料

まず最初に、杵築藩城下町に関する文献資料の残存状況とその概要について簡単に整理しておきたい。

杵築藩城下町に関する文献資料のなかで、質・量ともにまとまったものは、杵築市飛松天満社が所蔵する『飛松天満宮文書』（杵築市立図書館寄託）であろう。この『飛松天満宮文書』については、杵築市教育委員会編『杵築藩関係古文書調査報告書－古文書・和書目録－』（杵築市立図書館、1992年、以下『古文書調査報告書』と表記する）にその目録が収録されており、資料群の全容を把握することができる。同書によると、『飛松天満宮文書』は、飛松天満社にもともと伝わっていたもの（8件）と、町宿老を頂点とする町役人が勤務した町役所（町会所）に保管されていたもの（324件）の2種類に区別されるが、後者の324件の資料群が飛松天満社に移された詳細な経緯についてはわからないという。

町役所に保管されていた資料群のうち、とくに注目されるものが、計103冊から成る「杵築藩町役所日記」（以下「町役所日記」と表記する）である。これは、元禄15（1702）年から明治3（1870）年にかけて町役所が作成した公用日記で、城下町における商工業、町役人をはじめとする町人の生活・文化、さらに災害や事件など、さまざまな記事が収録されている。残念ながら10ヵ年分を欠くものの、「町役所日記」は、約170年間にわたり杵築藩城下町の歴史と文化を物語る基礎資料として、大分県の有形文化財にも指定されている。

前掲の『古文書調査報告書』によると、『土居文庫』（杵築市所蔵）にも杵築藩城下町に関する計118件の文献資料が存在することがわかる。『土居文庫』は、元杵築町長であった土居寛申氏が収集した資料群で、このうち城下町に関するものは、主として町奉行所および町役所に本来保管されていたと考えられる。

以上、『古文書調査報告書』から杵築藩城下町に関する文献資料を一覧すると、そのほとんどが、本来町奉行所や町役所に伝わった公的な資料であることがわかる。これらの資料群は、いずれも能見松平家が杵築藩主をつとめた時代（正保2（1645）年～明治4年）のもので、さらに18世紀以降に成立した資料が中心となっている。今のところ、17世紀における城下町の具体的な様子を、文献資料を用いて明らかにすることは難しいといわざるを得ない。したがって、文献資料からは、前述した4～6面の焼土層に関連する有用な情報を得ることができない。そこで、以下では、焼土層3面との関連性が想定される18世紀前半の火災と防火政策について、前掲の「町役所日記」に収録された記事から明らかにしていきたい。

2 城下町の防火体制－自身番と火番太－

杵築藩城下町の防火体制は、町奉行所の支配のもとで、町役人をはじめとする町人みずからの手により支えられていた。こうした防火体制の中心に位置づけられるものが、自身番と火番太である。

自身番は、城下町の警備を目的に町ごとに課せられたもので、毎年10月から翌年の3月頃にかけて、原則として世帯主が交替でつとめた。宝永4（1707）年10月19日条によると、町人居住区の計7町のうち、西町は「大工弥作かしや」に、新町は「かうしや弥兵衛かしや」に、中町は「はりまや清右衛門かしや」に、谷町は「又四郎かしや」に、下町は「新三兵衛かしや」に、魚町は「平右衛門納屋」に番屋が設置されており、紺屋町にのみ番屋がなかったことがわかる。自身番は、上述した勤務期間からも明らかのように火番を主たる職務とするが、そのほかにも時打ちや夜廻りはもちろん、町内を巡回して溝の破損などを点検することも求められていた。

宝永5年10月15日条には、「今晚より御家中衆夜廻りニ御出被成候間、町方自身番今夜より仕候様ニ、尤組頭中夜廻り是又いつも通り今夜より順番ニ廻り被申候様ニ書付を以申触候」と記されている。この記事から、城下町の武士居住区では、武士みずからが夜廻りを行ったこと、自身番は武士居住区の夜廻りの開始日にあわせて始められていたこと、そして町人居住区では、自身番とは別に組頭が交替で夜廻りを行っていたことがわかる。こうした、武士・町人居住区ごとの夜廻りは、自身番と同様に翌年の3月頃まで行われた。

自身番が、約半年間の警備期間であるのに対し、火番太は1年間常置されたものであった。宝永4年7月19日条に「火番太儀、時分二時を不打番所ヲ明ヶ罷在候ニ付、十六日夜おとりやつこ共、下町より谷町所々のすだれ損さし石橋をはつし候得共、火番太不存知段不屈ヶニ候、尤第一者火廻り、次ニハ諸事無油断気を付可申役人」と記されているように、火番太の職務の第一は文字通り火番であり、このほか時打ちや城下町の「諸事」に気を配ることも求められていた。火番太は、城下町の計6ヵ所に設置された火番屋に勤務したが（元禄16年9月8日条）、その所在地については今のところ明らかではない。また、火番太については、その人数や配置のあり方が判然としないものの、「町役所日記」には「谷町火番」「中町火番」「魚町火番」「大手火番」などと記されており、町ごとに、あるいは警備上の重要箇所配置されていたものと思われる。

自身番と火番太は、組頭の夜廻りとともに、城下町を火災から守るために町人へ課せられた重要な職務であり、勤務規定に違反した場合は厳しく処罰された。こうした自身番と火番太を中心とする防火体制は、「町役所日記」の記事により、明治期初頭まで続けられたことがわかる。

3 城下町の火災と藩の防火政策

ここでは、「町役所日記」の記事から、18世紀前半の城下町で発生した火災を一覧するとともに、杵築藩のさまざまな防火政策について述べることにしたい。

(1) 18世紀前半における城下町の火災

18世紀前半における城下町の火災発生状況を一望すると、表17の通りとなる。計37件の火災のうち、7割を超える28件は10月から3月頃にかけて発生しており、自身番や組頭による夜廻りの実施期間が、毎年10月から翌年の3月頃にかけて設定された必然性を示している。また、発生時間が明確な35件の火災のなかで、夜間（午後7時～午前5時）に発生したものは6割に近い20件に及んでいる。ただし、寺院区を除いた武士・町人居住区ごとの火災発生件数には、とくに顕著な特徴は見出せない。

さて、表17に示した37件の火災のうち、大火災といえるものは、正徳元（1711）年12月8日に発生した下町の火災、享保10（1725）年11月23日に芥屋曾兵衛の酒蔵を火元として発生した火災、そして享保14年5月3日に三原屋半左衛門の薪小屋を火元として発生した火災であろう。

正徳元年12月の火災では、下町のはほぼ全域が被災し、藩の勘定所および普請方会所を含む計41軒を焼失した（正徳元年12月8日条）。また、享保10年11月の火災では、町屋12軒とともに武家屋敷13軒が被災し、火元となった芥屋では「酒頭師」（杜氏）の伊兵衛が焼死している（享保10年11月23日条）。「町役所日記」をみる限り、18世紀前半における最大の火災が享保14年5月の火災である。武家屋敷10軒を焼失したが、被害は町人居住区に集中して

おり、紺屋町が全焼したほか西町・中町・谷町にも延焼し、町屋130軒および中町に所在した町役所が被災している（享保14年5月3日条）。

以上をふまえ、「町役所日記」の火災記事と、前述した焼土層3面との関連性について言及したい。

上述したように、享保14年5月の大火災（以下「三原屋火災」と表記する）では、全焼した紺屋町から、さらに西町・中町・谷町へも延焼した。中町と谷町を被災範囲に含むこの三原屋火災は、焼土層3面と関連する可能性を有する事例といえる。ただし、焼土層3面は、17世紀後半～18世紀前半に比定されており、一方で「町役所日記」の記事は、18世紀初頭の元禄15年以降のものである。したがって、焼土層3面と関連する可能性をもつ、17世紀後半の城下町における火災については、今のところ文献資料から明らかにすることができない。もとより、焼土層3面が、1度の大火災によるものなのか、それとも17世紀後半～18世紀前半にたびたび発生した火災により形成されたものなのかという判断も困難である。

いずれにしても、火災の規模とその被災範囲をみる限り、三原屋火災と焼土層3面が関連する可能性は高いが、今後は17世紀の城下町に関する文献資料を見出した上で、この点について再度検討する必要がある。

（2）さまざまな防火政策

城下町における藩の防火政策は、たとえば消火用水の確保などのように、消火活動に直接関わるものだけではなく、後述するように町人の生活や年中行事に関連するものまで多種多様である。

①煙硝（火薬）の管理 宝永3年12月、町奉行所は、町人が所有する煙硝について、「町中鉄砲薬商売仕候者有之分者火用心無心元」との理由から、翌同4年4月まで藩の土蔵にすべて預けるように指示している（宝永3年12月13日条）。こうした、町人が所有する煙硝の管理に関する町奉行所の指示は、これが初めてのものとみられ、直後には町人の煙硝所有状況が調査され、讃岐屋勘兵衛（80匁）・芥屋七右衛門（35匁）・油屋与兵衛（17匁）・山城屋弥兵衛（5斤50匁）の4名が藩の土蔵に煙硝を預けている（宝永3年12月16日条）。なお、煙硝の預かり期間を翌年4月までに設定したのは、冬季に火災が発生しやすいことを考慮したものと思われる。

②消火用水の確保 いうまでもなく、実際の消火活動に不可欠となる消火用水の確保は、城下町にとっても重要な課題であった。宝永7年11月、町奉行所から「町方自然火事之節、川水計り二而ハ無覚速候間、一町々ニ水溜桶用意致置」くように指示が出された。町奉行所が、城下町をほぼ東西方向に貫流する谷川の川水だけでは、十分な用水が確保できないのではないかと懸念をもっていたことがわかる。これに対し、町宿老は、「新町口ニ川せき置申候、西町両所ニ池御座候ニ付所々川せき置申候、町筋火事之節者西町池之水溝よりくミなかし可申候、其外裏々井戸数多御座候得者町方之火事ニハ余り水手間ハ御座有間敷候」との認識を示している。つまり、谷川の川水だけではなく、多くの井戸や西町には二つの溜池が築造されていることから、用水は十分に確保できるというのである。結局、町宿老は、「町家別棚下ニ水絶不申くミ置、又風立候之節者家々門口ニ水手桶出置」くように町人へ指示するので、「一町々ニ水溜桶用意致置」く必要はないことを上申し、町奉行所もこれを認めている（宝永7年11月20日条）。

以上から、城下町では、谷川の川水だけではなく、井戸水や池水を消火用水として有効に利用していたことが知られるが、これ以降も用水に関する記事が散見されるので言及しておく。

正徳4年10月、町奉行所から「町方裏々ニ井戸有之候分ハ、井有と紙口り大きニ書付能見へ候処、表口ニはり付置」くように指示が出されている（正徳4年10月12日条）。これは、井戸をもつ町屋を明確に表示して、迅速な消火活動を可能とするための措置である。また、享保11年4月には、藤屋吉左衛門が、「第一水無御座、近所難儀仕候間用水旁仕度」との理由から谷町戎堂前に井戸を掘ることを願い出ており、町奉行所から許可されている（享保11年4月10日条）。こうした井戸の水が、飲用水としてはもちろん、火災の際には消火用水としても利用された可能性は高い。

上述した西町の溜池に関して、元文2（1737）年2月14日条には、「西町溜池にちり芥捨申ものも有之候由ニ相聞候、今度池さらへ被仰付候間、向後ちり芥捨申間敷由被仰」と記されている。これは、捨てられたゴミにより池床が上がると、十分な用水を溜池に貯水できないため、池浚いを行うとともに溜池にゴミを捨てることを禁じ

文献資料調査

たものである。元文5年8月20・21日条には、「仲町用水池浚候処ニ、其後雨も降り不申故切寸と水無之、殊ニ色々成ル評義致、万一之節水無之候而ハ何分間ニ合不申ニ付、与頭中心付キ会所ニ出座候、及相談ニ候処ニ致儀定、壺組より式人つゝ夫出候而池之近辺手近ク所より井戸之水、右池ニ両日汲込」との記事がみえる。これから、降雨量の不足により十分な貯水量が得られなかった中町の溜池に、付近の井戸水を汲み上げて用水を確保していたことがわかる。なお、中町の溜池が築造された時期や経緯については今のところ判然としない。

③被災跡地の活用 前述した享保14年5月の三原屋火災では、町奉行所から、火元となった三原屋半左衛門の薪小屋跡地を「用水堀」とするように指示が出されている（享保14年5月11日条）。その後、翌6月には「用水検地」が行われ、「西表口五間四尺、裏横四間四尺、南入拾間六寸、北入拾間四尺五寸」の規模をもつ用水堀が築造されることになった（享保14年6月6日条）。これは、火災の延焼を防ぐ火除け地の役割を果たすだけでなく、いわゆる防火水槽としても利用されたとみられ、被災跡地の活用事例を示す興味深いものといえる。

④町人の生活・年中行事に関する規定 宝永4年12月15日条には、「自今以後、すゝはきの事、夜之内ニ取申儀火用心悪敷ニ付御法度被仰付候」と記されている。これは、不用心との理由から、夜間のすす掃きを禁じたものである。宝永6年5月6日に発生した「大坂屋清兵衛組塩飽屋藤吉かしや九蔵後家」宅を火元とする火災では、直後に「町宅後家壺人者」の調査が行われ、町奉行所から「自今以後、女壺人宅不罷成候間、兩人宛相談致候ハ、其通、壺人宛居申候儀不罷成」との指示が出されている（宝永6年5月9日条）。一人暮らしの九蔵後家が起こした火災をふまえ、おそらくは不用心であるとの認識から、城下町における女性の一人暮らしを禁じたものであろう。享保10年正月5日に谷町で発生した火災の直後には、町奉行所から「町方高き家」に梯子をかけておくように指示が出されている（享保10年正月8日条）。これは、高層家屋に登りやすくして、消火活動の迅速化を図ったものと思われる。

さて、宝永3年12月23日条には、「年徳棚ニ燈明上ヶ候事、無用心ニ被思召候条、当年より下ニともし申様ニ被仰付」と記されている。「年徳」とは、その年の福德を司る歳徳神のことであり、人々は毎年正月に屋内に棚を設けて供物をささげ、歳徳神を迎えたという。町奉行所は、この棚にあげる燈明を、棚の下に置くように指示しているのである。これは、棚の上に燈明をあげると燈明の火が天井に近くなり、火災の原因になることを懸念してのものと思われるが、藩の防火政策が祭祀の具体的な形態に影響を与えた事例として興味深い。

おわりに

小稿では、「町役所日記」の記事から、18世紀前半の杵築藩城下町で発生した火災と藩の防火政策について検討した。さらに、発掘調査により検出された焼土層と、文献資料に記された情報との関連性についても言及したが、資料的な制約もあり今回は明らかにできなかった。しかし、今後の杵築城下町遺跡における発掘調査に対して、文献資料のもつ情報により新しい視点を提示できたのではないだろうか。

城下町では、谷川の川水とともに井戸水や池水を消火用水として利用していたことは前述した通りであるが、文献資料の記事からは溜池の規模や形状をうかがい知ることができない。また、享保14年5月の三原屋火災直後、被災跡地に築造された用水堀も、周囲を土堀（「ねり堀」）で囲まれていた（享保14年6月6日条）こと以外、やはりその形状が明らかではない。溜池や用水堀といった消火用水関連施設の具体的なイメージは、発掘調査の成果からもたらされるものである。

前掲の「町筋火事之節者西町池之水溝よりくミなかし可申候」（宝永7年11月20日条）という一文は、池水を消火用水として有効に利用する上で、城下町に巡らされている溝が重要な役割を果たしていたことを物語っている。また、十分な貯水量が得られない中町の溜池に、付近の井戸水を汲み上げた事例（元文5年8月20・21日条）は、消火用水に関連する諸施設が相互に補完しあう形で利用される場合があったことを示している。

今後の杵築城下町遺跡の発掘調査は、井戸・溜池・用水堀・溝といった消火用水関連施設の具体的な規模や形状はもちろん、これらの諸施設が城下町においてどのように配置されていたのかという点についても留意して行われる必要があるだろう。

表17 18世紀前半における杵築藩城下町の火災発生状況

年次	月日	時刻	被災場所		内容
			範囲	区分	
宝永3(1706)年	11月26日	申上刻	—	武士	浅沢健春(藩医)長屋から出火、武家屋敷5軒が被災
宝永5(1708)年	3月15日	昼七ツ前	西町	町人	御料理人安藤三右衛門の木小屋から出火
	11月10日	夜九ツ前	—	武士	前川左衛門屋敷から出火、武家屋敷3軒が被災
宝永6(1709)年	2月5日	夜八ツ時	—	武士	岩永勘兵衛屋敷から出火、勘兵衛屋敷のみ全焼
	5月6日	昼七ツ半頃	—	町人	大坂屋清兵衛組塩飽屋藤吉かしや九蔵後家宅から出火
	10月23日	夜九ツ過	—	町人	大坂屋清兵衛の「むろ屋」から出火
正徳元(1711)年	12月8日	暮六ツ半時	下町	町人	深江屋銀右衛門浜の井筒屋次郎兵衛の納屋から出火、被災軒数41軒(このうち御勘定所1軒、御普請方2軒、空地1ヵ所)
享保9(1724)年	7月8日	昼九ツ過	下町	町人	御普請方鍛冶場から出火
	12月27日	夜九ツ時	—	武士	加藤与一兵衛長屋から出火
享保10(1725)年	正月5日	昼九ツ時	谷町	町人	油屋宅から出火
	11月23日	夜八ツ時	—	武士・町人	芥屋曾兵衛酒蔵から出火、町屋12軒・武家屋敷13軒が被災
享保11(1726)年	11月27日	夜九ツ前	下町	町人	放火
享保12(1727)年	3月5日	七ツ半頃	—	寺院	正覚寺隠居屋から出火
	4月朔日	八ツ時	—	町人	松尾口の「えんせう(煙硝)こしらへ之家」から出火
享保14(1729)年	5月3日	夜四ツ半時	紺屋町・西町・中町・谷町・武家屋敷(北台)	武士・町人	三原屋半左衛門の薪小屋から出火、紺屋町は全焼、町屋130軒・武家屋敷10軒・町会所が被災
享保16(1731)年	3月6日	昼過	—	武士	宮本孫八隠居屋から出火
	3月12日	夜四ツ前	魚町	町人	七兵衛宅から出火
	9月2日	夜五ツ半頃	—	武士	財津久平長屋から出火、武家屋敷2軒が被災
享保17(1732)年	12月18日	夜四ツ半時	紺屋町	町人	放火
享保20(1735)年	5月21日	夜九ツ時	古野下丁	武士	木本七右衛門の灰屋から出火
	8月6日	昼九ツ時	北浜	武士	矢野只助の灰屋から出火
	10月25日	夜九ツ半時過	袋町	武士	塚本作左衛門屋敷から出火
	11月7日	夜五ツ半時	古野下丁	武士	古野下丁裏垣から出火
	12月晦日	夜九ツ時	—	武士	坪生卯左衛門長屋から出火、同夜、寺町でも火災
元文元(1736)年	12月13日	夜九ツ半	西町	町人	砂屋藤右衛門組新吉宅から出火
元文5(1740)年	閏7月27日	夜八ツ過	—	武士	亀井太兵衛長屋から出火
	8月13日	夜四ツ半頃	古野上丁	武士	白井仲右衛門屋敷から出火
	12月9日	夜四ツ過頃	—	武士	川上善助屋敷から出火
寛保元(1741)年	正月24日	亥刻	—	寺院	妙徳寺から出火
寛保2(1742)年	11月29日	昼九ツ時	—	武士	村上大野右衛門屋敷から出火、武家屋敷12軒が被災
寛保3(1743)年	4月朔日	昼八ツ半	—	武士	御茶屋番田坂重蔵長屋から出火
	12月6日	昼七ツ半頃	古野中丁	武士	—
延享元(1744)年	11月11日	朝明ヶ六ツ	—	町人	角木屋組自身番から出火
延享2(1745)年	2月5日	明ヶ六ツ半時	—	町人	川崎屋勘左衛門宅から出火
寛延元(1748)年	10月6日	明ヶ六ツ過	新町	町人	和哥屋三郎助組美吉屋清介宅から出火
	閏10月3日	夜	—	—	芝居廻小屋から出火
寛延3(1750)年	8月5日	昼八ツ半時	—	—	「金正寺八坂郷蔵斗蔵」から出火

(註1) 「杵築藩町役所日記」から作成した。

(註2) 「区分」項目の「武士」は武士居住区を、「町人」は町人居住区を、「寺院」は寺院区を意味している。

第5章 総 括

杵築城下町の概観

杵築城下町遺跡は都市計画道路宗近魚町線の道路拡幅に伴って発掘調査されたものである。発掘調査は用地買収や家屋移転という発掘条件の整った地点を対象として平成14年度～平成18年度にかけて実施された。平成14年度の調査成果は既に発掘調査報告書として刊行済みである。本報告書は平成15年度～平成18年度の調査成果を収録している。発掘調査の主体は杵築市大字杵築字谷町を中心としたものであるが、一部中町も対象とした。現在の谷町の中心を走る宗近魚町線は近世の基幹道路をそのまま踏襲したものであり、現在の谷町の地割りをみると、近世の城下町絵図の区画がそのまま利用され、あるいは幾つかに統合されて使用されていることが一目瞭然である。発掘調査で確認できた町屋の区画は間口の狭い短冊形の地割りであり、区画の境界ごとに排水の側溝が設置されており、これが今の側溝と同じ位置に確認できることから、基本的な区画の単位は近世のままであるといえよう。

近世の城下町絵図をみると、谷町は商人、職人の活躍する町屋であり、中心を走る道路の両側に軒先を並べた様相が描かれている。谷町の地形をみると標高は東端が低く、西方向へ行くにつれて徐々に高くなる傾向が顕著である。谷町の南隅には西から東へ流れる谷川が描かれており、現在も同じ位置に谷川が流れているが、南北に長い家屋の床下を流れるように工夫されており、谷川を直接眼にすることは少ない。短冊形の地割りの境界線の側溝はほとんど全てがこの谷川に注がれており、まさに側溝で区画された町と表現できる。現地表面で標高約4mであり、当時の2m前後の標高を考慮すると、排水設備の維持・管理が谷町の生活環境を支える基礎条件であるといっても過言ではない。

一方、谷町の北側と南側には平坦な台地が広がり、北台や南台と呼ばれる武家屋敷が建ち並んでいた。平坦地の武家屋敷には石垣や土塀を廻らし、門や庭園を持つ家老屋敷や上級、中級武士の屋敷が並び、北台の西端やその周辺部は下級武士の居住区であった。また、南台の西には養徳寺、正覚寺、妙徳寺、木付氏代々の菩提寺である安住寺、長昌寺が並ぶ寺院区が位置していた。

城下町の機能的配置

北台、谷町、南台は酢屋の坂、塩屋の坂、飴屋の坂、天神の坂、北台の東には勘定場の坂があり、武家屋敷と町屋とはそれぞれ有機的に結ばれていた。視覚的には、南北の両高台を武家居住地が占め、その谷間に町人居住区が配置されるという構造であった。この地形的特徴を豊田寛三氏は『大分歴史事典』（平成2年）で杵築城下町は「町人居住地を武家居住地が取り囲み、しかも高みから見下ろすという、身分の上下を居住地の高低差に上乘せするという形で計画されている」と指摘している。

確かに、この様な現象を視覚的に把握してみると上述の結論となるが、武家居住区と町人居住区とは長い歴史的な自然開発史の発展過程、つまり、土地開発や占有の先後関係において結果的に生じた現象であり、いつの時期に谷町が形成されたのかという開発の時期と不可分の関係があると推察されるのである。北台、南台は谷町より早い段階に開発されていたのは事実であり、果たして、近世の城下町の構造に意図的な住み分けが当初から計画されていたものなのだろうか。なぜならば、高台にあった台山城は近世には海を背後とした低地の城郭に移転しているのであり、現杵築中学校の位置には堀と海とに囲まれた御殿場、御厩、西御殿があり、海に面する低地を意図的に利用して近世城郭の中核部が構築されていたのである。城郭区の標高は約4m前後であり谷町や魚町等の町屋のそれとほとんど同じである。この現象を視覚的に捉えると、城郭区は北台や南台の上級・中級家臣団より見下ろされた位置を占めるとも言えなくはない。この一見矛盾とも言える土地の選地の構造は、戦いと防衛を主目的とした中世的な城館から、治安と経済の流通を意図した近世的な城郭へと移行したことを意味しており、条件整備の現実的な対応結果と見做されるのである。

近世城郭の普遍的な特徴の一つとして、共通する選地条件は背後に海を控えた良港を持つことといえる。海上交通と物資輸送の利便性を重視した政治・経済活動の中心地となる条件の一つに、城郭に付随した舟入や港は必

要不可欠な要素であろう。八坂川の河口は物資流通と海上輸送の拠点であり、谷町の商人や職人の経済活動に与えた影響は容易に推測できる。そういう意味で、領民の政治・経済活動の拠点は水陸両面に利便性のある低地にあるといっても過言ではない。

北台と南台とに挟まれた谷部の基幹道路の両側には間口の狭い短冊形の敷地がみじん切りのように区画され谷町を形成している。今回の発掘調査は谷町を中心に実施した。

杵築城下町の谷町地区が記載された『町屋敷絵図』は写本とされるが、当時の町役所日記との照合から文化12年(1815)頃の製作とされている。今回の調査区と『町屋敷絵図』とを比較していくと、17～19調査区は吉野家吉兵衛、銅屋吉兵衛、佐渡屋直蔵、20～22調査区は伊豫屋兵左衛門、長門屋半右衛門、志保屋利兵衛、27調査区は志保屋長右衛門、28調査区は丸屋平兵衛、和嶋屋崑助、楠屋為右衛門、29、23調査区は山里屋兵衛、油屋丈吉、24調査区は若屋三郎助、25調査区は川嶋屋治助、26調査区はぬのや源三郎助、若屋三郎助の屋敷に比定できる。屋号から当時の職種を推測することは適当ではないが、銅屋、志保屋、油屋、ぬのやに加え、酢屋の坂、飴屋の坂等の名称からも、当時の職人、商人の活躍ぶりがおぼろげながらも想像できる。

発掘調査で出土した膨大な陶磁器類や煙管の数の多さに加え、一般民衆の経済流通の証左ともいえる寛永通寶の出土数は400枚弱にも上り、谷町一帯の活発な商業活動や町屋の生活の一端を垣間見ることができた。では、この谷町が果たして何時ごろから形成されていたのであろうか。今回の発掘調査の問題点と成果はこの点に集約できる。

谷町の火災と層序堆積

発掘調査は谷町の中心部をはしる基幹道路に沿って、標高の低い東方から高い西方へと断ち割る方法で実施された。調査区は市街の中心のため、細切れに設置したが、基本層序の追跡は幾つかの火災焼土の相対的な重なり合いを鍵層にして把握することができた。各調査区に共通する火災焼土は焼土3面～焼土5面であり、焼土1、2面に関しては近代～現代に限りなく近いことから部分的で希薄な堆積であった。焼土6面に関しては表土下約2m、標高2mの位置をしめる。表土下約1.5mで水の湧き出す条件下の発掘調査でもあり、焼土6面を面的に検出できたとは言い難い。焼土6面は地山の上に普遍的に堆積する青灰色シルトの上面で、薄い炭化物として確認できるものである。焼土7面は焼土が部分的に残るもので、焼土6面との関係は定かではない。

谷町の発掘調査で留意されたのは、火災の時期とその後始末の方法である。火災は全部で5～7回確認できるが、中でも焼土3面、焼土4面、焼土5面の焼土の堆積痕跡は顕著であった。焼土は炭化物を含んで厚さ数cm～20cmもあり比較的平坦に堆積している。焼土内には陶磁器類が包含され火災の痕跡と見做された。このような焼土層の上層には黄褐色土に岩や砂礫の混じった山土が20cm～40cmも置かれ嵩上げされ整地されていた。火災の度に同じような嵩上げ事業がおこなわれており、層序を見るとサンドイッチの状態、つまり版築された状態に見える。青灰色シルトの上に約2mの土砂が堆積しているが、全て人為的な嵩上げによる整地層と見做すことができる。単純計算すると、一回の火災で約30～40cmの嵩上げをした計算になる。現在でも、地表面の標高は約4mであり、約1.5mも掘ると水が湧く環境であるが、嵩上げする前の標高は約2mであり、排水施設の整備は谷町を維持管理するのに必要不可欠であったと推察できる。

低地に進出した近世城下町の開発史において、このような人為的な整地層の形成は普遍的に認識できる行為であると言える。

谷町の開発の時期

文化12年(1815)頃の『町屋敷絵図』によると、谷町は間口3～3.5間が谷町全体の約62%を占める。短冊形の敷地の両側町であるが、一区画ごとに側溝が設備され谷川へ流れるような構造である。発掘調査では現在の側溝の下部には人頭大や巨大な河原礫を両側に並べた側溝が出土している。このような石組みの側溝が構築された時期を明確にできないが、石組み側溝の出現する以前は、小指の太さの竹や葦のような中空の棒を約5～8cm間隔に密に立て並べ、これを3cm間隔に横棒で繋いだ、小さな柵状のような施設を両側に並べて側溝施設の一部とした遺構が検出されている。これが出土する地層は青灰色シルトの直上の面である。

各調査区に普遍的な焼土3面～焼土5面、焼土6面出土の陶磁器類をみると、焼土3面は17世紀後半～18世紀前半。焼土4面は17世紀前半～17世紀中頃。焼土5面は17世紀初頭～17世紀前半。焼土6面は16世紀末～17世紀初頭に比定できる。

このことから、現代まで営々と続いてきた谷町の成立は、少なくとも焼土6面頃の16世紀末～17世紀初頭までしか遡れない。焼土6面は地山の上に普遍的に堆積する青灰色シルトの上面であり、当時の地理的、地層的な条件を考慮すると、人々の生活に適した環境ではないことは一目瞭然である。現在の八坂川河口の植生から想像すると、八坂川に注ぎ込む谷川周辺は扇状地形の氾濫原で一面の葦原であったことは容易に推察できる。青灰色シルトの上面に薄く確認できる炭化物層は谷川周辺の荒地を開発する中で葦原を焼却した痕跡と見做されよう。谷川一帯の開発は16世紀末～17世紀初頭頃と想定できることから、慶長元年(1596)の杉原氏、慶長5年(1600)の細川氏等の入部の時期に谷町の基礎が構築されたと推察できる。

次に、焼土4面、焼土5面の時期には谷町の側溝は河原礫の石組側溝に仕上げられている。出土遺物をみると、焼土4面は17世紀前半～17世紀中頃、焼土5面は17世紀初頭～17世紀前半に比定できる。17世紀前半代は杵築城主が目まぐるしく変わり、元和元年(1615)の一国一城令により城郭構造や配置に改変が加えられたころである。青山賢信氏は、昭和56年の『杵築市伝統的建造物群保存対策調査報告書』において、延享3年(1764)の『御巡見控帳』を引用し、城山の北の海手に城郭を移したのは、寛永10年(1633)に入部した小笠原氏時代としている。谷町、中町の西方にある新町もこのころに造られたものと推察している。この城郭移築に伴って武家屋敷をはじめ町屋の移転や改変を伴ったであろうことは推測に難くない。そういった意味で、焼土5面は小笠原氏時代、焼土4面は正保2年(1645)に入部した初代藩主能見松平氏の時代に想定できそうである。

今回の発掘調査は、杵築城下町の中の谷町を中心に実施された。調査対象地は、現在も日常の営業活動をしている商店街の中心部であり、水の湧き出る狭小な調査範囲でもあり、遺構の面的な広がりを検証することは不可能であった。しかし、北台と南台に挟まれた狭い空間に密集しつつ展開していった当時の民衆の活力は、その豊富な陶磁器類、煙管、銭貨という出土遺物をはじめ、短冊形地割りの両脇にくまなく設置された側溝、不断に繰り返された火災処理と嵩上げ整地造成のなかに読み取ることができた。

今回の発掘調査は、近い将来に開発される部分に限って実施したものであり、多くの貴重な遺構、遺物は未だ地中深くに眠っている。これらを、活用しつつも、保護・保存し、後世に残し伝えていくことが、現在に生きる私達に残された使命の一つであるともいえるのである。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	キツキジョウカマチイセキ 2
書 名	杵築城下町遺跡 2
副 書 名	都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	*
シ リ ー ズ 名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第22集
編 著 者 名	栗田勝弘・小林昭彦
編 集 機 関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所 在 地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
発 行 年 月 日	平成20年(2008)2月15日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査 面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
杵築城下町遺跡 17～19調査区	杵築市 大字杵築	44210	118	33°24'47"	131°37'25"	2003年12月 ～ 2004年3月	420	都市計画道路 宗近魚町線道 路改良事業
杵築城下町遺跡 20～26調査区	杵築市 大字杵築	44210	118	33°24'47"	131°37'12" ～ 131°37'23"	2004年7月 ～ 2004年12月	1400	都市計画道路 宗近魚町線道 路改良事業
杵築城下町遺跡 27～28調査区	杵築市 大字杵築	44210	118	33°24'46"	131°37'20"	2005年9月 ～ 2005年12月	260	都市計画道路 宗近魚町線道 路改良事業
杵築城下町遺跡 29調査区	杵築市 大字杵築	44210	118	33°24'47"	131°37'18"	2006年5月 ～ 2006年7月	130	都市計画道路 宗近魚町線道 路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
杵築城下町遺跡 17～19調査区	町屋敷 跡	近世	溝・土坑	陶磁器・土師質土器・瓦質土器・砥石・ 銅銭	
杵築城下町遺跡 20～26調査区	町屋敷 跡	近世	溝・土坑・杭列	陶磁器・土師質土器・瓦質土器・砥石・ 煙管・銅銭	
杵築城下町遺跡 27～28調査区	町屋敷 跡	近世	溝・土坑・建物基礎	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・石臼・ 砥石・瓦・刀装具・銅銭	ベトナム産焼 締陶器
杵築城下町遺跡 29調査区	町屋敷 跡	近世	溝・土坑・建物基礎	土師質土器・瓦質土器・陶磁器・石臼・ 砥石・瓦・銅銭・銅製品	ベトナム産焼 締陶器

杵築城下町遺跡 2

都市計画道路宗近魚町線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第22集

平成20年2月15日

発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター

〒870-1113 大分市大字中判田1977番地

TEL (097) 597-5675

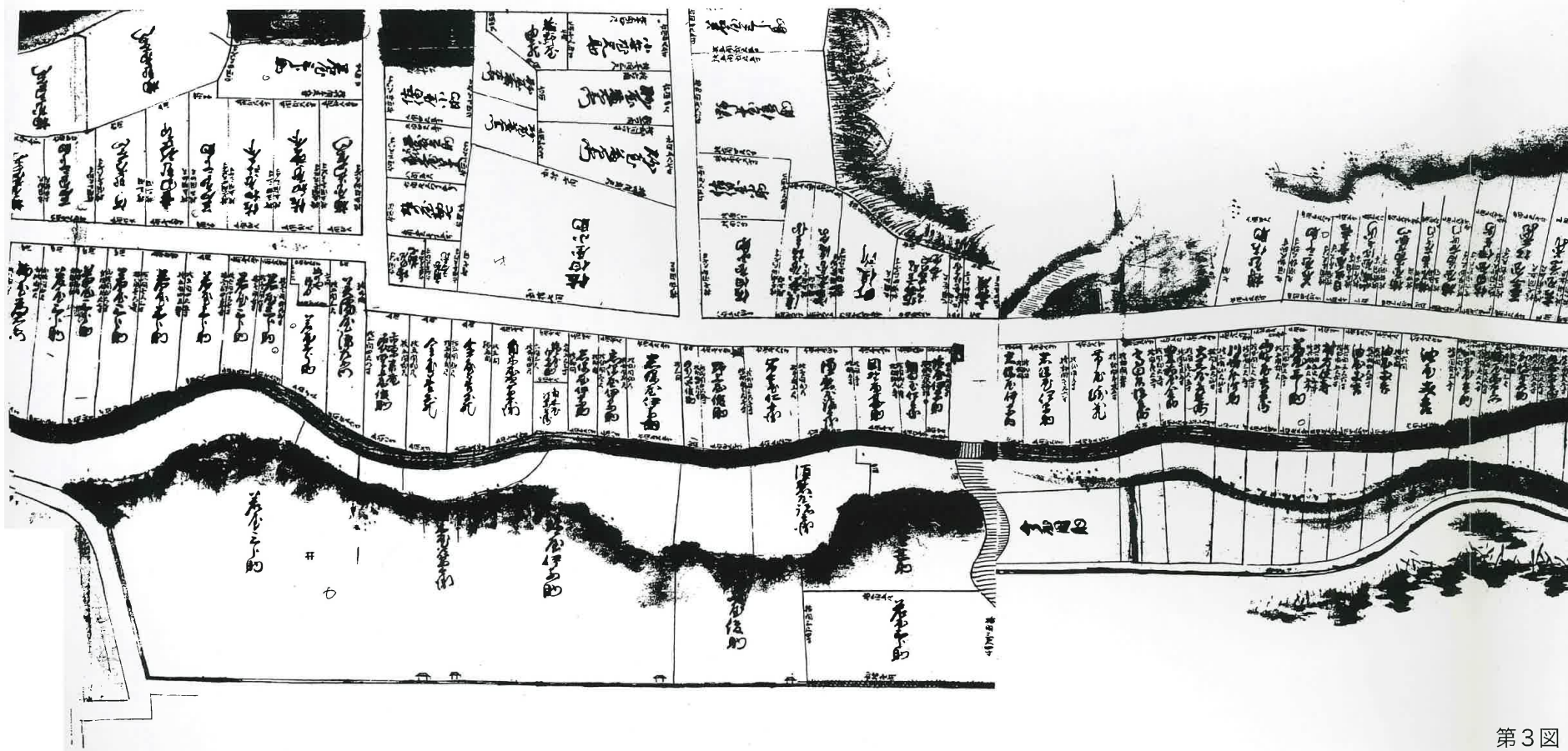
印刷 フタバ印刷社

〒874-0930 大分県別府市光町8-28

TEL (0977) 21-1328



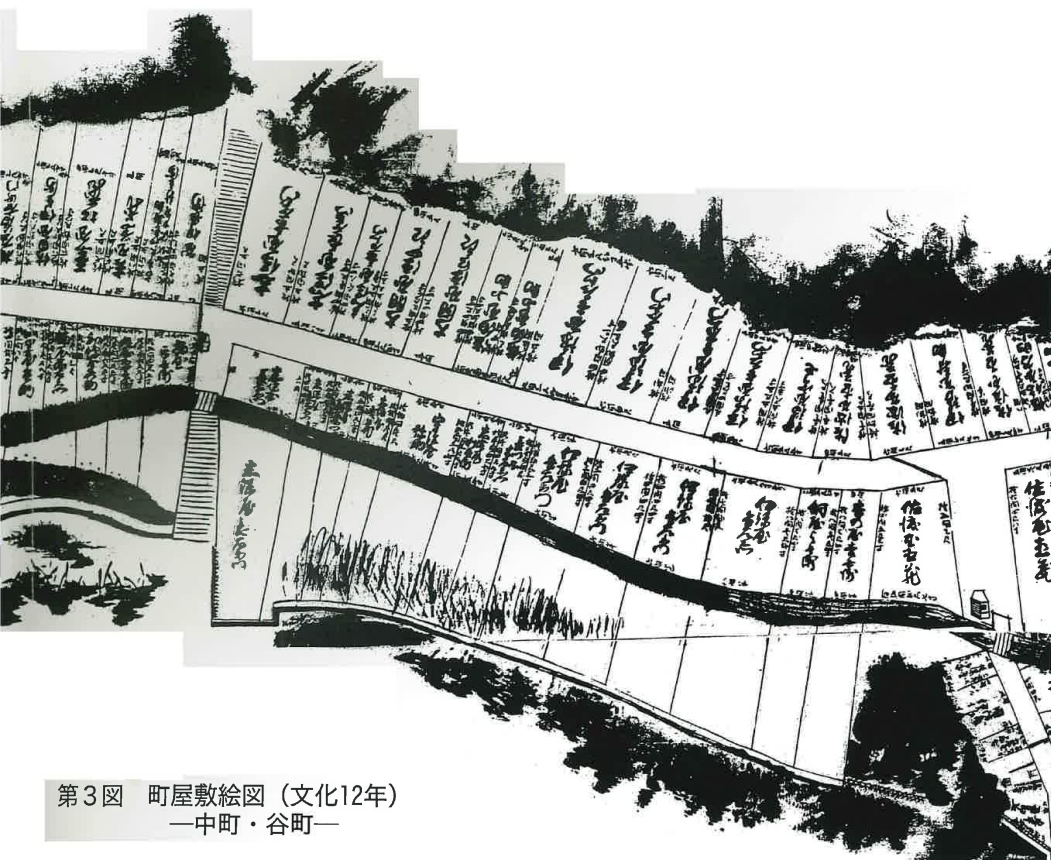
第2图



第3图



第2図 杵築城下町遺跡（中町・谷町地区）の調査区



第3図 町屋敷絵図（文化12年）
—中町・谷町—

